

西原大塚遺跡第45地点

発掘調査報告書

2 0 0 0

埼玉県志木市遺跡調査会

小松フォークリフト株式会社



遺跡遠景（北東から）



完掘全景空中写真



17号方形周溝墓



17号方形周溝墓出土遺物

はじめに

志木市遺跡調査会
会長 細田 信良

志木市の幸町地区には、市域最大規模の集落遺跡である西原大塚遺跡が広がっています。畑が多い田園地帯であったこの地区も、近年、住宅の数が多くなり、また、西原特定土地区画整理事業が開始されるに至り、徐々にではありますがその姿を変えつつあります。

平成11年2月、この地の一角に共同住宅建設の計画がもちあがり、志木市教育委員会では開発関係者と埋蔵文化財の保存について協議を重ね、その結果、記録保存のための発掘調査を行うことに決定しました。

発掘調査の委託を受けた志木市遺跡調査会では、酷暑の8月から霜柱の立ち始める12月の末まで調査を行いました。

調査結果は、本書に納められているとおりですが、弥生時代末葉から古墳時代初頭期にかけての70軒を越す住居跡や、全国的にも稀な鳥形土器を出土した大型方形周溝墓などが発見され、多大な成果を上げることができました。

発掘調査・整理作業及び本書の刊行につきましては、文化財保護の趣旨を御理解をいただいた小松フォークリフト株式会社に全面的な御協力を賜りました。また、志木市教育委員会をはじめとする関係各位並びに発掘調査・整理作業に携わった皆様からは、多くの御援助をいただきました。ここに、心から感謝申し上げます。

最後に、本書が多くの方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶ上での一助になることを願っています。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市幸町三丁目に所在する西原大塚遺跡（県No.09-007）第45地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、志木市教育委員会の斡旋により、小松フォークリフト株式会社から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
3. 発掘作業は、平成11年8月3日から同年12月24日まで、整理作業は平成11年9月6日から平成12年9月29日まで行った。
4. 調査地点の地番及び面積は、以下のとおりである。
地番 埼玉県志木市幸町三丁目3140-1、3146-2、3170、3200-1・3
面積 5642.416㎡。
5. 発掘調査の担当は、佐々木保俊があたった。
6. 本書の作成は志木市遺跡調査会が行い、編集は佐々木保俊が当たった。執筆は下記のとおりである。
第1章 第1節 関根正明
第2・3節 佐々木保俊
第2章 第1節 遺構 内野美津江 遺物 宮川幸佳
第2節 上田 寛
第3節 遺構 内野美津江 遺物 宮川幸佳
第4節 内野美津江
第3章 (1) 佐々木保俊
(2) 宮川幸佳
(3) 上田 寛
7. 本書の挿図版の作成は、執筆者の他に伊野部三千子・田代雄介・高杉朝子・成田しのぶ・二階堂美知子・野村貴子・矢野恵子・油橋由美・渡辺ゆかりが加わった。
8. 調査区内の空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。
9. 住居跡出土炭化材の樹種同定及び方形周溝墓出土土器の胎土分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
10. 出土した遺物および記録類は、志木市教育委員会で保管している。
11. 発掘調査および出土品整理作業・発掘調査報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館

埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

志木市文化財保護委員会・志木市行政資料室・志木市立郷土資料館

会田 明・浅野 信英・浅野 春樹・故 麻生 優・荒井 幹夫・飯田 充晴・市毛 勲
井上 尚明・今井 堯・碓井 三子・梅沢太久夫・岡本 東三・織笠 明子・織笠 昭
書上 元博・柿沼 幹夫・片平 雅俊・加藤 秀之・隈本 健介・栗島 義明・栗原 和彦
黒済 和彦・小出 輝雄・肥沼 正和・小久保 徹・小宮 恒雄・笹森 健一・塩野 博
斯波 治・白石 浩之・実川 順一・鈴木 一郎・鈴木加津子・鈴木 敏弘・鈴木 正博

田代 隆・田中 英司・坪田 幹夫・照林 敏郎・中島岐視生・中島 宏・長縄 賢
中村 倉司・中山 清隆・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早川 泉・早坂 廣人
堀 善之・松本 富雄・茂木 忠雄・森田 信博・柳井 彰宏・柳田 敏司・吉本 洋子
若井千佳子・和田 晋治・渡辺 誠

12. 調査組織

〈役員〉会 長 秋山 太藏（志木市教育委員会教育長）（～平成12年6月）
細田 信良（ ” ” ）（平成12年7月～）
副会長 川目 憲夫（志木市教育委員会教育総務部長）（～平成12年3月）
谷合 弘行（志木市教育委員会生涯学習部長）（平成12年4月～）
理 事 神山 健吉（志木市文化財保護委員会委員長）
井上 國夫（志木市文化財保護委員会副委員長）
高橋 長次（志木市文化財保護委員）
高橋 豊（ ” ” ）
内田 正子（ ” ” ）

理事兼事務局長

鈴木 重光（志木市教育委員会生涯学習課長）（～平成12年3月）
土橋 春樹（ ” ” ）（平成12年4月～）

監 事 萩原 洋子（志木市立郷土資料館長）
永田 伸夫（社会教育指導員）

〈事務局〉金子 雅佳（生涯学習課長補佐）（平成12年4月～）
関根 正明（文化財保護担当主査）
佐々木保俊（文化財保護担当主査）
清水あや子（文化財保護担当主任）（～平成12年3月）
尾形 則敏（ ” ” ）
新井由起子（ ” ” ）（平成12年4月～）

13. 発掘調査および整理作業参加者

調 査 員

内野美津江

調査補助員

東浦久美子・吉谷 顕子

発掘調査及び整理作業協力員

浅見 喜見子・足立 裕子・阿部 公子・阿部 ふみ子・飯田 久子・飯塚 麻由美
井上 麻美子・井上 始子・伊野部三千子・岩森 都・遠藤 英子・遠藤 美智子
大井 文・大平 裕子・神山 久子・神山 博・岸田 純一・黒田 千恵子
小日向すみ子・高麗 篤子・金野 照子・佐々木しづ子・清水 七枝・末次 明美
鈴木 美佐江・鈴木 百合香・砂川 春子・高杉 朝子・高橋 恭子・竹内 大輔
田代 雄介・塚田 和枝・土屋 富子・中 路子・永井 真理・中嶋 清美
中村 逸子・名久井よし江・成田 しのぶ・二階堂美知子・野村 貴子・橋本 好子

久留 浪子・広沢 奈津子・松崎 陽子・峰崎 靖子・宮川 幸佳・宮部 勇輔
矢野 恵子・柳沢 美子・山口 優子・油橋 由美・吉川 泰央・吉田 信江
渡辺 日出男・渡辺 ゆかり

特別参加

朝香 輝朗・上田 寛・松浦 佐代子

凡 例

1. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○ 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代末葉～古墳時代初頭の住居跡 H = 古墳時代後期の住居跡 D = 土坑



○ 遺構・遺物の挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。



○ 遺物写真図版の縮尺は任意とした。

○ 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は床面もしくは確認面からの深さを、凸堤上の数値は床面からの高さを示し、単位はcmである。

○ 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○ 挿図版中のスクリーントーンの指示は、以下のとおりである。

攪乱  住居跡内暗赤褐色土堆積位置 

カマド  土師器黒色処理 

2. 本書の住居跡の説明文中に使用した主軸とは、弥生時代末葉～古墳時代初頭においては炉跡と入口（想定）を結んだ線、古墳時代後期においてはカマドが設置された壁と直交する線とした。

3. 遺構の土層説明や土器の記述のなかで用いた色の表示方法は『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修によった。

目 次

卷頭図版	
はじめに	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	2
第3節 発掘調査の経過	4
第2章 検出された遺構と遺物	6
第1節 弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡	6
第2節 古墳時代初頭の方形周溝墓	127
第3節 古墳時代後期の住居跡	145
第4節 土坑	152
第3章 まとめ	155
1 弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡について	155
2 弥生時代末葉から古墳時代初頭の土器について	156
3 方形周溝墓について	159
引用・参考文献	170
附編 自然科学分析	173
1 弥生末・古墳初頭土器の胎土材料	173
2 植物珪酸体分析	182
3 出土炭化材の樹種同定	184
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	XII
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	1
第3図	試掘トレンチ配置図	2
第4図	180号住居跡 (1/60)	6
第5図	床硬化面	6
第6図	180号住居跡出土遺物1 (1/4)	7
第7図	180号住居跡出土遺物2 (1/3)	8
第8図	181号住居跡 (1/60)	9
第9図	床硬化面	9
第10図	181号住居跡出土遺物 (1/4)	9
第11図	182号住居跡 (1/60)	10
第12図	床硬化面	10
第13図	182号住居跡出土遺物 (1/3)	11
第14図	183号住居跡 (1/60)	12
第15図	183号住居跡出土遺物 (1/4)	13
第16図	184号住居跡 (1/60)	15
第17図	184号住居跡出土遺物 (1/3)	15
第18図	185・207号住居跡 (1/60)	16
第19図	床硬化面	16
第20図	185号住居跡出土遺物 (1/3)	16
第21図	186号住居跡 (1/60)	18
第22図	床硬化面	18
第23図	186号住居跡出土遺物1 (1/4)	18
第24図	186号住居跡出土遺物2 (1/3)	18
第25図	187号住居跡 (1/60)	20
第26図	床硬化面	20
第27図	187号住居跡出土遺物 (1/4)	21
第28図	188号住居跡 (1/60)	22
第29図	床硬化面	22
第30図	188号住居跡出土遺物1 (1/4)	23
第31図	188号住居跡出土遺物2 (1/3)	23
第32図	189号住居跡 (1/60)	24
第33図	189号住居跡出土遺物 (1/3)	24
第34図	190号住居跡 (1/60)	25
第35図	床硬化面	25
第36図	191号住居跡 (1/60)	26

第37图	191号住居跡出土遺物 (1/3)	27
第38图	192号住居跡 (1/60)	28
第39图	床硬化面	28
第40图	192号住居跡出土遺物 (1/4)	28
第41图	193号住居跡 (1/60)	29
第42图	193号住居跡出土遺物 1 (1/4)	29
第43图	193号住居跡出土遺物 2 (1/3)	29
第44图	194号住居跡 (1/60)	31
第45图	床硬化面	31
第46图	194号住居跡出土遺物 (1/4)	31
第47图	195号住居跡 (1/60)	33
第48图	床硬化面	33
第49图	195号住居跡出土遺物 1 (1/4)	34
第50图	195号住居跡出土遺物 2 (1/3)	34
第51图	196・201号住居跡 (1/60)	36
第52图	床硬化面	37
第53图	196号住居跡出土遺物 1 (1/4)	37
第54图	196号住居跡出土遺物 2 (1/3)	37
第55图	197号住居跡 (1/60)	39
第56图	床硬化面	39
第57图	197号住居跡出土遺物 1 (1/4)	40
第58图	197号住居跡出土遺物 2 (1/3)	40
第59图	198号住居跡 (1/60)	41
第60图	199・223・224号住居跡 (1/60)	41
第61图	199号住居跡出土遺物 (1/4)	42
第62图	200号住居跡 (1/60)	43
第63图	床硬化面	43
第64图	200号住居跡出土遺物 (1/4)	44
第65图	201号住居跡出土遺物 (1/3)	45
第66图	202・237号住居跡 (1/60)	46
第67图	202号住居跡出土遺物 1 (1/4)	47
第68图	202号住居跡出土遺物 2 (1/3)	47
第69图	203号住居跡 (1/60)	48
第70图	203号住居跡出土遺物 (1/4)	48
第71图	204号住居跡 (1/60)	50
第72图	床硬化面	50
第73图	204号住居跡出土遺物 1 (1/4)	51
第74图	204号住居跡出土遺物 2 (1/3)	51

第75图	205・206号住居跡 (1/60)	52
第76图	床硬化面	52
第77图	205号住居跡出土遺物 (1/4)	53
第78图	206号住居跡出土遺物 1 (1/4)	53
第79图	206号住居跡出土遺物 2 (1/3)	53
第80图	208号住居跡 (1/60)	54
第81图	床硬化面	54
第82图	208号住居跡出土遺物 (1/3)	54
第83图	209号住居跡 (1/60)	56
第84图	209号住居跡出土遺物 1 (1/4)	56
第85图	209号住居跡出土遺物 2 (1/3)	56
第86图	210号住居跡 (1/60)	58
第87图	床硬化面	59
第88图	210号住居跡出土遺物 1 (1/4)	59
第89图	210号住居跡出土遺物 2 (1/3)	59
第90图	211号住居跡 (1/60)	61
第91图	211号住居跡出土遺物 (1/3)	61
第92图	212号住居跡 (1/60)	62
第93图	床硬化面	62
第94图	212号住居跡出土遺物 (1/3)	62
第95图	213号住居跡 (1/60)	64
第96图	床硬化面	64
第97图	213号住居跡出土遺物 (1/3)	65
第98图	214号住居跡 (1/60)	67
第99图	床硬化面	67
第100图	214号住居跡出土遺物 1 (1/4)	67
第101图	214号住居跡出土遺物 2 (1/3)	67
第102图	215号住居跡 (1/60)	69
第103图	床硬化面	69
第104图	215号住居跡出土遺物 1 (1/4)	70
第105图	215号住居跡出土遺物 2 (1/3)	70
第106图	216号住居跡 (1/60)	72
第107图	床硬化面	72
第108图	216号住居跡出土遺物 1 (1/4)	73
第109图	216号住居跡出土遺物 2 (1/3)	73
第110图	217・248号住居跡 (1/60)	75
第111图	床硬化面	76
第112图	217号住居跡出土遺物 1 (1/4)	76

第113图	217号住居跡出土遺物 2 (1/3)	76
第114图	218・233号住居跡 (1/60)	77
第115图	218号住居跡出土遺物 1 (1/4)	78
第116图	218号住居跡出土遺物 2 (1/3)	78
第117图	219号住居跡 (1/60)	79
第118图	床硬化面	79
第119图	219号住居跡出土遺物 1 (1/4)	80
第120图	219号住居跡出土遺物 2 (1/3)	80
第121图	220・221号住居跡 (1/60)	82
第122图	220号住居跡出土遺物 (1/3)	82
第123图	221号住居跡 (1/3)	82
第124图	222・244~246号住居跡 (1/60)	84
第125图	床硬化面	85
第126图	222号住居跡出土遺物 (1/3)	85
第127图	223号住居跡出土遺物 (1/3)	86
第128图	225号住居跡 (1/60)	86
第129图	226号住居跡 (1/60)	87
第130图	床硬化面	87
第131图	226号住居跡出土遺物 1 (1/4)	87
第132图	226号住居跡出土遺物 2 (1/3)	88
第133图	227号住居跡 (1/60)	89
第134图	床硬化面	89
第135图	227号住居跡出土遺物 1 (1/4)	90
第136图	227号住居跡出土遺物 2 (1/3)	90
第137图	228号住居跡 (1/60)	92
第138图	床硬化面	92
第139图	228号住居跡出土遺物 (1/3)	92
第140图	229号住居跡 (1/60)	94
第141图	硬化面	94
第142图	229号住居跡出土遺物 (1/3)	94
第143图	230・232号住居跡(1/60)	95
第144图	230号住居跡出土遺物 (1/3)	95
第145图	231号住居跡 (1/60)	96
第146图	231号住居跡出土遺物 1 (1/4)	98
第147图	231号住居跡出土遺物 2 (1/3)	98
第148图	232号住居跡出土遺物 (1/4)	99
第149图	233号住居跡出土遺物 (1/3)	100
第150图	234・235号住居跡 (1/60)	101

第151图	床硬化面	102
第152图	234号住居跡出土遺物 1 (1/4)	103
第153图	234号住居跡出土遺物 2 (1/3)	104
第154图	236号住居跡 (1/60)	105
第155图	床硬化面	105
第156图	236号住居跡出土遺物 1 (1/4)	106
第157图	236号住居跡出土遺物 2 (1/3)	106
第158图	238号住居跡 (1/60)	108
第159图	床硬化面	108
第160图	238号住居跡出土遺物 1 (1/4)	109
第161图	238号住居跡出土遺物 2 (1/3)	109
第162图	239号住居跡 (1/60)	110
第163图	床硬化面	110
第164图	239号住居跡出土遺物 1 (1/4)	111
第165图	239号住居跡出土遺物 2 (1/3)	111
第166图	240号住居跡 (1/60)	112
第167图	床硬化面	113
第168图	240号住居跡出土遺物 1 (1/4)	114
第169图	240号住居跡出土遺物 2 (1/3)	114
第170图	241号住居跡 (1/60)	115
第171图	床硬化面	115
第172图	241号住居跡出土遺物 1 (1/4)	115
第173图	241号住居跡出土遺物 2 (1/3)	115
第174图	242号住居跡 (1/60)	116
第175图	242号住居跡出土遺物 (1/3)	116
第176图	243号住居跡 (1/60)	117
第177图	床硬化面	117
第178图	243号住居跡出土遺物 (1/3)	117
第179图	244号住居跡出土遺物 1 (1/4)	119
第180图	244号住居跡出土遺物 2 (1/3)	119
第181图	247号住居跡 (1/60)	120
第182图	床硬化面	120
第183图	248号住居跡出土遺物 (1/3)	120
第184图	249号住居跡 (1/60)	121
第185图	床硬化面	121
第186图	249号住居跡出土遺物 (1/3)	121
第187图	250号住居跡 (1/60)	123
第188图	床硬化面	123

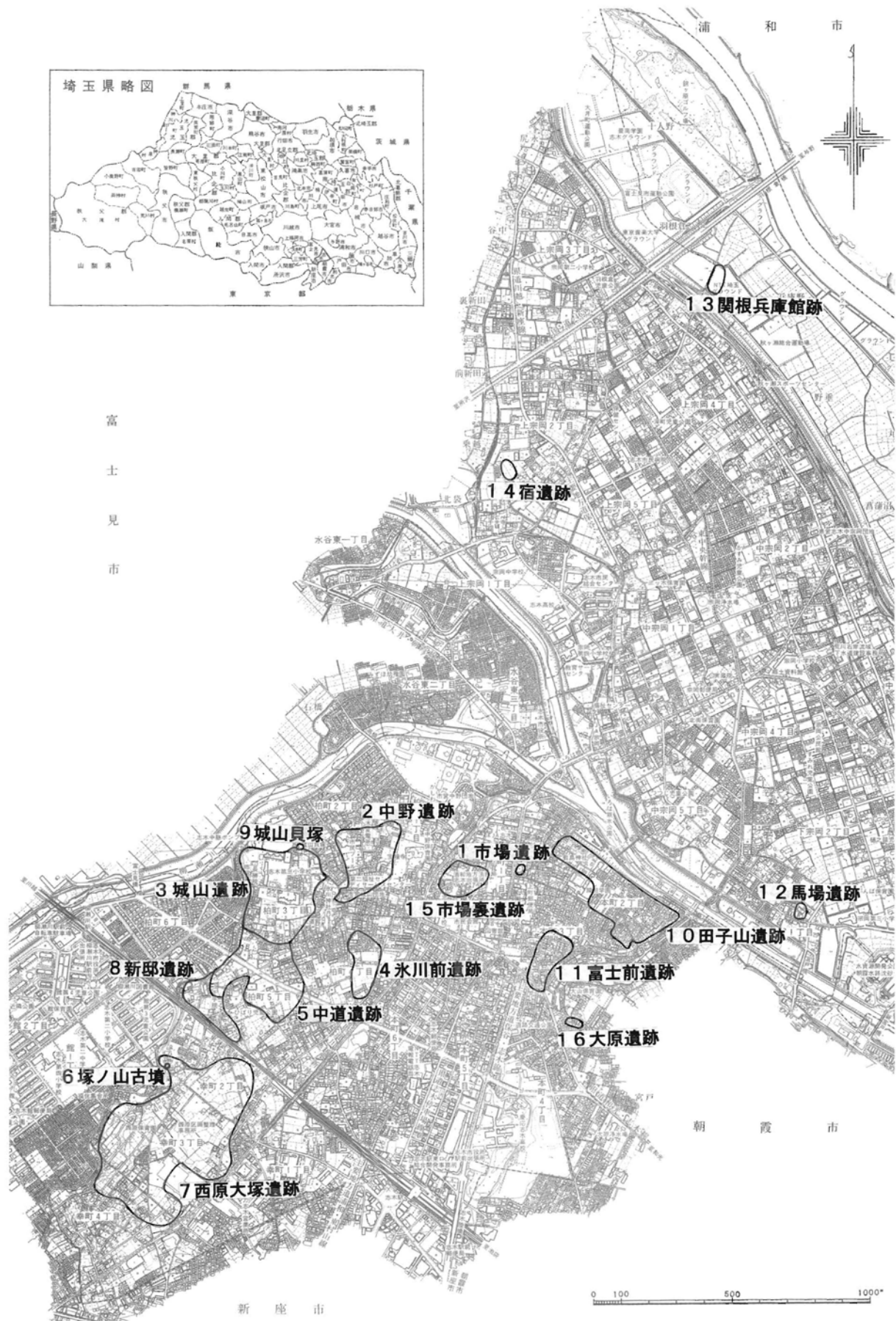
第189図	250号住居跡出土遺物 1 (1/4)	123
第190図	250号住居跡出土遺物 2 (1/3)	124
第191図	251号住居跡 (1/60)	125
第192図	床硬化面 (1/3)	125
第193図	251号住居跡出土遺物 1 (1/4)	126
第194図	251号住居跡出土遺物 2 (1/3)	126
第195図	土製品 (3/4)	127
第196図	17号方形周溝墓平面図 (1/120)、346・347号土坑 (1/60)	129
第197図	17号方形周溝墓土層・断面図 (1/120)	131
第198図	17号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	135
第199図	17号方形周溝墓出土遺物 2 (1/4)	137
第200図	17号方形周溝墓出土遺物 3 (1/3)	139
第201図	17号方形周溝墓出土遺物 4 (1/3)	141
第202図	17号方形周溝墓出土遺物 5 (1/3)	143
第203図	11号住居跡 (1/60)	146
第204図	床硬化面	146
第205図	11号住居跡カマド (1/30)	147
第206図	11号住居跡出土遺物 (1/4)	148
第207図	12号住居跡 (1/60)	150
第208図	床硬化面	151
第209図	12号住居跡カマド (1/30)	151
第210図	12号住居跡出土遺物 (1/4)	151
第211図	土坑 (1/60)	153
第212図	住居跡の形状	155
第213図	出土土器の分類	157
第214図	周辺地域の方形周溝墓	160
第215図	10号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	162
第216図	鳥形土器 (土製品) の類例	164
第217図	二重口縁壺形土器の類例	167
第218図	粒子組成図	179
第219図	埼玉県地質図	180
附 図	遺構分布図 (1/300)	

表 目 次

表 1	志木市の遺跡の概要	3	表 4	土器胎土の粘土および砂粒の特徴	178
表 2	調査進行表	4	表 5	住居跡出土炭化材の樹種	184
表 3	土器胎土中の粒子組成一覧表	178	表 6	住居別の検出樹種と点数	184

図 版 目 次

- 図版 1 180～183・186・187号住居跡
図版 2 188・189・191～196号住居跡、348号土坑
図版 3 197・199・223・224・200・202～206号住居跡
図版 4 208～213号住居跡、発掘調査風景
図版 5 214～218・233・219号住居跡、発掘調査風景
図版 6 222・244～246・225～229号住居跡
図版 7 230・232・231・234～236号住居跡
図版 8 238～241・243号住居跡、発掘調査風景
図版 9 244・248・250・251号住居跡
図版10 17号方形周溝墓、346・347号土坑、調査終了
図版11 11・12号住居跡、345・349～352号土坑
図版12 遺物（180～183号住居跡）
図版13 遺物（184～188号住居跡）
図版14 遺物（189・191～195号住居跡）
図版15 遺物（196・197号住居跡）
図版16 遺物（199～205号住居跡）
図版17 遺物（206・208～210号住居跡）
図版18 遺物（211～215号住居跡）
図版19 遺物（216～219号住居跡）
図版20 遺物（220～223・226号住居跡）
図版21 遺物（227～230号住居跡）
図版22 遺物（231～233号住居跡）
図版23 遺物（234号住居跡）
図版24 遺物（236・238・239号住居跡）
図版25 遺物（240～244号住居跡）
図版26 遺物（248～251号住居跡）
図版27 遺物（17号方形周溝墓）
図版28 遺物（17号方形周溝墓）
図版29 遺物（17号方形周溝墓）
図版30 遺物（17号方形周溝墓、土製品）
図版31 遺物（17号方形周溝墓）
図版32 遺物（11・12号住居跡）
図版33 遺物（10号方形周溝墓）
図版34 弥生末葉および古墳初頭土器胎土中の顕微鏡写真
図版35 出土炭化植物遺体（228号住居跡）の灰像
図版36 出土灰試料（243号住居跡）の植物珪酸体
図版37 西原大塚遺跡第45地点出土炭化材樹種
図版38 西原大塚遺跡第45地点出土炭化材樹種



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

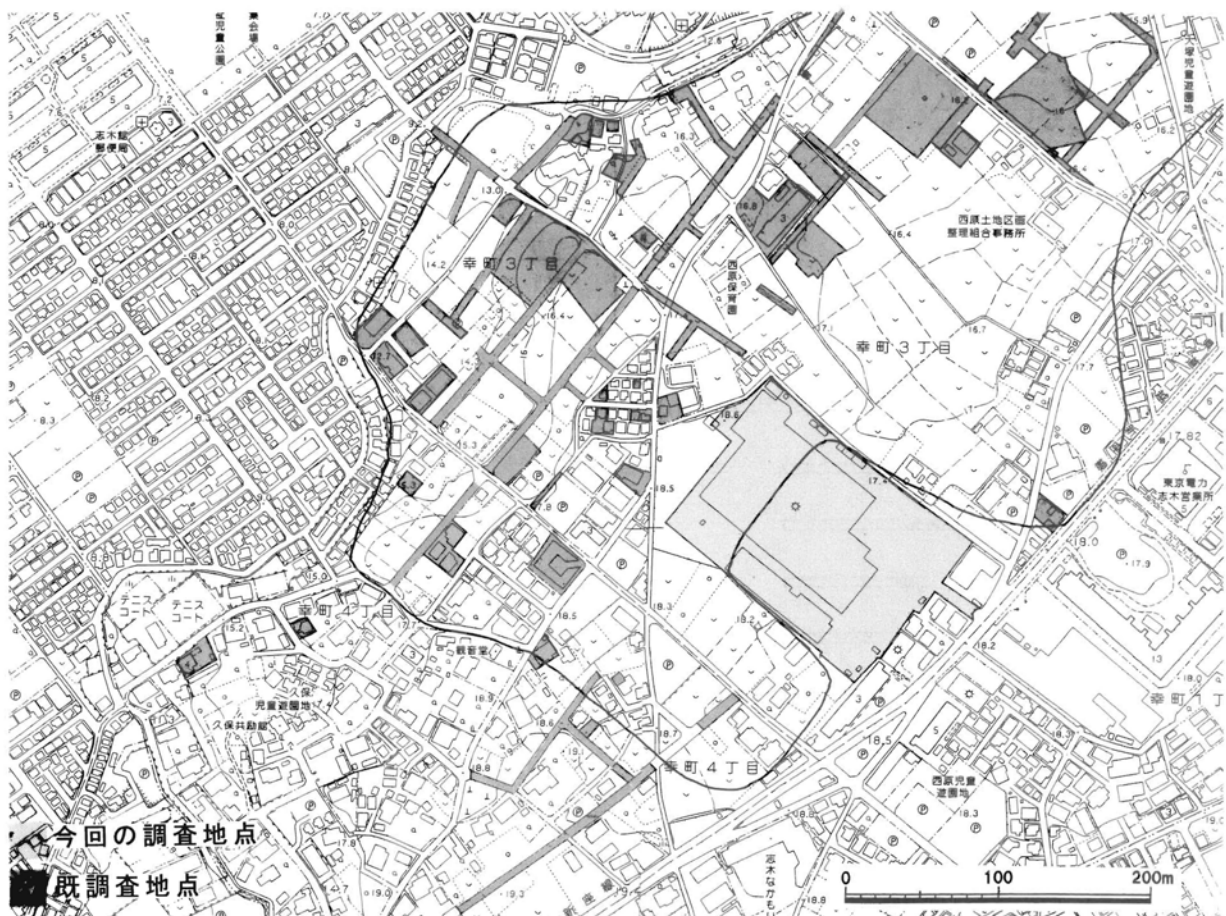
第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

平成11年2月、小松フォークリフト株式会社から志木市教育委員会（以下、教育委員会）に志木市幸町三丁目3140-1、3146-2、3170、3172、3173-1・4、3175-2、3177-3、3200、3200-3地内の小松フォークリフト志木工場（以下、志木工場）跡地に計画されている高層の共同住宅開発事業に係る埋蔵文化財の有無及び取り扱いに関する照会があった。なお、この計画では、土地所有者の小松フォークリフト株式会社と開発者の株式会社長谷工コーポレーション、トータルハウジング株式会社との売買契約の中に埋蔵文化財保存措置については、土地所有者が行うという条件であった。

該当地は、志木市遺跡分布図において遺跡が存在する可能性の高い地域に含まれているが、昭和47年に実施された遺跡分布調査の際には、すでに志木工場は建設されていたために分布調査が行えず、本来は埋蔵文化財包蔵地として周知すべき地域として考えられていた。こうした経緯もあるため、教育委員会では、確認調査を行う必要がある旨の回答を行った。

その後、2月19日、3月15日の事前協議を経て、3月31日に土地所有者小松フォークリフト株式会社から確認調査依頼書が提出されたため、教育委員会では志木工場の解体や舗装撤去などの工事計画に合わせ、対象地域20,648.91㎡を4月15・16日、5月15・16日、6月10・11・14～16日の9日間にわたり、



第2図 周辺の地形と調査地点（1/5000）

確認調査を実施した。

その結果、対象地域の北側約3分の一から、住居跡と思われるもの10カ所、溝跡と思われるもの5カ所、土坑と思われるもの1カ所、焼土跡1カ所、柱穴と思われるもの2カ所及び弥生時代の土器片が検出され、何らかの保存措置が必要であることが判明した。なお、試掘調査の実施面積は約2,000㎡で、試掘対象面積の約10%である。

この結果を踏まえ、7月27日に開発者の株式会社長谷工コーポレーション、土地所有者の小松フォークリフト株式会社などと埋蔵文化財の保存対策についての協議を行った結果、遺跡が確認された区域全体が現状保存不可能のため、記録保存としての発掘調査を実施することで合意した。

教育委員会では、調査にあたる組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋し、遺跡調査会ではこれを受けた。7月30日には発掘届が提出されたため、関係書類を埼玉県教育委員会を経由し、文化庁に提出した。

遺跡調査会は、8月2日に土地所有者の小松フォークリフト株式会社と委託契約を締結し、8月3日から発掘調査を開始した。（通知文章番号 教文 第2-68号 平成11年8月27日付）。

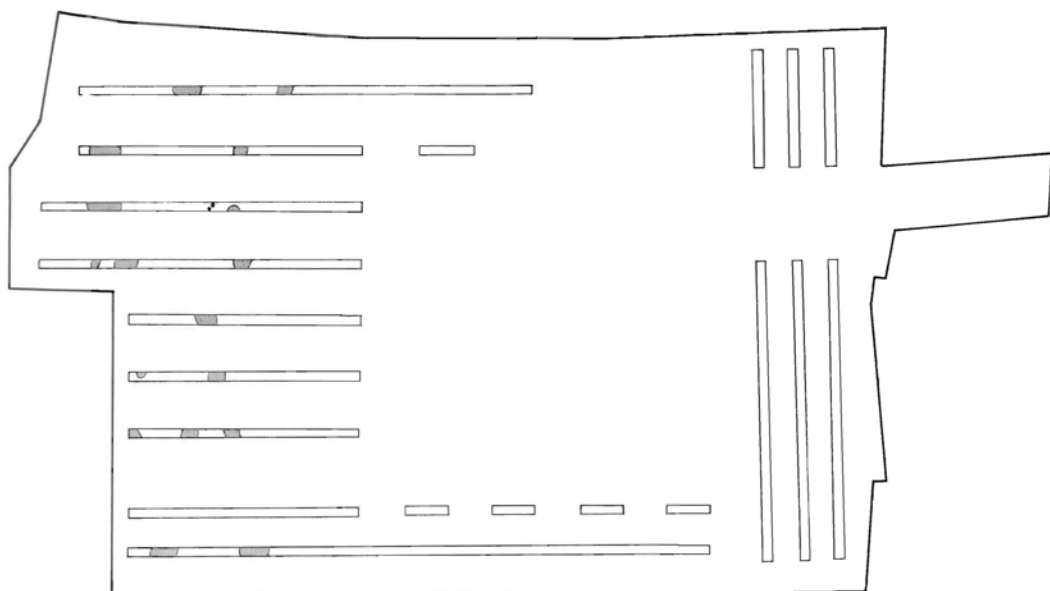
第2節 遺跡の位置と環境

(1) 市域の地形の概要

志木市は埼玉県の南西部に位置し、市の南西は朝霞市・新座市と接し、北東は荒川によって浦和市と、北西は柳瀬川によって富士見市と画される。市の規模は東西4.73km・南北4.71km・面積9.06km²を測る。

市域の地形は、市中央部を南東流する新河岸川によって大略二分され、北東部は荒川（旧入間川水系）によって形成された低地、南西部は武蔵野台地の野火止台にあたる。より詳しくみると、市の北東部には北東流する柳瀬川がある。この柳瀬川は流末で90度近く西方に流れを変へ、市の中央部を南東流する新河岸川と合流する。

武蔵野台地は古多摩川の扇状地といわれ、標高100mを測る東京都青梅市付近を扇頂にして、西から



第3図 試掘トレンチ配置図

東に向けて大きく広がる。志木市の台地部分は、武蔵野台地の北東端部にあたり、北東に向けてゆるやかに傾斜し、南西奥部の新座市との境付近で標高約19m、先端部で9m前後を測る。また、朝霞市との境には南西方向に小さな谷が入り込むため、市域の台地部分は大きな舌状を呈している。

荒川の形成した低地は、市域では上流部で標高約6m、下流部で約5mとあまり比高差はないが、部分的に自然堤防がみられ、僅かな起伏が認められる。

(2) 市域の遺跡の概要

市域の埋蔵文化財包蔵地は、主に柳瀬川と新河岸川を望む台地上の縁辺部に位置する。

柳瀬川流域には、上流から西原大塚遺跡・新邸遺跡・中道遺跡・城山遺跡・中野遺跡、柳瀬川と新河岸川の合流する付近に市場裏遺跡、新河岸川流域には田子山遺跡・富士前遺跡、また、朝霞市との境にある谷の奥部には大原遺跡がある。

荒川低地には現在、宿遺跡・馬場遺跡・関根兵庫館跡が知られているが、自然堤防上には未発見の遺跡がある可能性も残されている。

(3) 遺跡の立地と環境

西原大塚遺跡は、市の南端に位置する面積約180,000㎡の市域最大規模の集落跡である。

遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地上にあり、標高は14~16mで北西方向に徐々に傾斜しているが、おおむね平坦である。台地下の柳瀬川に開析された低地は約8mを測る。崖下には小規模な湧水地が認められるが、2カ所は比較的規模が大きくその部分がえぐれているため崖線は凹凸をなす。

遺跡を乗せる台地上には畑地を多く残しているが、現在、土地区画整理事業が進行中であり、また、住宅建設を主とする開発も始まっていて、埋蔵文化財に対する影響が多くなりつつある。

本遺跡の最初の発掘調査は昭和48年に行なわれ(谷井 1975)、それ以降、志木市教育委員会・志木市史編さん室・志木市遺跡調査会で調査を行なっていて(志木市史編さん室 1984、佐々木 1985・1989・1996・1997・1998、佐々木・尾形 1987・1990、尾形 1990・1996、尾形・深井 1999・2000)、縄文時代中期後半、弥生時代後期、古墳時代前期を中心に、古墳時代後期、奈良・平安時代を含んだ集

遺跡	時代	縄文		弥生			古墳		奈良・平安	中世	近世
		草創	早	前	中	後	前	後			
1 市場遺跡										○	○
2 中野遺跡	○				○			○	○	◎	○
3 城山遺跡		○		○	○			○	○	◎	○
4 氷川前遺跡								○			
5 中道遺跡	○				○			○	○	○	○
6 塚ノ山古墳								○			
7 西原大塚遺跡	○			○	◎	○	○	◎	◎	○	○
8 新邸遺跡				○				○		○	○
9 城山貝塚				◎						○	○
10 田子山遺跡		○			○			◎	◎	○	○
11 富士前遺跡								◎	◎		
12 馬場遺跡								○			
13 関根兵庫館跡											○
14 宿遺跡											○
15 市場裏遺跡								○			
16 大原遺跡											○

表1 志木市の遺跡の概要 (◎は主体となる時期)

落跡であることが知られてきている。また、未発表ではあるが旧石器時代の石器集中地点、縄文時代後・晩期の遺構・遺物も発見されている。

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は平成11年8月3日から開始した。表土剥ぎはバックホー・ペールローダー・ダンプカーを使用し、調査区北側から行なった。

10日からは調査区北隅に基点を設け、調査区の形状に合わせて10m間隔に杭打ちを行ない、グリッドを設定した。グリッドの配列は、基点から南東に向けてA～F、南西に向けて1～12とした。

16日からは調査協力員を導入し、調査区北側から遺構確認作業に入り、順次南側に進んでいったが、

調査月	8月	9月	10月	11月	12月	調査月	8月	9月	10月	11月	12月
表土剥ぎ	////					220Y				////	
遺構確認	///	///				221Y				////	
17号方周		////				222Y					///
180Y	///					223Y				///	
181Y			///			224Y				////	
182Y			////			225Y				///	
183Y			////			226Y				////	
184Y			///			227Y				////	
185Y			///			228Y				////	
186Y			////			229Y				///	
187Y		///				230Y				///	
188Y		///				231Y				////	
189Y		////				232Y				////	
190Y		///				233Y				///	
191Y		////				234Y				////	
192Y		////				235Y				///	
193Y		////				236Y				////	
194Y			///			237Y				///	
195Y			////			238Y				///	
196Y			////			239Y				///	
197Y		////				240Y				////	
198Y				///		241Y				////	
199Y				////		242Y				////	
200Y			///			243Y				///	
201Y			///			244Y				////	
202Y				////		245Y				////	
203Y			///			246Y				///	
204Y				////		247Y				///	
205Y				///		248Y				///	
206Y				///		249Y				///	
207Y				///		250Y				///	
208Y				///		251Y				///	
209Y				///		11H			///		
210Y				///		12H			////		
211Y				///		345D		///			
212Y				///		346D			///		
213Y			////			347D		////			
214Y			///			348D			////		
215Y				////		349D				///	
216Y				////		350D				///	
217Y				////		351D				///	
218Y				////		352D				///	
219Y				///		353D				///	

表2 調査進行表

北半は遺構が密集していて数十軒の住居跡の存在が予測できた。また、18日には（A・B-4～6）グリッドに大型の方形周溝墓（17号方形周溝墓）があることが確認できた。遺構の分布は南側にいくに従って希薄になることがうかがえた。

17号方形周溝墓は多くの住居跡と重複していたが、プラン確認の結果すべての住居跡を切っていることが判明、23日からは方形周溝墓の調査に入った。

26日からは180号住居跡を掘り始めるが、大半の労力を方形周溝墓にあてた。

9月9日からは方形周溝墓の土層図を取り始めるが、北東溝の土層観察ベルト中に鳥形土器を発見したのは10日のことであった。

24日からは住居跡の本格的調査にとりかかる。作業は遺構の重複の少なく、比較的調査が容易と思われる調査区南側から、写真撮影・測量などの記録作成を行ないながら順次進めていった。

30日には1ヵ月にも及んだ方形周溝墓の調査を終え、10月5日に空中撮影を行なった。

10月中旬に入り、作業は遺構の密集する調査区北側に徐々に進み、数軒が重複する住居跡もあり、調査は困難をきわめた。住居跡の中には、少数ながらベッド状遺構と思われる施設をもつものや、住居の主軸を短軸にもつものなどが認められた。

これらの遺構の諸記録を作成し、12月24日には全体の空中撮影を行ない、全作業を終了した。

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡

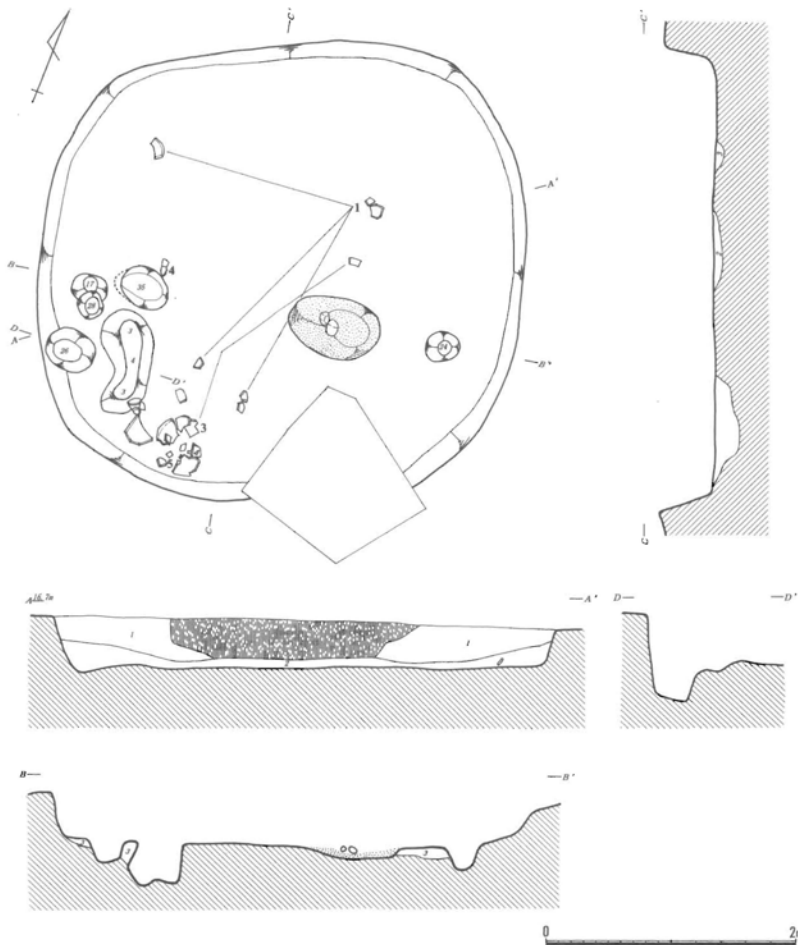
180号住居跡（第4・5図）

〔位置〕 D-3 G。

〔住居構造〕 南壁の一部は破壊されている。（平面形）隅丸方形。（規模）380×360cm。（主軸方向）N-80°-E。（壁高）28~41cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）壁際と、炉の周辺を除いてよく硬化している。（炉）住居中央から南東に偏って位置する。70×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。炉中央部に礫が配される。（柱穴）住居に伴う柱穴は検出されなかった。西側壁際の1本は入口施設に関係しようか。（貯蔵穴）南西壁下、やや南に偏って位置する。45×35cmの円形を施し、深さ26cmを測る。貯蔵穴東側に高さ3~4cm・幅30~40cmの凸堤が弧状に構築される。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 黄褐色土（10YR5/6）。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。



第4図 180号住居跡（1/60）



第5図 床硬化面

〔遺物〕南西側床面上から比較的多く出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

180号住居跡出土遺物（第6・7図）

壺形土器（1・5・8）

1は体部中位から下半にかけて1/2程度遺存する。外面は体部中位が横、下位は斜、底部付近は縦方向のハケメ調整後、横方向にヘラミガキを施す。内面の調整は体部中位がヘラナデ、下位は横方向のヘラミガキが施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈するが、2ヵ所に黒斑がみられる。外面は赤彩される。胎土は白色粒子、1～2mmの細礫を僅かに含むが緻密である。床面上から散乱した状態で出土した。

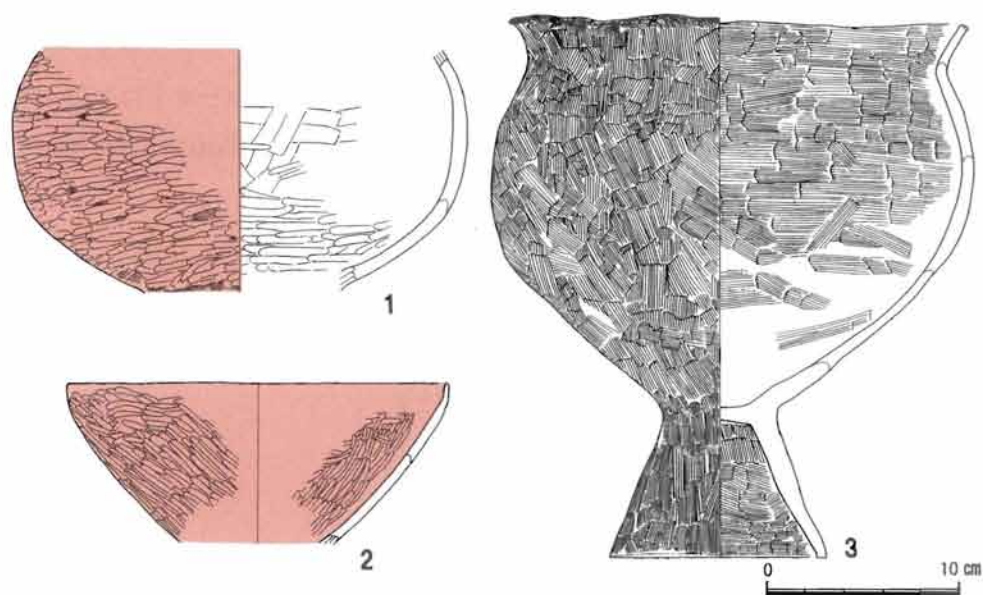
5・8は底部破片。5は小型で底径5.5cmを測る。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面にはヘラナデした工具痕が残る。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。住居南壁際床面上の出土。8は底部に木葉痕が残る。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。外面は赤彩される。煤が底面に付着する。胎土には白・黒色粒子を多く、細礫を僅かに含む。覆土中の出土。

高坏形土器（2）

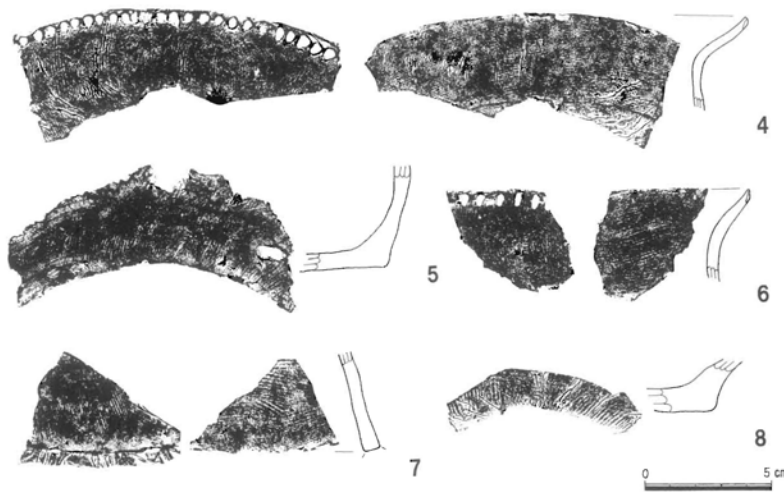
脚台部を欠損し、坏部は1/2程度遺存する。推定口径20cmを測る。接合部からゆるく内湾しながら口縁部へ至り直線的に立ち上がる。内外面ともに口唇部は横方向にヘラナデされる。坏部上半は横方向、下半は縦方向にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土は砂粒、細礫を僅かに含むがきめ細かい。床面上の出土である。

甕形土器（3・4・6・7）

3は完形の台付甕形土器である。口径11.5cm・裾径24cm・器高28cmを測る。最大径を体部上半にもち、頸部でくびれ、口縁部はゆるやかに外反する。脚台部はやや直線的に開く。口唇部はハケ状工具により平坦面が作られ、外縁に同一工具によりやや左方向から刺突された刻みが一周する。外面はヘラナデされるが口縁部が縦方向、体部は斜方向、脚台部は縦方向のハケメ痕を残す。内面は体部中位以上が横方



第6図 180号住居跡出土遺物1（1/4）



第7図 180号住居跡出土遺物2 (1/3)

向にヘラナデされるがハケメ痕を残す。脚台部内面は上位縦方向、下位横方向にハケメ調整されるが、ヘラナデのためハケメ痕が消されている。色調はにぶい赤褐色(2.5YR 4/3)を呈する。外面には煤が付着し、内面体部中位には炭化物がこびりついている。胎土には砂粒、細礫を含む。南コーナー、床面上からの出土である。

4・6は口頸部破片。4は口唇部にハケ状工具を刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。南西ピット脇床面上の出土。6は口唇部にやや右方向から刺突された刻みが施される。調整は4と同じ。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

7は台付甕形土器の脚台部破片である。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。脚端部にもハケメ痕が残る。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土。

181号住居跡(第8・9図)

〔位置〕A-6G。

〔住居構造〕東側は破壊されている。(平面形)隅丸長方形。(規模)450×400cm。(主軸方向)N-29°W。(壁高)24~34cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)住居西側がよく硬化している。(炉)住居中央から北西に偏って位置する。80×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ15cmを測る。炉西側に礫が配される。(柱穴)各コーナーにある4本が主柱穴である。(貯蔵穴)南東コーナーに位置する。50×40cmの楕円形を呈し、深さ31cmを測る。貯蔵穴北側に高さ4~7cm・幅30~40cmの凸堤が構築される。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕貯蔵穴付近、南西壁際から出土した。

〔時期〕弥生時代末葉

181号住居跡出土遺物(第10図)

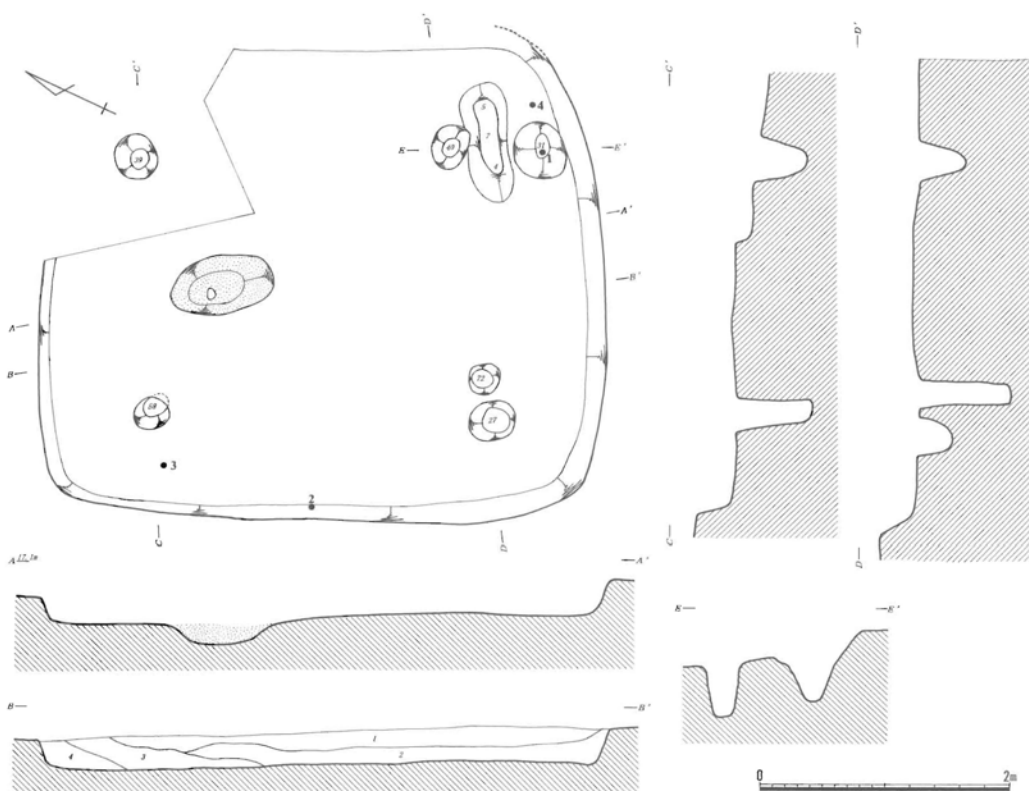
壺形土器(1)

小型の土器で体部中位以下1/2程度遺存する。全体の器形は不明であるが、体部は最大径をやや下半

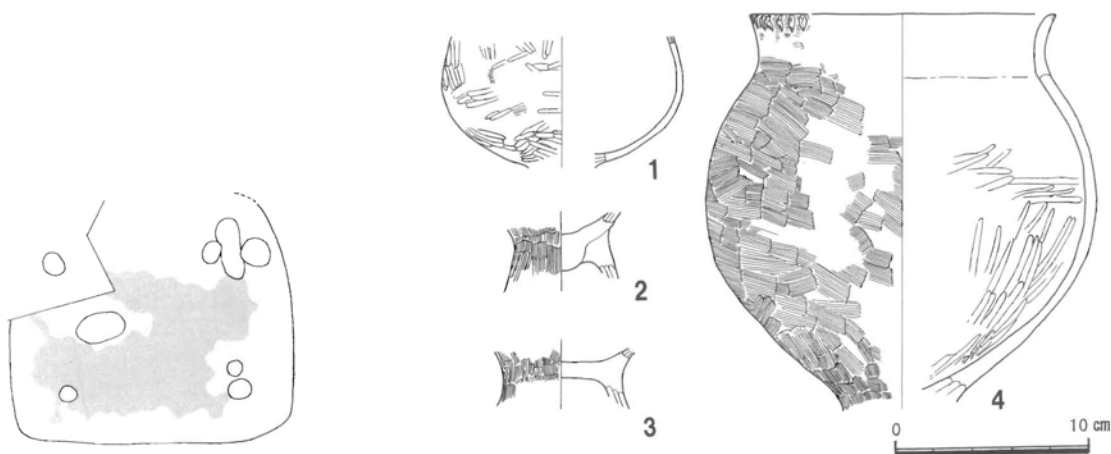
にもつ球状を呈する。外面はヘラミガキされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。内外面ともに遺存状態が悪い。色調は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈する。胎土は白色粒子、1～2mmの細礫を僅かに含むがきめ細かい。貯蔵穴からの出土である。

甕形土器 (2～4)

2・3はともに甕部と脚台部の接合部破片で、脚台部は裾部にかけてやや直線的に開く。2は甕部と脚台部の接合がよくわかる例である。天井部が抜けた脚台に、ソケット状の突起を挿入して甕部と脚部を接合している。外面はヘラナデされるが縦方向のハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。甕部外面には煤が付着する。胎土は砂粒、1～2mmの細礫、軽石と



第8図 181号住居跡 (1/60)



第9図 床硬化面

第10図 181号住居後出土遺物 (1/4)

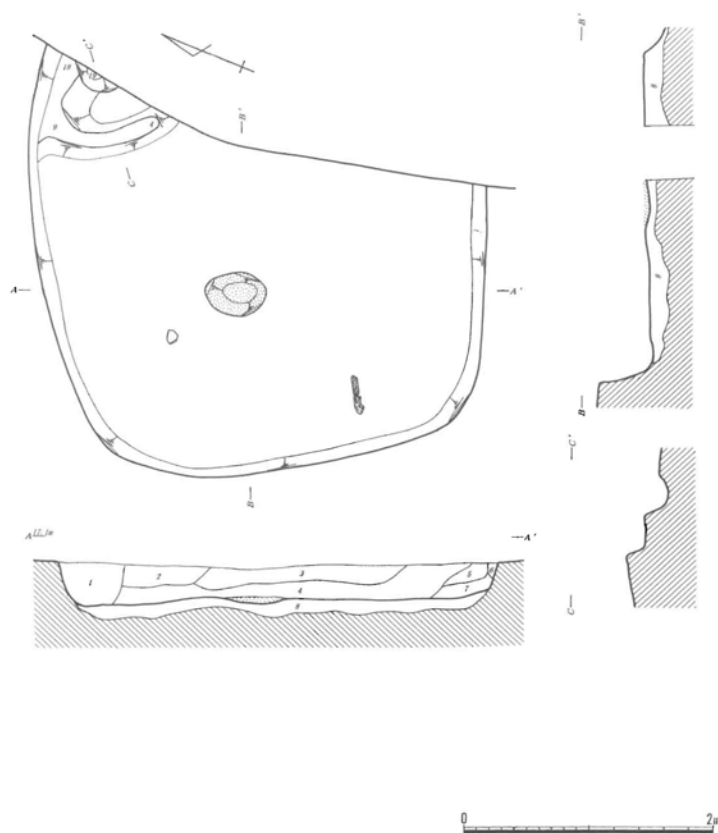
推測される橙色～白灰色の2mm前後の粒子を多量に含む。南西壁際からの出土である。3は甕部との接合強化のため、脚台部天井に粘土を補強しているのが観察できる。外面はナデられるが縦方向のハケメ痕を残す。内面はヘラナデされるが、その際の工具痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土は2mm前後の赤褐色粒子、1～2mmの細礫を含むが細かい。西コーナー付近床面上からの出土である。

4は甕部のみ1/2程度遺存する。推定口径16cm。最大径を体部中位にもち、頸部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。口唇端部はハケ状工具によるナデの後、同一の工具でやや左から刺突した刻みが一周する。体部は球状を呈する。外面はヘラナデされるが口縁部と頸部が横方向、体部中位までが斜方向、以下縦方向のハケメ痕を残す。内面は口縁部から体部中位までヨコナデ、以下縦方向にヘラミガキされる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。外面には煤が付着し、内面体部下半には炭化物がこびりつく。胎土は砂粒、1～2mm程度の細礫を含むが細かい。東コーナー付近の床面上から出土している。

182号住居跡(第11・12図)

〔位置〕A-6G。

〔住居構造〕東側は17号方形周溝墓に切られる。(平面形)楕円形。(規模)不明×360cm。(主軸方向)S-65°-W。(壁高)30～39cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面)全面に貼床される。北側の一部と貯蔵穴西側の一部が硬化している。(炉)住居中央から西に偏って位置する。50×35cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)北東コーナーに位置する。大半は破壊されているが、深さ19cmを測る。貯蔵穴西側に高さ4～18cm・幅25～50cmの凸堤が巡っている。



第11図 182号住居跡(1/60)

〔覆土〕不整合な堆積で、埋め戻された感がある。

1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。



第12図 床硬化面

- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。炭化材小片を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を含む。炭化材小片を含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子、焼土粒子を含む。
- 8層 褐色土 (10YR4/6)。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

〔所見〕 覆土中から焼土と炭化材が多く検出されたことから焼失住居の可能性が大きい。

182号住居跡出土遺物 (第13図・第195 図1)

壺形土器 (2・3)

2は肩部破片。Rの無節斜縄文が施される。文様の上位と下位にはS字状結節文がめぐるとはなれ、縄文帯下位の結節文はヘラミガキで消されている。縄文帯以下は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、白色粒子を僅かに含むがきめ細かく堅緻である。覆土中の出土である。

3は体部破片。外面はヘラミガキが施されるがハケメ痕を僅かに残す。内面は剥離が著しい。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

甕形土器 (1)

口頸部破片。口唇部には左方向から浅く刺突した刻みが加えられる。外面と内面口縁部はヘラナデされるが、広く粗いハケメ痕を残す。内面の頸部以下はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土は砂粒、1~3mmの細礫、白色粒子を含み粗い。覆土中の出土。

土製勾玉 (1)

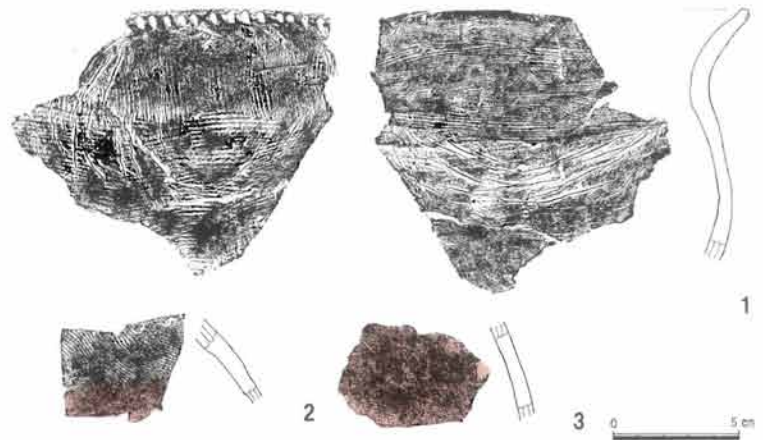
頭部1/2程度遺存する。現存長3.2cm・径1.8cm・孔径2~4mm・重量7.5gを測る。表面は丁寧にナデられる。孔は左から右方向に穿孔されている。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

183号住居跡 (第14図)

〔位置〕 A-6G。

〔住居構造〕 17号方形周溝墓に大部分が切られる。(平面形) 不明。(壁高) 18~37cmを測り、急斜に立ち上がる。(主軸方向) N-40°-W。(壁溝) 幅16~25cm・下幅4cm前後・深さ5cm前後を測る。(床面) 壁際を除き良く硬化している。南東側は部分的に床面が高くなっている。(炉) 住居中央に位置する。

130×50cmの楕円形を呈する地床

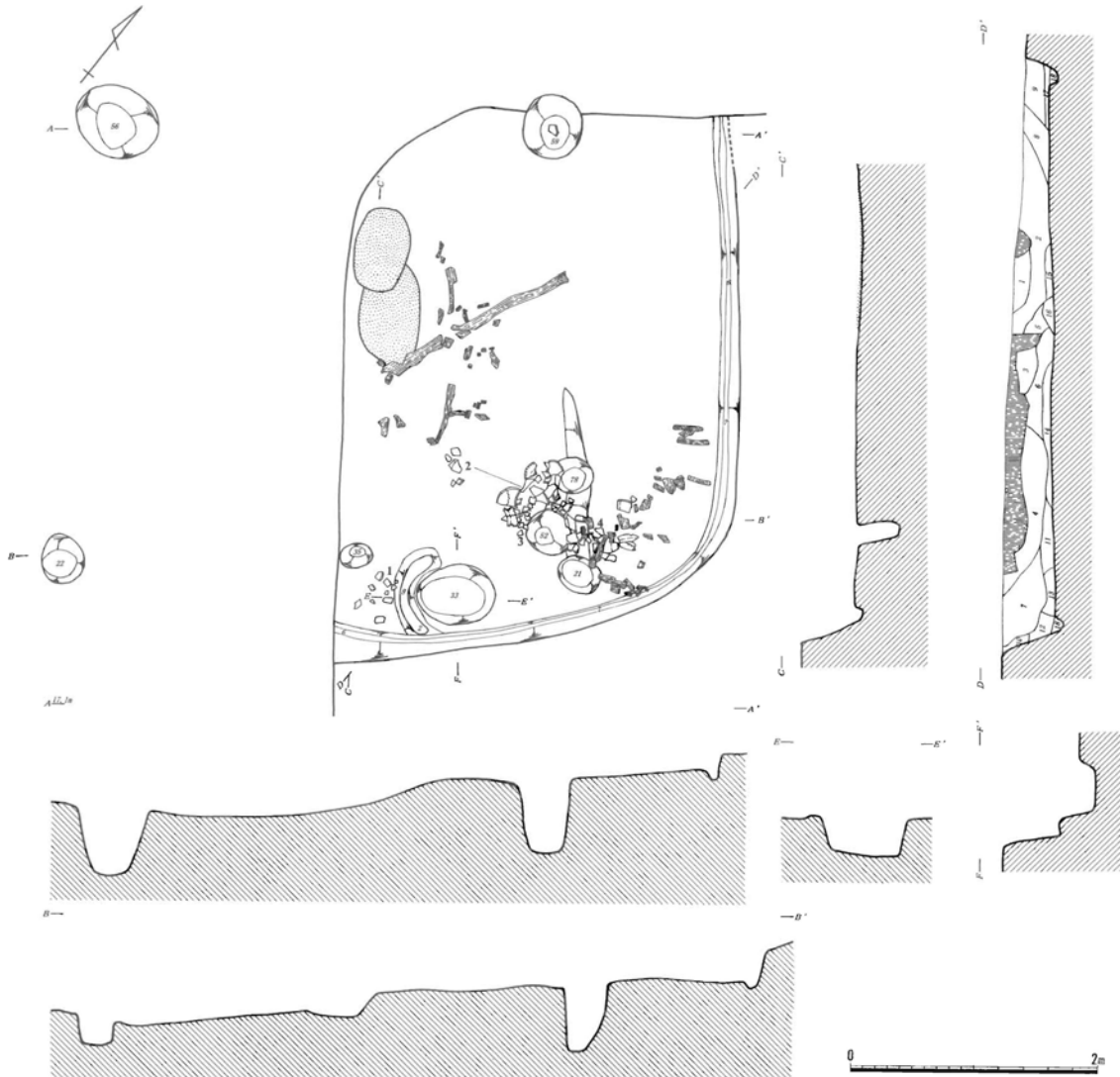


第13図 182号住居跡出土遺物 (1/3)

炉で、深さ33cmを測る。(柱穴) 支柱穴は4本検出された。(貯蔵穴) 南壁下に位置する。46×60cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。貯蔵穴西側に高さ2～8cm・幅15～22cmの凸堤が弧状に構築される。

〔覆土〕 ロームブロックを多量に含み、埋め戻された可能性が大きい。

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。
- 5層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 7層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 黒色土 (7.5YR1.7/1)。ローム粒子を含む。
- 9層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子、焼土粒子を含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を含む。
- 11層 黒色土 (7.5YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。



第14図 183号住居跡 (1/60)

- 12層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 13層 極暗褐色土 (7.5YR2/3)。ローム粒子、炭化材小片を含む。焼土粒子を多く含む。
- 14層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。焼土粒子・小ブロックを含む。
- 15層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 16層 極暗褐色土 (7.5YR2/3)。焼土粒子・小ブロックを多く含む。
- 17層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 18層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 東コーナー付近から多量に出土する。床面上に炭化材が散乱している。

〔時期〕 古墳時代初頭

〔所見〕 覆土中に焼土と炭化材が多く検出されたことから焼失住居と思われる。

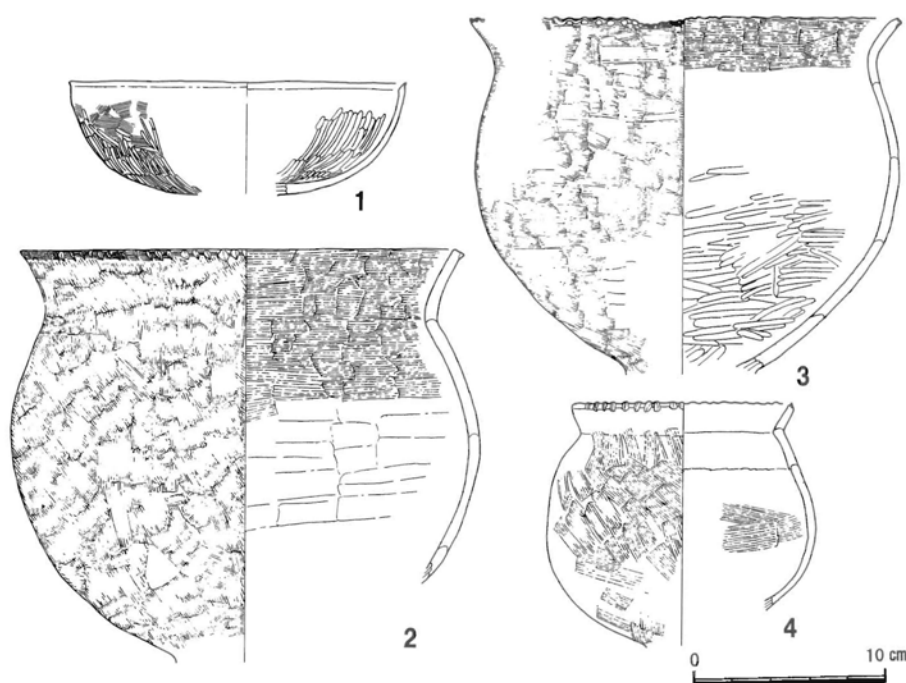
183号住居跡出土遺物 (第15図)

高坏形土器 (1)

脚台部を欠損し、坏部は1/2程度遺存する。推定口径18cmを測る。坏部下端から内湾しながら立ち上がり口縁部は僅かに外反する。内外面ともに口唇部は横ナデ。以下、縦方向にヘラミガキが施されるが横方向のハケメ痕を残す。色調は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈する。胎土は砂粒、1mm程度の細礫、軽石と思われる1~2mmの白色粒子を含むが細かい。貯蔵穴凸堤付近からの出土である。

甕形土器 (2~4)

2は脚台部と甕部下半を1/2程度欠損する。口径23.5cm。最大径を体部中位にもち、頸部はやや「く」字状を呈し、口縁部は外反する。体部は球状を呈する。口唇部にハケ状工具により平坦面を作り、外縁部には同一工具を刺突した刻みが一周する。外面はヘラナデされるが口縁部が縦、体部上半が斜、下半が縦方向のハケメ痕を残す。内面は口縁部から体部中位までヘラナデされるが横方向のハケメ痕を残す。下半は横方向にヘラナデされる。色調は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈する。外面体部上半には煤が、内



第15図 183号住居跡出土遺物 (1/4)

面下半には炭化物が付着する。胎土には1～2mmの細礫を含む。住居東側の床面上からの出土である。

3は甕部のみ2/3程度遺存する。口径約23cmを測る。最大径を体部中位にもち、頸部はやや「く」字状を呈し、口縁部は2より大きく外反する。体部は球状を呈する。口唇部はハケ状工具で一旦ナデられた後、同一の工具で交互に刺突した刻みをもつ。外面はヘラナデされるが体部上半は横、下半は斜方向のハケメ痕を残す。内面口縁部はヘラナデされるが横方向のハケメ痕を残す。体部はヘラナデされるが、中位以下は粗いヘラミガキが施される。色調は赤褐色(10YR4/3)を呈する。外面には口縁部付近に煤が、内面には中位以下に炭化物がみられる。胎土は黒色砂粒、1mm前後の細礫を含む。東コーナー付近床面上及びピット上から出土。

4は小型の土器。脚台部と甕部下半を1/2程度欠損する。口径11.5cmを測る。最大径を体部中位にもち、頸部は「く」字状を呈し、口縁部はやや内傾ぎみに開く。口唇部はハケ状工具で一度平坦にナデられた後、同一の工具で右方向からやや深めに刺突した刻みが一周する。体部は球状を呈する。外面はヘラナデされるが口縁部は縦、頸部以下は斜方向のハケメ痕が一部分に残る。ハケメは広く深い。内面はヘラナデされるが、体部中位に僅かにハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。外面には煤の付着がみられ、特に体部上半に顕著である。内面体部下半には炭化物がこびりつく。胎土は薄茶・黒・白色粒子や細礫を含むが細かい。住居東コーナーピット付近床面上の出土である。

184号住居跡(第16図)

〔位置〕B-6G。

〔住居構造〕住居の大部分が17号方形周溝墓に切られる。(平面形)不明。(壁高)39～55cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)全体に軟弱である。(炉)17号方形周溝墓に破壊されたものと思われる。(柱穴)検出されなかった。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

2層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。

3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。

4層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

5層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

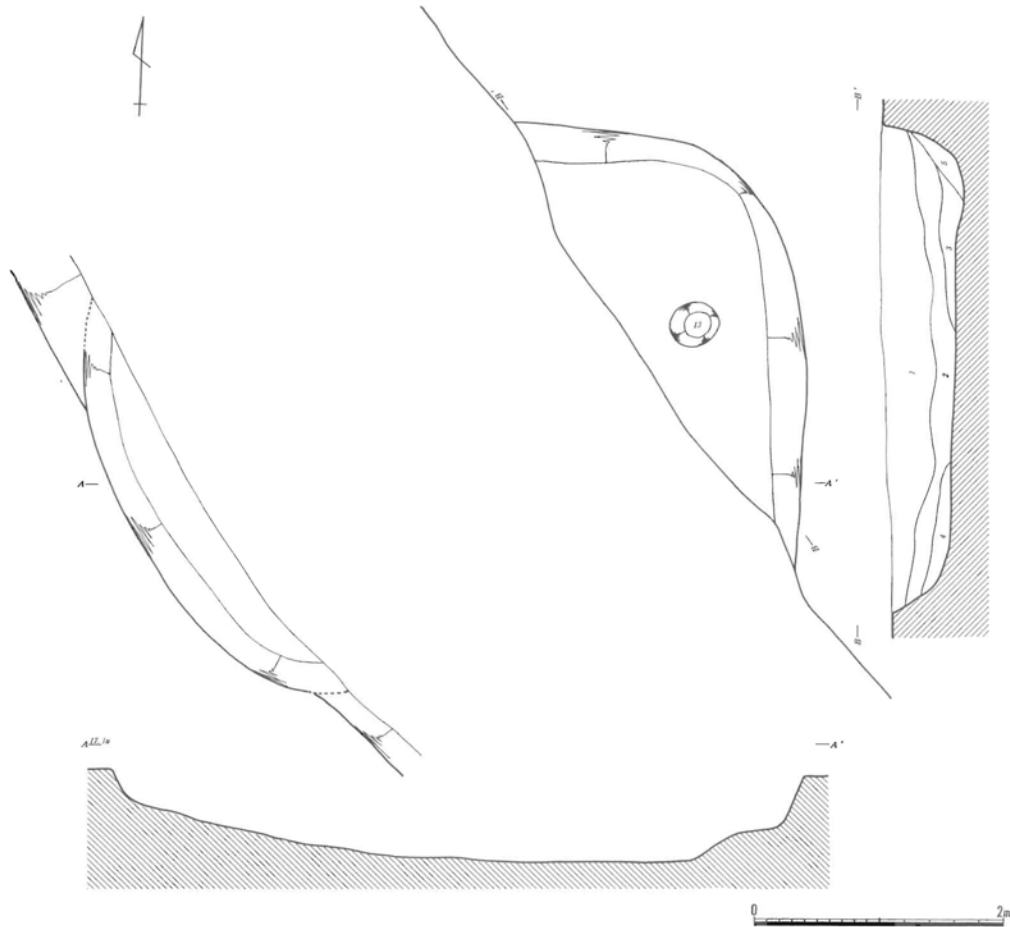
〔所見〕大部分が17号方形周溝墓に破壊されているため詳細は不明であるが、東壁・西壁のあり方から住居跡2軒の可能性はある。

184号住居跡出土遺物(第17図)

甕形土器(1～3)

1は台付甕形土器の脚台部。内外面ともにヘラナデされるが外面縦方向、内面横方向の粗いハケメ痕が残る。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。

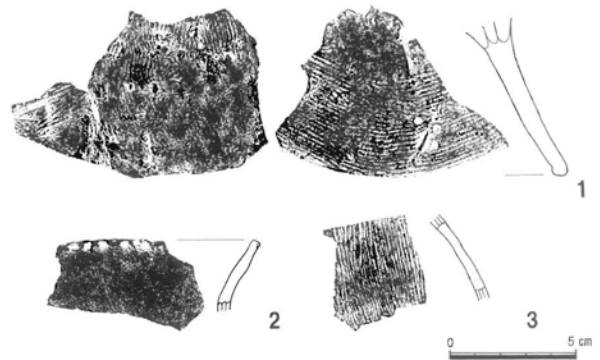
2は口頸部破片。摩耗が著しく確認困難であるが、口唇部外面に刻みをもつ土器である。色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。胎土には輝石と白色砂粒を多く含む。



第16図 184号住居跡 (1/60)

3は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデ。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる2mm前後の白灰色の粒子を含む。

いずれも覆土中の出土である。



第17図 184号住居跡出土遺物 (1/3)

185号住居跡 (第18・19図)

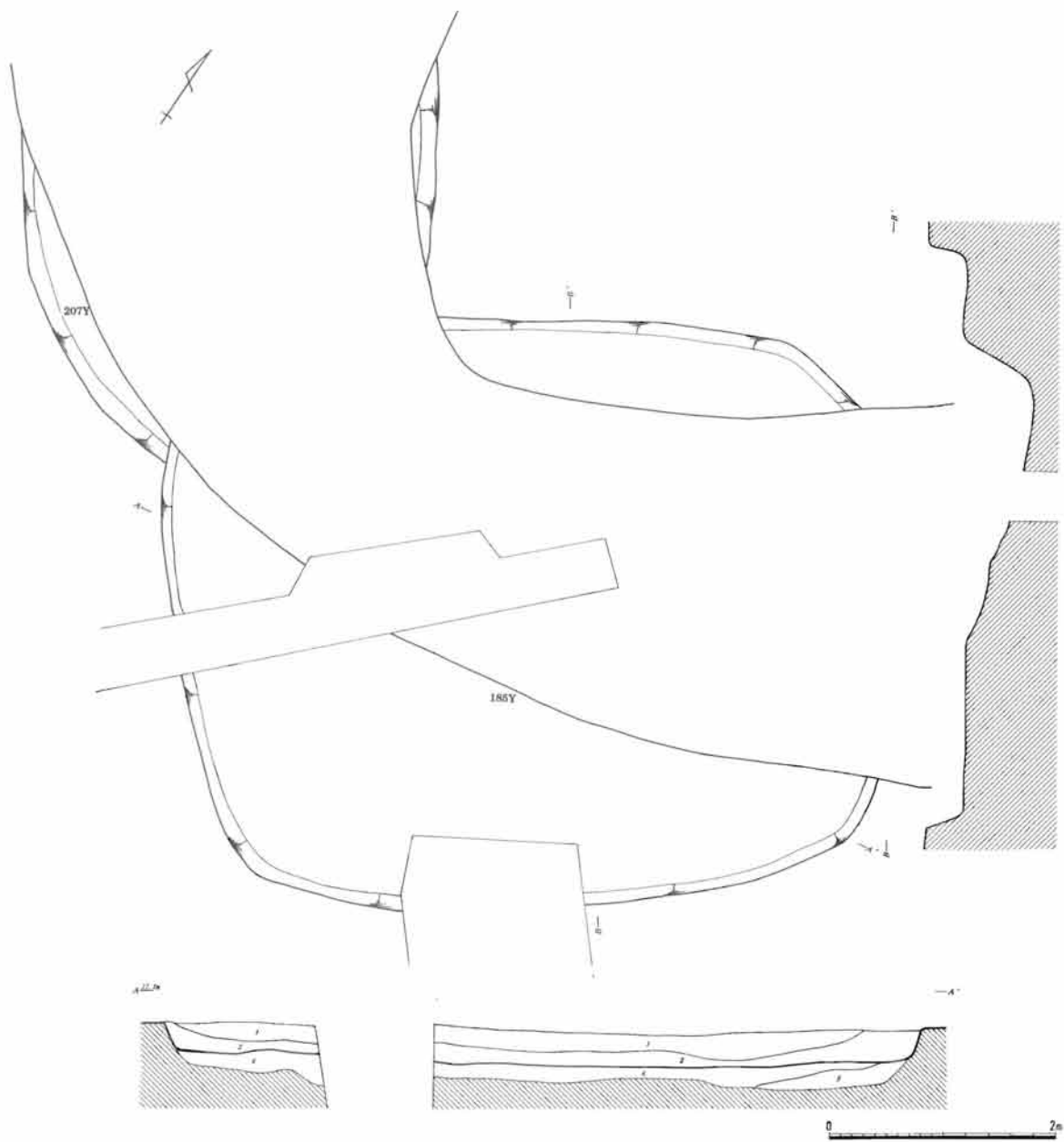
〔位置〕 B-6 G。

〔住居構造〕 住居の中央が17号方形周溝墓に切られる。(平面形) 長方形。(規模) 620×530cm (主軸方向) N-50°-E。(壁高) 23~34cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 貼床が施されている。全体に軟弱だが、部分的に硬化している。(炉) 17号方形周溝墓に破壊されたものと思われる。(柱穴) 検出されなかった。

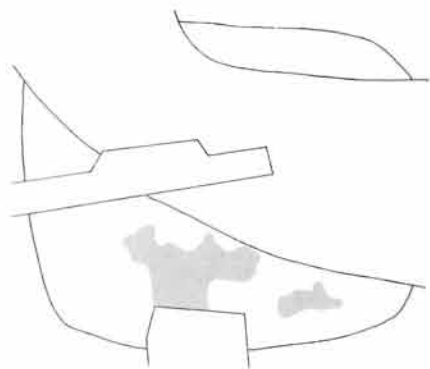
〔覆土〕 大きく攪乱を受けているが、レンズ状の堆積状態を示す。

1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。

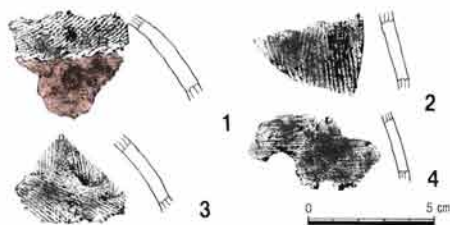
2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。



第18图 185・207号住居跡 (1/60)



第19图 床硬化面



第20图 185号住居跡出土遺物 (1/3)

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

185号住居跡出土遺物 (第20図)

壺形土器 (1)

肩部破片。外面は、LRの単節斜縄文が施され、縄文帯下端にはS字状結節文がみられる。以下ハケメ調整後ヘラミガキされる。内面は剥離が顕著。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

甕形土器 (2～4)

いずれも体部破片で、器面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は、2が褐灰色 (7.5YR4/1)、3が灰黄褐色 (10YR4/2)、4が暗灰色 (N3/0) を呈する。2・3の胎土には白色砂粒、細礫を含む。4は砂粒、細礫、2mm前後の橙色粒子を含む。

いずれも覆土中の出土。

186号住居跡 (第21・22図)

〔位置〕 C-6G。

〔住居構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 520×455cm。(主軸方向) N-35°-W。(壁高) 27～38cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。100×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ15cmを測る。(柱穴) 5本検出された。主柱穴は各コーナーの4本である。南壁際の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東壁下に位置する。径55cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。周辺には高さ5～14cm・幅15～55cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕 覆土中にロームブロックが多く、埋め戻された感が大きい。

1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。

5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。

6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。

7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。

8層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

10層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

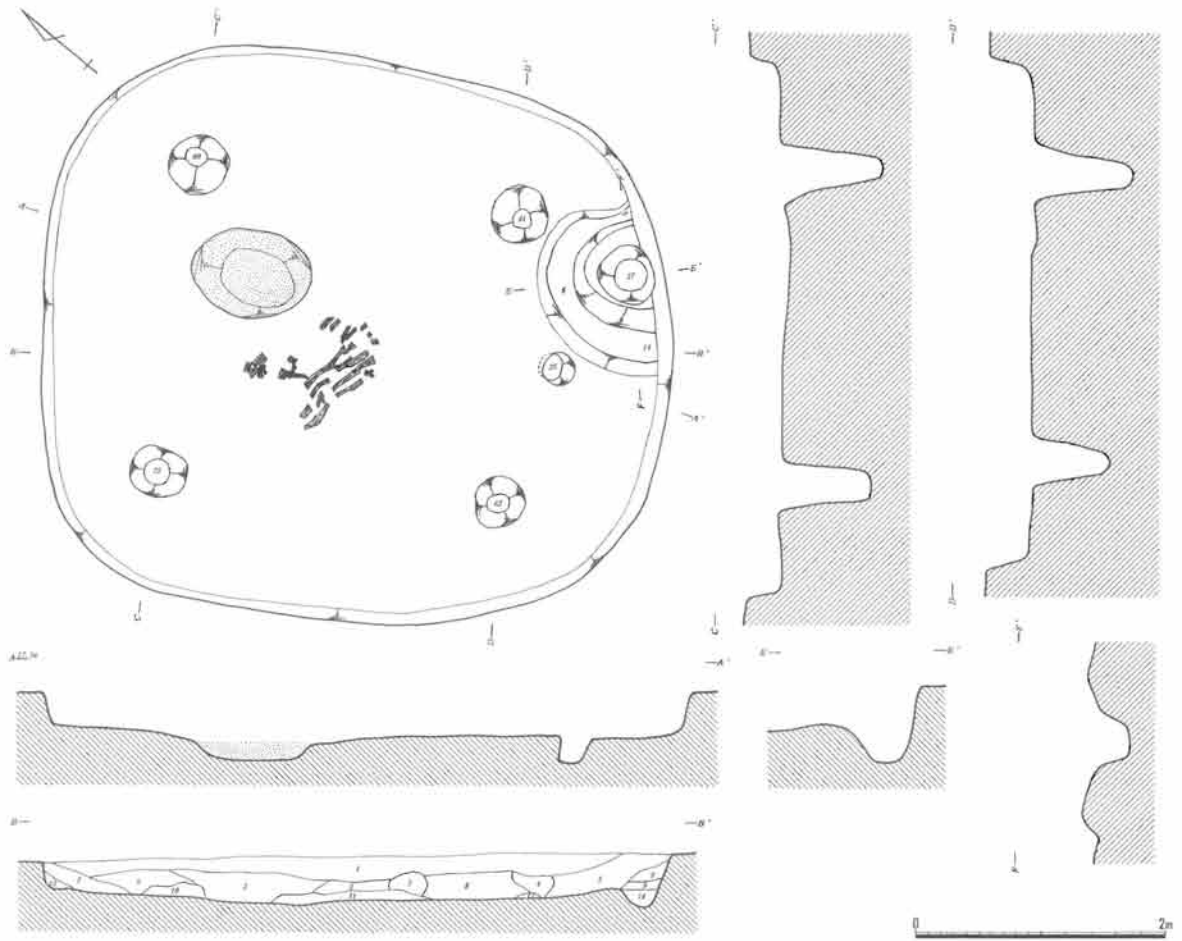
11層 黒褐色土 (10YR2/2)。炭化材片を多く含む。

12層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。焼土ブロックを含む。

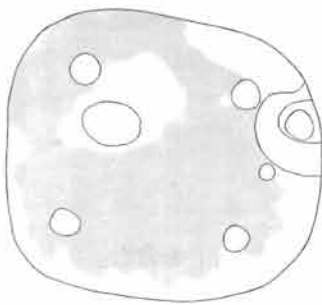
13層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、炭化物粒子を含む。

14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。

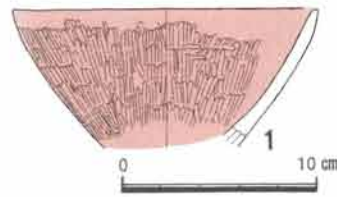
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。



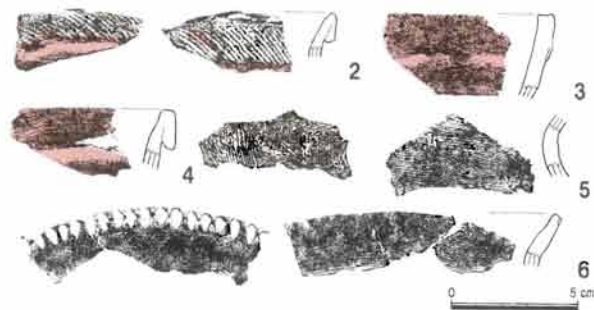
第21图 186号住居跡 (1/60)



第22图 床硬化面 (1/3)



第23图 186号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第24图 186号住居跡出土遺物 2 (1/3)

〔時期〕 弥生時代末葉。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化物粒子を多く含み、床面上には炭化材が散乱するため、焼失住居の可能性が大きい。

186号住居跡出土遺物（第23・24図）

壺形土器（2・4）

いずれも複合口縁部破片。2は口縁部内外面にRLの単節斜縄文が施される。内面縄文帯内には円形赤彩文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる2mm前後の白色粒子を僅かに含む。4は内外面ともヘラミガキされるが僅かにハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かい。ともに覆土中の出土。

高坏形土器（1）

脚台部と坏部1/2程度を欠損する。推定口径16cmを測る。坏部は鉢状を呈し、体部はほぼ直線的に開き、口縁部は僅かに内湾する。器厚は口縁部以外一定である。内外面ともに縦方向にヘラミガキされる。口唇部はヨコナデ。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。内外面ともに赤彩されるが、全体に摩耗が著しく斑点状に剥離している。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。覆土中の出土である。250号住居跡の土器片と接合する。

鉢形土器（3）

複合口縁部破片で、高坏形土器の可能性もある。口唇部はやや角頭状を呈する。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は丁寧なナデ。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。外面は焼成後赤彩されるが摩耗が著しい。胎土は砂粒、細礫、白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中の出土である。

甕形土器（5・6）

5は頸部破片。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。

6は口頸部破片。口唇部は一度平坦に面取りした後、やや右方向から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黄灰色（2.5YR4/1）を呈する。口唇部には煤の付着がみられる。胎土には砂粒、細礫を含む。

いずれも覆土中の出土である。

187号住居跡（第25・26図）

〔位置〕 C-6G。

〔住居構造〕（平面形）円形。（規模）470×460cm。（主軸方向）N-63°-E。（壁高）25～40cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅10～15cm・下幅4～8cm・深さ1～6cmを測りほぼ全周する。（床面）住居西側と東側の一部がよく硬化している。（炉）住居中央から東に偏って位置する。60×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。炉東側に礫が配される。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。西壁下の小ピットは入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下に位置する。50×60cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。部分的に焼土粒子を含む。

2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。

3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

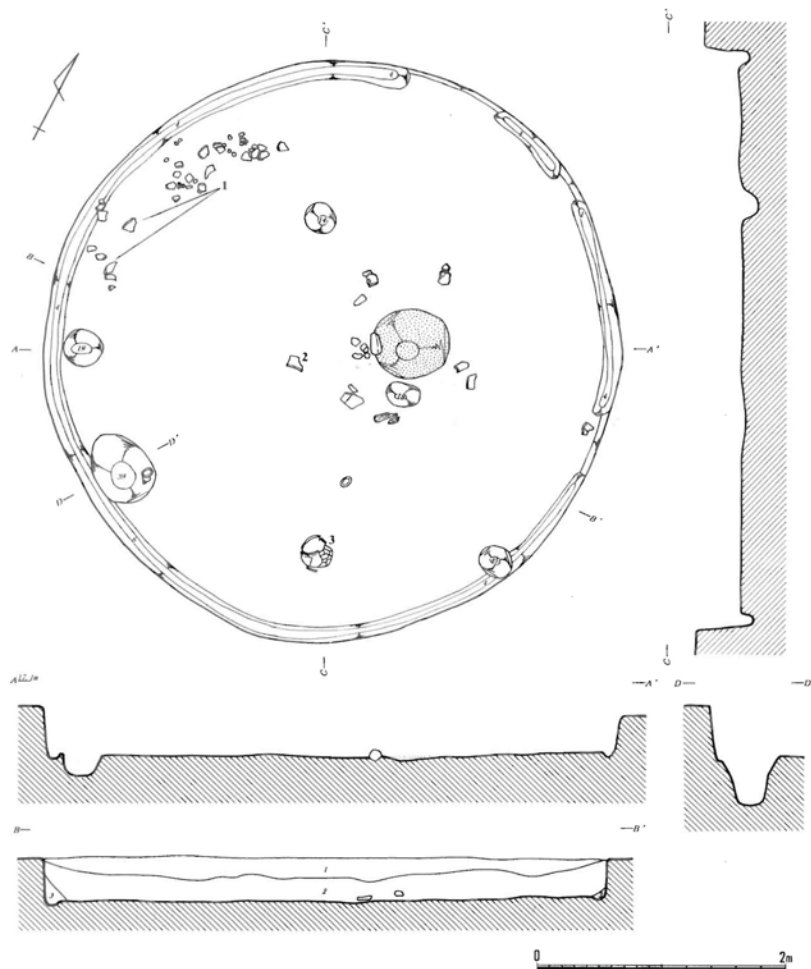
〔遺物〕 炉の周辺から多量に出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

187号住居跡出土遺物 (第27図)

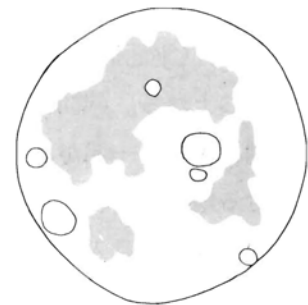
壺形土器 (1・2)

1は1/3程度遺存する。推定口径21cmを測る。体部下半に最大径をもち、頸部はゆるやかに外反し、複合口縁部は僅かに内湾する。口縁部には棒状浮文が4本1単位で貼付される。下端には極めて浅い刻みに加えらる。装飾文様帯は頸部から肩部にかけてあり7段の文様で構成される。施文はまず2・4・6段目に7条1単位の櫛歯状工具による横線文を施し、次に同一工具による櫛描波状文を1・3段目にめぐらす。5段目には櫛歯状工具によりコンパス文状に施文した半円文が、7段目には先端が鋭い棒状ないしヘラ状工具で描いた重鋸歯状文が施文される。外面の整形は、口唇部ヨコナデ、口縁部は横方向のハケメ調整後、縦方向にヘラミガキされるが、下端と棒状浮文の周囲に僅かにハケメ痕を残す。頸部以下は頸部縦方向、体部横方向にヘラミガキされるが、頸部縦方向、体部斜方向のハケメ痕が僅かに残る。内面は口縁部横方向のヘラミガキ、頸部以下はヘラナデされる。色調は灰黄褐色 (10YR4/2) を呈し、外面は文様帯以外と口縁部内面は赤彩される。遺存状態が悪く鮮明ではないが文様帯内にも赤彩された可能性がある。外面頸部と体部下半、内面口縁部に黒斑がみられる。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻である。

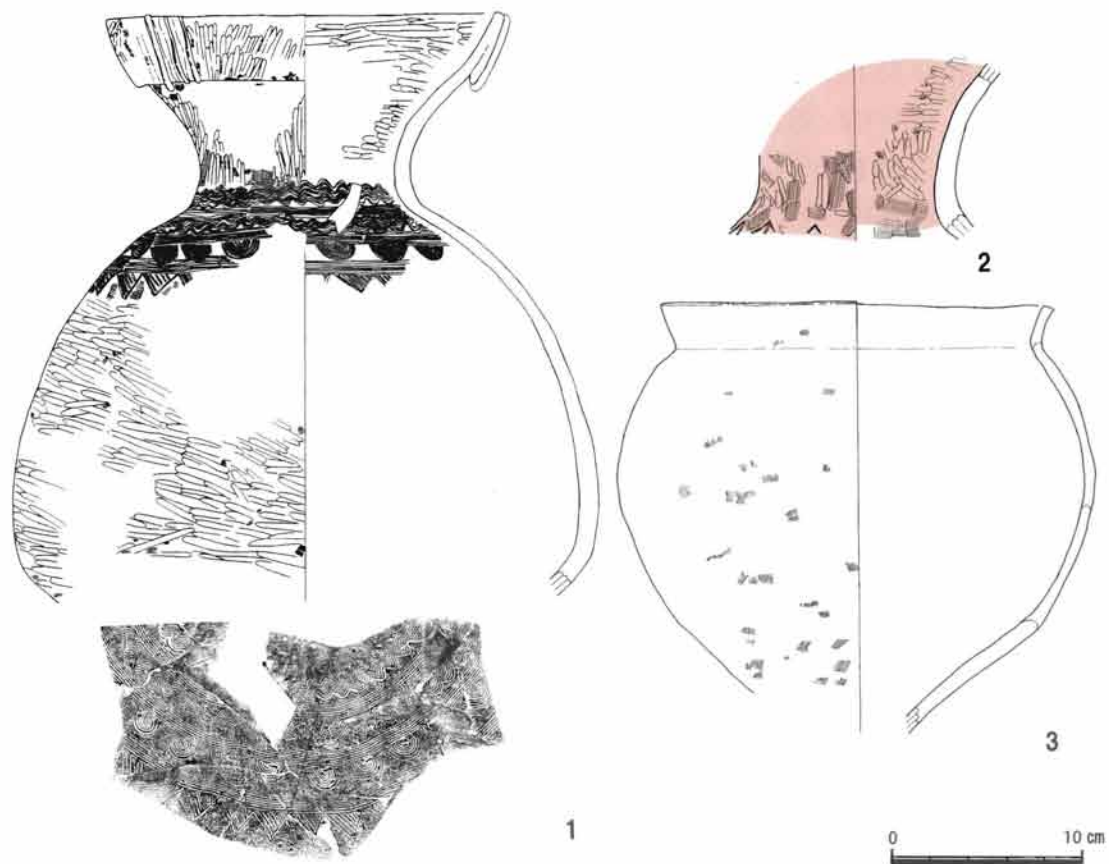


第25図 187号住居跡 (1/60)

に残る。内面は口縁部横方向のヘラミガキ、頸部以下はヘラナデされる。色調は灰黄褐色 (10YR4/2) を呈し、外面は文様帯以外と口縁部内面は赤彩される。遺存状態が悪く鮮明ではないが文様帯内にも赤彩された可能性がある。外面頸部と体部下半、内面口縁部に黒斑がみられる。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻である。



第26図 床硬化面



第27図 187号住居跡出土遺物 (1/4)

2は頸部である。外面は縦方向のハケメ調整後、縦方向にヘラミガキされるがハケメ痕を残す。内面は横方向のハケメ調整後、上部は横方向、下部は縦方向にヘラミガキされるがハケメ痕を残す。肩部には鋸歯状の沈線文が一部確認できる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、内外面は赤彩される。胎土は砂粒、小礫を含むがきめ細かく堅緻である。住居中央床面上からの出土である。

甕形土器(3)

甕部1/2程度と脚台部を欠損する。口径21cmを測る。最大径を体部中位にもち、頸部は「く」字状に屈曲し口縁部はやや外反する。口唇部は平坦にナデられるが僅かに粘土のはみ出しがみられる。体部下半に明瞭な輪積痕を残す。内外面は丁寧にヘラナデされるが、外面に僅かにハケメ痕を残す。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。上半部には煤が僅かに付着する。胎土には軽石と思われる1~3mmの白色粒子が含まれる。南東側床面上からつぶれた状態で出土した。

188号住居跡(第28・29図)

〔位置〕C-8G。

〔住居構造〕(平面形)楕円形。(規模)340×310cm。(主軸方向)N-60°-E。(壁高)39~42cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)炉の周辺がよく硬化している。(炉)住居中央から東に偏って位置する。40×25cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴)主柱穴は検出されなかった。西壁際の1本は入口施設と思われる。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 炉の周辺から比較的多く出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

188号住居跡出土遺物 (第30・31図)

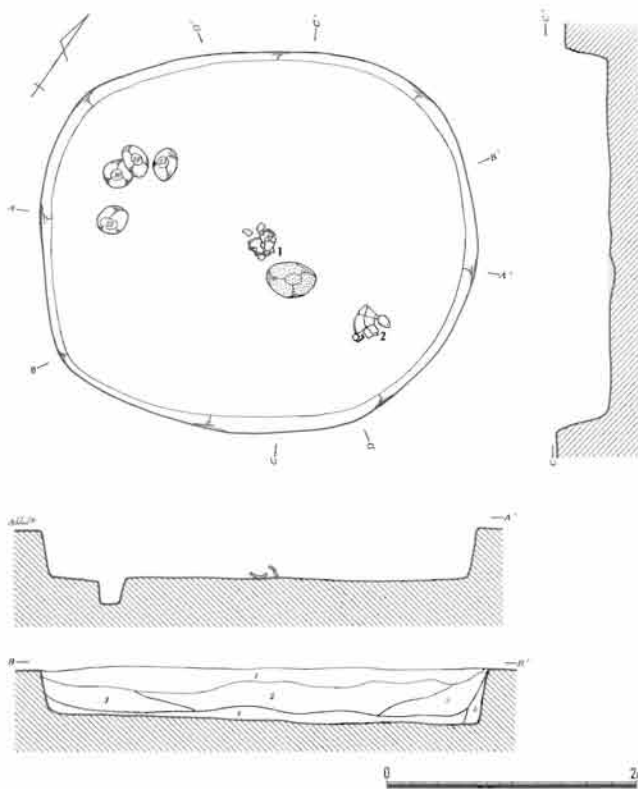
壺形土器 (1～3)

1は口縁部と底部を欠損する。球状の体部からゆるやかに内湾し肩部に至り、頸部は大きく外反する。最大径を体部下半にもち玉葱状を呈する。外面の調整は、頸部縦方向、体部横方向にヘラミガキされる。頸部から肩部にかけては上位から下位へと順に縄文が施される。最初に2条のS字状結節文をめぐらせ、次にLRの単節斜縄文を羽状に4段施す。以下、2条のS字状結節文を4段目の縄文と重なるように施文する。内面はヘラミガキされたと思われるが、斑点状の剥離が著しく観察が困難である。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。外面の縄文帯以外と内面頸部は赤彩される。胎土は砂粒、2～3mmの細礫を僅かに含むが細かい。住居東側床面上からの出土である。

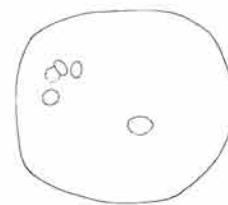
2は口頸部と体部下端を欠損する。最大径を体部下位もち玉葱状を呈すると思われる。外面は斜方向にヘラミガキされるがハケメ痕を残す。肩部には縄文が上位から下位へと施文される。RLの単節斜縄文を羽状に5段施し、下位には2条のS字状結節文がみられる。結節文は端末を結んだ物である。内面

はヘラミガキされたと思われるが、剥離が著しく詳細は不明である。色調は褐色 (7.5YR 4/3) を呈する。外面は縄文帯以外は赤彩されるが、器面の荒れが激しい。外面には棒状の黒斑がみられる。胎土には1～2mmの白色粒子や1～2mmの細礫を含む。住居中央の炉付近床面上から出土した。

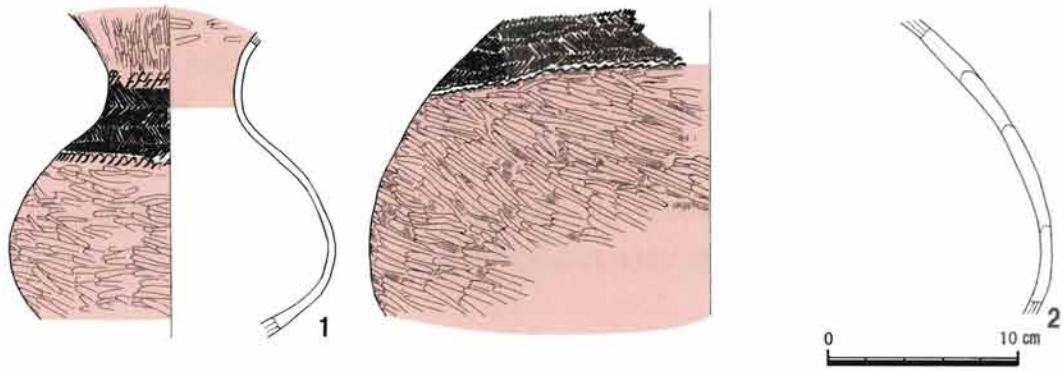
3は複合口縁部破片。口縁部外面と口唇端部には付加条の縄文が施され、複合口縁部下



第28図 188号住居跡 (1/60)



第29図 床硬化面

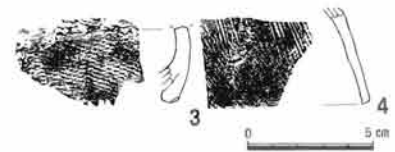


第30図 188号住居跡出土遺物1 (1/4)

端には刻みが加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、内面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる2mm前後の白色粒子を含み粗い。覆土中の出土。

甕形土器(4)

台付甕形土器の脚台部破片。器壁は薄い。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。外面には煤が僅かに付着する。胎土には白色粒子、細礫を含む。覆土中の出土。



第31図 188号住居跡
出土遺物2 (1/3)

189号住居跡(第32図)

〔位置〕C-8G。

〔住居構造〕(平面形)長方形。(規模)490×340cm。(主軸方向)N-30°-W。(壁高)5~12cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)上幅8~20cm・下幅7~12cm・深さ6~22cmで全周する。(床面)全面貼床されよく硬化している。中央がすり鉢状にくぼむ。(炉)検出されなかった。(柱穴)南コーナーを中心にした壁際にピットが集中する。

- 1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム小ブロックを多く含む。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 黒色土(7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 8層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。貼床。
- 9層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム小ブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉~古墳時代初頭。

〔所見〕住居北側コーナーを除き壁際に多くのピットが確認された壁柱穴であろうか。

189号住居跡出土遺物（第33図）

壺形土器（1・4）

1は複合口縁部破片。複合口縁部下端にはヘラ状工具の刺突による刻みが加えられる。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、外面は口唇部を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

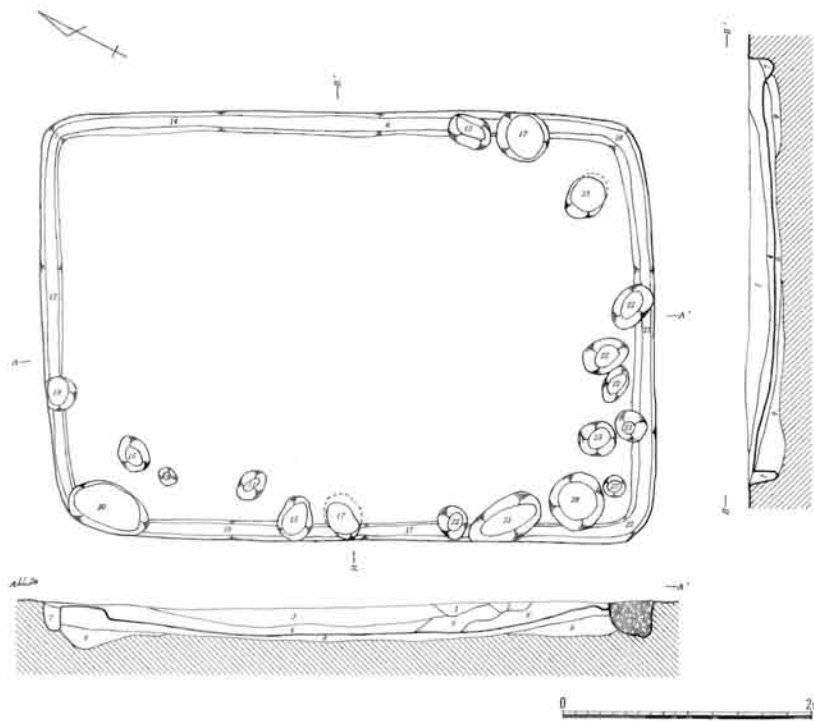
4は頸部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はナデ。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。貼床中の出土。

甕形土器（2・3）

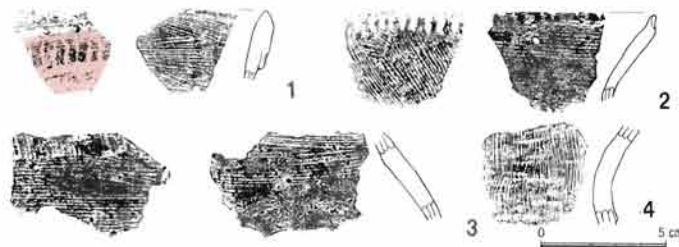
2は口頸部破片。口唇部にハケ状工具を深めに刺突した刻みがみられる。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。外面には僅かに煤がハケメの中に残っている。胎土には砂粒、細礫を含む。

3は体部破片。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。外面は煤の付着がみられる。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。

ともに覆土中の出土。



第32図 189号住居跡



第33図 189号住居跡出土遺物（1/3）

190号住居跡（第34・35図）

〔位置〕 C-8 G。

〔住居構造〕 住居北側が大きく破壊されている。（平面形）楕円形？。（規模）320×300cm。（主軸方向）N-40°-E。（壁高）26~29cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）南側が貼床されている。床面は部分的に硬化している。（炉）破壊された部分にあったものと思われる。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）西側コーナー壁下に位置する。70×50cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を含む。
- 2層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 6層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中に僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。

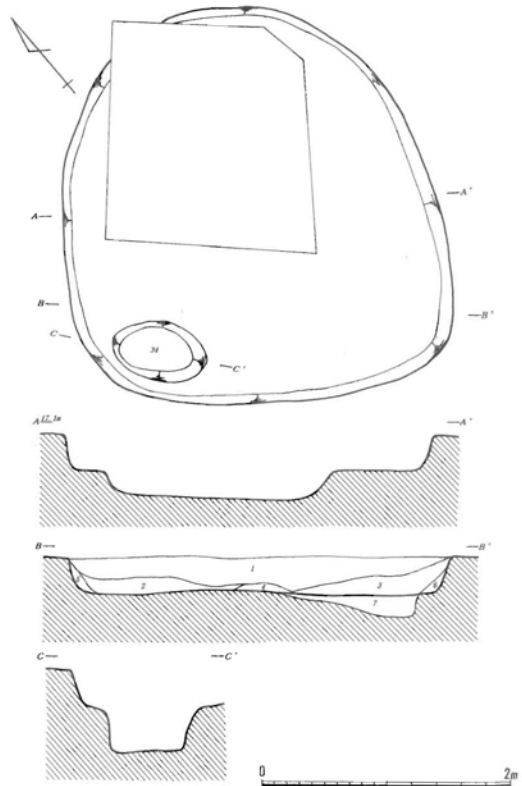
190号住居跡出土遺物（第195図2・5）

土製品（2・5）

2は勾玉ではぼ完存。長さ2.9cm・径1.1cm・孔の径3.5mm・重量5.3gを測る。手づくねで作られる。孔は断面図右から穿孔されている。表面はよくヘラナデされている。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土は砂粒を含むが細かい。

5は細形管状土錘。長さ4.7cm・径1cm・孔の径0.35cm・重量3.35gを測る。手づくねで作られている。粘土を葦などの細い軸に巻きつけて焼成しているののだろうか。孔は中で曲がっている。外面は丁寧にヘラナデされている。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土は砂粒を含むがきめ細かい。

ともに覆土中の出土。



第34図 190号住居跡（1/60）

191号住居跡（第36図）

〔位置〕 D-10 G。

〔住居構造〕 一部破壊されている。南壁際が348号土坑に切られる。（平面形）長方形。（規模）680×530cm。（主軸方向）N-25°-W。短軸が主軸。（壁高）12~20cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅12~20cm・



第35図 床硬化面

下幅4～7cm・深さ6～14cmを測る。(床面)南壁側を除く壁際が貼床されている。(炉)住居中央から東に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。炉の東側にも焼土が検出されるが、炉であったか疑問である。(柱穴)検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 3層 暗赤灰色 (2.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。貼床充填土。

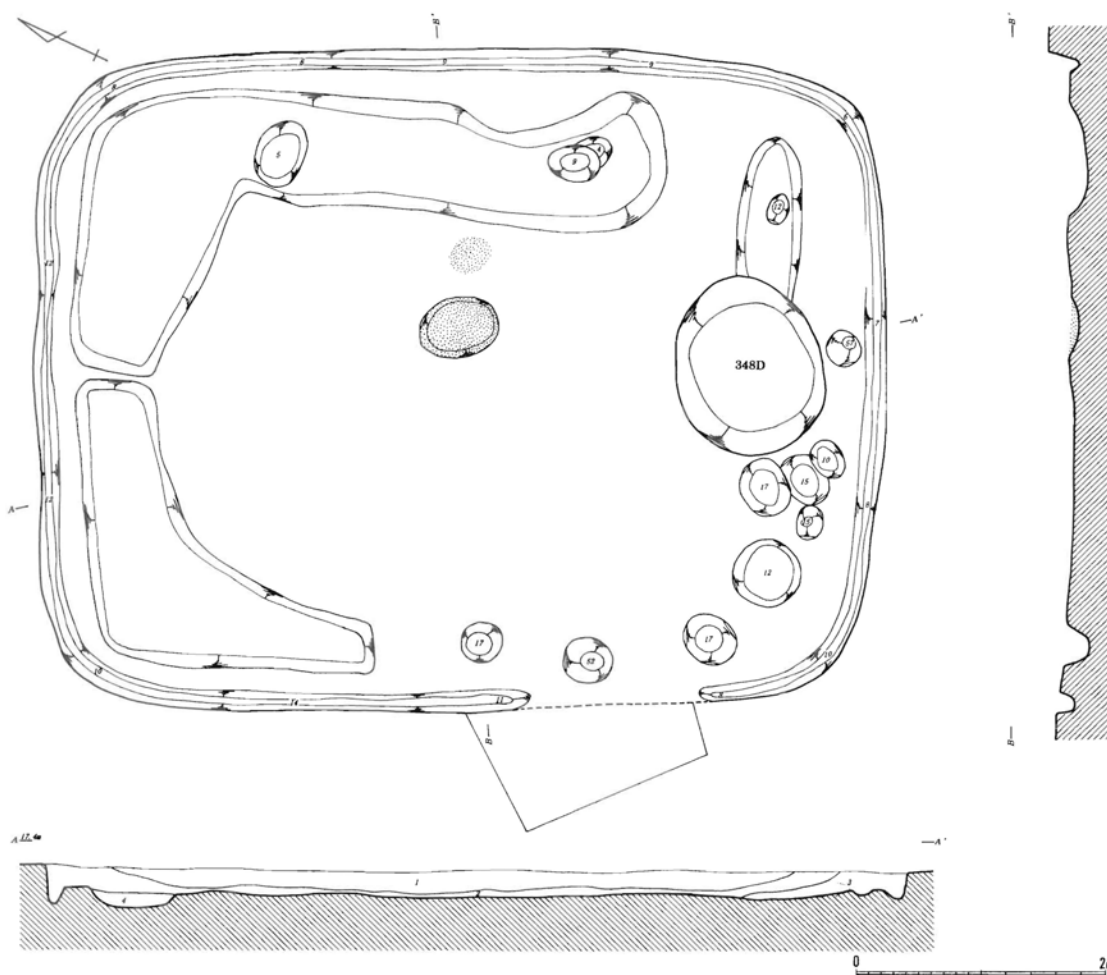
〔遺物〕小破片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

191号住居跡出土遺物 (第37図)

壺形土器 (1)

肩部破片。端末結節のRの無節斜縄文が施される。外面は丁寧にヘラミガキされる。内面は横方向に粗くヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、外面縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻である。

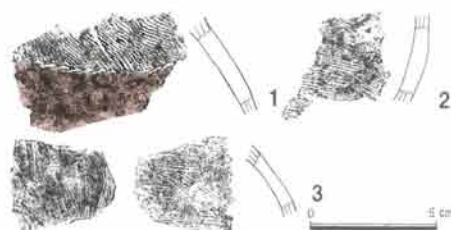


第36図 191号住居跡 (1/60)

甕形土器（2・3）

いずれも体部破片。2の外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は丁寧にヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫、黄橙色粒子を含む。3は内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。外面には煤が僅かに付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。

ともに覆土中の出土。



第37図 191号住居跡出土遺物（1/3）

192号住居跡（第38・39図）

〔位置〕 C-11G。

〔住居構造〕（平面形）長方形。（規模）500×440cm。（主軸方向）N-40°-E。（壁高）17～28cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）全周する。上幅12～22cm・下幅4～8cm・深さ5～10cmを測る。（床面）部分的に硬化している。（炉）2ヶ所に炉と思われる痕跡がみられた。中央のものは35×30cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。北東のものは60×50cmの楕円形で、深さ6cmを測る地床炉である。（柱穴）東側の2本と西壁下の1本が主柱であろう。南壁側は検出されなかった。（貯蔵穴）西壁下、南に偏って位置する。50×30cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。
- 4層 暗石灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。
- 5層 暗石灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。
- 7層 赤褐色土（2.5YR4/6）。焼土ブロック。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

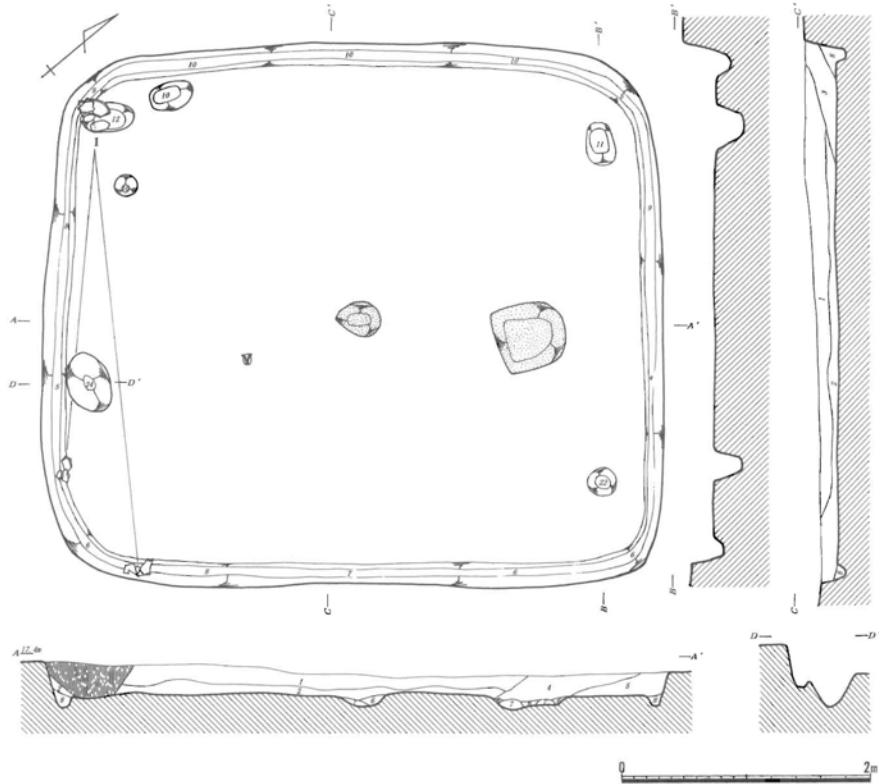
〔遺物〕 図示できたのは床面上出土の1点のみで、非常に少ない。

〔時期〕 古墳時代初頭

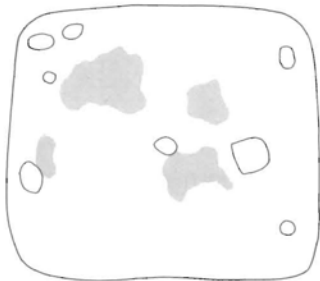
192号住居跡出土遺物（第40図）

甕形土器（1）

甕部下位以下を欠損する。口径17.5cmを測る。最大径を体部中位にもち、頸部は「く」字状に屈曲し口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。体部は扁球状を呈する。口唇部は左方向からのハケ状工具による浅い刻みが一周する。外面体部はヘラナデされるが頸部以下は僅かにハケメ痕が残る。内面は横方向にヘラナデされるが、僅かにハケメ痕を残す。色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。外面上半と内面下位に炭化物が付着する。胎土は1mm前後の白色粒子や細礫を含むが細かい。南西壁に沿った床面上の出土である。



第38図 192号住居跡 (1/60)



第39図 床硬化面



第40図 192号住居跡出土遺物 (1/4)

193号住居跡 (第41図)

〔位置〕 E-8 G。

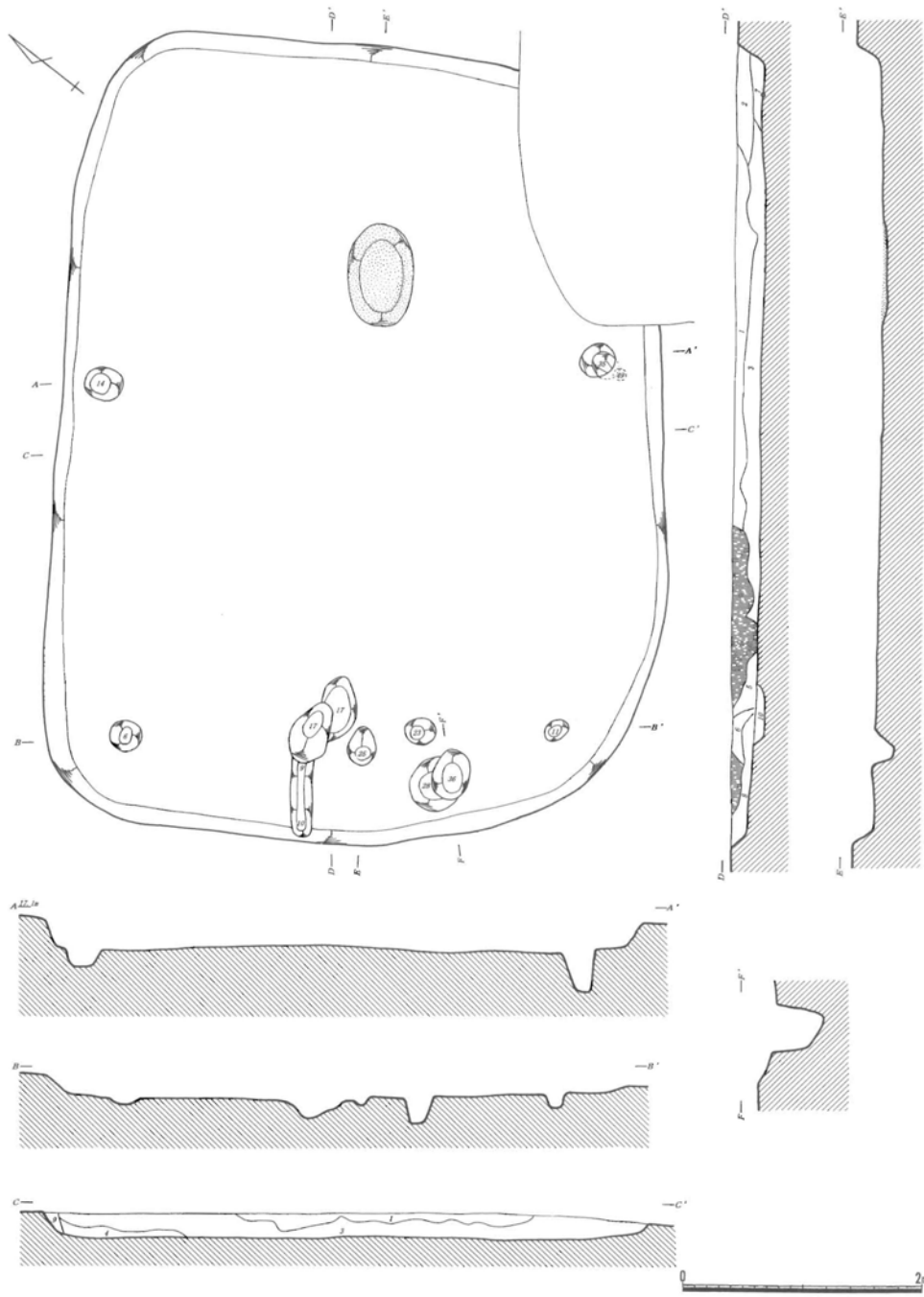
〔住居構造〕 南東コーナーは破壊されている。(平面形) 長方形。(規模) 670×500cm。(主軸方向) N-51°-E。(壁高) 12~20cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。95×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 支柱穴は4本検出されたが、東側の2本は住居中央に偏って位置する。南西壁際中央の一本は入口施設か。(貯蔵穴) 南西壁下、やや南に偏って位置する。径30cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。

〔覆土〕

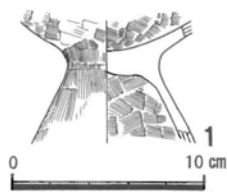
1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

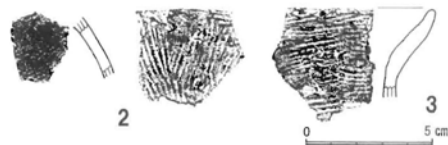
3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。



第41图 193号住居跡 (1/60)



第42图 193号住居跡出土遺跡 1 (1/4)



第43图 193号住居跡出土遺跡 2 (1/3)

- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

193号住居跡出土遺物 (第42・43図、第195図 6)

鉢形土器 (2)

高環形土器の可能性もある。外面には短軸絡条体第5類と思われる網目状撚糸文が施される。内面は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (7.5YR5/3) を呈し、内面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中の出土。

甕形土器 (1・3)

1は台付甕形土器の甕部と脚台部の接合部のみ遺存する。脚台部は裾部にかけて直線的に開く。内外面ともにヘラナデされるが、甕部内外面斜方向、脚台部外面斜方向・内面横方向のハケメ痕を残す。ハケメは深くて広めである。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。甕部内面には炭化物の付着がみられる。

3は口頸部破片。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕を残す。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。外面に僅かに煤の付着がみられる。

ともに覆土中の出土である。

土製品 (6)

細形管状土錘。長さ4.1cm・径0.9cm・孔径4mm・重量2.8gを測る。外面は丁寧にナデられる。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈する。胎土は砂粒をふくむがきめ細かい。覆土中の出土。

194号住居跡 (第44・45図)

〔位置〕 E-7G。

〔住居構造〕 (平面形) 正方形。(規模) 390×390cm。(主軸方向) N-60°-E。(壁高) 33~42cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 炉の周辺に部分的に硬化面が認められるが、全体に軟弱である。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。75×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 西壁下やや南に位置する。径40cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。貯蔵穴南側には高さ3~6cm・幅20~28cmの凸堤が弓状に構築される。

〔覆土〕 堆積状態は不整合で、埋め戻された感が強い。

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを含む。

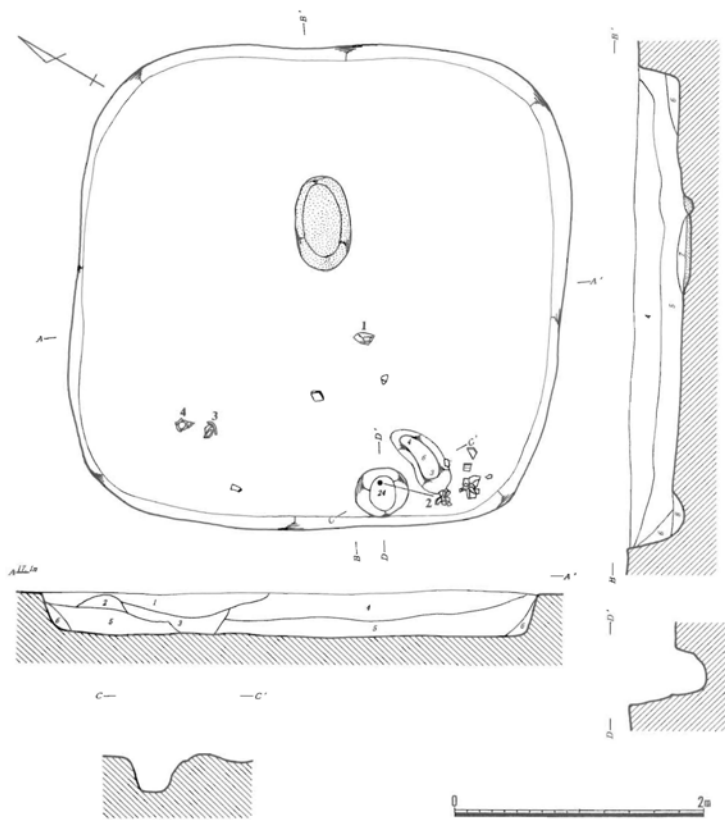
〔遺物〕 南側床面上から比較的多く出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

194号住居跡出土遺物 (第46図)

高坏形土器 (1)

脚台部と坏部1/2程度を欠損する。口径14.6cmを測る。坏部は鉢状を呈しやや直線的に開き、口縁部が僅かに内湾する。脚台部は坏部に較べて細身で、裾部はゆるやかに広がると思われる。外面は坏部横方向、脚台部は斜方向のハケメ調整を行なうが、一部に縦方向のヘラミガキが施される。内面は坏部が横方向のヘラミガキ、脚台部はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。口縁部内外面に黒斑がみられる。胎土は白色粒子と1mm程度の細礫を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居中央床面上の出土である。



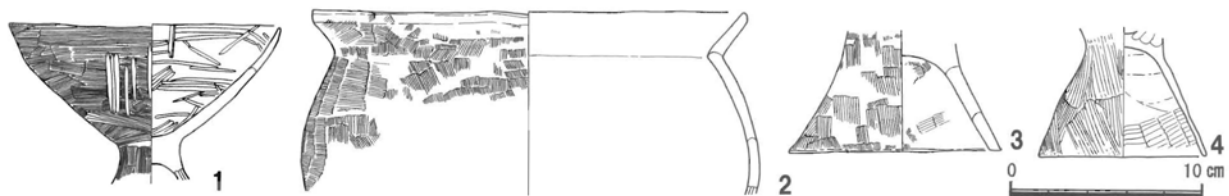
第44図 194号住居跡 (1/60)

甕形土器 (2~4)

2は口縁部と甕部上半1/2程度が遺存する。口径23cmを測る。体部は球状を呈すると思われ、頸部はやや「く」字状に屈曲し口縁部は直線的に開く。外面はヘラナデされるが、縦・横方向のハケメ痕が不規則に残る。内面はヘラナデされるが、体部上端には指頭痕がみられる。色調は赤褐色 (10YR4/4) を呈する。外面



第45図 床硬化面



第46図 194号住居跡出土遺物 (1/4)

には煤の付着がみられる。胎土は砂粒、1～2mmの細礫を含みやや粗い。貯蔵穴付近の出土である。

3・4は台付甕形土器の脚台部。3は裾径11cmを測る。僅かに外湾しながら開く。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面斜方向のハケメ痕が残る。内面天井部には甕部との接合を強化するためか粘土で補強している。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土は白色粒子、1mm前後の細礫を含むがきめ細かい。4は裾径8.7cmを測る。「ハ」字状に直線的に開く。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕を残す。ハケメ痕は幅が広く粗い。裾部下端はヨコナデされる。内面天井部には甕部との補強のためと思われる粘土の貼付がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。外面には煤が付着する。胎土は砂粒、1～2mmの細礫を僅かに含むが細かい。いずれも住居西側床面上の出土である。

195号住居跡(第47・48図)

〔位置〕C-7G。

〔住居構造〕北側は調査区外にある。また、中央を排水溝により破壊されている。(平面形)楕円形。(規模)540×不明。(主軸方向)N-44°-E。(壁高)14×32cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)上幅11～25cm・下幅3～6cm・深さ2～10cmを測る。全周すると思われる。(床面)壁際と炉の西側を除き、硬化している。(炉)住居中央から東に偏って位置する。不明×50cmを呈する地床炉で、深さ7cmを測る。炉の西側に礫が配される。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)南壁コーナーに位置する。径40cmの円形を呈する。深さ40cmを測る。

〔覆土〕ロームブロックが多くみられ、埋め戻された感が強い。

- 1層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・小ブロックを多く含む。
- 8層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 9層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。
- 10層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム小ブロックを多く含む。
- 11層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム小ブロックを僅かに含む。貼床充填土。

〔遺物〕貯蔵穴と覆土中から比較的多く出土する。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

195号住居跡出土遺物(第49・50図)

壺形土器(3～6)

いずれも肩部破片。3・4は同一個体で、櫛描きによる波状文と横線文が施されている。3は10本櫛歯による横線文1段と、その上に波状文が1段。下端には波状文が2段施文されている。4は2段の波状文と1段の横線文が確認できるのみである。外面はヘラミガキされるがハケメ痕を僅かに残す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含むが細かく

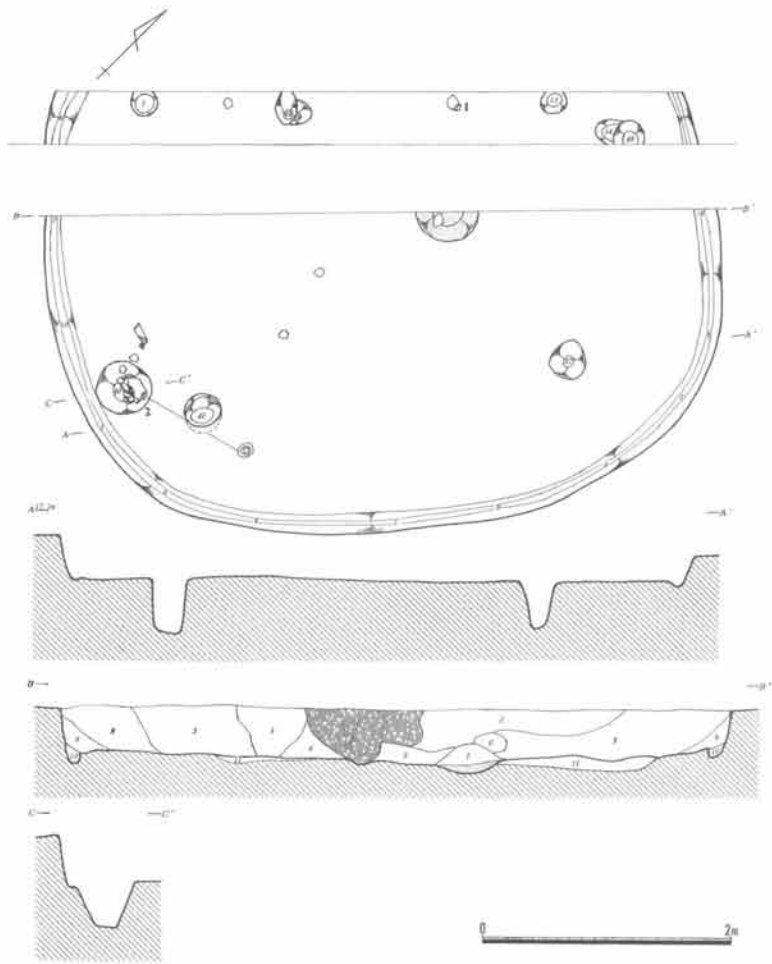
堅緻である。5・6も同一個体である。施文順位は上から下で、LRの単節縄文を羽状に施し、最下段には2条のS字状結節文が施される。外面はヘラミガキされるが僅かにハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

高坏形土器(1)

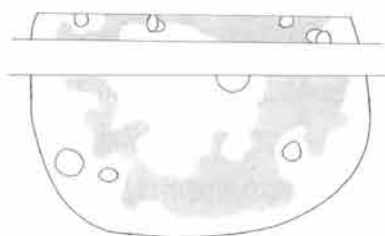
脚台部のみ遺存。坏部と脚裾部を欠損する。脚台部は「ハ」字状に直線的に開く。外面は縦方向にヘラナデされるが、脚台部上端部に縦位のハケメ痕が残る。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。外面は赤彩されるが摩耗が著しい。胎土は砂粒、2~3mm大の細礫を含むがきめ細かく堅緻である。住居中央付近床面上の出土である。

甕形土器(2・7~9)

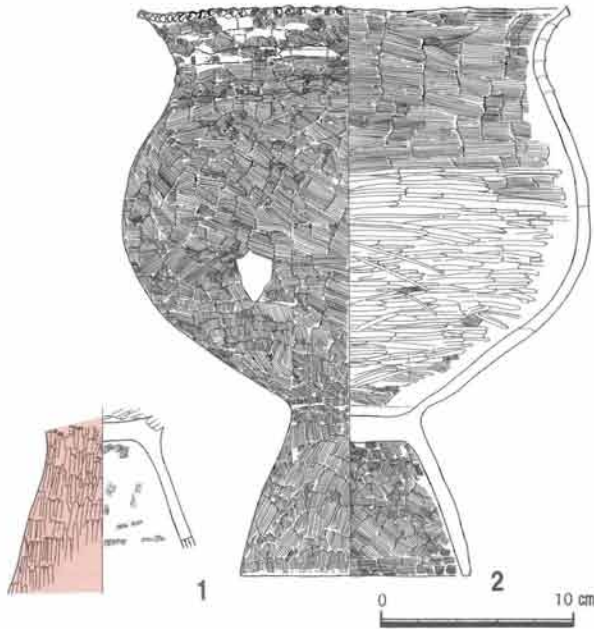
2は口頸部に輪積痕を残す台付甕形土器である。ほぼ完形で、口径13cm・裾径12cm・器高30cmを測る。最大径を体部中位にもち、口縁部は頸部からゆるやかに外反する。体部は球状を呈し、脚台部は直線的に開く。外面口唇部は一度平坦にナデられた後、先端が丸いハケ状工具で、左から右に押し引きした刻みが一周する。口頸部は1cm幅の輪積成形で5段の輪積痕を残し、その上から押さえるようにハケメ調整し、その後ナデられている。1段目と4・5段目は輪積痕を明瞭に残すのに対し、間の2段は上からハケ状工具で一部磨りつぶされている。体部はヘラナデされるが上位縦方向、中位斜方向、下位以下脚台部は縦方向に浅くて細密なハケメ痕が残る。体部上端のハケメは輪積痕に入り込むような状態になっている。脚裾部は横方向にナデられる。内面は口縁部以下横方向のハケメ調整後、ヘラナデされるがハケメ痕を残す。中位以下は粗くヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるが、天井部縦方向、以下斜方向、裾端部のみ横方向のハケメ痕が残る。



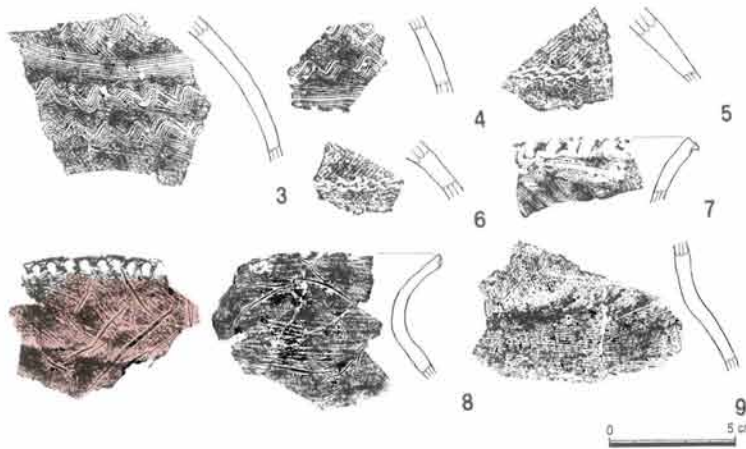
第47図 195号住居跡(1/60)



第48図 床硬化面



第49図 195号住居跡出土遺物1 (1/4)



第50図 195号住居跡出土遺物2 (1/3)

色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈し、甕部外面は全体に煤の付着が顕著である。甕部内面下半には、多量の炭化物の付着がみられる。胎土は砂粒と1~3mmの細礫を含む。貯蔵穴中からの出土である。

7は口縁部破片。口唇部はハケ状工具で一度平坦にされた後、やや左方向から刺突した刻みが施される。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヨコナデ。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈し、胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中の出土である。

8は口頸部破片。口唇部にハケ状工具で刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。外面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

9は頸部から体部上半部にかけての破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナ

デされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈する。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を多量に含み粗い。覆土中の出土である。

196号住居跡 (第51・52図)

〔位置〕 C-4 G。

〔住居構造〕 201号住居跡を切る。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 480×400cm。(主軸方向) N-50°-E。(壁高) 45~54cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 住居壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。100×80cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 各コーナーに主柱穴4本が検出された。(貯蔵穴) 南壁下に位置する。径50cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。貯蔵穴の周囲には高さ1~5cm・幅40cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕 ロームブロックが多く、埋め戻された感が大きい。

1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 12層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 20層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 貯蔵穴東側から比較的多く出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

196号住居跡出土遺物 (第53・54図)

壺形土器 (1・4・8)

1は底部と体部下半1/4程度遺存する。推定底径4.2cm。中心が凹んだ底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、球状の体部を呈すると思われる。内外面共にハケメ調整後、縦方向に丁寧なヘラミガキが施されるが、外面底部下端に縦位のハケメ痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈する。断面は内部が黒いサンドイッチ状を呈する。外面は赤彩される。胎土は細かい砂粒を含むが精製されていて、きめ細かく堅緻である。

4は複合口縁部破片。口唇部と口縁部外面に付加条の縄文が施される。細い棒状浮文が4本単位で付けられている。内面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土は砂粒、小礫、軽石と思われる白色粒子を特に多く含み粗い。

8は肩部破片。LRの単節斜縄文が羽状に施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。内外面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。

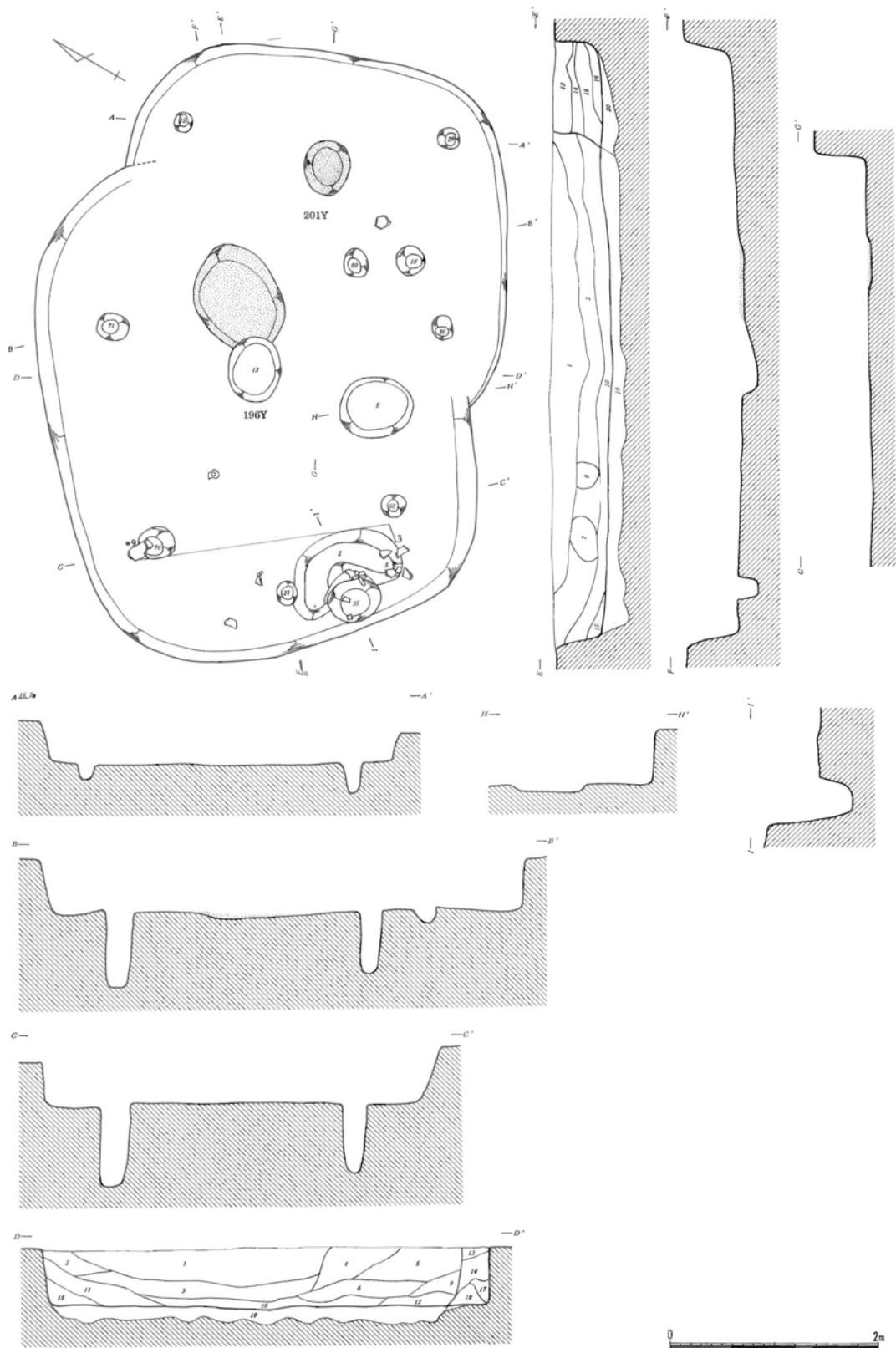
いずれも覆土中の出土である。

高坏形土器 (2)

脚台部破片で裾部を欠損する。全体の器形は不明であるが、裾部にかけてゆるやかにラッパ状に広がる器形である。途中3孔が外側から内側に向けて開けられている。脚台部外面はハケメ調整後、丁寧にヘラミガキされるが、上端部には縦位のハケメ痕が残る。内面はヘラナデされるが、わずかに横位のハケメ痕が残る。甕部内面は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土は砂粒、1mm程度の細礫を含むが精選されており緻密である。断面は表面から2mmの厚さで色調がくっきり分かれている。これは焼成時の温度差のせいではないかと推測される。覆土中からの出土である。

鉢形土器 (5～7・10)

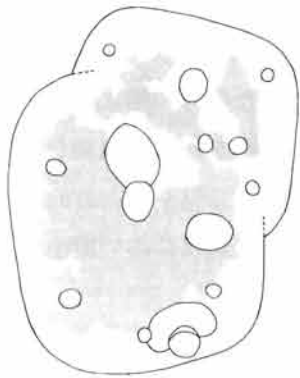
5～7は高坏形土器の可能性もある。5は複合口縁部外面にLRの単節斜縄文が施され、口縁部下端には指で粘土を押えつけた痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を多量に含み粗い。6はLRの単節斜縄文を口縁部では縦方向に、口唇端部で



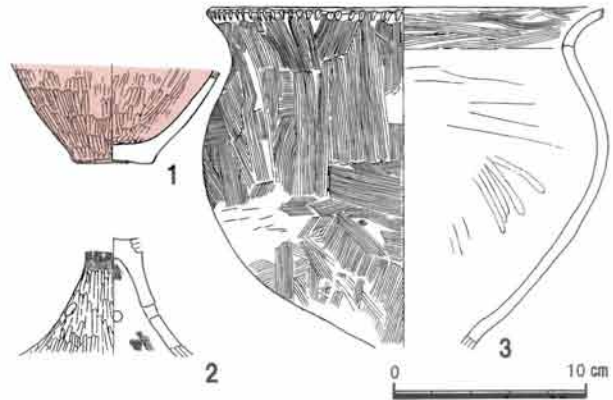
第51图 196 • 201号住居跡 (1/60)

は横方向に施される。内外面ともに丁寧なミガキが施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒を含むがきめ細かく堅緻である。7は壺状を呈する器形か。口唇部はやや尖った形に成形される。口唇部直下と体部にはヘラ状工具による刻みがめぐらされる。口唇部と文様帯以外は丁寧なヘラミガキが施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土は砂粒を含むがきめ細かく堅緻である。いずれも覆土中の出土である。

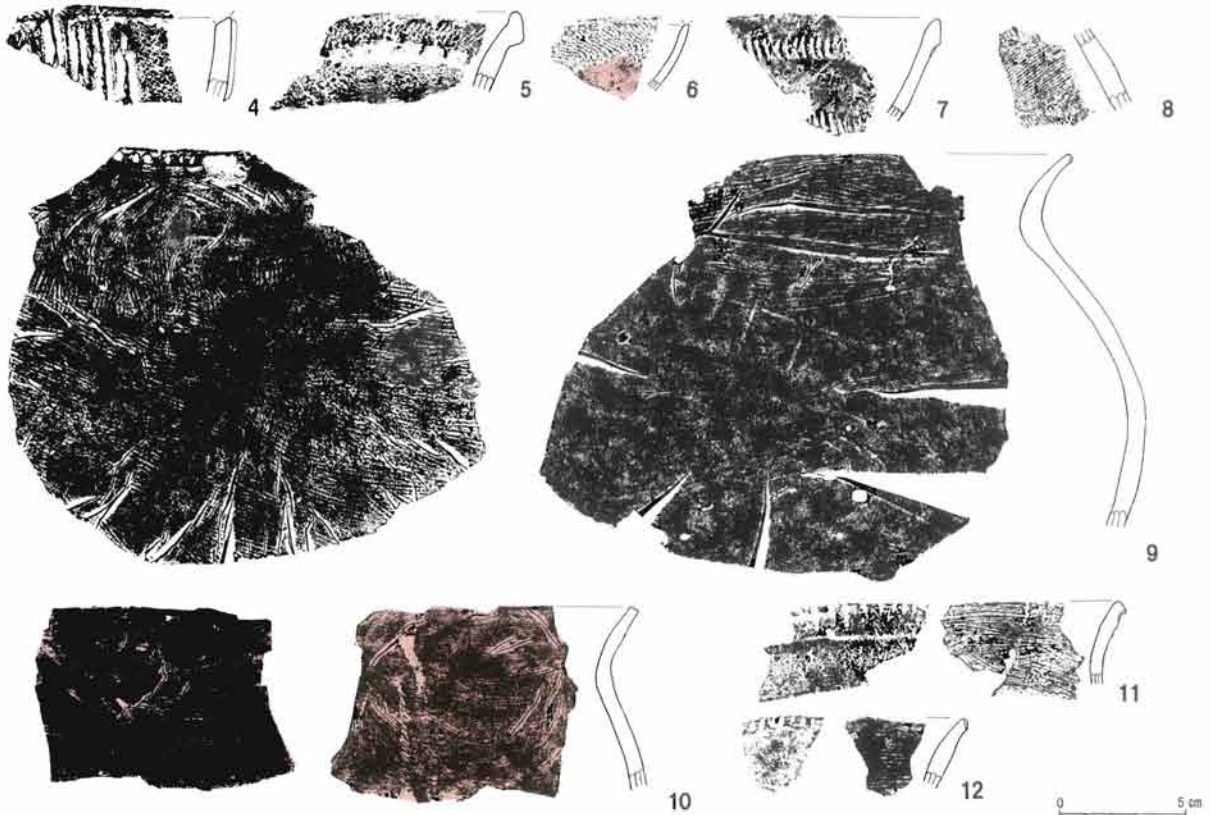
10は口縁部破片。内外面ともにヘラミガキが施されるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。内外面ともに赤彩される。胎土は砂粒、細礫、橙色粒子を少量含むがきめ細かく堅緻である。覆土中の出土である。



第52図 床硬化面



第53図 196号住居跡出土遺物1 (1/4)



第54図 196号住居跡出土遺物2 (1/3)

甕形土器（3・9・11・12）

3は甕部中位以下2/3を欠損する。口径21cmで、最大径を体部中位にもち、口縁部はゆるやかに外反する。外面口唇部はハケ状工具で一度平坦にされた後、先端が鋭い工具により刻まれる。体部は全面ハケメ調整が施された後、ヘラナデされるがハケメ痕を残す。ハケメは横方向と縦方向の部分が混在した状態で施されている。内面口縁部はヘラナデされるが横方向のハケメ痕を残す。体部はヘラナデされるが、僅かに工具痕が残る。体部中位は粗くヘラミガキされる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。外面上半と内面口縁部に煤が僅かに付着する。胎土には砂粒、2～3mmの小礫を含む。住居跡コーナー際、凸堤付近の出土。

9は口頸部から体部にかけての破片。口唇部に浅く刺突された刻みがめぐる。球状の体部から頸部でゆるやかにくびれて口縁部が外反する器形である。外面と内面口縁部はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。外面体部中位に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。北西ピット上から出土。

11・12はいずれも口頸部破片。11は口唇部にヘラ状工具で刺突された刻みが施され、1段の輪積痕を残す。2段目の輪積痕で割れている。内面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。12はやや左方向からの浅い刺突された刻みが施される。内面はヘラナデされるが、ハケメ痕を残す。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。ともに覆土中の出土である。

197号住居跡（第55・56図）

〔位置〕 A-5G。

〔住居構造〕 243号住居跡を切り、17方形周溝墓に切られる。一部攪乱により破壊されている。（平面形）長方形。（規模）不明×460cm。（主軸方向）N-45°-W。短軸が主軸。（壁高）34cm前後を測る。ゆるやかに立ち上がる。（壁溝）上幅10～25cm・下幅3～6cm・深さ6～18cmで、全周すると思われる。また溝の中に小ピットが等間隔に検出された。（床面）弥生時代243号住居跡の上に厚さ10cm前後の貼床を施す。炭化材が僅かに残る。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。径70cmの円形を呈する地床炉で、深さ20cmを測る。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南壁下中央に位置する。径30cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む（斑状）。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。

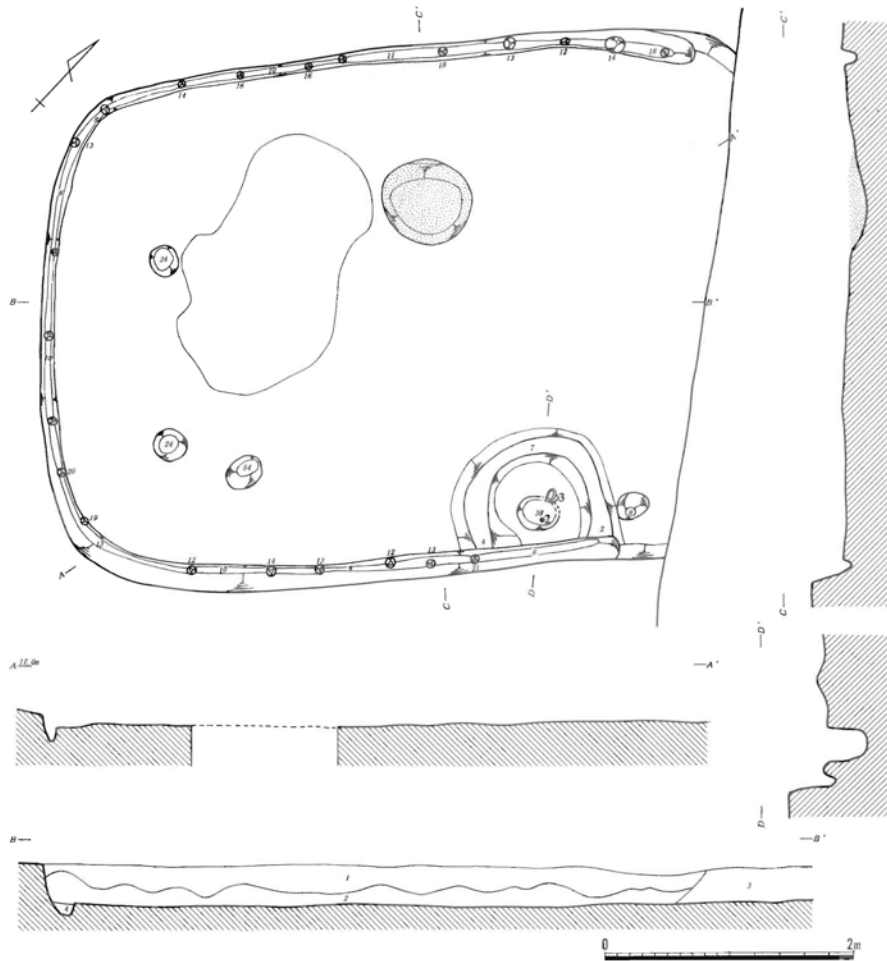
〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

197号住居跡出土遺物（第57・58図）

壺形土器（1・2・4～6）

1は推定口径5cmと小形の土器。口縁部1/4程度のみ遺存のため全体の器形は不明であるが、球形を呈する体部から頸部でくびれ、口縁部はゆるやかに外反する。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残

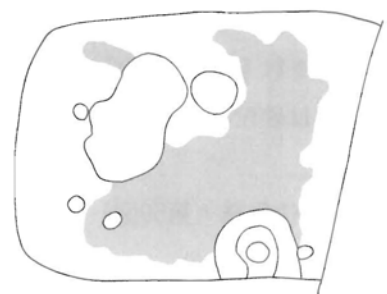


第55図 197号住居跡 (1/60)

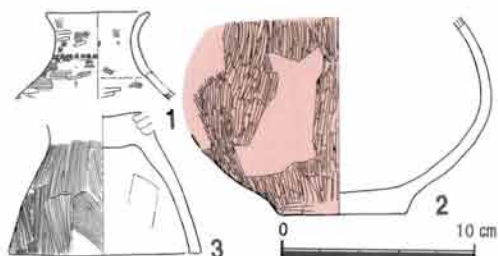
す。頸部には非常に小さい円形竹管文が一周する。内外面ともに口唇部ヨコナデ、以下はナデられるがハケメ痕を残す。一部ヘラミガキ痕が残る。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈する。胎土は白・黒色粒子を含むがきめ細かい。覆土中からの出土である。

2は底部と体部下半1/2程度遺存する。底径6.6cm。平底の底部から立ち上がり、体部は球状を呈する。外面は縦方向に丁寧ヘラミガキが施される。内面はヘラナデされたと思われるが、剥離が著しいため確認が困難である。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR 4/3) を呈する。外面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。貯蔵穴とその周囲床面上からの出土である。

4～6は複合口縁部破片。4はRLの単節斜縄文が羽状に3段施される。口唇端部にも縄文が施される。複合口縁部下端には、ハケ状工具で刺突された刻みが施される。施文後棒状浮文が貼付されるが本数は不明。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、縄文帯の中に円形赤彩文が4箇所確認される。内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。5は口縁部外面にRLの単節斜縄文を縦方向に回転させて施文。内外面ともにヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色の粒子を含むが細かく堅緻である。6は複合口



第56図 床硬化面



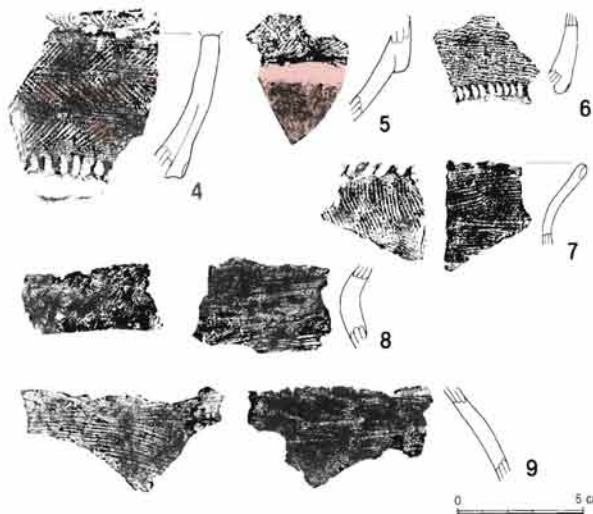
第57図 197号住居跡出土遺物1 (1/4)

縁部外面に単軸絡条体第5類と思われる網目状撚糸文が施される。口縁部下端には先端の尖ったヘラ状工具で刺突されたハケメ痕が残る刻みが一周する。色調はにぶい褐色(7.5 YR5/3)を呈し、内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を多く含む。いずれも覆土中の出土である。

甕形土器(3・7~9)

3は脚台部である。裾径10.1cm。甕部を欠くため全体の器形は不明であるが、脚部は内湾気味に開く器形である。外面はヘラナデされるが縦方向のハケメ痕を残す。ハケメは広く深い。内面はヘラナデされ、その際の工具痕が残る。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。脚端部に僅かに粘土のはみ出しがみられる。胎土は砂粒、1~2mmの細礫、白色の1~3mm大の粒子が多く含まれ粗い。貯蔵穴からの出土である。

7~9は口頸部破片である。7は口唇部にハケ状工具による刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。8は頸部破片、9は頸部と体部上位破片で、いずれもヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はともに黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。いずれも覆土中の出土である。



第58図 197号住居跡出土遺物2 (1/3)

198号住居跡(第59図)

〔位置〕C-6G。

〔住居構造〕南壁と北壁の一部分を残すのみで、ほとんどが17号方形周溝墓に切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(壁高)17~19cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(床面)軟弱である。(炉)17号方形周溝墓に破壊されたものと思われる。(柱穴)不明。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。

3層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕弥生時代末葉~古墳時代初頭。

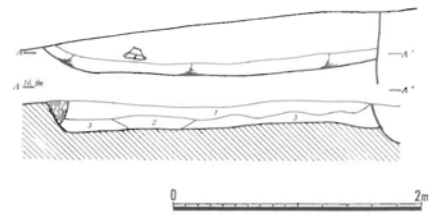
199号住居跡（第60図）

〔位置〕 C-5 G。

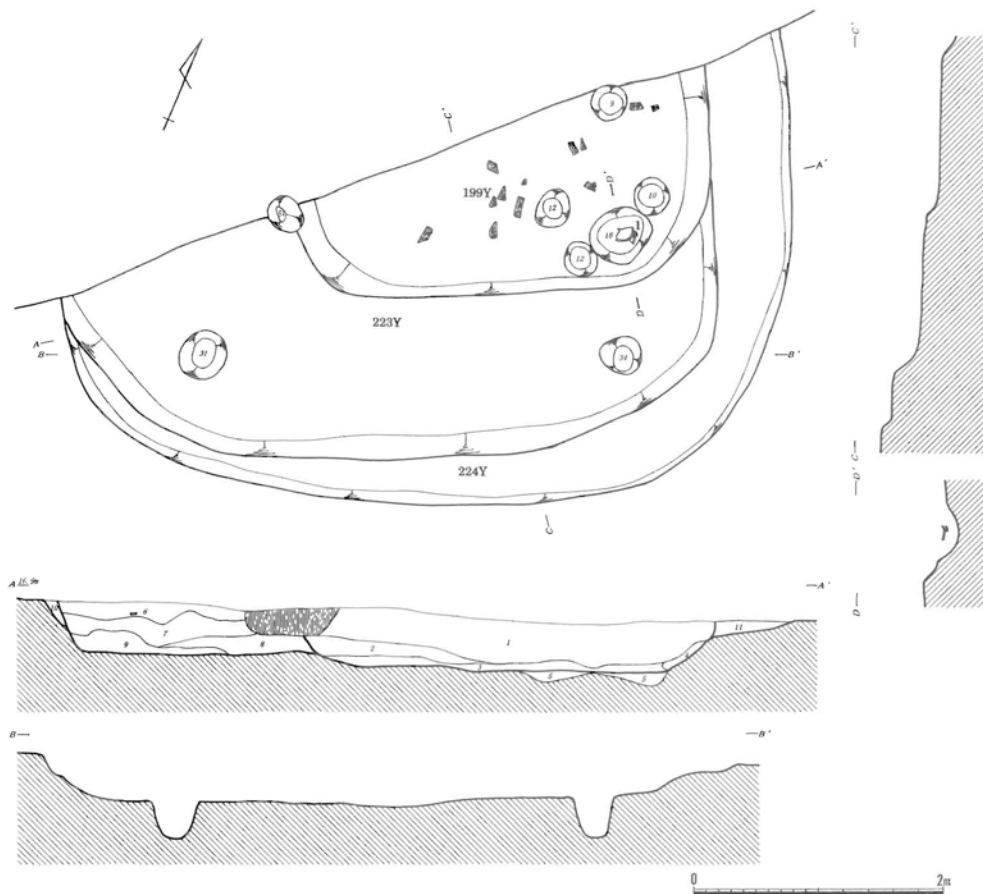
〔住居構造〕 223号住居跡を切り、17号方形周溝墓に大きく切られる。（平面形）不明。（規模）不明×340cm。（主軸方向）N-25°-W。（壁高）31~55cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。（床面）壁際が貼床される。全体に軟弱である。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南東コーナーに位置する。40×50cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

〔覆土〕

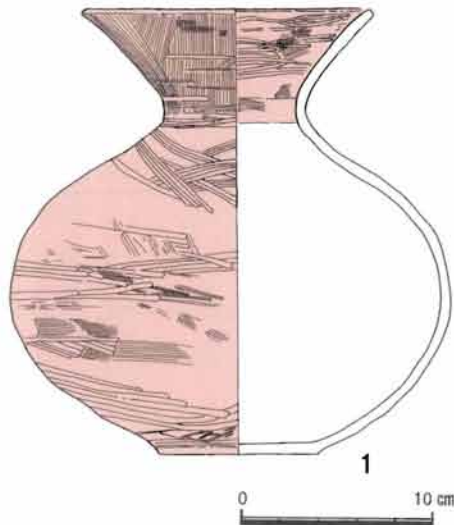
- 1層 黒褐色土（10YR2/2）ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。
炭化材片を含む。
- 3層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。中央部には焼土小ブロックを僅かに含む。
- 4層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 5層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・小ブロックを



第59図 198号住居跡（1/60）



第60図 199・223・224号住居跡（1/60）



第61図 199号住居跡出土遺物 (1/4)

多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕貯蔵穴内から僅かに出土した。床面上に炭化材が散乱している。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕床面上に炭化材が散乱していることから焼失住居の可能性が大きい。

199号住居跡出土遺物 (第61図)

壺形土器である。体部上半の一部を欠損する。口径15cm、底径8.5cm。最大径を体部下半にもち、玉葱状を呈する体部からゆるやかにくびれ、口縁部は大きく外反し口唇部でさらに開く。外面はヘラミガキされるが、口縁部は縦方向、体部上半斜方向、体部下半横方向のハケメ痕を残す。ハケメは幅広で粗い。内面口縁部は横方向にヘラミガキされる

がハケメ痕を僅かに残す。頸部以下はナデられるが、剥離が顕著であるため詳細な観察は難しい。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、外面全面と内面口縁部は赤彩される。外面底部から体部下半にかけて焼成時のものと推測される黒斑がみられる。胎土は砂粒や白・橙色粒子と1～3mmの細礫を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴からの出土であるが、一部の破片は244号住居跡から出土している。

200号住居跡 (第62・63図)

〔位置〕C-4G。

〔住居構造〕(平面形) 楕円形。(規模) 380×360cm。(主軸方向) N-56°-E。(壁高) 28～34cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 住居壁際と炉の東側を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。100×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 支柱穴は検出されなかったが、南西壁際の1本は斜めに掘込みをもち入口施設に関係しようか。(貯蔵穴) 南壁下、東に偏って位置する。60×45cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。また貯蔵穴東側に高さ4～8cm・幅22～38cmの凸堤がL字状に構築される。

〔覆土〕ロームブロックを多く含む層が斑状に混入する。埋め戻された可能性が大きい。

- 1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 暗赤褐色土 (2.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 6層 暗赤褐色土 (2.5YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。焼土粒子を含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 11層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 13層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 16層 黒褐色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

なお、南西コーナーに厚さ 3 cm 前後の小砂利混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 南東側床面上から比較的多く出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

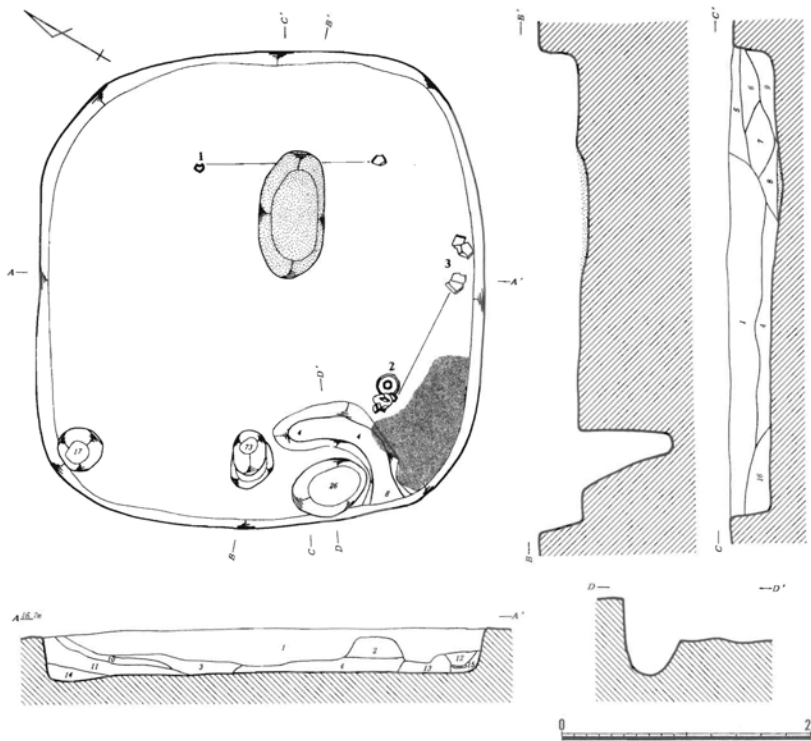
200号住居跡出土遺物 (第64図)

高坏形土器 (1)

脚台部との接合部のみ遺存。坏部は水平ぎみに開く。坏部と脚台部の接合部には凸帯がめぐる。外面と坏部内面は、それぞれ縦・横方向に丁寧にヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。この土器はまず脚台部を作り、坏部底面を指で押えて脚台部と密着させて作られている様子がよく観察できる。色調は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈し、坏部内面と脚台部外面は赤彩される。胎土には白色粒子や砂粒、1～2 mm の細礫を含む。床面上の出土である。

甕形土器 (2・3)

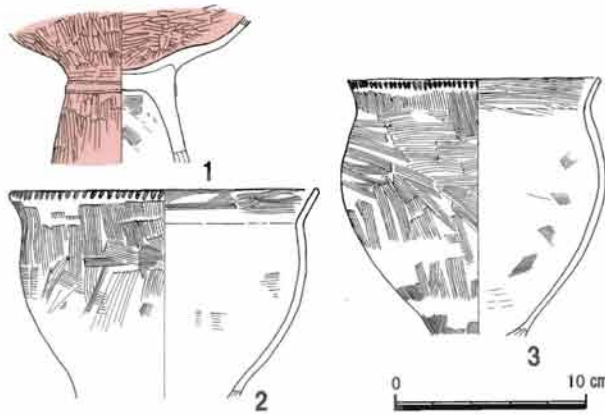
2 は口径16.5cmを測る。最大径を口縁部にもち、体部に張りをもたず、脚台部へゆるやかにすぼまる器形である。口縁部はゆるやかに外反する。口唇部には左方向からハケ状工具で刺突した刻みが一周する。内外面はヘラナデされるが、外面は縦方向、内面は横方向のハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈する。外面体部上半には煤が、内面体部下半には炭化物が付着する。胎土は砂粒及び軽石と思われる1～3 mmの淡黄橙色粒子が含まれていて粗い。貯蔵穴付近の床面上から出土した。



第62図 200号住居跡 (1/60)



第63図 床硬化面



第64図 200号住居跡出土遺物 (1/4)

3は口径13.5cmを測る。体部上半に最大径をもち口頸部はゆるやかに外反し、体部下半から脚台部にかけて急にすぼまる器形である。口唇部にはハケ状工具を浅く刺突した刻みが一周する。内外面ともにヘラナデされるが、外面口縁部と体部下半は縦方向、体部上半は横方向、内面は横方向のハケメ痕を残す。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。外面には煤が付着する。内面下半には炭化物がこびりついている。胎土には砂粒、細礫が含まれる。2と同位置から出土。

201号住居跡 (第52図)

〔位置〕 C-3G。

〔住居構造〕 西側が196号住居跡に切られる。(平面形) 不明。(規模) 360×不明。(主軸方向) N-60°-E。短軸が主軸。(壁高) 45~52cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 壁際を除いて全体によく硬化している。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。50×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmを測る。(柱穴) 北西コーナーを除く各コーナーに3本検出された。

〔覆土〕 ロームブロックが多く含まれ、埋め戻された感が大きい。

13層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。

14層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

15層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

16層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

17層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム小ブロックを僅かに含む。

18層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。

19層 暗褐色土(10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。

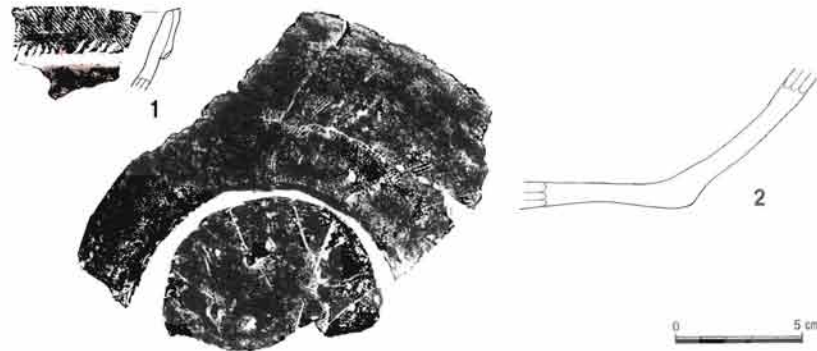
201号住居跡出土遺物 (第65図)

壺形土器 (1・2)

1は口頸部破片。複合口縁部には無節Rの斜縄文が施され、下端には先端の尖った工具で刺突した刻みがめぐる。口唇部はヨコナデ、外面頸部と内面は丁寧なヘラミガキ。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は白色粒子と細礫を含むがきめ細かく堅緻である。

2は木葉痕を残す底部と体部下位破片。平底の底部からゆるやかに立ち上がり、体部は球状を呈すると思われる。体部外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされたようであるが、剥離が著しく確認困難である。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。外面には焼成時についたと思われる棒状の黒斑がみられる。胎土は砂粒、細礫を含み粗め。

いずれも覆土中の出土。



第65図 201号住居出土遺物 (1/3)

202号住居跡 (第66図)

〔位置〕 A-4 G。

〔住居構造〕 204号住居跡と17号方形周溝墓に大きく切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×560cm。(主軸方向) S-45°-E。(壁高) 22~29cm。(床面) 床面全体が5~20cmの厚さで貼床されている。東側は部分的に硬化している。(炉) 住居中央から南東側に偏って位置する。75×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 不整合な堆積で、埋め戻された感が大きい。

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を部分的に含む。
- 4層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。炭化材片を含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子、炭化物粒子を含む。
- 8層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。貼床充填土。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを含む。貼床充填土。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。貼床充填土。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

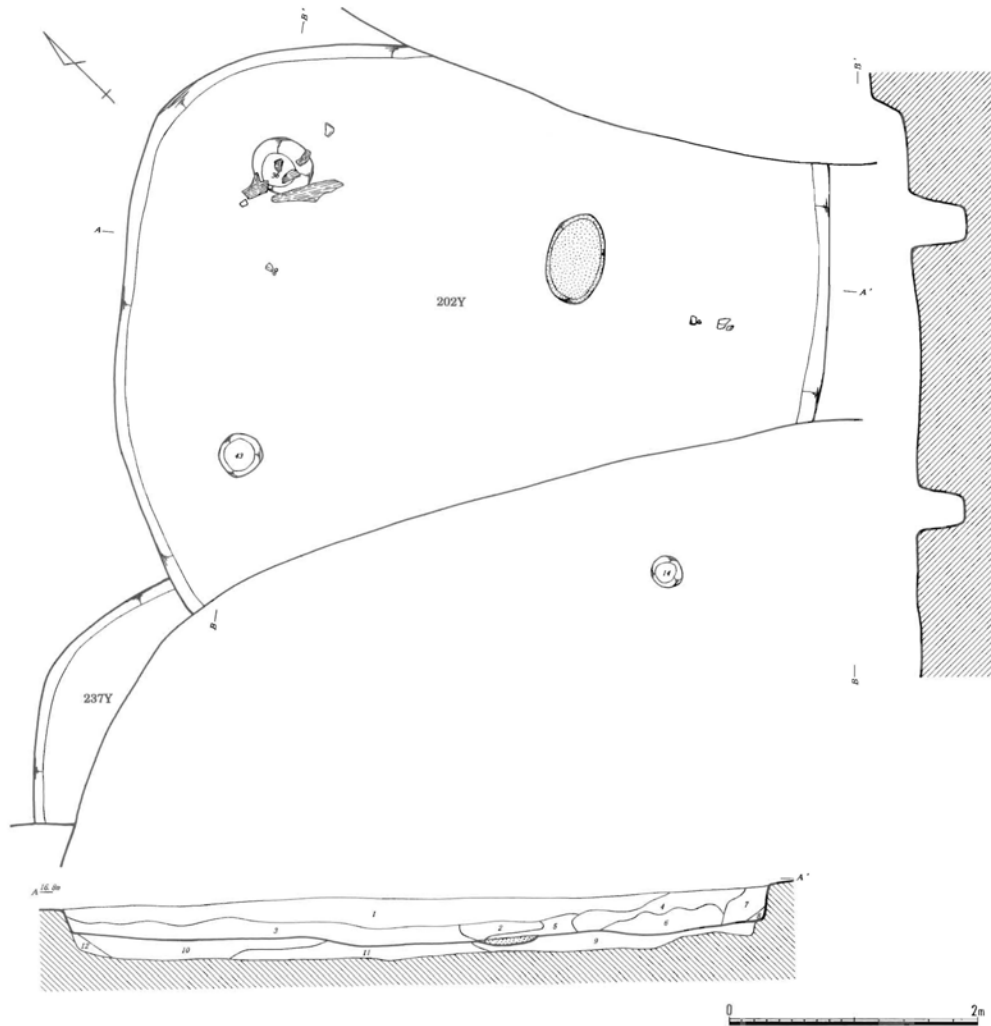
〔時期〕 弥生時代末葉。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化材を多く含むことから焼失住居の可能性が大きい。

202号住居跡出土遺物 (第67・68図)

壺形土器 (1・2・5~7)

1は小型壺形土器の口縁部と体部上半1/3程度が遺存する。推定口径5.5cmを測る。球状を呈すると思われる体部から直立ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はナデられるが輪積痕が明瞭に残る。ナデはヘラと指で行なわれた部分がある。色調はにぶ



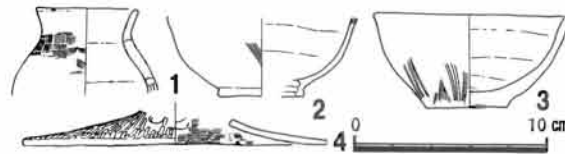
第66図 202・237号住居跡 (1/60)

い褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土は白色粒子、細礫、砂粒を含むがきめ細かい。覆土中の出土であり、17号方形周溝墓C区出土の土器と接合する。

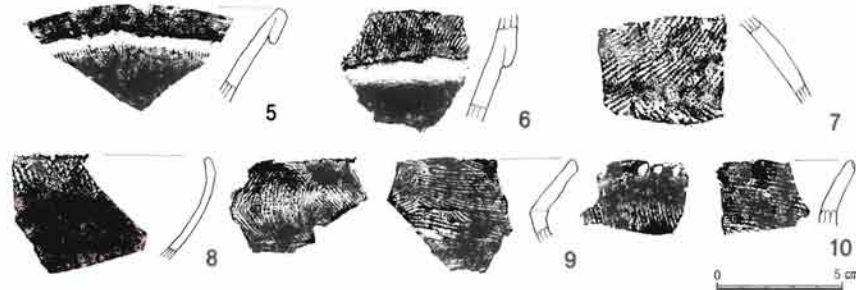
2は底部と体部体部下半1/2程度が遺存する。推定底径4.5cmを測る。平底の底部から球状を呈すると思われる体部へ立ち上がる器形である。外面はヘラナデされるがハケメ痕を僅かに残す。内面はヘラナデされ、その工具痕が明瞭に残る。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かい。覆土中の出土である。

5・6は複合口縁の口頸部破片。5は内外面ともにヘラミガキされるが、複合口縁部横方向、頸部縦方向、内面横方向のハケメ痕が一部に残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、内面には赤彩が残る。外面頸部も赤彩された可能性があるが、摩耗が激しく確認困難である。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。6は複合口縁部外面にLの無節斜縄文が施される。縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、外面複合口縁部以外は赤彩された可能性がある。内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を僅かに含む。ともに覆土中の出土である。

7は肩部破片。外面にはLRの単節斜縄文を羽状に施す。内面は剥離が著しい。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土中には砂粒、細礫、軽石と思われる黄橙色粒子を含む。覆土中の出土である。



第67図 202号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第68図 202号住居跡出土遺物 2 (1/3)

鉢形土器 (3)

小型の土器でほぼ完形。口径10cm・底径4.2cm・器高4.9cmを測る。器形はやや凹んだ底部から内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は僅かに外反する。内外面ともにヘラナデされるが、外面底部付近に僅かにハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる灰白色粒子を多く含む。表面は摩耗が顕著である。覆土中の出土。

高坏形土器 (4・8)

4は脚裾部1/2程度が遺存する。推定裾径15.5cmを測る。裾部は末広がり大きく開く。孔は3孔であろう。器壁は薄く非常に丁寧な作りである。裾部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるが、ハケメ痕を残す。裾端部は横方向にナデられる。色調はにぶい黄褐色 (10YR6/3) を呈する。内外面ともに斑点状に剥離している。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中の出土。

8は坏部が塊状を呈すると思われる土器の口縁部破片である。口縁部外面と口唇端部にはRLの単節斜縄文が施される。縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされる。色調は灰赤色 (2.5YR4/2) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中の出土である。

203号住居跡 (第69図)

〔位置〕 A-4 G。

〔住居構造〕 17号方形周溝墓により大部分が切られる。(平面形) 不明。(規模) 380×不明。(壁高) 17~26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 住居北壁寄りに位置する地床炉。平面形は不明である。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕北東コーナーに図示できるものが4点出土した。

〔時期〕古墳時代初頭。

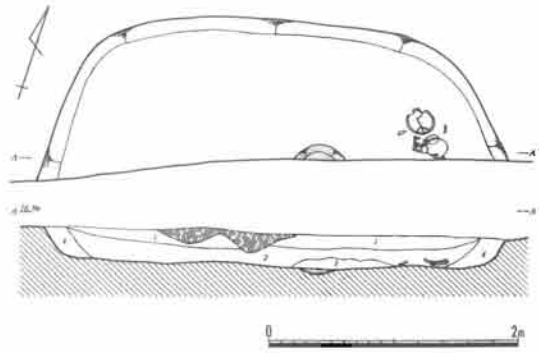
203号住居跡出土遺物（第70図）

壺形土器（1）

口径10cm・底径9.7cm・器高24.6cmを測る。体部下位に最大径をもち、頸部にむかって急激にくびれて、若干短い口縁部は外反する。口唇部は平坦になるように整形されやや角張っている。外面はヘラミガキされるが、口縁部と体部下半は縦方向、体部中位は斜方向の幅広で粗いハケメ痕が残る。底部には木葉痕がみられる。内面口縁部はヘラナデされるが、横方向のハケメ痕を残す。頸部以下は非常に丁寧にヘラナデされる。体部下半には工具痕が残り、部分的に剥離している。頸部には指頭痕がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を多く含む。床面上の出土である。

高环形土器（4）

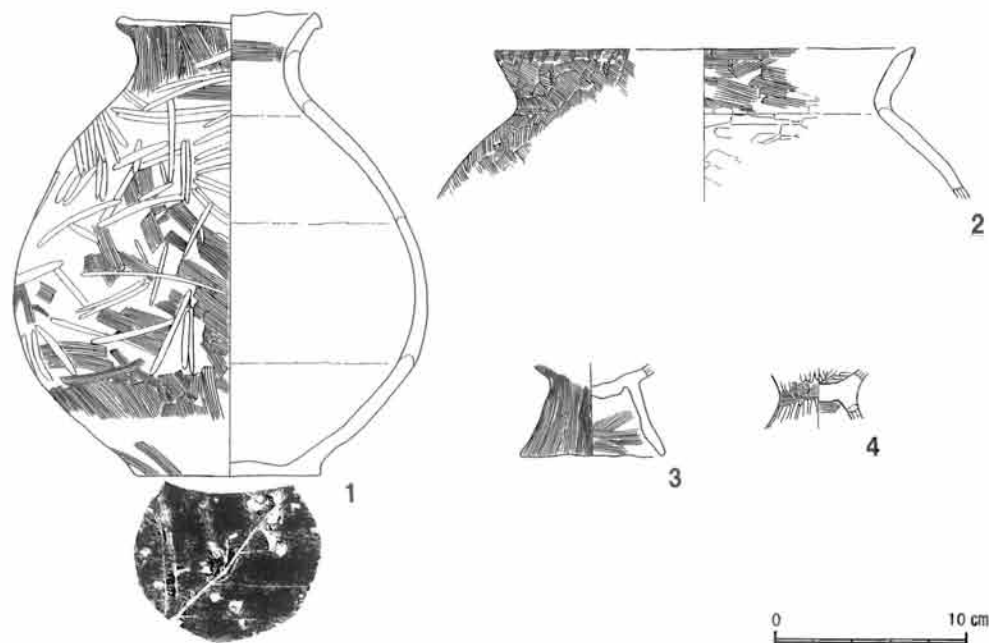
脚台部と坏部の接合部。裾部は広がる。外面は縦方向にヘラミガキされる。坏部内面は横方向にヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、外面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を多く含む。覆土中からの出土である。



第69図 203号住居跡（1/60）

甕形土器（2・3）

2は口縁部破片。推定口径22cmを測る。体部は球状を呈すると思われ、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。尖りぎみの口唇部にはハケ状工具で左方向から刺突された刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるが、外面斜方向、内面横方向の浅くて細かいハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）



第70図 203住居跡出土遺物（1/4）

を呈する。胎土には砂粒、1～2mmの黒チャート、細礫を含む。

3は「ハ」字状に広がる脚台部である。裾径7.6cmを測る。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕が残る。甕部内面はヘラナデされたと思われるが、剥離が著しく確認困難。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土は砂粒、細礫、橙色粒子を含むが細かい。覆土中の出土である。

204号住居跡(第71・72図)

〔位置〕A-3G。

〔住居構造〕北側は調査区外にある。(平面形)楕円形。(規模)不明×670cm。(主軸方向)N-27°-W。(壁高)27～44cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)上幅6～20cm・下幅3～10cm・深さ3～7cmを測り、全周すると思われる。(床面)壁際を除き、全面よく硬化している。(炉)中央北に偏って位置する。径60cmを呈する。粘土火皿で、厚さ2cm前後を呈する。周囲の床面には焼けた痕跡が認められる。(柱穴)南東コーナー、南西コーナーに主柱穴2本検出される。中央南壁側に偏って位置する1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南東壁下、東に偏って位置する。55×75cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。

〔覆土〕不整合で埋め戻された感がある。

1層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・ブロックを含む。

3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。

4層 黒色土(7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・ブロック、炭化材片を含む。

5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

6層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。

7層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。

8層 暗褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。炭化材片を僅かに含む。

9層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子を含む。

10層 暗赤褐色土(5YR3/3)。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。

なお、南東コーナーに厚さ1cm前後の小砂利混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕床面上から破片と炭化材が比較的多く出土した。

〔時期〕弥生時代末葉。

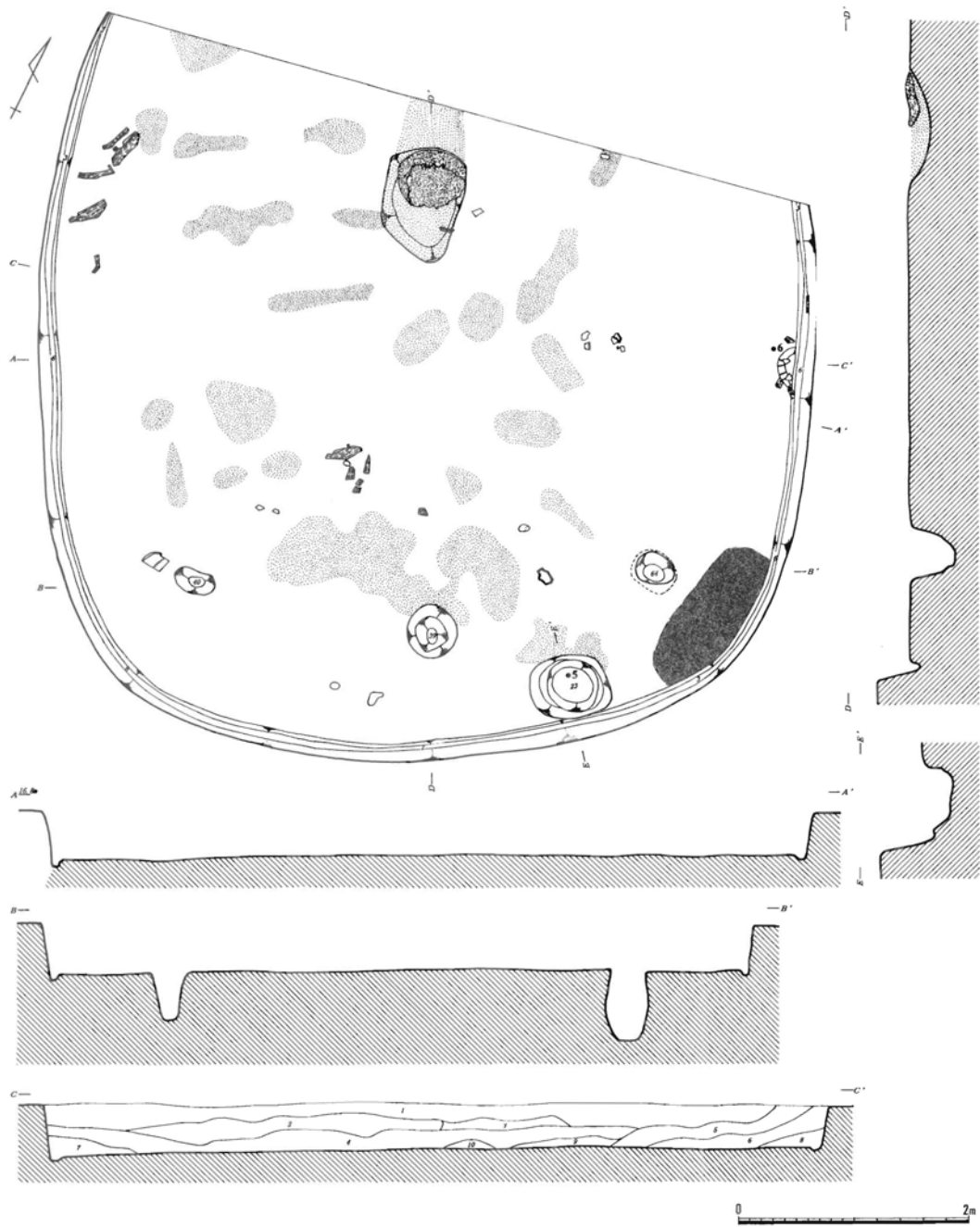
〔所見〕覆土中から焼土粒子・炭化物粒子が多く検出され、床面上の焼けた部分が広範囲にあることから焼失住居の可能性がある。

204号住居跡出土遺物(第73・74図)

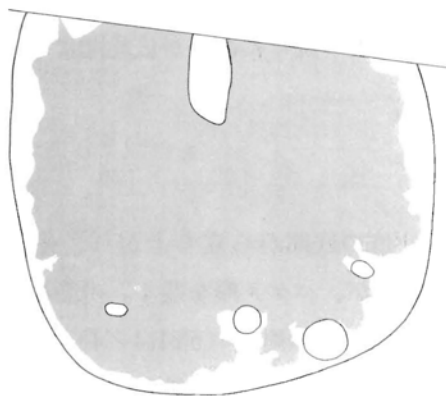
壺形土器(1～6)

1は体部上半以下1/3程度が遺存する。底径5.5cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部下位に最大径をもつ下膨れの器形である。外面は粗くヘラミガキされるが、ハケメ痕を残す。内面は剥離が著しく確認が困難であるが、ヘラナデされたと思われる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈し、外面は赤彩される。外面体部中位にドーナツ状の黒斑がみられる。胎土には砂粒、細礫を含む。

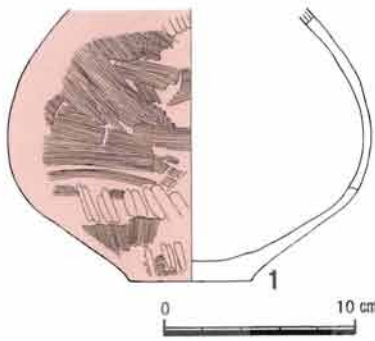
2は複合口縁をもつ口頸部破片。口唇部はヨコナデ。複合口縁部外面はハケメ痕を残すが、それ以外



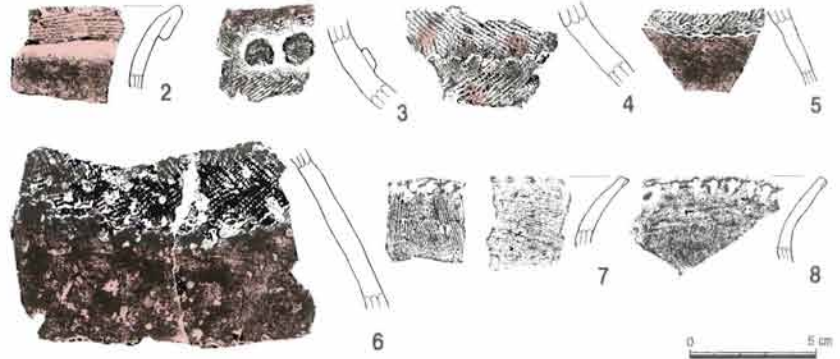
第71图 204号住居跡 (1/60)



第72图 床硬化面



第73図 204号住居跡
出土遺物 (1/4)



第74図 204号住居跡出土遺物 (1/3)

は丁寧にヘラミガキが施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、全体に赤彩される。胎土は白色粒子、細礫を含むが細かい。覆土中の出土。

3は頸部破片。2条のS字状結節文下にLの無節斜縄文が羽状に施される。円形浮文が貼付される。色調は褐色 (7.5YR4/3) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。覆土中の出土。

4は頸部から肩部にかけての破片。RLの単節斜縄文を羽状に施し、間にはS字状結節文が施文される。縄文帯の中には3個の円形赤彩文がみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈する。胎土は砂粒、細礫を含み粗い。覆土中の出土である。

5は肩部破片。LRの単節斜縄文を施し、下端に3条のS字状結節文がみられる。縄文帯以外はハケメ調整後ヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、外面縄文帯以外は赤彩される。胎土は白色粒子と細礫を含むがきめ細かく堅緻である。貯蔵穴からの出土。

6は肩部から体部上半にかけての破片。RLの単節斜縄文を3段、羽状に施している。下端には2条のS字状結節文がみられる。体部はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、1~2mmの白色粒子を含み粗い。住居北東壁際床面上からの出土。

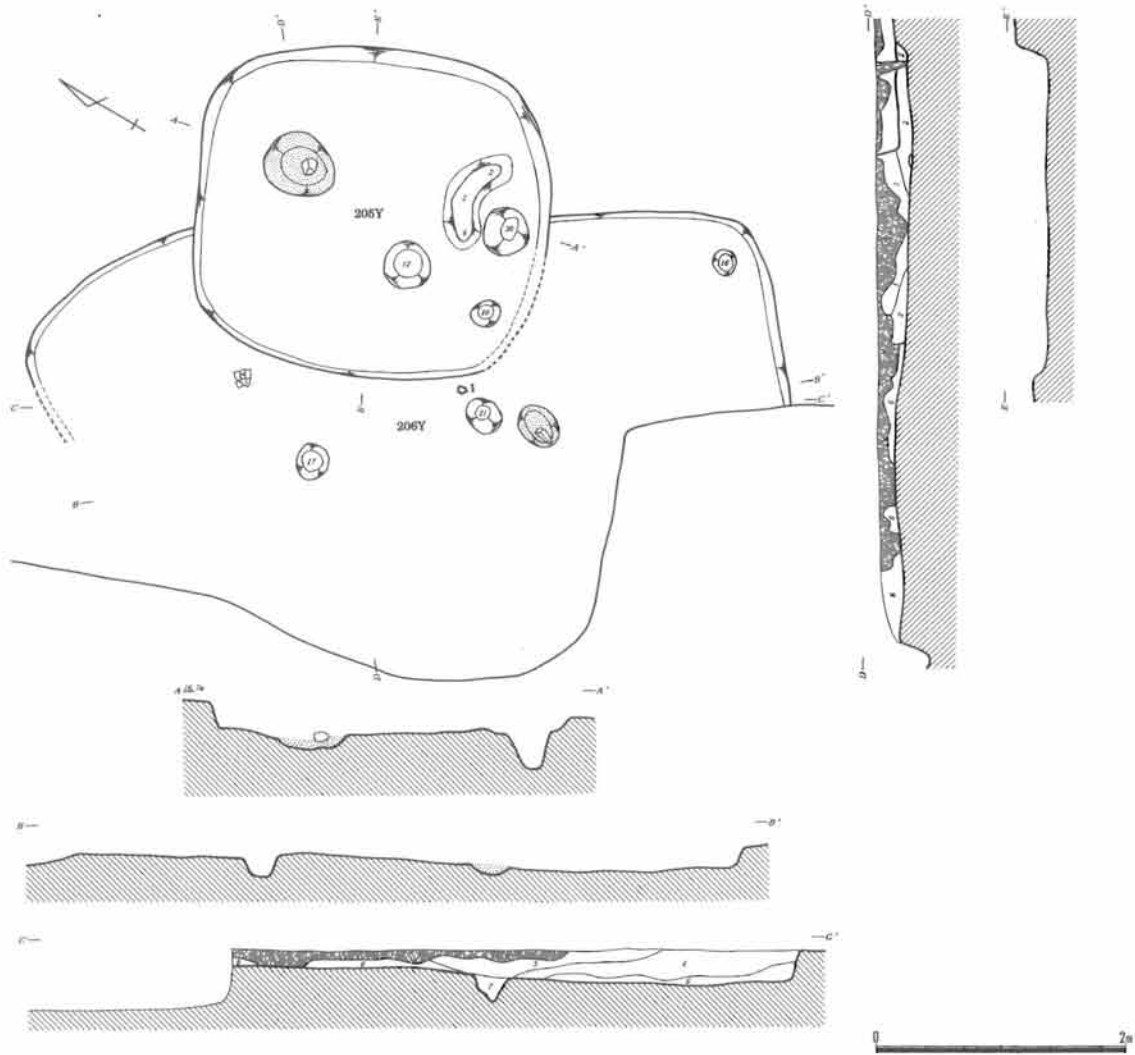
甕形土器 (7・8)

いずれも口頸部破片。7は口唇部にハケ状工具による左方向から刺突された刻みが施される。以下、ヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は暗灰色 (N3/0) を呈する。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。8は口唇部にヘラ状工具で刺突された刻みが施される。以下、ヘラナデされるが僅かにハケメ痕を残す。色調は褐色 (7.5YR4/3) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。ともに覆土中の出土である。

205号住居跡 (第75・76図)

〔位置〕 B-4 G。

〔住居構造〕 南壁は破壊されている。(平面形) 正方形。(規模) 280×260cm。(主軸方向) N-28°-W。(壁高) 10~27cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 貯蔵穴前から炉の両側にかけてよく硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。55×50cmの楕円形の地床炉で、深さ7cmを測る。炉の中央に礫が配される。(柱穴) 柱穴は検出されなかった。(貯蔵穴) 南壁下ほぼ中央に位置する。35×40cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。貯蔵穴北側に高さ2~4cm・幅22~30cmの凸堤が弧状に構築される。



第75図 205・206号住居跡 (1/60)



第76図 床硬化面

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。

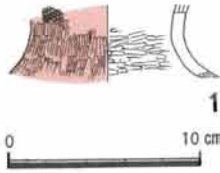
2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

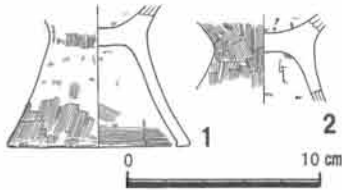
〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代。

205号住居跡出土遺物 (第77図)

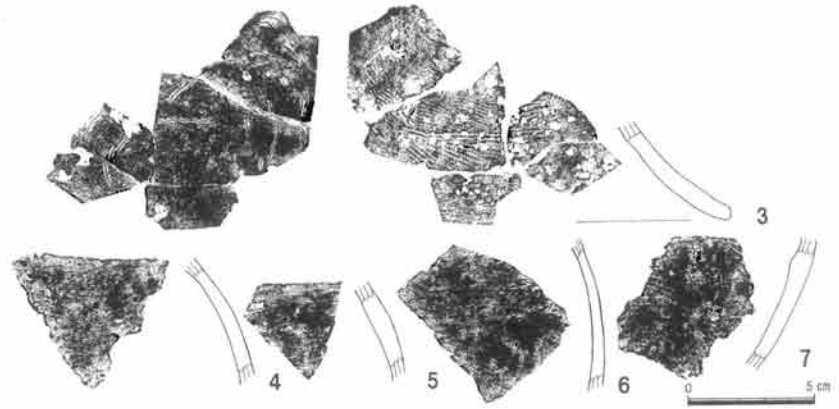
壺形土器の破片で、頸部の一部のみ遺存する。球状の体部から頸部でくびれ、口縁部が外反する器形が想定される。頸部外面上位の縄文は付加条と思われるが、撚りがゆるいためかはっきりしない。外面は縦方向、内面は横方向に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、1mm前後の細礫、軽石と思われる白色粒子を含むが細かく堅緻である。覆土中からの出土である。



第77図 205号住居跡
出土遺物 (1/4)



第78図 206号住居跡
出土遺物 1 (1/4)



第79図 206号住居跡出土遺物 2 (1/3)

206号住居跡 (第75図)

〔位置〕 B-4 G。

〔住居構造〕 205号住居跡と17号方形周溝墓に大きく切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×580cm。(壁高) 10~24cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱。(炉) 住居南東側に位置する。40×30cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmを測る。炉の西側に礫が配される。

〔覆土〕

3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、炭化材片を僅かに含む。炭化物粒子を含む。

4層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

6層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

7層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

206号住居跡出土遺物 (第78・79図)

高坏形土器 (3)

脚台部破片。脚端部は角状に成形され、丁寧にヨコナデされる。外面はハケメ調整後縦方向に丁寧なヘラミガキが施される。内面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。裾部上端に横方向の細い沈線がみられるが、工具痕の可能性もある。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土は砂粒、細礫を僅かに含むがきめ細かく精選されていて堅緻である。覆土中の出土である。

甕形土器 (1・2・4~7)

1・2は台付甕形土器の脚台部である。1は裾径9.7cmを測る。裾部にかけて「ハ」字状に開く。裾端部には僅かに粘土のみみ出しがみられる。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕が僅かに残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。床面上の出土である。2は甕部との接合部で、裾部にかけて開く。内外面ともにヘラナデされるが、外面は縦位、内面は横位の幅広で深く粗いハケメ痕が残る。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/4) を呈する。甕部内面には炭化物が付着する。胎土には白色粒子を含む。覆土中から

の出土である。

4～7はいずれも体部破片で、ヘラナデされるがハケメ痕を残す。4・6・7は同一個体であろうか。いずれも幅広の粗いハケメ痕を残す。4・6の色調は黒褐色(10YR3/1)を呈する。外面に煤が付着する。7の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。内面には炭化物がこびりつく。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。5は細密なハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を僅かに含む。いずれも覆土中の出土。

207号住居跡(第18図)

〔位置〕 B-6 G。

〔住居構造〕 17号方形周溝墓に大きく切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(壁高) 24～28cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(床面) 軟弱である。(炉) 不明。

〔覆土〕 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

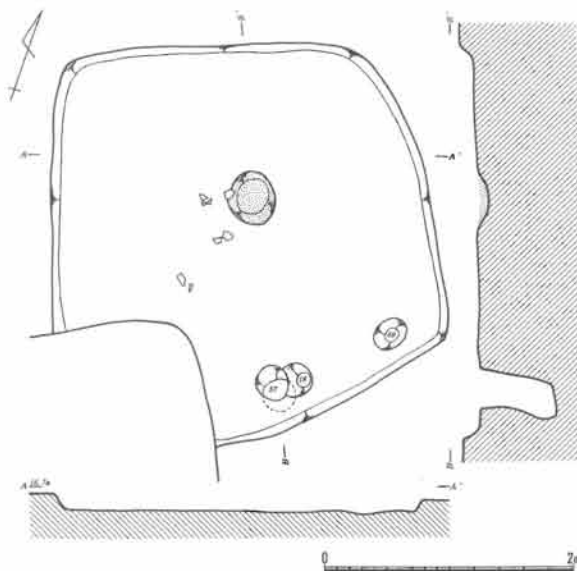
208号住居跡(第80・81図)

〔位置〕 B-4 G。

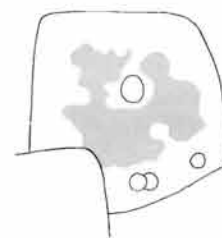
〔住居構造〕 209号住居跡を切り、205号住居跡に切られる。(平面形) 不整正方形。(規模) 360×370cm。(主軸方向) N-20°-W。(壁高) 9～17cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。45×40cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmを測る。(柱穴) 支柱穴は検出されなかった。中央南壁際の径25cm・深さ57cmを測る小ピットは入口施設と思われる。

〔覆土〕 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子、炭化物粒子を含む。

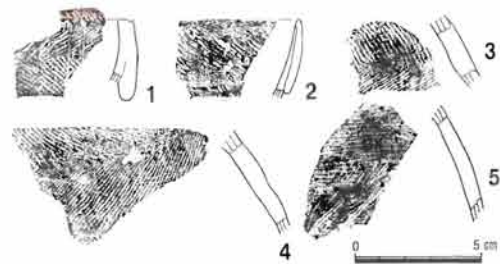
〔遺物〕 炉の西側、床面上から破片が僅かに出土した。



第80図 208号住居跡(1/60)



第81図 床硬化面



第82図 208号住居跡出土遺物(1/3)

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

208号住居跡出土遺物（第82図）

壺形土器（1～4）

1・2は複合口縁部破片。1は口縁部外面にRLの単節斜縄文を羽状に施し、縦位の沈線が加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、口唇端部と内面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。2は口縁部外面にRの無節斜縄文が施される。内面は丁寧なヘラミガキ。色調は褐灰色（10YR4/1）を呈する。胎土は白色粒子を含むが細かい。

3・4は肩部破片。3の羽状縄文は異なる単節縄文を使用している。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。4はRLの単節縄文の末端を結節した原体を横に回転し、さらに別のLR単節斜縄文を羽状に施文している。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈している。胎土は砂粒、細礫を含むが粗い。

いずれも覆土中の出土である。

甕形土器（5）

体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

209号住居跡（第83図）

〔位置〕 B-3G。

〔住居構造〕 208号住居跡に切られる。（平面形）長方形。（規模）550×650cm。（主軸方向）N-45°-W。短軸が主軸。（壁高）8～39cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅8～16cm・下幅4～8cm・深さ1～6cmを測る。全周すると思われる。（床面）住居東壁際が貼床されている。全体に軟弱である。（炉）住居中央北に偏って位置する。75～55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmをはかる。（柱穴）各コーナーに支柱穴4本を検出した。（貯蔵穴）南壁下東に偏って位置する。径50cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。貯蔵穴西側に高さ2～4cm・幅25～30cmを測る凸堤が構築される。

〔覆土〕 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。

なお、南東コーナーに厚さ7cm前後の小砂利混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 東側床面上から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

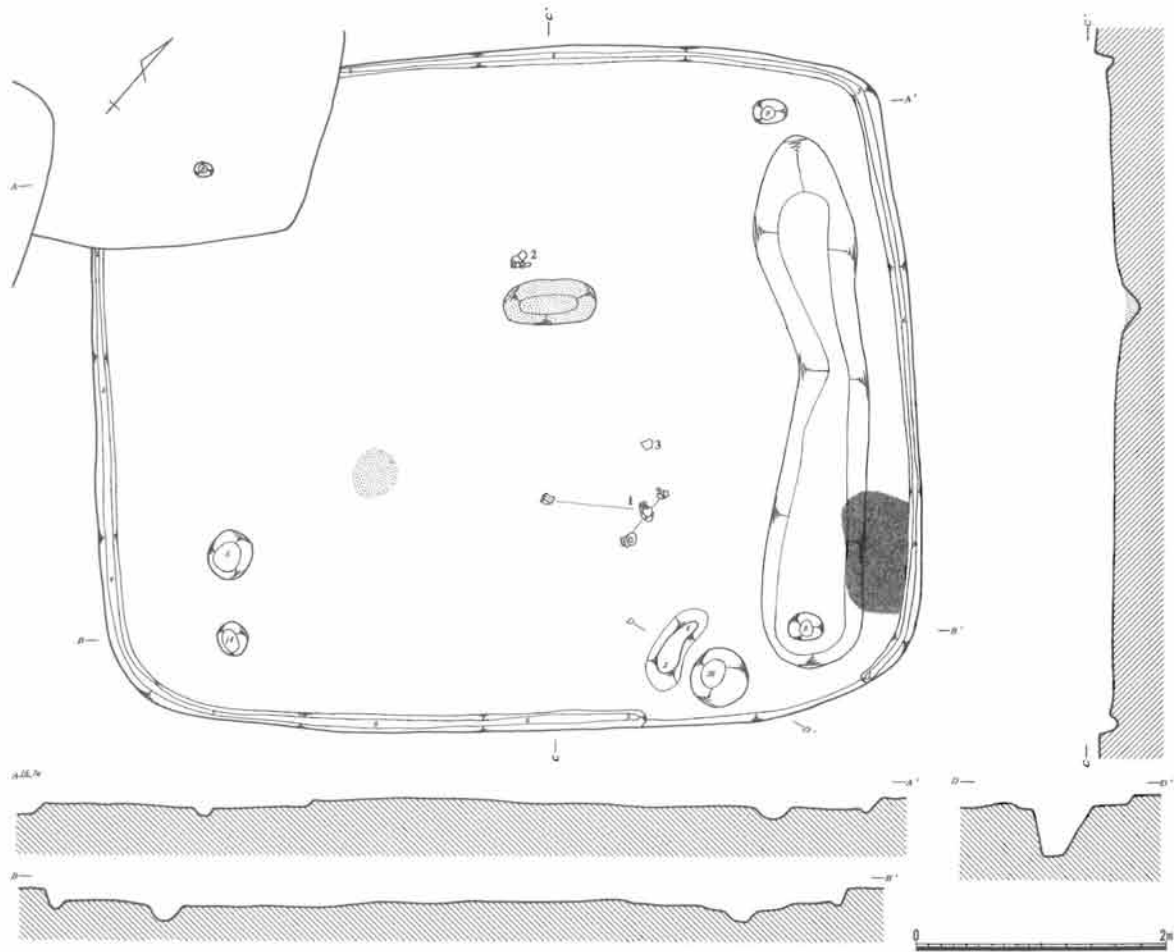
209号住居跡出土遺物（第84・85図）

壺形土器（4・5）

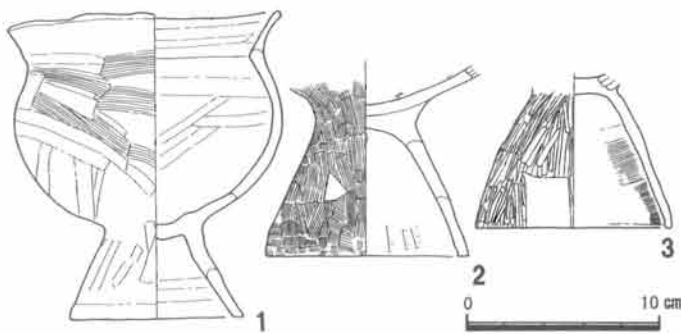
いずれも複合口縁部破片。4は口縁部外面にRLの単節斜縄文が施され、棒状浮文が2本貼付されるのが確認される。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。胎土は砂粒、細礫を含み粗い。5は口縁部外面にRの無節斜縄文を羽状に施している。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を僅かに含む。ともに覆土中の出土。

高環形土器（3）

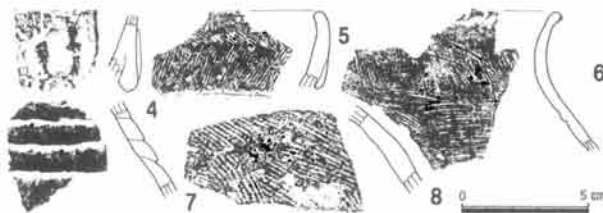
裾径10cmを測る。裾部にかけてやや直線的に開く。器厚は薄く全体に丁寧な作りである。外面は縦方向のヘラミガキ、坏部内面はヘラナデされる。脚台部内面はヘラナデされるが、横方向の浅く広いハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻で



第83図 209号住居跡 (1/60)



第84図 209号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第85図 209号住居跡出土遺物 2 (1/3)

ある。床面上の出土である。

甕形土器 (1・2・6～8)

1は台付甕形土器で完形。口径14.3cm・裾径9.1cm・器高16.2cmを測る。体部は球状を呈し、頸部は「く」字状にくびれ口縁部は外反する。内外面ともにヘラナデされるが、広く粗いハケメ痕を僅かに残す。色調はにぶい赤褐色(2.5YR 5/4)を呈する。内外面甕部上半に煤が付着し、胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。床面上の出土である。

2は台付甕形土器の脚台部で、裾部にかけて内湾ぎみに開く。裾径11cmを測る。内外面ともにヘラナデされるが、脚台部外面縦方向、甕部内面横方向の

ハケメ痕を残す。脚台部内面にはヘラナデの際の工具痕が明瞭に残る。色調はにぶい黄褐色（10YR 5/3）を呈する。甕部内面には炭化物が僅かに付着する。胎土には砂粒、1～2mmの細礫を含む。炉跡横から出土。

6は口頸部破片。口唇部には棒状の工具で浅く押捺した刻みが施される。内外面ともヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、灰白色粒子を僅かに含む。覆土中の出土。

7は頸部に3段の輪積痕を残す破片。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

8は体部破片。外面はヘラナデされるが、深く粗いハケメ痕を残す。内面はヘラナデ。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には白色粒子、細礫を含む。覆土中の出土。

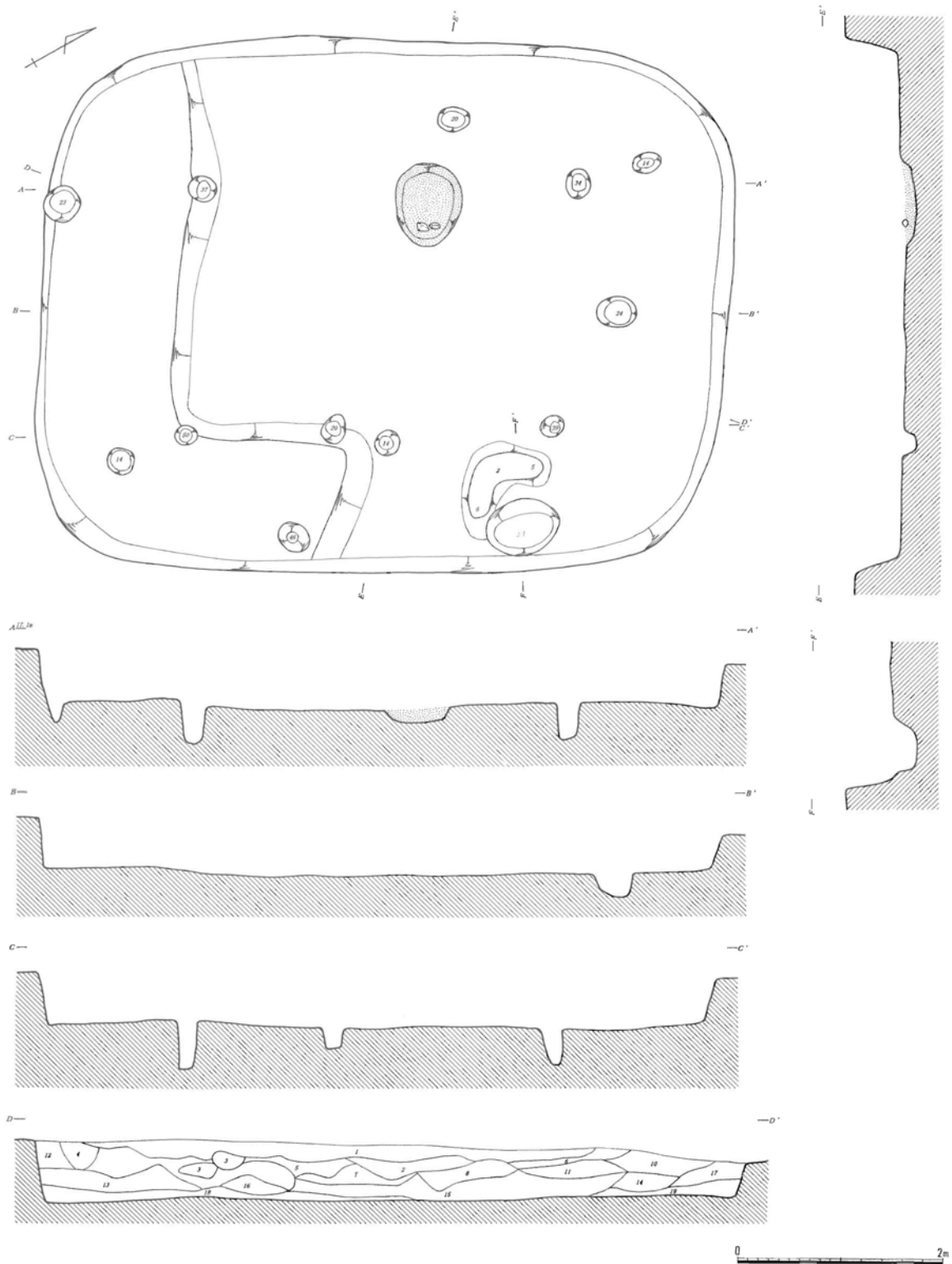
210号住居跡（第86・87図）

〔位置〕 B-5 G。

〔住居構造〕（平面形）長方形。（規模）530×665cm。（主軸方向）N-60°-W。主軸が短軸。（壁高）6～55cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）壁際を除き、よく硬化している。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。80×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ12cmを測る。炉の東側に礫が配される。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴になろう。（貯蔵穴）南東壁下、東に偏って位置する。70×55cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。貯蔵穴西側に高さ2～6cm・幅35～50cmの凸堤がL字状に構築される。

〔覆土〕堆積状態が不整合で埋め戻された可能性が大きい。

- 1層 暗赤褐色土（2.5YR3/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ロームブロック。
- 4層 暗褐色土（10YR3/3）。ロームブロックを多く含む。
- 5層 暗赤褐色土（2.5YR3/2）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。
- 7層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 8層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム小ブロックを多く含む。
- 9層 黒褐色土（5YR2/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 10層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 11層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。
- 12層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。
- 13層 暗赤褐色土（2.5YR3/2）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 14層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 15層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 16層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 17層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。
- 18層 黒褐色土（10YR2/3）。ロームブロックを僅かに含む。
- 19層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を多く含む。



第86图 210号住居跡 (1/60)

〔遺物〕 さほど多くはないが覆土中から出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

〔所見〕 南西壁から南東壁の半ばにかけて幅150cm前後、高さ4～15cmでL字状に一段高くなる。ベッド状遺構になるうか。

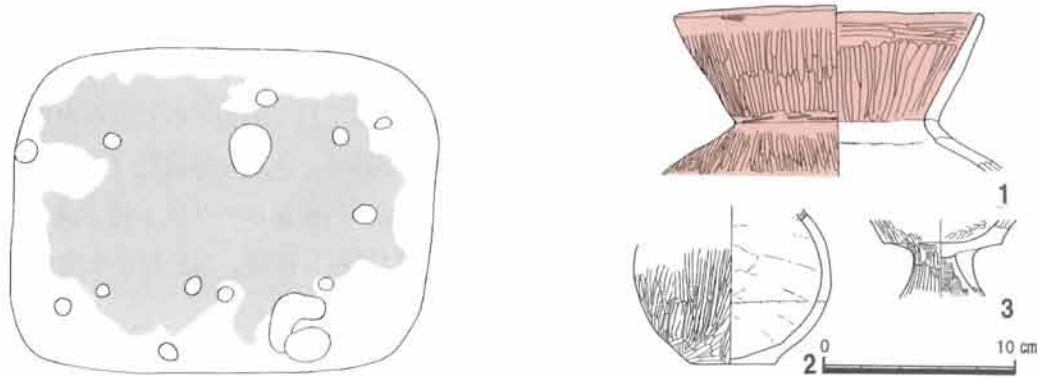
210号住居跡出土遺物（第88・89図）

壺形土器（1・2・4～9）

1は肩部以上が遺存する。口径15.7cmを測る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部は平坦で横方向にナデられる。外面は縦方向にヘラミガキされるが、ハケメ痕を僅かに残す。内面口縁部は上位横方向、下位縦方向にヘラミガキされる。頸部以下はヘラナデされる。頸部内面には輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。外面と内面口縁部は赤彩されるが、摩耗が顕著である。胎土は砂粒、細礫を含むが精製されており、細かく堅緻である。覆土中からの出土である。

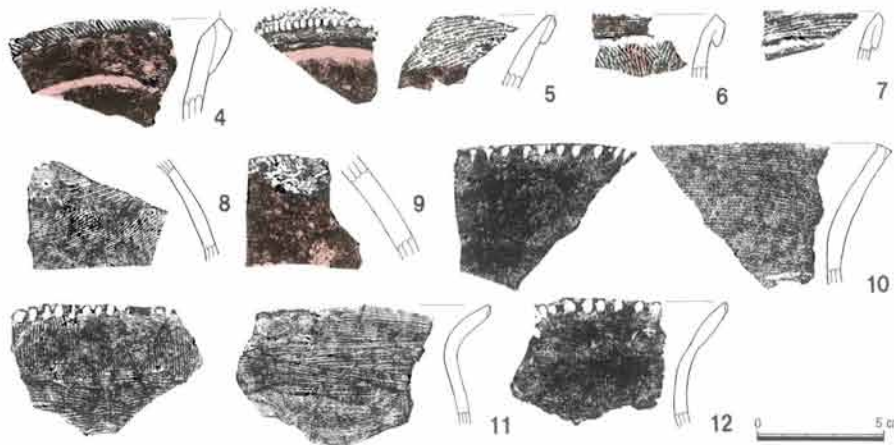
2は底径4.5cmを測る小型の土器で、体部上半以下2/3程度が遺存する。平底の底部から立ち上がり、体部は球状を呈する。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされるがハケメ痕を僅かに残す。内面は横方向にヘラナデされるが輪積痕を明瞭に残す。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈する。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

4～7は複合口縁部破片。4はやや角頭状を呈する口唇端部にRLの単節斜縄文を施す。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、縄文帯以外は赤彩さ



第87図 床硬化面

第88図 210号住居跡出土遺物1（1/4）



第89図 210号住居跡出土遺物2（1/3）

れる。胎土には白色粒子、細礫を含む。5は口唇部内外面にハケ状工具で刺突した刻みがみられる。口縁部内面と口唇端部には付加条の縄文が施される。複合口縁部外面はヨコナデ、頸部は丁寧なヘラミガキが施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、複合口縁部と縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻である。6・7の外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。6の色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、内外面ともに赤彩されるが、外面は部分的である。7の色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、内面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。いずれも覆土中の出土である。

8・9は肩部破片。8は無節Lの端末結節したものを2段に施している。色調は褐灰色(10YR4/1)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。9はRLの単節斜縄文が施される。剥離が著しく確認困難であるが、下端には2条のS字状結節文がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土中には砂粒、細礫、1～2mmの白色粒子を含み粗い。204号住居の破片と接合する。ともに覆土中の出土である。

高坏形土器(3)

坏・脚台部の接合部のみ遺存する。坏部は下半に段を有する。脚台部は末広がりを開くと推測される。外面は縦方向にヘラミガキされる。内面坏部は横方向のヘラミガキ、脚台部はナデられるが、横方向のハケメ痕を残す。色調は黒褐色(10YR3/1)を呈し、外面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。覆土中の出土である。

甕形土器(10～12)

いずれも口頸部破片。10は口唇部にヘラ状工具でやや左方向から浅く刺突した刻みがめぐる。器面はヘラナデされるが、内面口縁部にはハケメ痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。11は口唇部に先端に丸みのある棒状工具で刺突された刻みが施される。器面はヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕が残る。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。12は口唇部にハケ状工具で浅く刺突した刻みがめぐる。色調は黄灰色(2.5YR4/1)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。いずれも覆土中の出土である。

211号住居跡(第90図)

〔位置〕C-4G。

〔住居構造〕住居の大半を17号方形周溝墓に切られる。(平面形)不明。(規模)550×不明。(主軸方向)N-18°-W。(壁高)17～22cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)全体に軟弱。(炉)不明

〔覆土〕

1層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。

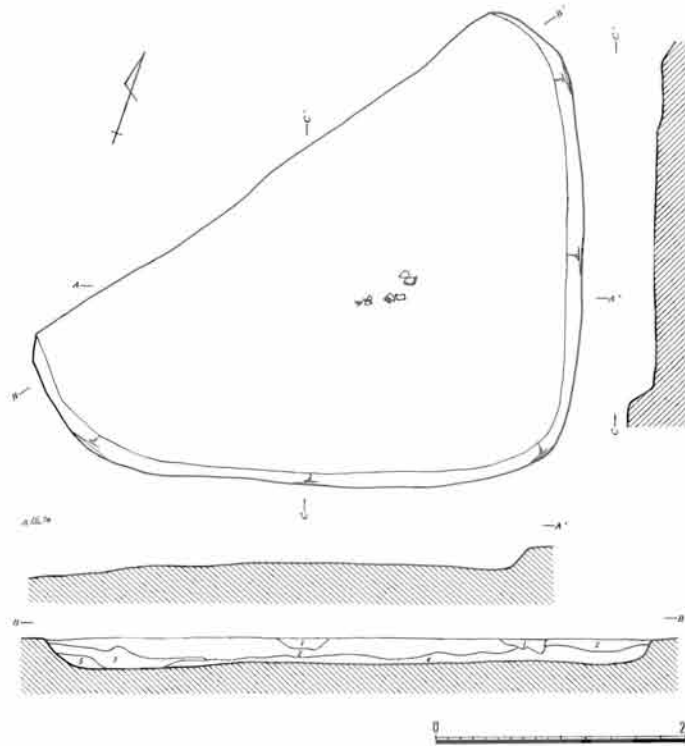
3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

4層 暗褐色土(2.5YR3/4)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕床面上から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。



第90図 211号住居跡 (1/60)

211号住居跡出土遺物 (第91図)

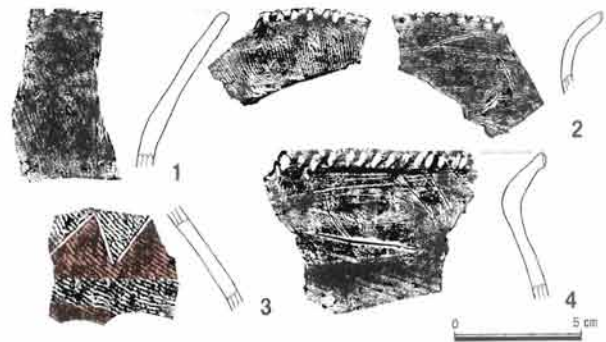
壺形土器 (1・3)

1は口頸部破片。口唇部はやや角頭状を呈し、ヨコナデされる。外面はハケメ調整後ヘラミガキされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土は砂粒、細礫を僅かに含みきめ細かく精製され堅緻である。3は肩部破片。Rの無節斜縄文上に鋸歯文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈する。縄文帯中の鋸歯文下と縄文帯以下は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、1mm前後の白・橙色粒子を含むが精製され細かく堅緻である。

ともに覆土中の出土である。

甕形土器 (2・4)

ともに口縁部破片。2は口唇部に棒状工具でやや右方向から刺突した刻みがめぐる。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は褐色 (7.5YR4/3) を呈する。胎土には砂粒、細礫、1mm前後の橙色粒子を含む。4は口唇部にヘラ状工具の刺突による刻みが施される。器面は丁寧になでられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と推測される白灰色粒子を含む。ともに覆土中の出土である。



第91図 211号住居跡出土遺物 (1/3)

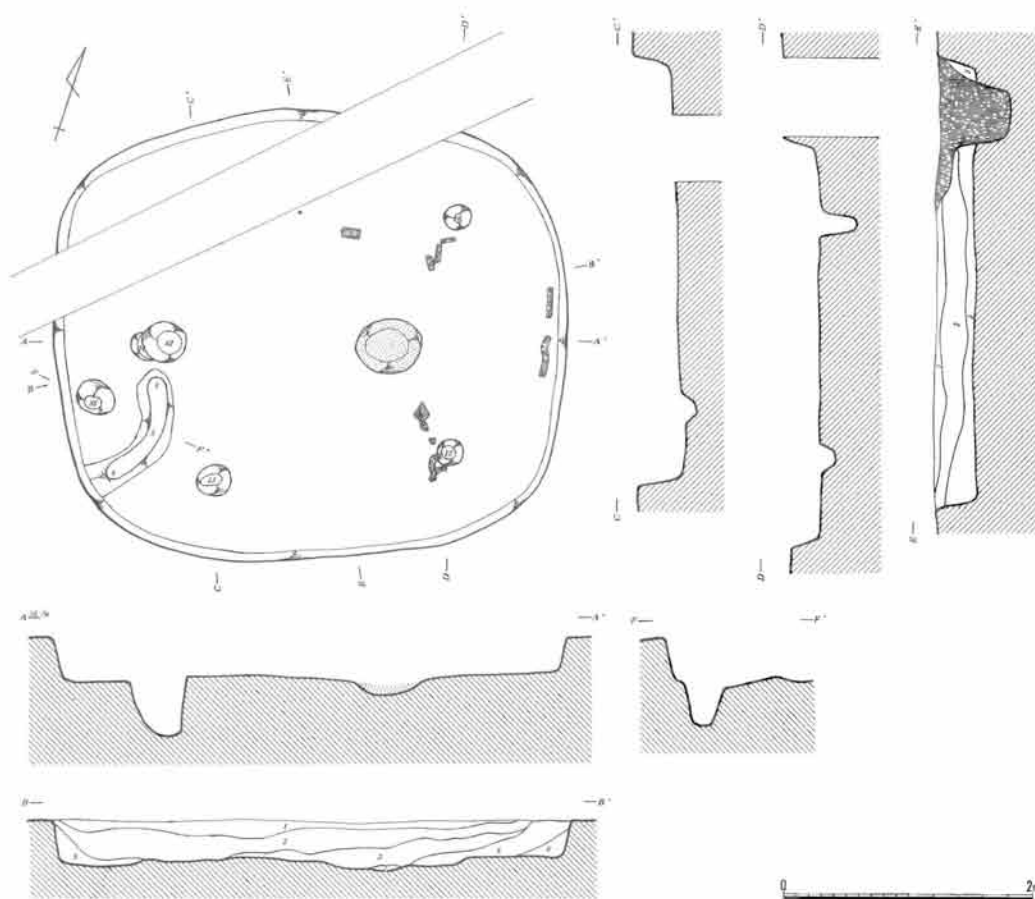
212号住居跡 (第92・93図)

〔位置〕 C-4 G。

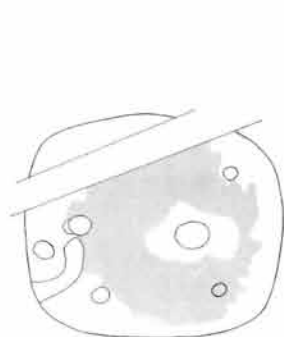
〔住居構造〕 一部攪乱により破壊されている。(平面形) 楕円形。(規模) 410×360cm。(主軸方向) N-70°-E。(壁高) 29~35cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 住居壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉) 中央から東に偏って位置する。54×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 西側コーナーを除き支柱穴3本を検出した。西側に位置する1本は、住居内側に傾斜をもって穿たれていて、梯子穴を想定させる。(貯蔵穴) 中央西壁下やや南に偏って位置する。径30cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。貯蔵穴南側に高さ3~5cm・幅24~30cmを測る凸堤がL字状に構築される。

〔覆土〕

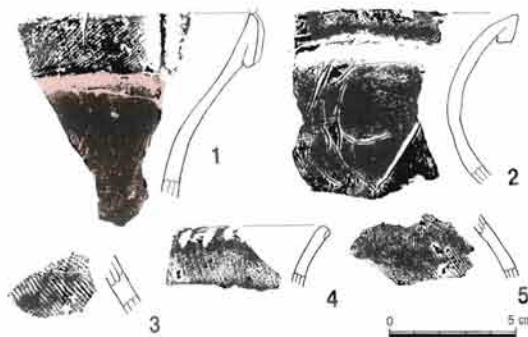
- 1層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。



第92図 212号住居跡 (1/60)



第93図 床硬化面



第94図 212号住居跡出土遺物 (1/3)

- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (5YR2/2)。ローム粒子、炭化材小片を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2)。焼土粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕 炭化物・焼土粒子が多量に検出されたため、焼失住居の可能性が大きい。

212号住居跡出土遺物 (第94図)

壺形土器 (1～3)

1・2は複合口縁部破片。1は口縁部外面にLRの単節斜縄文を施し、棒状浮文を貼付する。縄文は口唇端部にも施される。縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、複合口縁部以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、1～2mmの橙色粒子を含む。2は口唇端部が尖る土器。器面はハケメ調整後丁寧にヘラミガキされる。色調は褐色 (7.5YR4/3) を呈する。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。

3は肩部破片。RLの単節斜縄文を2段施し、間にZ字状の結節文を施す。色調は灰黄褐色 (10YR5/2) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。

いずれも覆土中からの出土である。

甕形土器 (4・5)

4は口頸部破片。口唇部にはヘラ状工具で左方向から浅く刺突した刻みが施される。器面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈する。外面に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。

5は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は丁寧なヘラナデ。色調は褐灰色 (7.5YR4/6) を呈する。外面に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。

ともに覆土中からの出土である

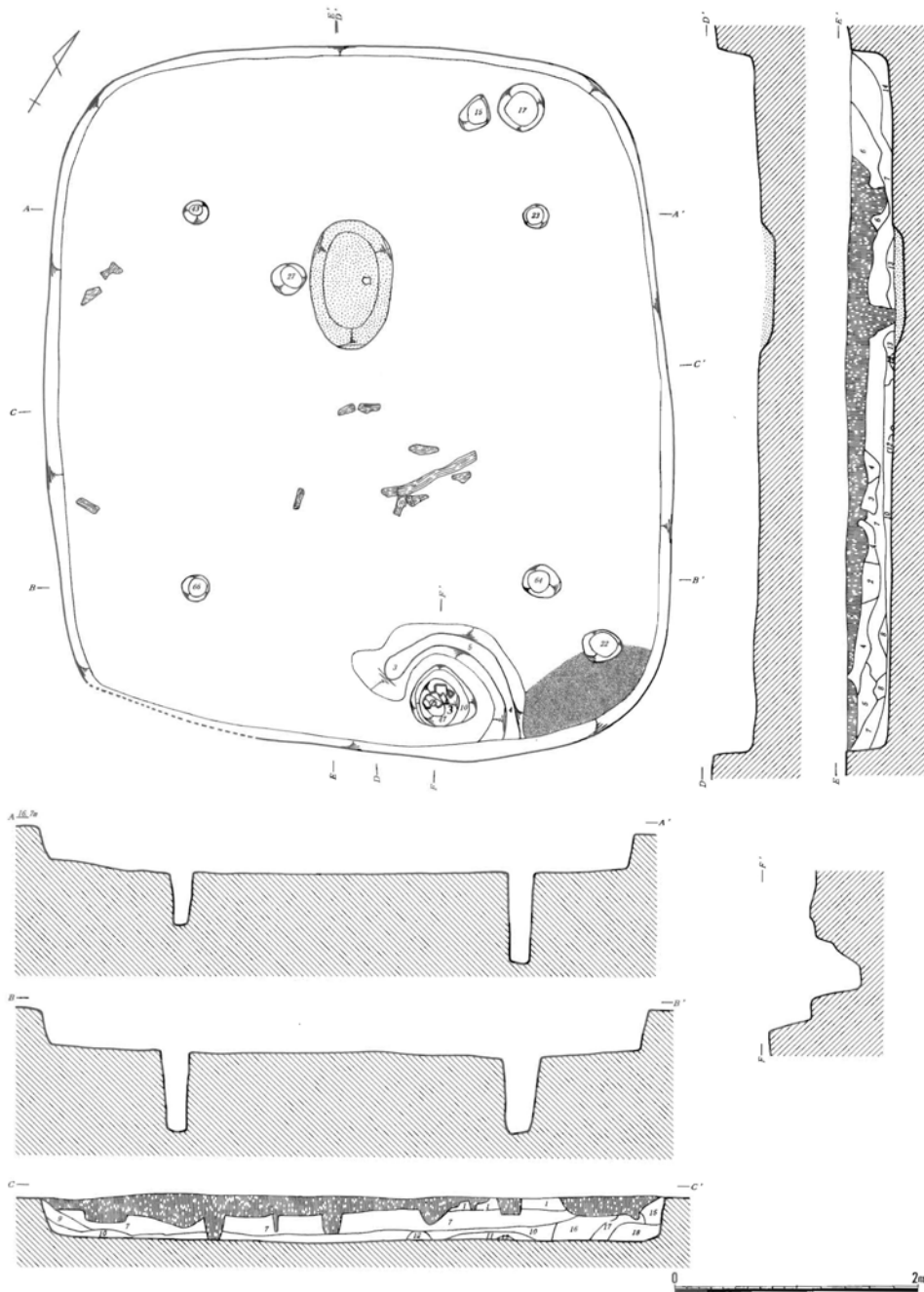
213号住居跡 (第95・96図)

〔位置〕 D-5G。

〔住居構造〕 南西コーナーを破壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 590×510cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(主軸方向) N-35°-W。(壁高) 27～32cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化している。(炉) 住居中央北に偏って位置する。105×65cmの楕円形の地床炉で、深さ6cmを測る。(柱穴) 各コーナーやや中央寄りに支柱穴が4本検出された。(貯蔵穴) 南壁下中央東に偏って位置する。径50cmの円形を呈し、深さ47cmを測る。貯蔵穴東側には高さ3～5cm・幅30～50cmを測る凸堤が構築されている。

〔覆土〕 不整合な堆積で、埋め戻された感が大きい。

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。



第95図 213号住居跡 (1/60)



第96図 床硬化面

- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
ローム小ブロックを僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
ローム小ブロック、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
ロームブロックを含む。

- 9層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 11層 黒褐色土 (10YR2/2)。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。
- 12層 暗赤褐色土 (5YR3/6)。焼土粒子・小ブロックを多く含む。
- 13層 暗赤褐色土 (5YR3/4)。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。
- 14層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子・炭化材片を含む。
- 15層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 16層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 17層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 18層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ローム粒子、炭化物粒子を含む。焼土粒子を多く含む。

なお、南東コーナーに厚さ3 cm前後の小砂利混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 貯蔵穴とその周辺から比較的多く出土する。

〔時期〕 弥生時代末葉。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化物粒子が含まれ、床には炭化材が散乱しているため焼失住居の可能性が大きい。

213号住居跡出土遺物 (第97図)

壺形土器 (1)

口頸部破片。口唇部はやや角頭状を呈する。内外面ともにハケメ調整後丁寧なヘラミガキが施される。口縁部には棒状浮文が貼付される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

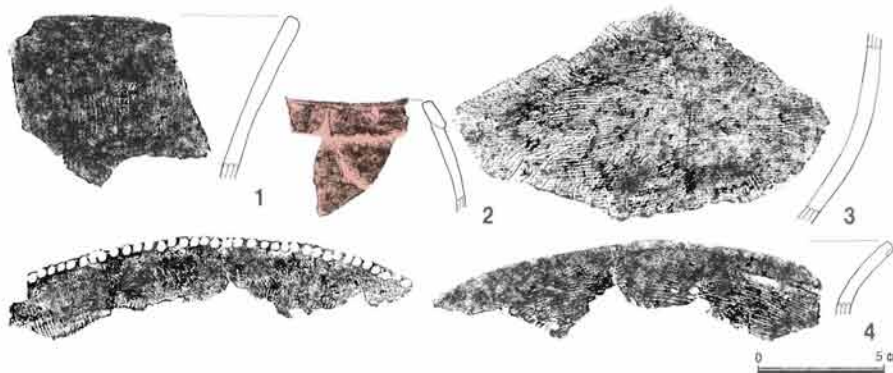
鉢形土器 (2)

2は高坏形土器の可能性がある。複合口縁部破片。器厚は非常に薄い。内外面ともに丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、全面赤彩される。胎土は砂粒、細礫、1~2mmの橙色粒子を含むがきめ細かく精製され堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (3・4)

3は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は丁寧なナデ。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈する。外面に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。貯蔵穴からの出土。

4は口頸部破片。口唇部に先端の丸い棒状工具で刺突された刻みが施される。器面はヘラナデされる



第97図 213号住居跡出土遺物 (1/3)

がハケメ痕を残す。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。外面に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、橙色粒子を含む。覆土中の出土。

214号住居跡（第98・99図）

〔位置〕 D-4 G。

〔住居構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）310×310mm。（主軸方向）N-19°-W。（壁高）26～34cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）貯蔵穴と炉の間がよく硬化している。（炉）住居中央から北に偏って位置する。75×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。炉の北側に礫が配される。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。南壁際中央の小ピットは入口施設と思われる。（貯蔵穴）住居南壁下、東に偏って位置する。30×50cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。貯蔵穴東側に高さ2～4cm・幅20～30cmの凸堤がめぐっている。

〔覆土〕 不整合な堆積で、埋め戻された感が大きい。

1層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を含む。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

3層 暗赤褐色土（5YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック、焼土小ブロックを僅かに含む。

4層 暗赤褐色土（5YR3/3）。焼土。

5層 暗褐色土（7.5YR3/3）。焼土粒子を多く含む。

6層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

7層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

8層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。

9層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。

10層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。

11層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 床面上・貯蔵穴中・覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕 覆土中から焼土粒子・炭化物粒子を検出し、床面に炭化材が散乱していることから焼失住居の可能性がある。

214号住居跡出土遺物（第100・101図）

壺形土器（2・3）

2は小型土器で口縁部上位を欠損する。底径3.6cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部は最大径を中位にもち球状を呈する。頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。外面頸部には付加条と思われる縄文が施されるが、摩耗が著しく明確でない。外面頸部以下は縦方向にヘラミガキされるがハケメ痕を僅かに残す。内面はナデられるが斑点状の剥離が著しくはっきりしない。頸部に輪積痕を明瞭に残す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細かい白や橙色の粒子を含むがきめ細かく精選されている。堅緻で丁寧な作りである。貯蔵穴からの出土。

3は複合口縁部破片。RLの単節斜縄文を口縁部内外面に施す。それ以外はハケメ調整後丁寧にヘラミガキされる。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、

浅黄橙色粒子を含む。床面上からの出土。

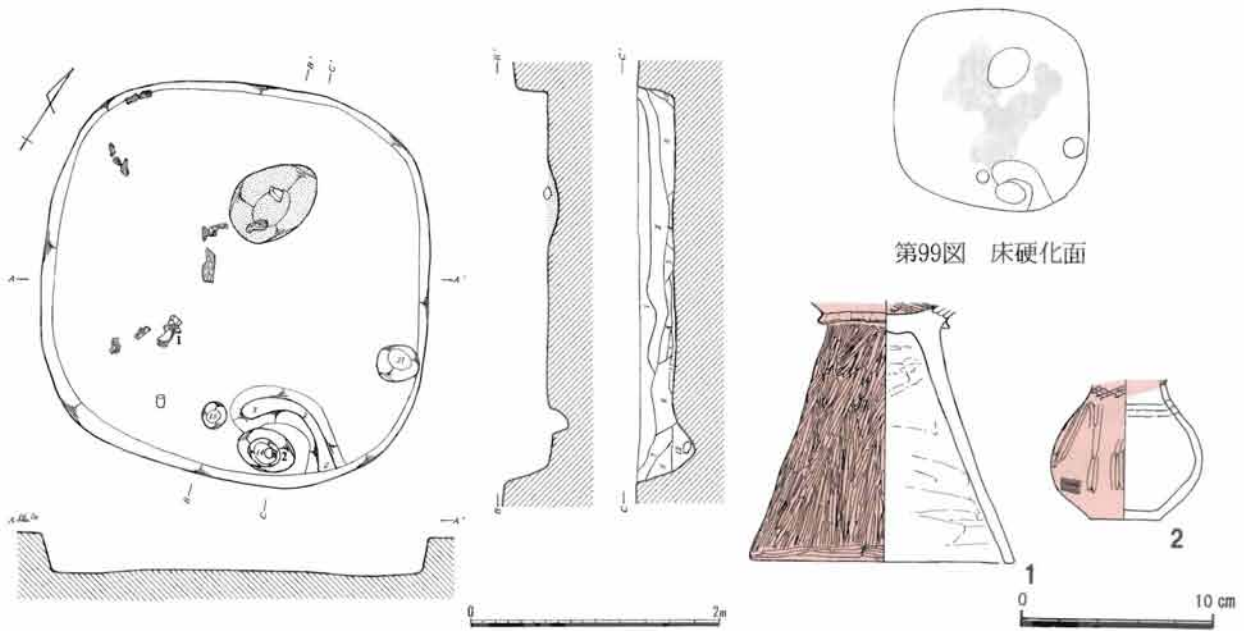
高环形土器（1）

裾径13.9cmを測る脚台部。鉢形を呈すると思われる坏部から裾部へかけて直線的に開く。坏部と脚台部の接合部に凸帯が一周する。凸帯には接合の際に押しつけた指頭痕が残る。脚台部は丁寧にヘラミガキされるが、裾部では横方向に粗く行われている。坏部内面は横方向のヘラミガキ。脚台部内面はヘラナデされるが、天井部では特に強くナデられていて光沢をおびる。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈し、外面は赤彩される。裾部には黒斑がみられる。胎土は砂粒、細礫を含むがきめ細かく精製されていて堅緻である。床面上の出土。

甕形土器（4～7）

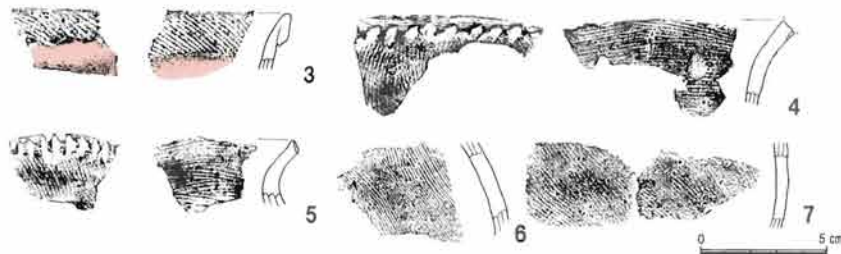
4・5は口頸部破片。4は口唇部がやや角頭状を呈し、板状工具で左方向から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。外面には煤の付着がみられる。胎土には砂粒、細礫、1～2mmの黄橙色粒子を含む。5はヘラ状工具で4より深めに刺された刻みがめぐる。器面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（2.5YR3/1）を呈する。胎土には砂粒、細礫、黄橙色粒子を含む。

6・7は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は6が暗褐色（10YR3/4）、7は暗灰褐色（N3/0）を呈する。いずれも外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫及び1～2mmの



第98図 214号住居跡（1/60）

第100図 214号出土遺跡1（1/4）



第101図 214号住居跡出土遺物2（1/3）

白色粒子を含む。

いずれも覆土中の出土である。

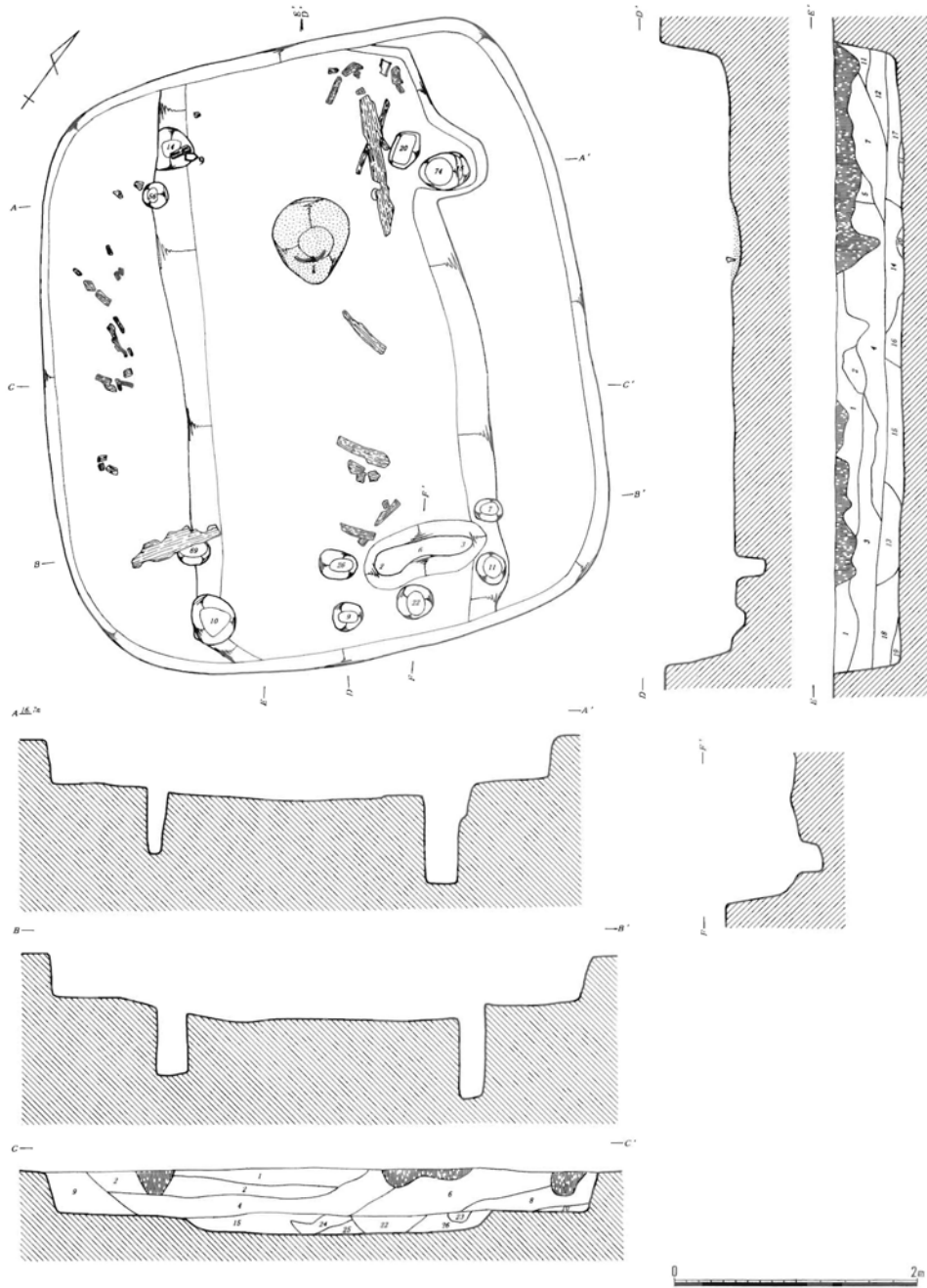
215号住居跡（第102・103図）

〔位置〕 D-3 G。

〔住居構造〕（平面形）長方形。（規模）520×440cm。（主軸方向）N-40°-W。（壁高）37～59cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）東壁は幅40～110cm・高さ8～12cm。西壁は幅90～120cm・高さ9～17cmの規模で住居中央より高くなっている。炉の周辺を除きよく硬化している。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。70×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。炉の南側に土器片を埋設している。（柱穴）各コーナーに主柱穴4本が検出される。中央南壁下の小ピットは入口施設と思われる。（貯蔵穴）住居南壁下、東に偏って位置する。径30cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。貯蔵穴北側に高さ2～6cm・幅30～45cmの凸堤が短軸にそって構築される。

〔覆土〕 不整合な堆積で、埋め戻された感が大きい。

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 2層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。
- 5層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 8層 暗赤灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。
- 10層 黒褐色土（10YR3/2）。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。
- 11層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 12層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子・炭化材片を含む。
- 13層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 14層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。焼土粒子・小ブロックを含む。
- 15層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 16層 暗褐色土（7.5YR3/3）。ローム粒子、焼土粒子を多く含む。
- 17層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 18層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ブロックを僅かに含む。
- 19層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。
- 20層 暗褐色土（7.5YR3/3）。焼土粒子・小ブロックを多く含む。
- 21層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・ブロックを僅かに含む。
- 22層 黒褐色土（7.5YR2/3）。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。炭化材
- 23層 暗褐色土（7.5YR3/4）。ロームブロックを多く含む。
- 24層 暗赤褐色土（5YR3/6）。焼土ブロック。



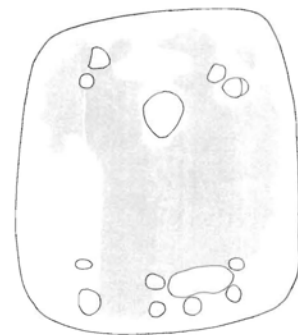
第102図 215号住居跡 (1/60)

25層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。炭化材小片を多く含む。
 26層 黒褐色土 (10YR3/2)。焼土粒子、炭化物粒子を含む。
 [遺物] 炉と覆土中から僅かに出土した。
 [時期] 弥生時代末葉。
 [所見] 東・西の1段高い床面はベッド状遺構と思われる。床面上に炭化材・焼土があり焼失住居の可能性はある。

215号住居跡出土遺物 (第104・105図)

壺形土器 (1~3)

1は口頸部が2/3程度遺存する。口径21cm。頸部はゆるやか



第103図 床硬化面

に外反し、複合口縁部は僅かに内湾する。口縁部には端末結節したLRの単節斜縄文とRLの単節斜縄文を使用した羽状縄文が施される。口唇部はハケ状工具でナデられる。外面縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。内面は横方向にヘラミガキされるが、上端にはハケメ痕を残す。ハケメは広く深いため、ミガキで消されても観察できるほどである。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、外面複合口縁部以外と内面口頸部は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが精製され細かく堅緻である。炉跡からの出土である。炉の施設として使用されたのであろうか。

2は複合口縁部破片。LRの単節斜縄文を羽状に施し、棒状浮文が貼付される。下端にはハケ状工具で刻みが増えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子が含まれる。覆土中の出土である。

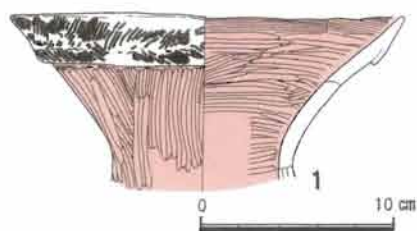
3は口頸部破片。口縁部内面にはRLの単節斜縄文が羽状に施されるが、上部は摩耗が著しく確認が困難である。口唇部にもRLの単節斜縄文がみられる。複合口縁部外面はハケメ調整後、丁寧にヘラミガキされる。内面は縄文帯以外は丁寧なヘラミガキ。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、1~2mmの白色粒子を含むが細かく堅緻である。覆土中の出土である。

鉢形土器(4・5)

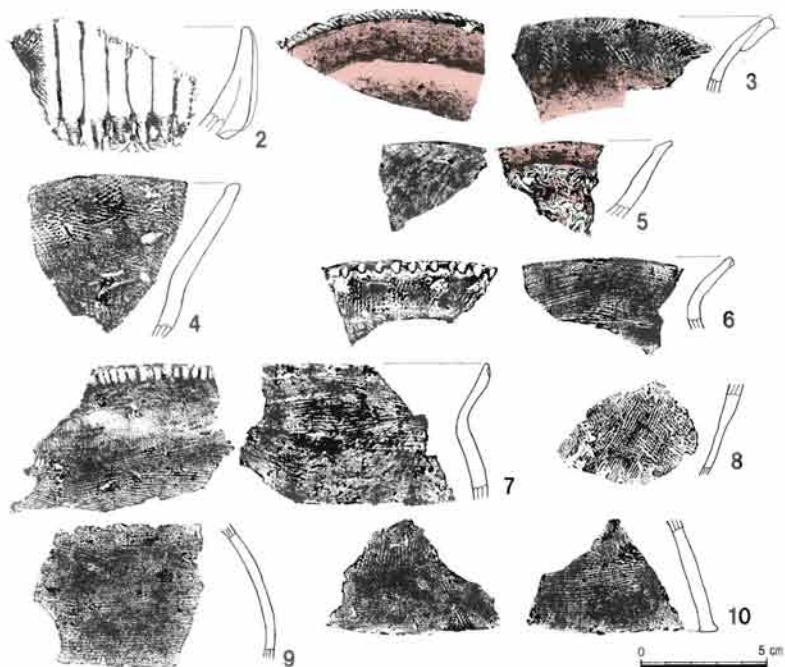
高坏形土器の可能性はある。いずれも口縁部破片。4は外面に網目状撚糸文が施される。詳細は摩耗が著しく確認困難である。色調は橙色(5YR6/6)を呈し、内面には赤彩が僅かに残る。胎土には砂粒、細礫を僅かに含む。5は口唇部ヨコナデ。内面には櫛描波状文が2段施されているのが確認できる。外面はヘラミガキされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、文様帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。ともに覆土中の出土である。

甕形土器(6~10)

6・7は口頸部破片。6は口唇部に先端がやや丸い工具で刺突した刻みが、7はヘラ状工具で浅く刺



第104図 215号住居跡
出土遺物1(1/4)



第105図 215号住居跡出土遺物2(1/3)

突した刻みがめぐる。いずれもヘラナデされるがハケメ痕を残す。6の色調は黒褐色(10YR3/1)、7は褐灰色(10YR4/1)を呈する。ともに外面には煤の付着がみられる。6は胎土に砂粒、細礫を含み、7はそれに加えて軽石と思われる橙色粒子を含む。

8・9は体部破片。いずれも外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。8の色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)、9はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土にはいずれも砂粒、細礫、軽石と思われる黄橙色粒子を含む。

10は脚台部破片。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。脚台端部に粘土のはみ出しがみられる。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。

いずれも覆土中の出土である。

216号住居跡(第106・107図)

〔位置〕D-3G。

〔住居構造〕(平面形)隅丸正方形。(規模)410×380cm。(主軸方向)N-17°-W。主軸が短軸。(壁高)26~30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面)壁際と炉の西側を除き、硬化している。(炉)住居中央から北に偏って位置する。径55cmの円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。焼土の範囲は45cmの円形を呈する。(柱穴)各コーナー壁際に支柱穴4本が検出される。中央南壁下の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南壁下、東に偏って位置する。径40cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。貯蔵穴の北側に高さ2~4cm・幅20~45cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕不整合で埋め戻された感が大きい。

- 1層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 2層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ロームブロック。
- 4層 黒色土(7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 6層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 7層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。
- 10層 黒色土(7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 11層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

なお、南東コーナーに厚さ8cm前後の小砂利混じりの暗赤褐色土が堆積する。

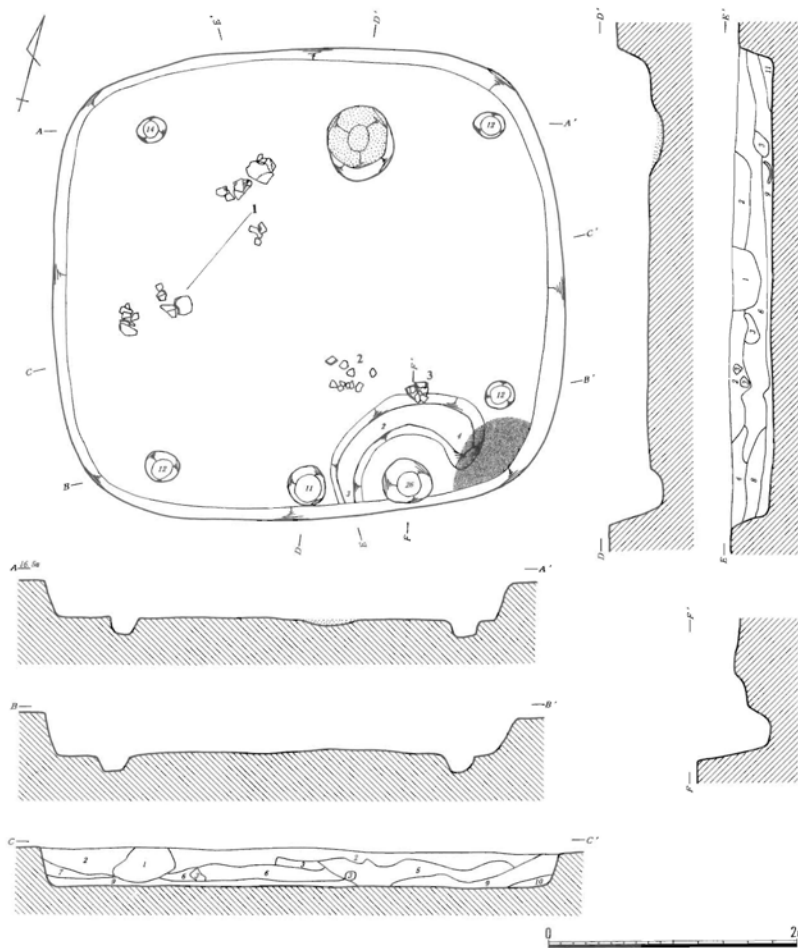
〔遺物〕南西床面上から多く出土した。

〔時期〕古墳時代初頭。

216号住居跡出土遺物(第108・109図)

壺形土器(1・2・4・6)

1は口縁部の大部分と体部の一部を欠損する。底径8.4cm・器高28.3cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部は最大径をやや下半にもち、ほぼ球状を呈する。頸部は強くくびれて口縁部は大きく外反するが、口唇部で僅かに内湾する。頸部には断面三角形の凸帯が一周する。外面口唇部と頸部、体部下



第106図 216号住居跡 (1/60)



第107図 床硬化面

半は横方向のナデ、それ以外はハケメ調整後、丁寧にヘラミガキされる。内面は口唇部横方向のナデ、口縁部は横方向にヘラミガキされる。頸部以下はナデられたと思われるが摩耗が著しく不明瞭である。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、外面及び口縁部内面は赤彩される。棒状黒斑も体部にみられる。胎土は白色粒子、細礫、軽石と思われる白色粒子を含むが細かく堅緻である。南西側床面上の出土。

2は体部上位以上が1/2程度遺存する。推測口径17.5cmで体部は球状を呈すると思われる、頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口唇部は横方向のナデ、外面は縦方向にヘラミガキされるが、口縁部上端横方向、以下縦方向のハケメ痕が僅かに残る。内面口縁部は横方向にヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされるが摩耗が顕著である。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。体部には焼成時についたと思われる黒斑がみられる。胎土は黒・白色粒子、細礫を含むが精製されておりきめ細かく堅緻である。貯蔵穴付近床面上の出土である。

4は口頸部破片。口縁部外面には2箇所結節文のある原体を数段回転させて施文している。縄文帯下端には先端のやや丸い工具で刺突した刻みがみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、頸部以下と内面は赤彩される。胎土には砂粒、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。床面上の出土。

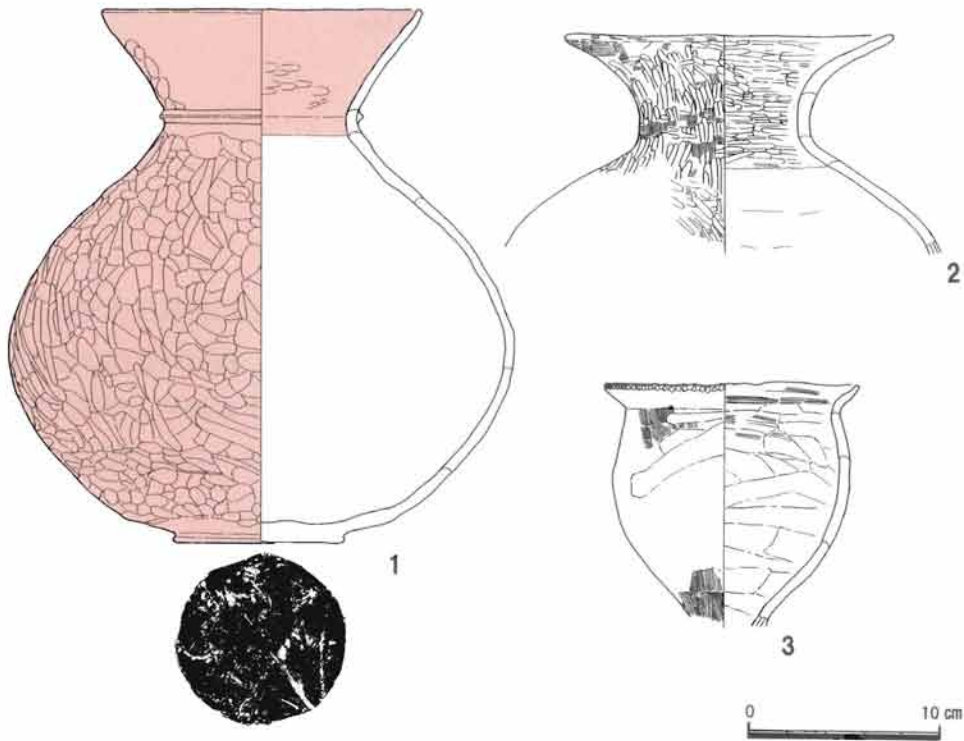
6は肩部破片。RLの単節斜縄文を羽状に3段施す。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、外面縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土。

甕形土器 (3・5・7)

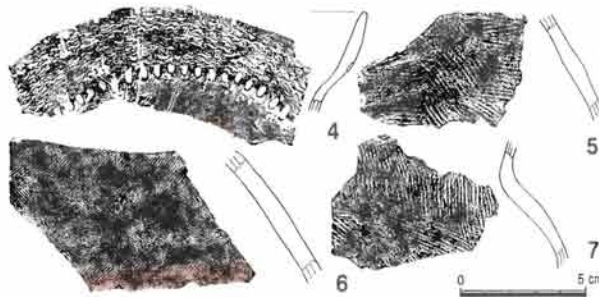
3は台付甕形土器。口径13.2cmと小型で、脚台部を欠損する。最大径を口縁部にもち、体部は張りをもたず、下位に向かってゆるやかにすぼむ。頸部は強く屈曲し、口縁部は外反する。外面はヘラナデされるが、頸部と体部下位に縦方向のハケメ痕を僅かに残す。内面はヘラナデされるが、頸部に僅かなハケメ痕を残す。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。外面脚台部と体部上半に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。貯蔵穴凸堤横床面上から出土。

5は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土である。

7は頸部破片。器面はヘラナデされるが、外面と内面上部にはハケメ痕が残る。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈する。煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。覆土中の出土である。



第108図 216号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第109図 216号住居跡出土遺物 2 (1/3)

217号住居跡（第110・111図）

〔位置〕 D-3 G。

〔住居構造〕 248号住居跡に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）700×540cm。（主軸方向）N-44°-E。（壁高）20～26cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）北側が幅90～120cm・高さ2～7cmの規模で高くなっている。壁際と炉の周辺を除きよく硬化している。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。80～70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmを測る。（柱穴）各コーナーに支柱穴4本が検出された。南壁際の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下、東に偏って位置する。40×50cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。北側に高さ4～7cm・幅25～30cmの凸堤が弧状に構築されている。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土（7.5YR3/3）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 2層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕 住居北側はベッド状遺構と思われる。

217号住居跡出土遺物（第112・113図）

壺形土器（1～4）

1は頸部1/2程度が遺存する。球状を呈する体部から頸部でくびれ、口縁部は外反する。外面は横方向にヘラミガキされるが、頸部縦方向、体部横方向のハケメ痕を残す。内面口縁部は横方向にヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされるが、その際の工具痕が残る。輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。北コーナーに近い床面上の出土である。

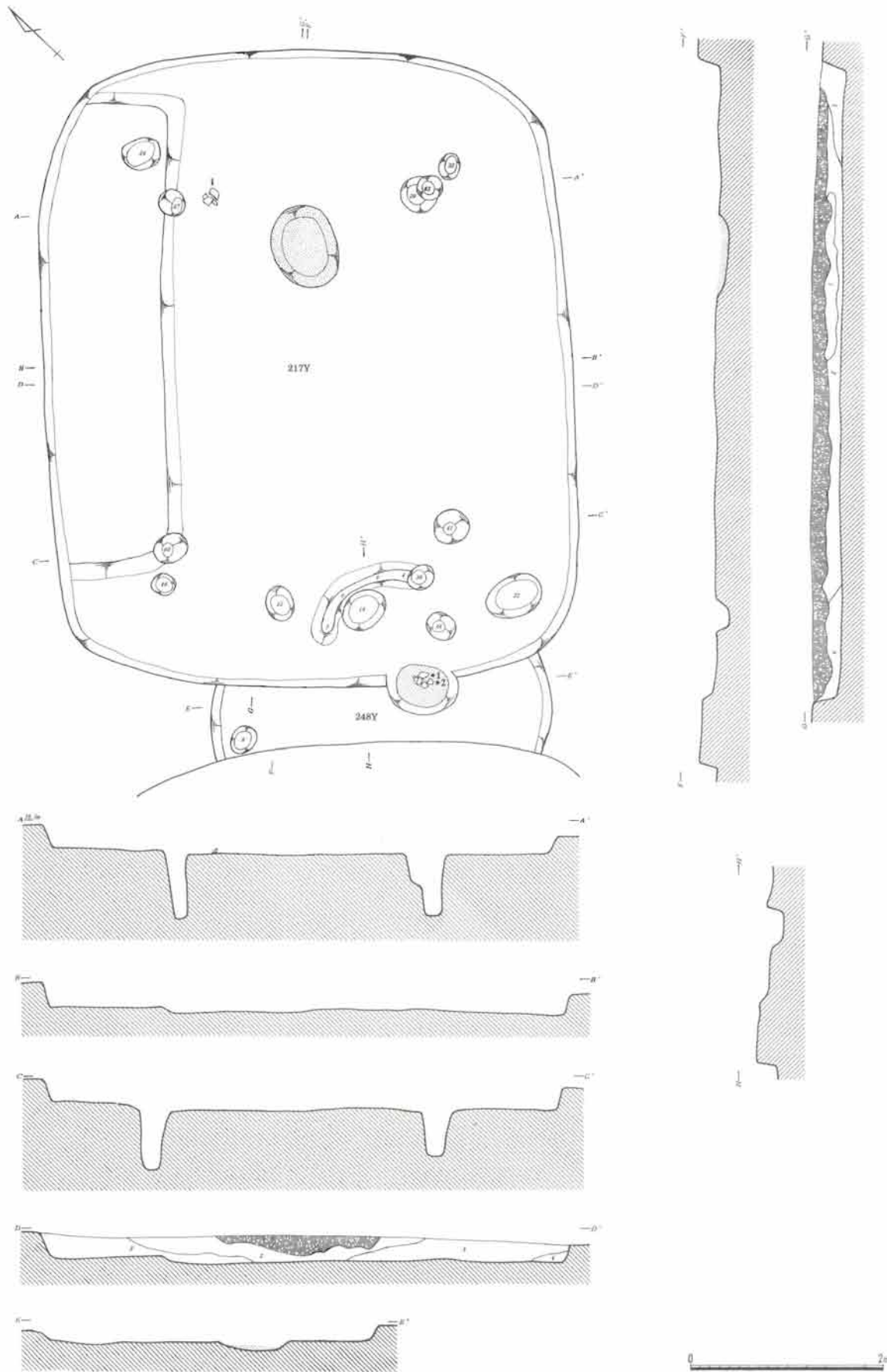
2～4は肩部破片。2はRLの単節斜縄文を羽状に3段施し、間に円形浮文が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土は細礫、白色粒子を含むが精選されている。3は付加条の縄文が3段施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫、白色粒子を含む。4はLRの単節斜縄文を2段施す。1段目の下端には縄文原体の端を閉じた部分の回転圧痕がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫、1～2mmの白色粒子を含む。いずれも覆土中の出土。

鉢形土器（5・6）

5は高環形土器の可能性もある。口縁部にはLRの単節斜縄文が施される。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。

6は口頸部破片。外面はヘラミガキされるが、頸部にハケメ痕を残す。内面口縁部はヘラナデされるがハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。

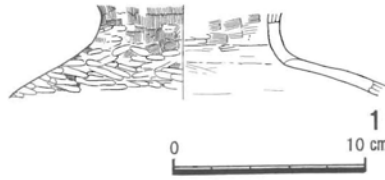
ともに覆土中の出土である。



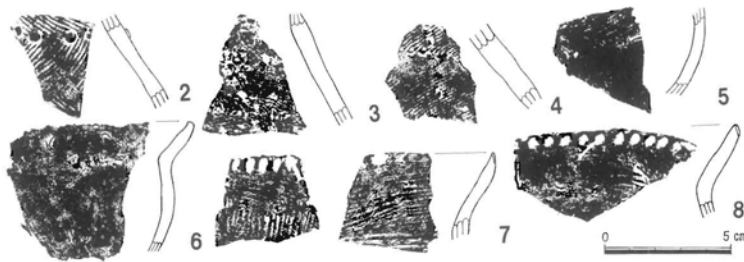
第110图 217·248号住居跡 (1/60)



第111図 床硬化面



第112図 217住居跡出土遺物1 (1/4)



第113図 217号住居跡出土遺物2 (1/3)

甕形土器 (7・8)

いずれも口頸部破片。7は口唇部に先端が丸い工具で浅く刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。8は口唇部にハケ状工具で刺突した刻みが施される。内外面ともにハケメ調整後、丁寧にヘラナデされる。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。胎土には細礫、白色粒子を含む。ともに覆土中からの出土。

218号住居跡 (第114図)

〔位置〕 C-3 G。

〔住居構造〕 233号住居跡を切る。

(平面形) 正方形。(規模) 430×430

cm。(主軸方向) N-65°-E。(壁高) 50~60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱。

(炉) 検出されなかった。(柱穴) 各コーナー毎に4本の柱穴を検出した。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。
- 3層 暗褐色土(7.5YR3/4)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 7層 黒褐色土(10YR3/2)。ロームブロックを含む。
- 8層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。
- 9層 暗褐色土(10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。
- 10層 暗褐色土(10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。黒色土を斑状に含む。
- 11層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 12層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 13層 暗褐色土(7.5YR3/3)。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 14層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 15層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 16層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

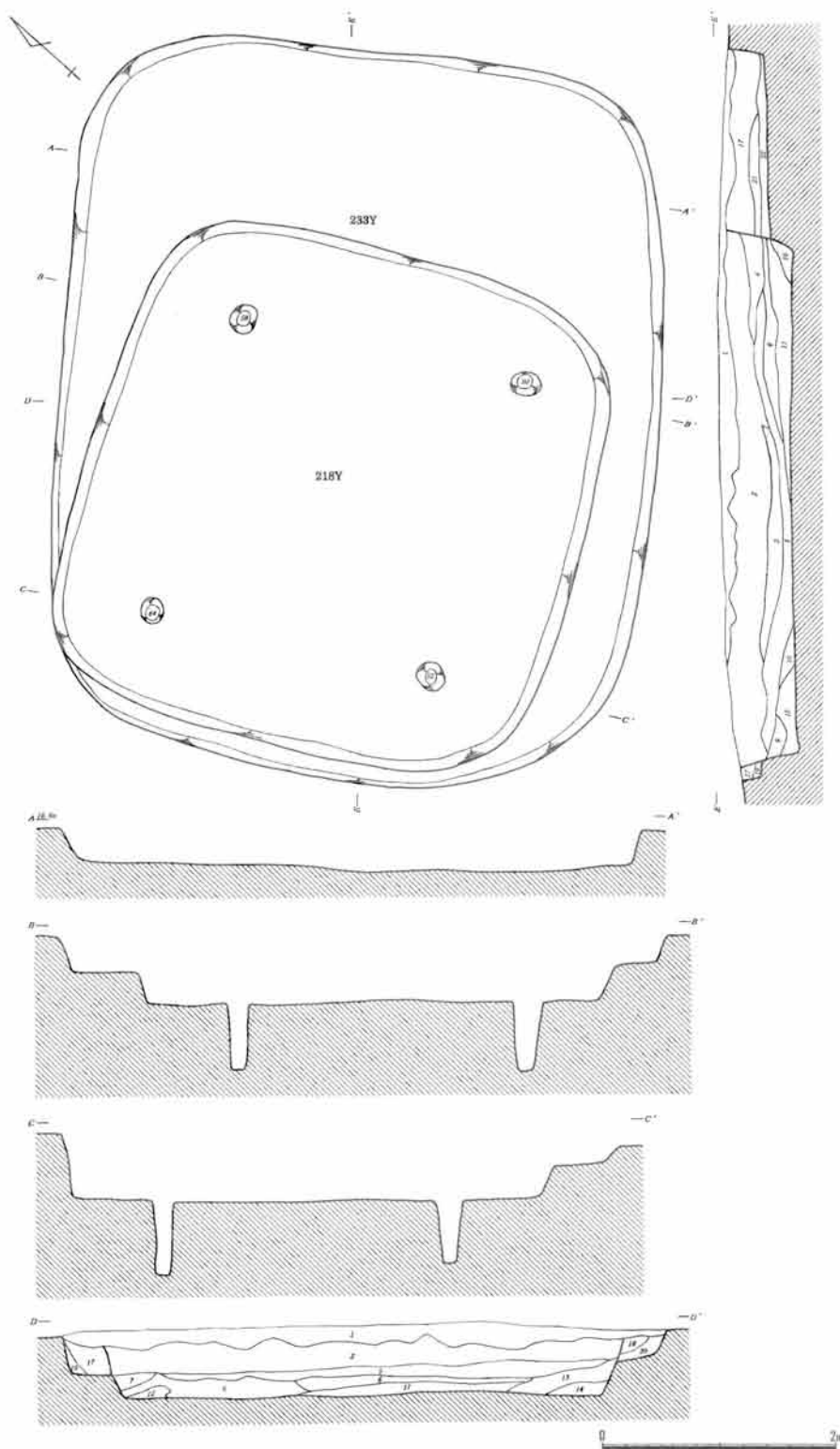
〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕古墳時代初頭。

218号住居跡出土遺物（第115・116図）

壺形土器（1・4～6）

1は口頸部から体部上半の1/2程度が遺存。球状を呈すると思われる体部から頸部でくびれ、口縁部はやや外反する。外面は縦方向にヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。内面口縁部はハケメ調



第114図 218・233号住居跡（1/60）

整後、横方向のヘラミガキが施される。頸部以下はヘラナデされるが摩耗が著しい。輪積痕が明瞭に観察できる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、外面と口縁部内面は赤彩される。体部中位には黒斑がみられる。覆土中の出土である。

4・5は複合口縁部破片。4は棒状浮文が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる1～2mmの白色粒子を含む。5はLRの単節斜縄文を羽状に施文されると推測されるが摩耗がはげしく確認が困難である。下端にはハケ状工具で刺突された刻みがみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる黄橙色粒子を含む。ともに覆土中の出土。

高坏形土器（2）

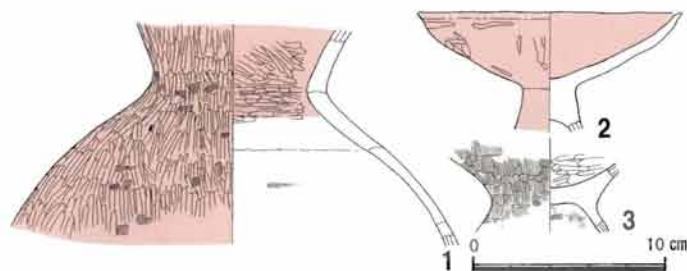
坏部約1/2と脚台部の上部のみ遺存する。推定口径13.7cm。坏部は広がるが口縁部付近で内傾し、口唇部は僅かに外反する。脚台部は裾部に向けて広がるものと思われる。坏部は内外面ともに斑点状の剥離が著しいため不明瞭であるが、口縁部はナデ、以下ヘラミガキされたと思われる。脚台部内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、脚台部内面以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる細かい黄橙色粒子を含む。覆土中の出土である。

6は肩部破片。S字状結節文をもつLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土である。

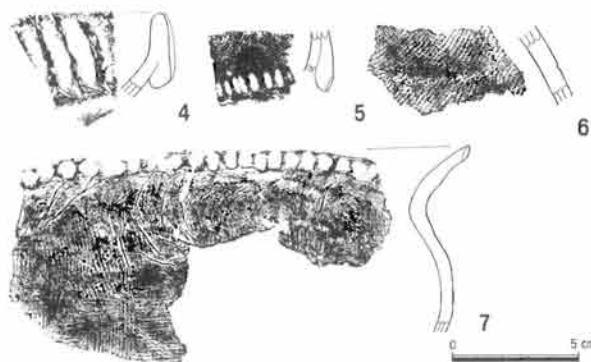
甕形土器（3・7）

3は台付甕形土器の甕部と脚台部の接合部のみ遺存。脚台部は直線的に開く。外面と脚台部内面はナデられるが、縦方向のハケメ痕を残す。甕部内面は横方向のヘラミガキが施される。色調はにぶい橙色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を多く含む。

7は口頸部破片。口唇部には先端がやや丸い工具で左方向から刺突した刻みがめぐる。色調は黒褐色



第115図 218号住居跡出土遺物1（1/4）



第116図 218号住居跡出土遺物2（1/3）

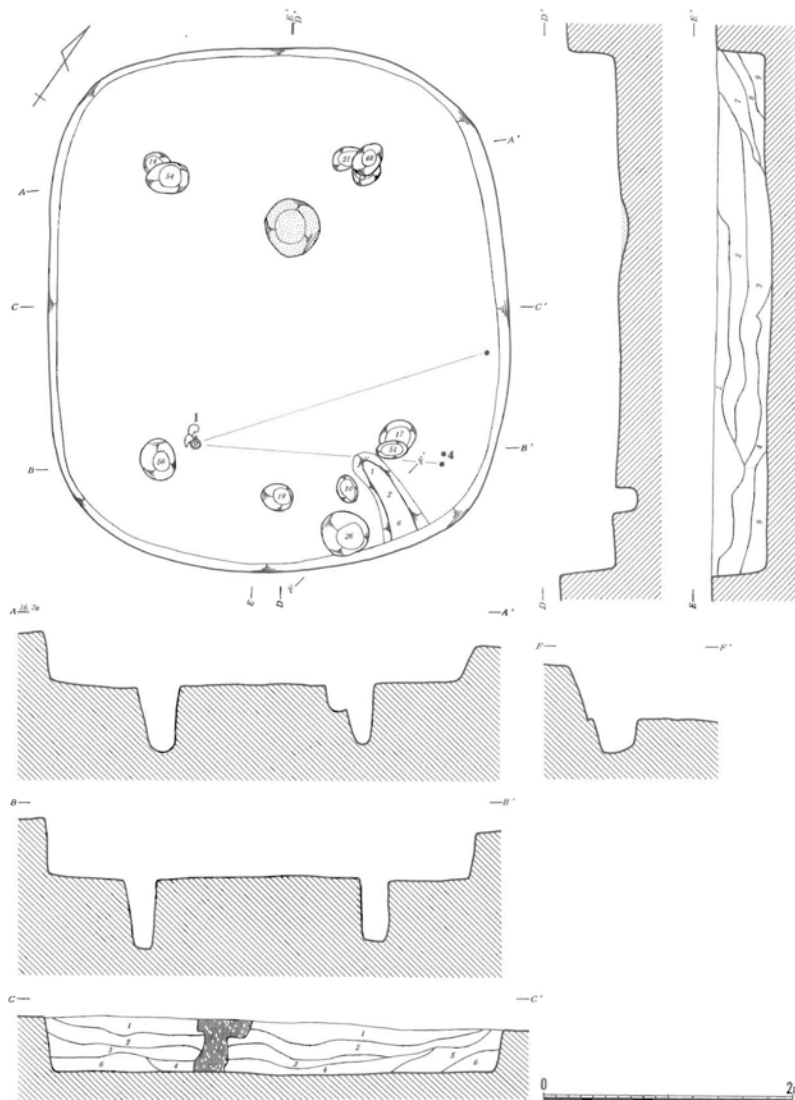
(10YR3/1) を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。

ともに覆土中の出土である。

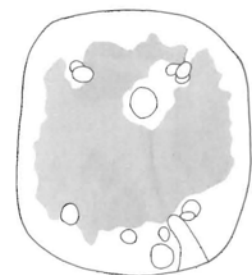
219号住居跡 (第117・118図)

〔位置〕 B-3 G。

〔住居構造〕 249号住居跡を切る。(平面形) 楕円形。(規模) 420×360cm。(主軸方向) N-40°-W。(壁高) 37~46cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 住居壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。径45cmの円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴である。ただし南側の1本を除いた3本には柱穴の重複がみられる。中央南東壁際より北に偏って位置する小ピットは、入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東壁下、東に偏って位置する。径38cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。貯蔵穴東側に高さ1~6cm・幅25~24cmの凸堤が構築されている。



第117図 219号住居跡 (1/60)



第118図 床硬化面

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

〔所見〕 柱穴の重複からみて、住居の建て直しの可能性がある。

219号住居跡出土遺物 (第119・120図)

壺形土器 (2・3・5)

2・3は複合口縁部破片。2は複合口縁部下端にハケ状工具の刺突による刻みが施される。外面はヘラナデされるが口縁部横方向、頸部縦方向のハケメ痕が残る。内面はヘラミガキされるが、横方向のハケメ痕を残す。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、複合口縁部外面以外は赤彩される。胎土には砂粒、

細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中の出土。3は棒状浮文が剥落している。器面はヘラミガキされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) 呈し、全面赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。床面上の出土。

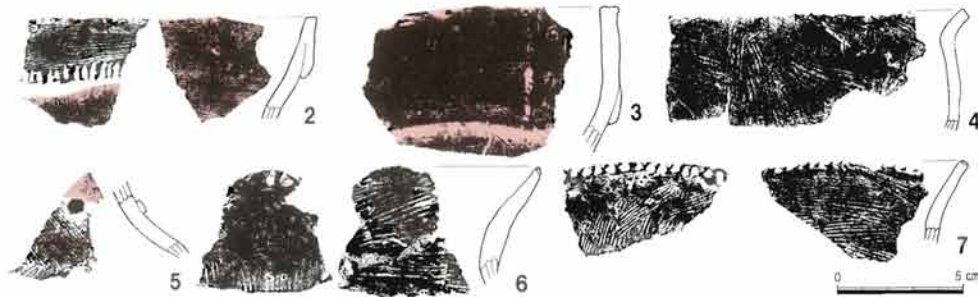
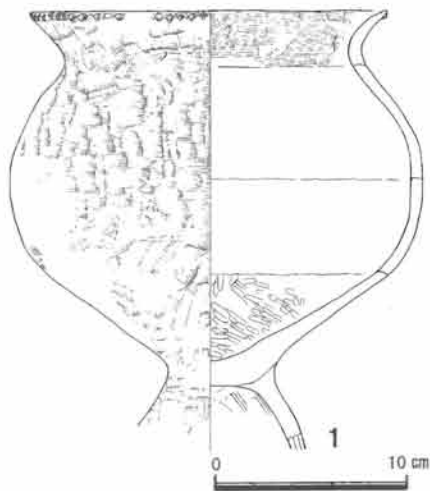
5は頸部から肩部にかけての破片。Rの無節斜縄文の下位に、折った縄を回転施文したと思われる痕跡が残る。円形浮文が貼付される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、一部赤彩されている。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

甕形土器 (1・4・6・7)

1は台付甕形土器。甕部1/2程度と脚台部下半を欠損する。

第119図 219号住居跡出土遺物 1 (1/4)

口径19cmを測る。最大径を球状を呈する体部中位にもち、頸部



第120図 219号住居跡出土遺物 2 (1/3)

はやや強く屈曲し、口縁部は外反する。脚台部は僅かに内湾しながら開くものと思われる。口唇部にはハケ状工具を刺突した刻みが一周する。外面はヘラナデされるが、口縁部と体部下半には縦方向、体部上半には横方向のハケメ痕を残す。内面口縁部はナデられるが、ハケメ痕を残す。頸部以下は丁寧にヘラナデされるが、底部は粗くヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるが、その際の工具痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。外面体部中位には煤が、内面底部には炭化物の付着がみられる。胎土には砂粒、細礫を含む。床面上の出土。

4は口頸部破片。口唇部は平坦に作られる。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は丁寧にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土である。

6・7は口頸部破片。6は口唇部にヘラ状工具で刺突された刻みがめぐる。内外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。7は先端のやや丸い工具で刺突された刻みが施される。内外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、白・橙色の1mm大の粒子を含む。ともに覆土中の出土である。

220号住居跡（第121図）

〔位置〕A-2G。

〔住居構造〕北側は調査区外、南側コーナーは221号住居跡を切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方向）N-35°-W。（壁高）28~52cmを測り、垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅10~22cm・下幅4~7cmを測り、深さ2~8cmを施す。溝の中にピットが、ほぼ等間隔に検出された。（床面）壁際周辺と炉の周辺を除きよく硬化している。（貯蔵穴）住居中央南東壁、東に偏って位置する。径60cmの円形を呈し、高さ3~6cm・幅25~45cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 3層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 暗赤灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ブロックを多く含む。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 8層 暗赤褐色土（2.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。
- 10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む
- 11層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子、炭化物粒子・炭化材片を含む。
- 12層 オリーブ黒色土（5YR3/2）。焼土粒子・小ブロックを多く含む。
- 13層 黒褐色土（10YR3/1）。焼土粒子・小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。
- 14層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子の僅かに含む。
- 15層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。

16層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。

17層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 床面上と覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕 南壁中央はロームを掘り残して階段状に作出している。入口施設の可能性が大きい。

220号住居跡出土遺物 (第122図)

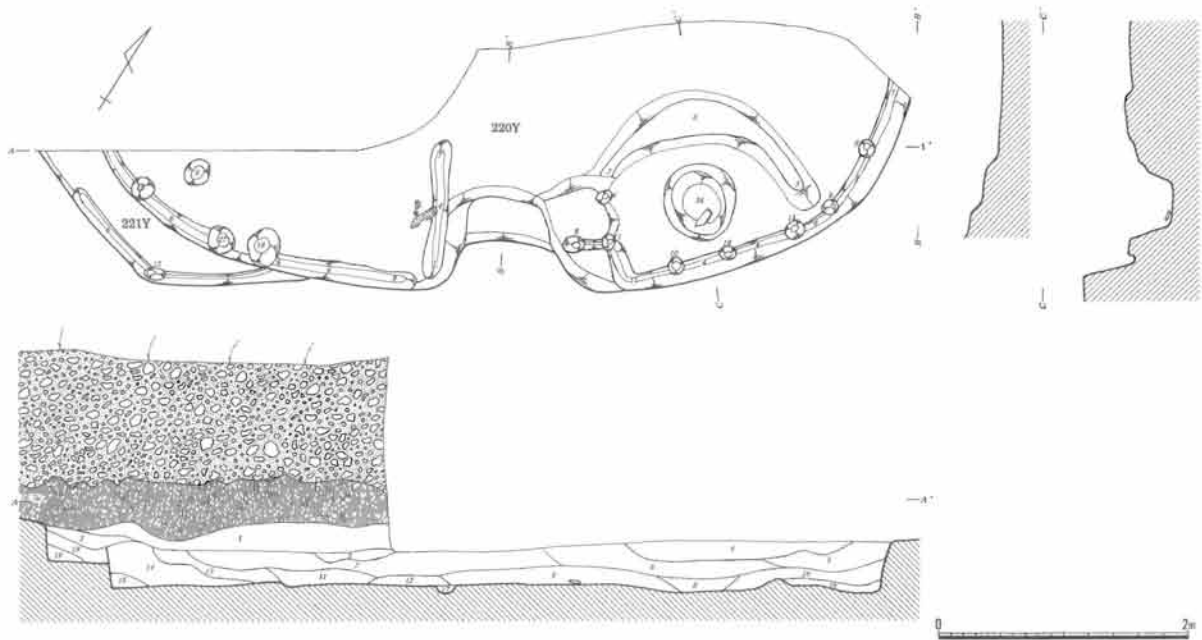
壺形土器 (1・2)

1は複合口縁部破片。口縁部には撚りの異なる単節縄文を用いた羽状縄文が施され、棒状浮文が9本貼付される。下端には刻みが加えられる。口唇端部にはL Rの単節斜縄文が施される。器面はヘラミガキされるが、口縁部直下に僅かなハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、口縁部外面以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を多く含む。

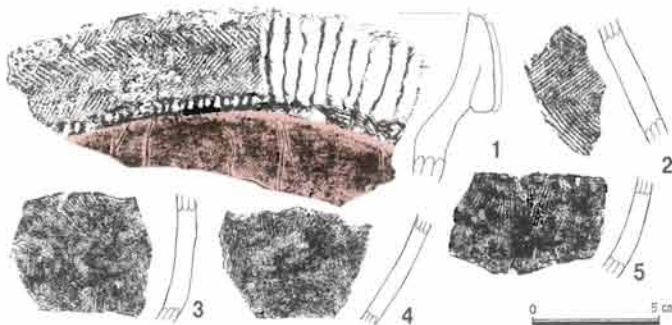
2は肩部破片。R Lの単節斜縄文を3段羽状に施す。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。

ともに覆土中の出土である。

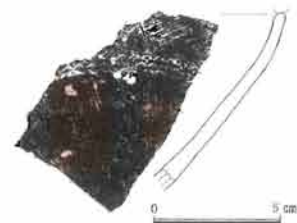
甕形土器 (3～5)



第121図 220・221号住居跡 (1/60)



第122図 220号住居跡出土遺物 (1/3)



第123図 221号住居跡 (1/3)

いずれも体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は3がにぶい褐色(7.5YR5/3)、4が灰褐色(7.5YR4/2)、5が灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。3・5の胎土には砂粒、細礫が、4には更に軽石と思われる白色粒子が含まれる。覆土中の出土である。

221号住居跡(第121図)

〔位置〕A-3G。

〔住居構造〕住居北側は調査区外。220号住居跡に大部分切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(壁高)30~46cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)上幅10~15cm・下幅4~6cm・深さ5cm前後を測る。(床面)軟弱。(炉)不明。

〔覆土〕

18層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。

19層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉~古墳時代初頭。

221号住居跡出土遺物(第123図)

高環形土器もしくは鉢形土器。器厚が薄く非常に丁寧な作りである。口縁部には撚りの異なる単節縄文を用いた羽状縄文と3条のS字状結節文が施される。口唇端部にもLRの単節斜縄文がみられる。縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされる。色調は赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが精選されきめ細かく堅緻である。覆土中の出土である。

222号住居跡(第124・125図)

〔位置〕B-2G。

〔住居構造〕224・245・246号住居跡に切られる。(平面形)正方形。(規模)360×360cm。(主軸方向)N-43°-W。(壁高)29~45cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)全体に軟弱。(炉)検出されなかった。(柱穴)検出されなかった。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。

2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。

3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

4層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

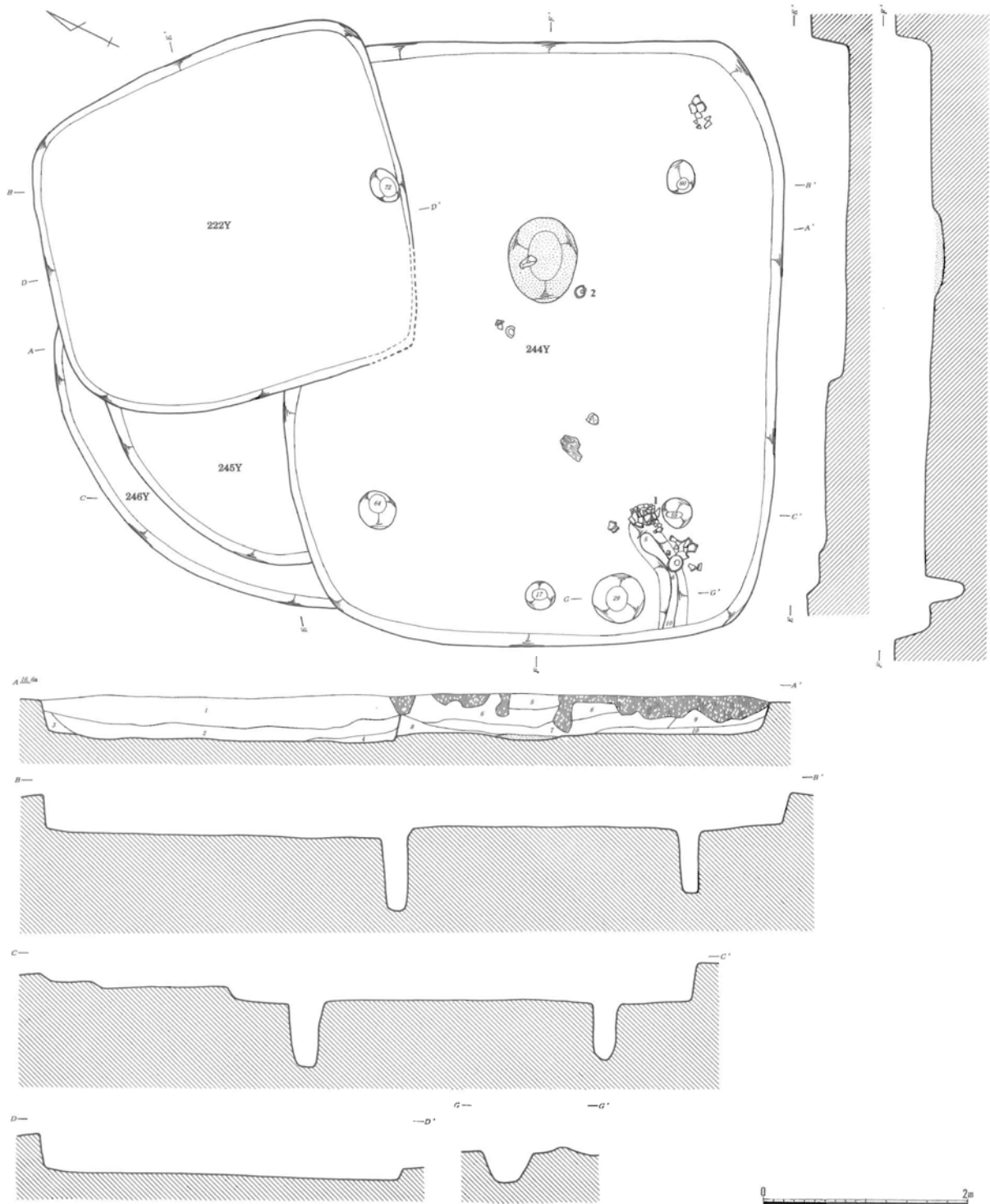
〔時期〕古墳時代初頭。

222号住居跡出土遺物(第126図)

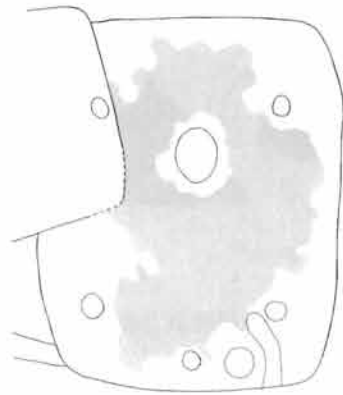
壺形土器(1~4・6・7)

1~3・6は複合口縁の口頸部破片。1は複合口縁部にRLの単節斜縄文を羽状に施し、棒状浮文が貼付される。下端にはハケ状工具による刻みが施される。口唇端部にもRLの単節斜縄文がみられる。頸部はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラミガキされる。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。2は口縁部外面にRLの単節斜縄文を施し、棒

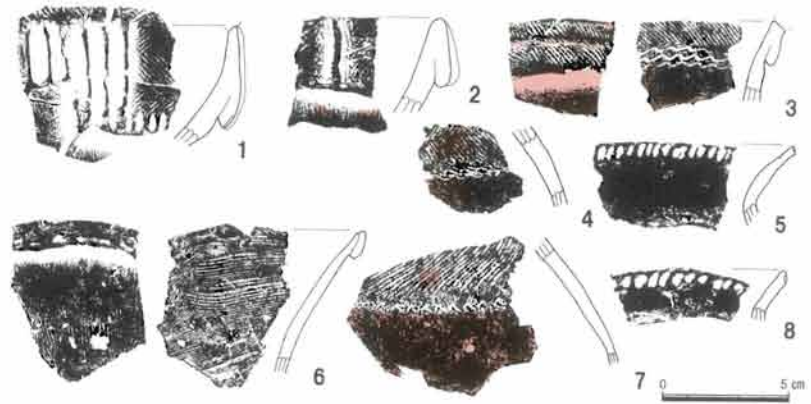
状浮文が貼付される。頸部はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は丁寧にヘラミガキされる。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。3は口縁部内外面と口唇端部にRLの単節斜縄文を施す。内面縄文帯下端には3条のS字状結節文がみられる。色調は赤褐色（10R4/4）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には細礫、白色粒子を含む。6は短い複合口縁をもつ土器。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。いずれも



第124図 222・244～246号住居跡 (1/60)



第125図 床硬化面



第126図 222住居跡出土遺物 (1/3)

覆土中の出土。

4・7は肩部破片。4はR Lの単節斜縄文を羽状に施し、縄文帯下には2条のZ字状結節文がめぐる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。7はL Rの単節縄文の端末を結節したZ字状結節文が施される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。縄文帯の中に円形赤彩文が施される。胎土には砂粒、細礫を含む。ともに覆土中の出土。

甕形土器(5・8)

いずれも口頸部破片。口唇部には5がハケ状工具で細かく刺突された刻みが、8がやや左方向から刺突した刻みがめぐる。色調は5がにぶい褐色(7.5YR5/4)、8が黒褐色(10YR3/1)を呈する。8には煤が付着する。ともに胎土には砂粒、細礫を含む。5は白色粒子を含む。覆土中の出土。

223号住居跡(第60図)

〔位置〕C-5G。

〔住居構造〕224号住居跡を切り、199号住居跡・17号方形周溝墓に切られる。(平面形)不明。(規模)不明×530cm。(主軸方向)N-30°-W。(壁高)24~32cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。(床面)壁際が4~18cmの厚さで貼床されている。全体に軟弱である。(炉)不明。(柱穴)各コーナーに2本検出された。

〔覆土〕

- 6層 黒色土(10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 7層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 9層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

〔遺物〕小破片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉~古墳時代初頭。

223号住居跡出土遺物(第127図)

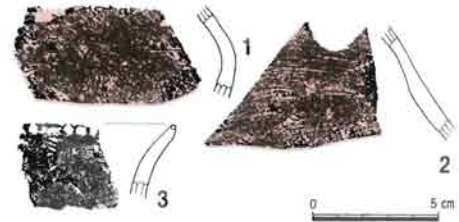
壺形土器(1・2)

いずれも体部破片。ハケメ調整後ヘラミガキされたと思われるが、器面の荒れが激しく確認困難である。色調は1がにぶい褐色(7.5YR5/4)、2がにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、赤彩される。胎土

には砂粒、細礫が含まれる。覆土中の出土。

甕形土器(3)

口唇部に先端の丸い工具による刻みが施される。器面はヘラナデされるが僅かにハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土である。



第127図 223号住居跡出土遺物(1/3)

224号住居跡(第60図)

〔位置〕C-5G。

〔住居構造〕住居の大部分が199・223号住居跡、17号方形周溝墓に切られる。(平面形)不明。(規模)不明×550cm。(主軸方向)N-27°-W。(壁高)4~14cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)南壁際が一部硬化している。(炉)不明。

〔覆土〕

10層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

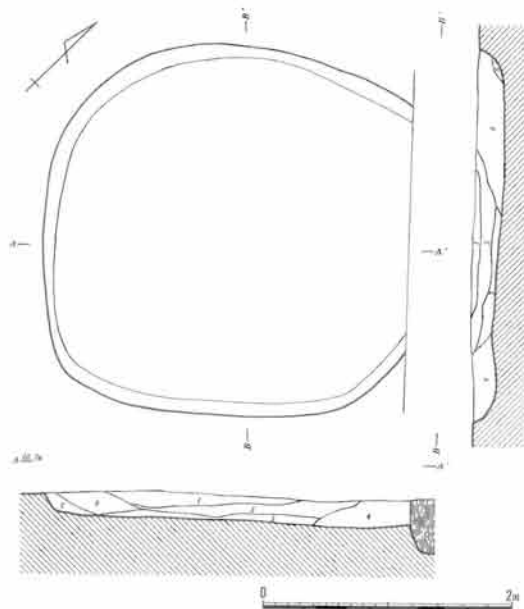
〔遺物〕破片が数点出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕弥生時代末葉~古墳時代初頭。

225号住居跡(第128図)

〔位置〕C-2G。

〔住居構造〕住居西側が、破壊されている。(平面形)不整楕円形。(規模)不明×300cm(主軸方向)N-44°-W。(壁高)9~24cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)軟弱。(炉)不明。(柱穴)検出されなかった。



第128図 225号住居跡(1/60)

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

4層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

5層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

6層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。

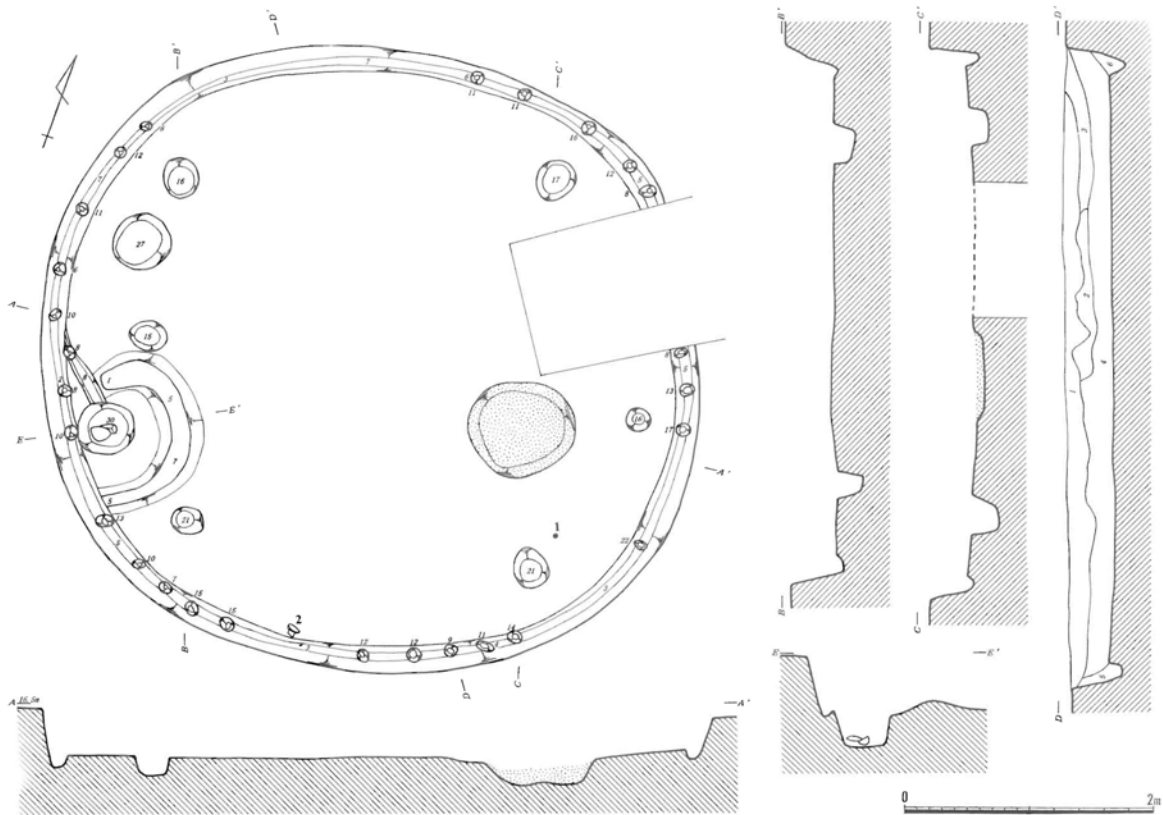
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

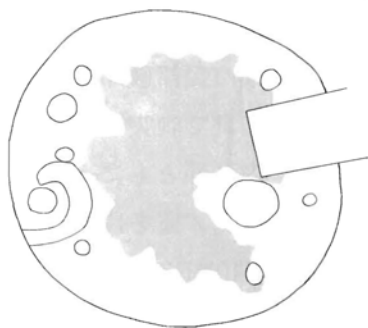
226号住居跡（第129図）

〔位置〕 E-3 G。

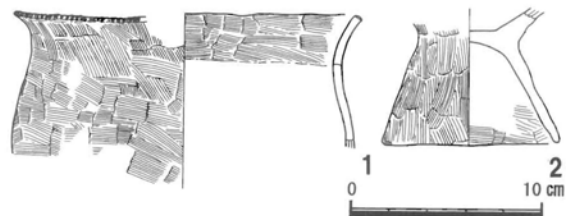
〔住居構造〕 北東側が破壊されている。（平面形） 楕円形。（規模） 540×500cm。（主軸方向） N-79°-E。（壁高） 28～39cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝） 上幅14～32・下幅5～10cm・深さ3～7cmを測り全周する。また、溝に小ピットが北東側を除きほぼ等間隔に検出された。（床面） 壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。（炉） 住居中央から東に偏って位置する。径80cmの円形を呈する地床炉で、深さ20cmを測る。（柱穴） 各コーナーに主柱穴4本検出される。西壁際にある1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴） 西壁下、やや南に偏って位置する。径44cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。貯蔵



第129図 226号住居跡（1/60）



第130図 床硬化面



第131図 226号住居跡出土遺物1（1/4）

穴東側に高さ1～7cm・幅25～35cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 比較的多く破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

226号住居跡出土遺物 (第131・132図)

壺形土器 (3～5)

3は複合口縁部破片。口縁部外面にはLRの単節斜縄文が施され、棒状浮文が貼付される。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈し、内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。

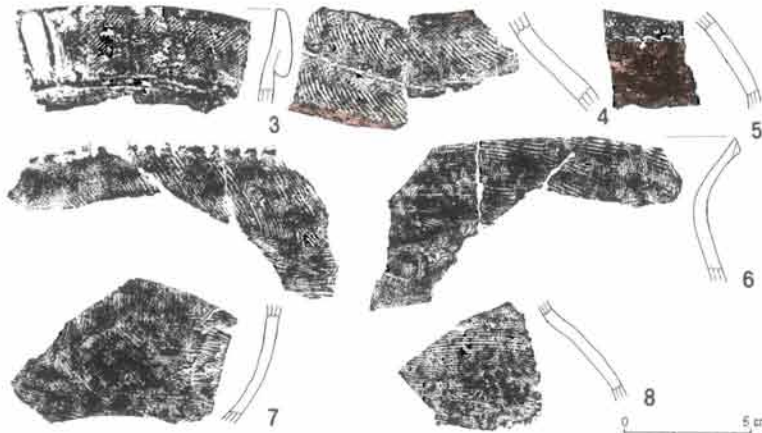
4は肩部破片。撚りの違う縄文を羽状に施す。縄文帯の間にはS字状結節文がみられる。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫、橙色粒子を含む。

5はRの無節斜縄文と思われる縄文帯の下にZ字状結節文が施される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含む。

いずれも覆土中の出土である。

甕形土器 (1・2・6～8)

1・2は台付甕形土器。1は甕部上半1/2程度が遺存する。推定口径18.5cm。頸部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部をハケ状工具で平坦にナデ、浅く刺突した刻みを施す。外面はヘラナデされるが、口縁部縦方向、体部横方向の深くて幅広なハケメ痕が残る。内面口縁部はヘラナデされるが横方向のハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。全面に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、1～2mmの橙・白色粒子を含む。ピット付近の床面上の出土。2は脚台部のみ残存する。裾径9cmで直線的に開く器形である。脚端部には粘土のみ出しが見られる。内外面ともにヘラナデされるが、外面縦方向、内面横方向のハケメ痕が残る。色調は



第132図 226号住居跡出土遺物2 (1/3)

にぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を多く含む。壁際床面上の出土。

6は口頸部破片。口唇部にヘラ状工具で刺突した刻みがめぐる。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出

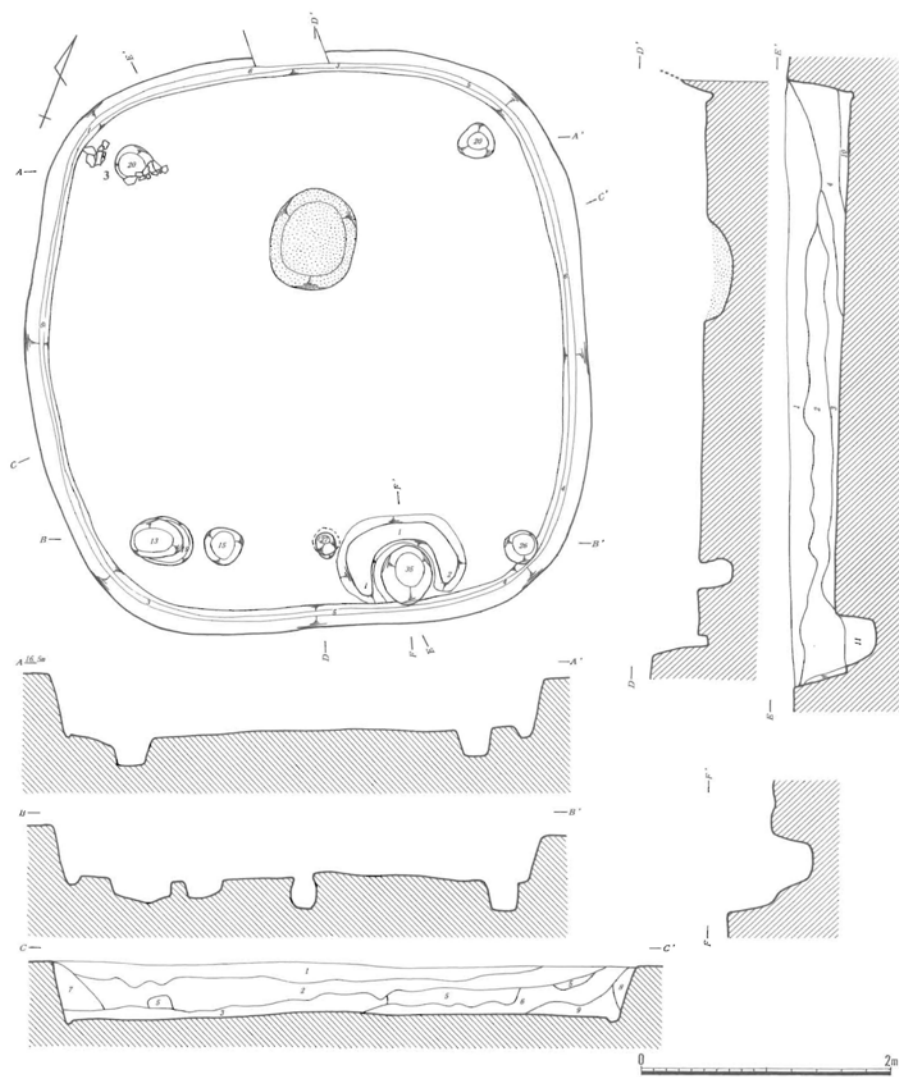
土である。

7・8は体部破片で、外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面は横方向のヘラナデ。7の色調は黒褐色(10TR3/2)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。8の色調は黒褐色(10YR3/1)を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。ともに覆土中の出土である。

227号住居跡(第133・134図)

〔位置〕F-2G。

〔住居構造〕北壁の一部が破壊されている。(平面形)楕円形。(規模)460×440cm。(主軸方向)N-22°-W。(壁高)36~50cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)上幅20~24cm・下幅3cm前後・深さ1~6cmを測り、全周すると思われる。(床面)貯蔵穴から炉にかけてよく硬化している。(炉)住居中央から北に偏って位置する。80×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ20cmを測る。(柱穴)各コーナー壁際に支柱穴が4本検出された。南壁下の1本は住居内側に傾斜をもって穿たれていて梯子穴を想定させる。(貯蔵穴)南壁下、東に偏って位置する。40×50cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。貯蔵穴北側に高さ1~2cm・幅25~35cmの凸堤が構築される。



第133図 227号住居跡(1/60)



第134図 床硬化面

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 11層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕床面上から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉。

227号住居跡出土遺物 (第135・136図)

壺形土器 (4～6)

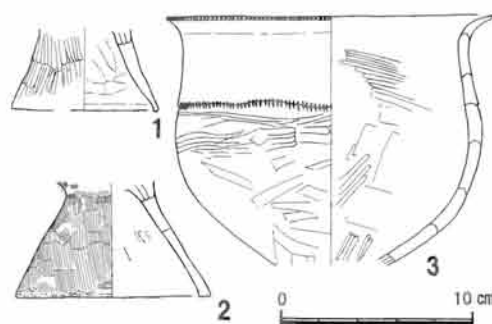
4は複合口縁部破片。口唇部はナデられ平坦である。口縁部外面には棒状浮文が貼付される。内面はハケメ調整後ヘラミガキされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土には砂粒、細礫、橙色粒子を含む。

5・6は肩部破片。5はLRの単節斜縄文が施され、縄文帯下には2条のS字状結節文がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。6はRLの単節斜縄文を羽状に施す。縄文帯以外はヘラミガキされる。内面はヘラナデ。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。

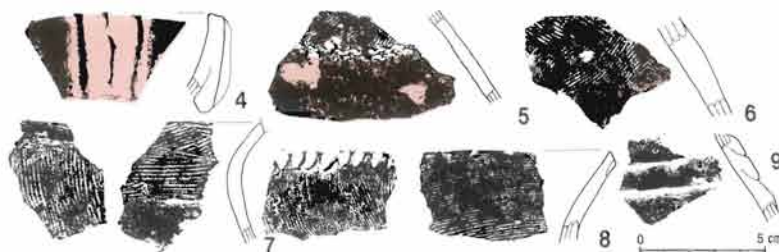
いずれも覆土中の出土である。

高环形土器 (1)

脚台部1/2程度が遺存する。裾径7.5cmを測る。外面はハケメ調整後ヘラミガキされる。内面はヘラナデ。色調はにぶい赤褐色 (10YR4/6) を呈し、外面は赤彩される。胎土は細礫、白色粒子を含むが細かく堅緻である。覆土中の出土である。



第135図 227号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第136図 227号住居跡出土遺物 2 (1/3)

甕形土器（2・3・7～9）

2は台付甕形土器。脚台部のみ遺存する。裾径10.5cmを測る。やや直線的に「ハ」字状に開く。外面はヘラナデされるが、縦方向のハケメ痕を残す。内面はヘラナデされ、その際の工具痕を残す。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。体部には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。3は体部下半以下を欠損する。最大径を口縁部にもち、口径17cmを測る。あまり張りをもちない体部から頸部は直線的に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部には先端の尖った工具で浅く刺突された刻みが一周する。体部中位よりやや上に1段の輪積痕を明瞭に残し、その下端には同じ工具で刺突した刻みが加えられる。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はハケメ調整後丁寧にヘラナデされるが、その際の工具痕を残す。体部中位横方向、下位斜方向に粗いヘラミガキが施される。色調はにぶい橙色（5YR7/4）を呈する。外面体部上半には煤の付着が顕著である。内面体部下位には炭化物がこびりつく。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。西側コーナー床面上の出土である。

7・8は口頸部破片。7は口唇部ヨコナデ。8は口唇部にハケ状工具で右方向から刺突した刻みが施される。ともに内外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色（10YR3/2）を呈する。8の外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。いずれも覆土中の出土。

9は輪積痕を残す頸部破片である。外面はナデられるがハケメ痕を残す。輪積痕には指で押さえつけた跡が2段とも明瞭に残る。色調は黒褐色（10YR3/1）を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

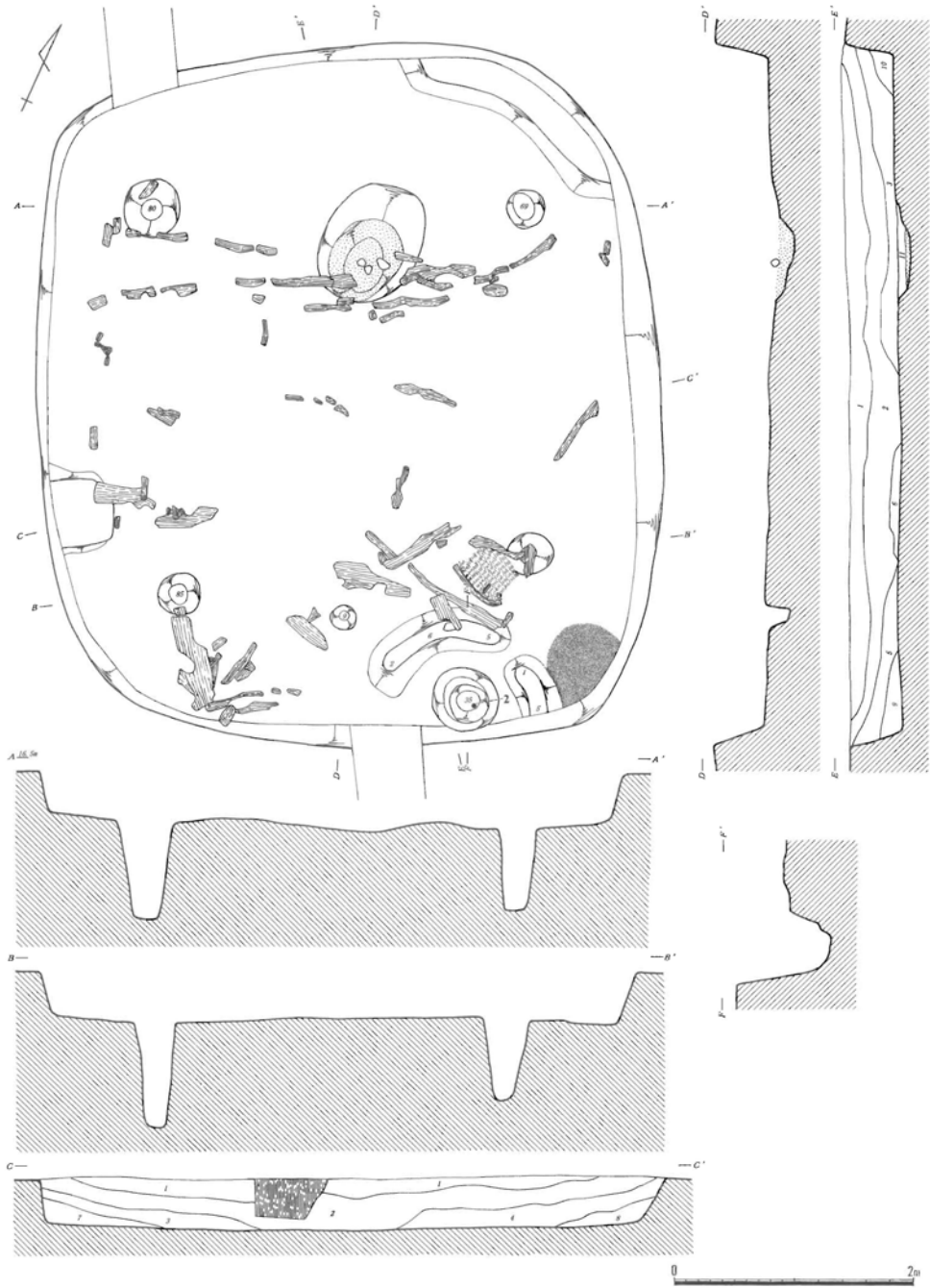
228号住居跡（第137・138図）

〔位置〕 E-2 G。

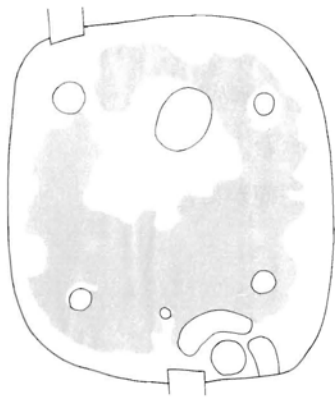
〔住居構造〕 壁の一部が破壊されている。（平面形）楕円形。（規模）580×520cm。（主軸方向）N-28°-W。（壁高）37～43cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。北側コーナーと西壁下の一部にロームを掘り残しテラス状に作出している。（炉）住居中央から北に偏って位置する。200×180cmの楕円形を呈する地床炉で深さ15cmを測る。炉の中央には礫が配されている。（柱穴）各コーナーに支柱穴が4本検出された。南壁際の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下、東に偏って位置する。径50cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。2重構造になっている。貯蔵穴北側と東側に高さ1～6cm・幅35～40cmの凸堤が構築される。

〔覆土〕

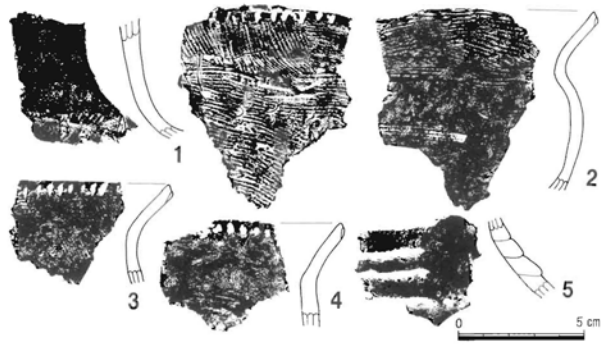
- 1層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子、炭化物粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 3層 暗褐色土（7.5YR3/4）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 4層 ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。
- 5層 ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 6層 炭化材。
- 7層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 ローム粒子を僅かに含む。
- 10層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。



第137图 228号住居跡 (1/60)



第138号 床硬化面



第139图 228号住居跡出土遺物 (1/3)

11層 赤褐色土 (5YR4/6)。焼土粒子を多く含む。

(4・5・8・9層は浸透した廃油の影響のため土色の判断は不可能であった。)

なお、東側コーナーに厚さ4cm前後の暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。床面上に炭化材とワラ?が多量に検出される。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕 覆土中に焼土粒子、炭化物粒子を多く含み、床面に多量の炭化材と焼土が検出された。焼失住居の可能性が大きい。

228号住居跡出土遺物 (第139図)

壺形土器 (1)

頸部から肩部にかけての破片。肩部にはLRの単節斜縄文が施される。縄文帯以外はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中の出土である。

甕形土器 (2～5)

2～4は口頸部破片。2はヘラ状工具で刺突した刻みがめぐる。3は板状の工具でやや左から浅く刻まれる。4は先端に丸みのある工具で刺突した刻みが施される。いずれもヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は2がにぶい赤褐色 (2.5YR5/4)、3がオリーブ黒 (7.5YR3/1)、4がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土にはいずれも砂粒、細礫を含む。3は橙色粒子、4は軽石と思われる白色粒子も含む。3は貯蔵穴、4・5は覆土中の出土である。

5は輪積痕を残す頸部破片。3段の輪積痕が確認できるが、一部磨消されている。色調は褐灰色 (10YR4/1) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

229号住居跡 (第140・141図)

〔位置〕 D-2G。

〔住居構造〕 壁・床面の一部が破壊されている。(平面形) 楕円形。(規模) 440×420cm。(主軸方向) N-48°-W。(壁高) 22～37cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 上幅16～23cm・下幅5～10cm・深さ6～11cmを測り全周する。(床面) 一部硬化しているが全体に軟弱。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。40×30cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。西壁下の1本は入口施設かと思われる。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・ブロックを僅かに含む。

2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを含む。

3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。

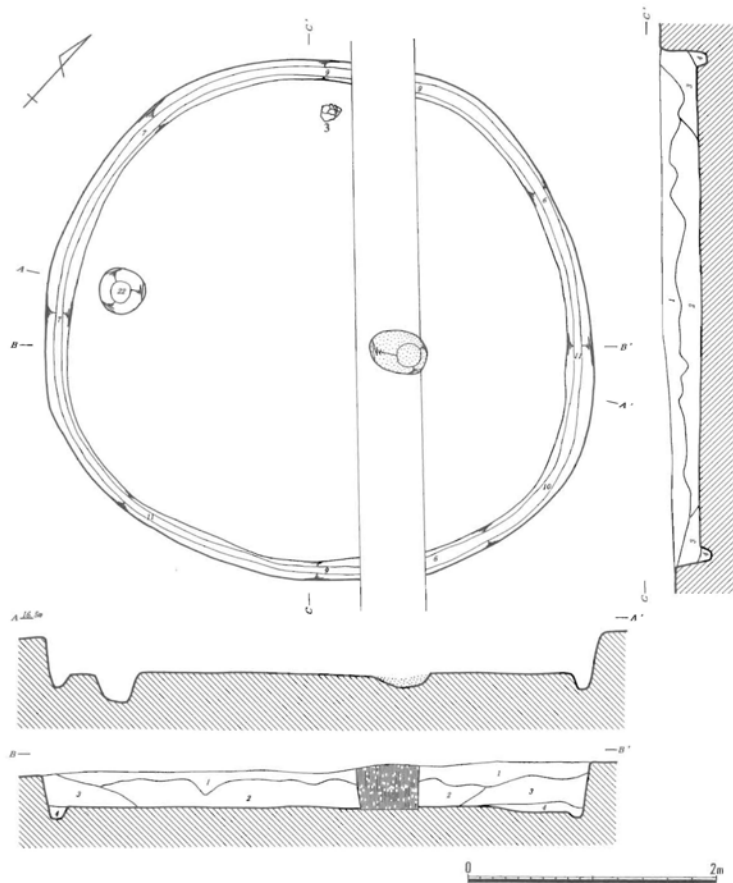
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

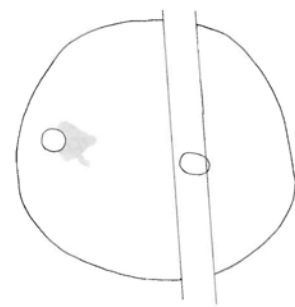
229号住居跡出土遺物 (第142図)

甕形土器 (1～3)

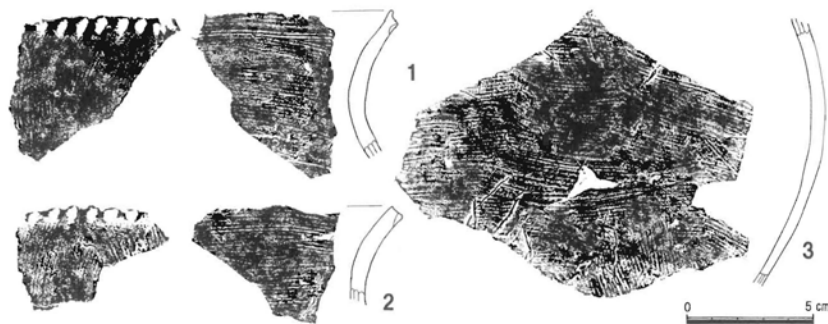
1・2は口頸部破片。口唇部にはハケ状工具でやや左方向から刺突した刻みがめぐる。器面はヘラナ



第140図 229号住居跡 (1/60)



第141図 硬化面



第142図 229号住居跡出土遺物 (1/3)

デされるがハケメ痕を残す。色調は1が褐色 (7.5YR4/3)、2がオリーブ黒 (5YR3/1) を呈する。2は外面に僅かに煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる灰白・橙色粒子を含む。いずれも覆土中の出土。

3は体部破片。器面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土にはいずれも砂粒、細礫、灰白・橙色粒子を含む。

北西壁際床面上からの出土である。

230号住居跡 (第143図)

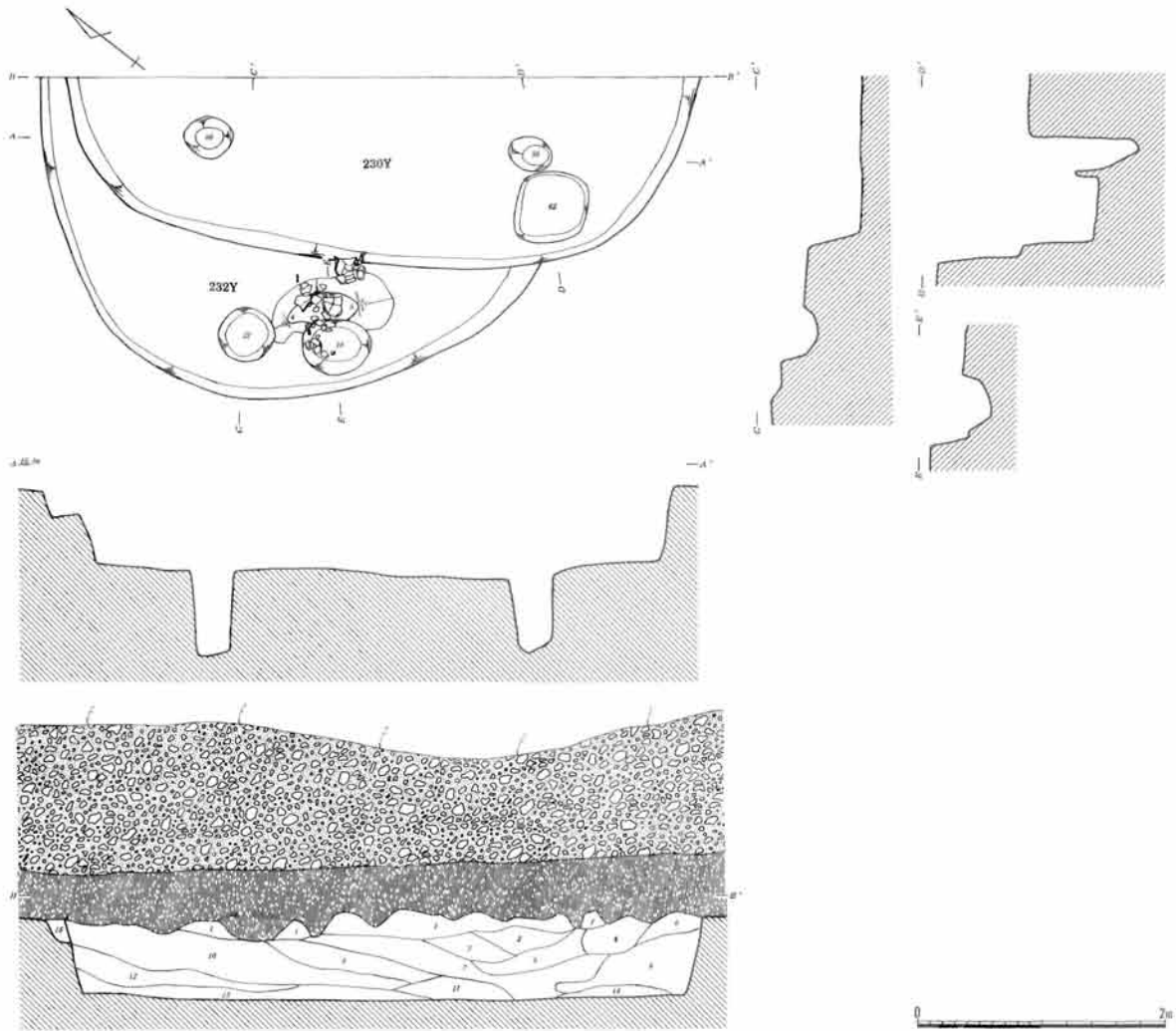
〔位置〕 D-1 G。

〔住居構造〕 北東側は調査区外。232号住居跡を切る。(平面形) 不明。(規模) 不明×500cm。(主軸方

向) N-54°-E。(壁高) 60~75cm。(床面) 軟弱。(炉) 調査区外にあらう。(柱穴) 各コーナーに2本検出された。(貯蔵穴) 南側コーナーに位置する。一辺50cmの正方形を呈し、深さ62cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・ブロックを含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。



第143図 230・232号住居跡 (1/60)



第144号 230号住居跡出土遺物 (1/3)

- 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 11層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 12層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子・焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 13層 黒色土 (7.5YR1.7/1)。ロームブロックを含む。
- 14層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 15層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子を含む。232号住居跡覆土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

230号住居跡出土遺物 (第144図)

壺形土器 (1)

複合口縁部破片。口唇部はヨコナデされる。外面はヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈する。口唇部には僅かに赤彩の跡が残る。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中の出土である。

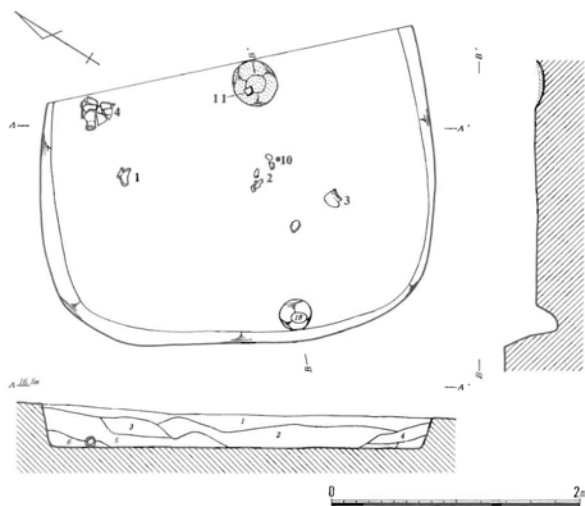
甕形土器 (2・3)

ともに体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は2がにぶい赤褐色 (2.5YR4/4)、3がにぶい褐色 (7.5YR3/1) を呈する。いずれも胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。ともに覆土中の出土である。

231号住居跡 (第145図)

〔位置〕 C-1 G。

〔住居構造〕 北東側は調査区外。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×320cm。(主軸方向) N-47°-E。(壁高) 24~33cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱。(炉) 住居中央から北東側に偏って位置する。不明×40cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。(柱穴) 西壁際下に位置する1本は入口施設と思われる。



第145図 231号住居跡 (1/60)

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を部分的に含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。

5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。

6層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

7層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕床面上から比較的多く出土した。

〔時期〕弥生時代末葉。

231号住居跡出土遺物 (第146・147図)

壺形土器 (1・2・5～8)

1は体部上半と口縁部1/2程度が遺存する。口径9cmを測る。球状を呈すると思われる体部から頸部でくびれ、内湾ぎみに僅かに開く口縁部は短い。肩部にはLRの単節縄文の閉端部を少し折り曲げた原体を回転施文している。口唇部の平坦面にも縄文が施されている。外面は縦方向にヘラミガキされるが僅かにハケメ痕を残す。内面口縁部は横方向にヘラミガキされるがハケメ痕を僅かに残す。頸部以下は剥離が著しく確認が困難であるが、ヘラナデされると思われる。輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。外面は縄文帯以外、内面は口頸部が赤彩される。縄文帯内には円形赤彩文が施される。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含むが細かく堅緻である。床面上の出土。

2は口縁部2/3程度が遺存する。口径13.1cmを測る。頸部からゆるやかに外反する器形である。内面横方向、外面縦方向に丁寧なヘラミガキされるが、部分的にハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土は1mm大の細礫を含むが精選されきめ細かく堅緻である。床面上の出土である。

5は複合口縁部破片。口縁部外面にRLの単節斜縄文を施し、内面は横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には細礫を含む。覆土中の出土である。

6は口縁部破片。口唇端部と口縁部内面にはLRの単節斜縄文が施される。外面は縦方向にヘラミガキされる。内面は縄文帯以下が横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土は橙色粒子を含むが細かく堅緻である。覆土中の出土である。

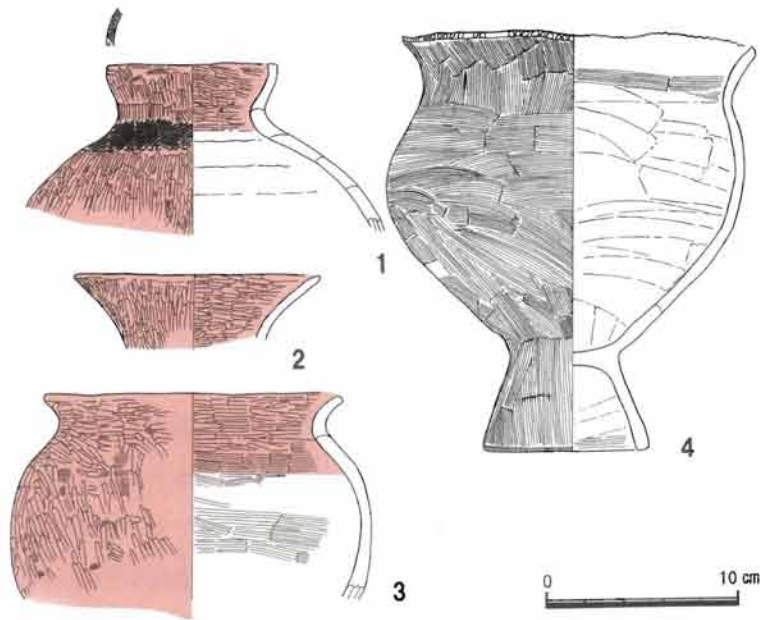
7・8は肩部破片。7は外面にRの無節斜縄文が施され、以下ヘラミガキされる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。縄文帯内に円形赤彩文がみられる。胎土には細礫、白色粒子を含む。8は外面にLRの単節斜縄文を羽状に施し、境目にはS字状結節文を施文している。内面はヘラナデされる。色調はにぶい黄褐色 (10YR3/1) を呈する。胎土は精製されているが細礫を含む。ともに覆土中の出土である。

鉢形土器 (3)

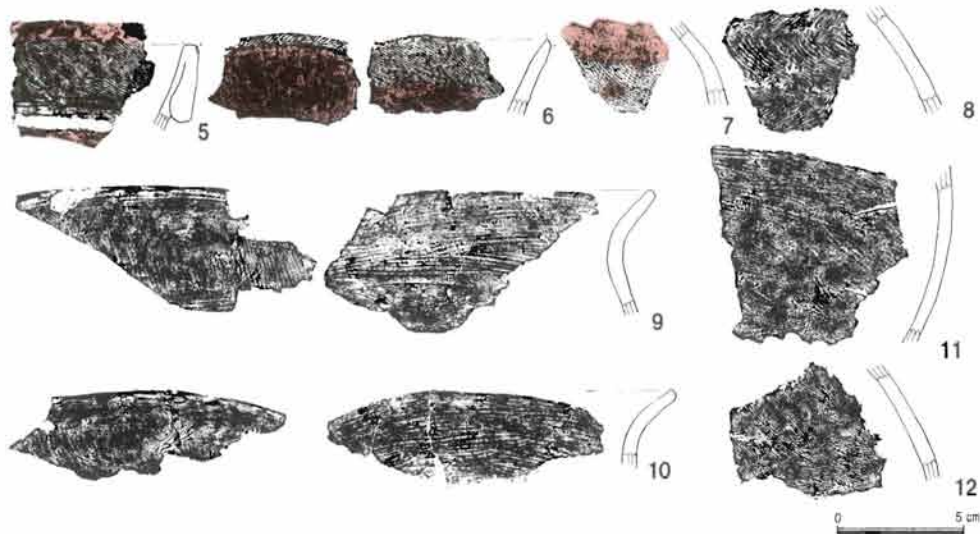
体部中位以上が1/4程度遺存する。推定口径15.5cmを測るが確実性に欠ける。球状を呈する体部から頸部が強くくびれ口縁部は外反する。外面は口縁部横方向、体部縦方向にヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。内面口縁部はハケメ調整後、横方向にヘラミガキされる。頸部以下はヘラナデされるが、横方向のハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、外面及び内面口頸部は赤彩される。器面は斑点状の剥離が顕著である。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白・黄橙色粒子を多く含むが細かく堅緻である。床面上の出土である。

甕形土器 (4・9～12)

4はやや小型の台付甕形土器でほぼ完形。口径18.7cm・裾径8.4cm・器高22cmを測る。体部は最大径



第146図 231号住居跡出土遺物1 (1/4)



第147図 231号住居跡出土遺物2 (1/3)

を中位にもちやや偏球状を呈する。口頸部はゆるやかに外湾する。口唇部には浅く刺突された刻みが一周する。脚台部はほぼ直線的に開く。外面はヘラナデされるが、口縁部縦方向、体部中位横方向、体部下位斜方向のハケメ痕を残す。内面はヘラナデされるが、頸部付近と脚台部にはハケメ痕を残す。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。甕部外面には煤が付着する。胎土は砂粒、細礫、橙色粒子を含み粗い。床面上の出土である。

9・10は口頸部破片で同一個体か。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。口唇部はヨコナデされる。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。胎土には細礫、橙色粒子を含む。床面上の出土である。

11・12は体部破片。いずれも外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデ。色調はともに黒褐色(10YR3/1)を呈する。胎土には11が砂粒、細礫、橙色粒子を多く、12が砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土である。

232号住居跡（第143図）

〔位置〕 D-1 G。

〔住居構造〕 北西側は調査区外。230号住居跡に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（壁高）27～29cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）壁際を除き硬化している。（炉）230号住居跡に破壊されたと思われる。（柱穴）支柱穴は不明。西壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）西壁下に偏って位置する。径55cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。貯蔵穴東側に、高さ4～5cm・幅20～40cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子、焼土粒子を含む。

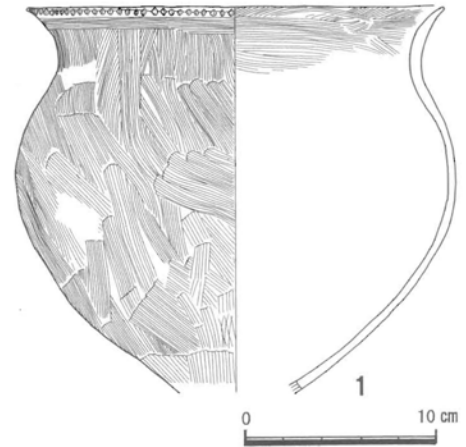
〔遺物〕 凸堤の上部から出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

232号住居跡出土遺物（第148図）

甕形土器

台付甕形土器で脚台部を欠損する。口径22cmを測る。体部は最大径を中位にもつ球状を呈し、頸部は弱くくびれ口縁部は外反する。口唇部には先端の丸い棒状工具で刺突した刻みが一周する。外面はヘラナデされるが、口縁部横方向、頸部以下斜方向のハケメ痕を残す。内面口縁部はヘラナデされるが、横方向のハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされるが、斑点状の剥離が顕著である。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。全体に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる浅黄橙色粒子を含み、特に砂粒が多くみられる。凸堤上から出土。



第148図 232号住居跡出土遺物（1/4）

233号住居跡（第114図）

〔位置〕 C-3 G。

〔住居構造〕 218号住居跡によって中央部が破壊されている。（平面形）隅丸長方形。（規模）620×510cm。（主軸方向）N-55°-E。（壁高）16～31cmを測り、垂直に立ち上がる。（床面）全体に軟弱である。（炉）218号住居跡に破壊されたと思われる。（柱穴）検出されなかった。

〔覆土〕

17層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。

18層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。

19層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子・ブロックを多く含む。

20層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。

21層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

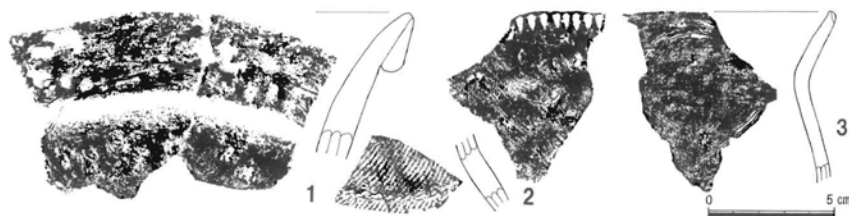
22層 黒褐色土（10YR2/3）。ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

233号住居跡出土遺物（第149図）

壺形土器（1・2）



第149図 233号住居跡出土遺物 (1/3)

1は口頸部破片。複合口縁部下端にはハケ状工具で刻みが加えられる。外面はハケメ調整後、ヘラミガキもしくはヘラナデされるが、器面の荒れが著しく確認困難である。内面は横方向のヘラミガキ。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、内面は赤彩されているのが確認されるが外面は不明。胎土は砂粒、細礫、輝石、軽石と思われる白色粒子を多く含む粗い。

2は肩部破片。端末結節したLRの単節斜縄文が2段施される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒、白色粒子を含む。

ともに覆土中の出土である。

甕形土器(3)

口頸部破片。口唇部にはヘラ状工具でやや左方向から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

234号住居跡(第150・151図)

〔位置〕D-2G。

〔住居構造〕235号住居跡を切る。(平面形)隅丸長方形。(規模)640×510cm。(主軸方向)N-54°-E。(壁高)17~27cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉)住居中央から東に偏って位置する。径50cmの円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴)各コーナーの4本が支柱穴になろう。北西コーナーを除き他の3本は柱穴が重複する。西壁下、東に偏って位置する小ピットは入口施設かと思われる。(貯蔵穴)西壁下、南に偏って位置する。50×40cmの楕円形を呈し、深さ60cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土(7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 7層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 9層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ロームブロックを多く含む。貼床。

〔遺物〕床面上から多量に出土した。



第150図 234・235号住居跡 (1/60)

〔時期〕古墳時代初頭。

234号住居跡出土遺物 (第152・153図)

壺形土器 (1～5・10～16)

1は複合口縁の土器で、口径16.6cmを測る。口頸部は大きく外湾する。外面は口縁部横方向、頸部は縦方向にヘラミガキされるが、ハケメ痕を僅かに残す。内面は口頸部は横方向にミガかれ、以下ヘラナ

デ。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土は砂粒、細礫、黄橙色粒子を含むが細かく堅緻である。炉跡横の床面上の出土である。

2は口径18.8cmの複合口縁の土器で口頸部のみ遺存する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部はラッパ状に開く。外面はハケメ調整後、口縁部横方向、以下縦方向、内面は口頸部上位縦方向、下位横方向に丁寧にヘラミガキされ光沢をおびる。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。胎土は砂粒、細礫、橙色粒子を含むが細かく堅緻である。炉跡横の床面上の出土である。

3は肩部以上が遺存する。口径18cmを測る。肩部は張りをもち頸部はやや「く」字状に屈曲し、僅かに外湾しながら開く。口唇部はヨコナデ。外面は縦方向の粗いハケメ痕を残す。内面口頸部はヘラナデされるが横方向の粗いハケメ痕が残る。頸部以下はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。床面上の出土。

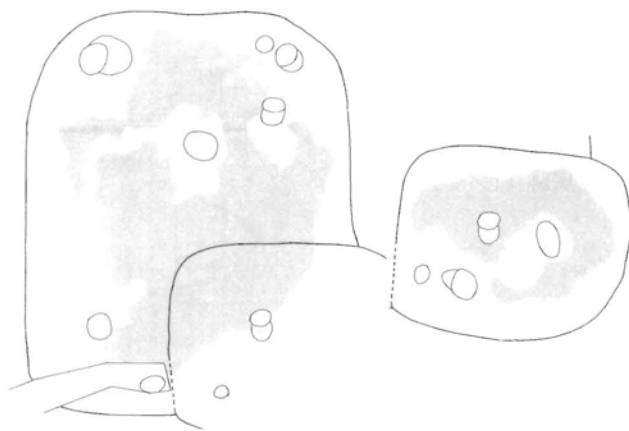
4は口径11.5cmを測り、口頸部のみ遺存する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直立ぎみに開く。肩部には5個の円形浮文が貼付される。口唇部はヨコナデ。外面はハケメ調整後、縦方向にヘラミガキされる。内面はハケメ調整後ナデられる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。南コーナー床面上の出土である。

5は口縁部と底部を欠損する。体部は下位に最大径をもち玉葱状を呈する。頸部は「く」字状にくびれて口縁部は内湾ぎみに開く。内外面ともに摩耗が激しい。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には砂粒、細礫、橙色粒子を含む。炉跡横の床面上の出土である。

10～13は口頸部破片。10は複合口縁部外面にL Rの単節斜縄文が施され、下端にはハケ状工具による刻みが加えられる。縄文帯以外はハケメ調整後、外面縦方向、内面横方向に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白・橙色粒子を含む。北西壁際床面上の出土。11は複合口縁部外面にR Lの単節斜縄文を羽状に施し、棒状浮文が貼付される。下端にはハケ状工具で刻みが加えられる。口唇端部にも縄文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白・橙色粒子を含む。覆土中の出土。12は口唇部ヨコナデ。外面はハケメ調整後ヘラミガキが施される。内面はヘラナデされるが、横方向のハケメ痕を残す。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、外面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、白色粒子を含むが細かい。覆土中の出土。13は複合口縁部外面にR Lの単節斜縄文が施され、縦位の集合する沈線が加えられる。内面は横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）

を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、白色粒子を含むが細かい。239号住居跡3の土器と同一個体と思われる。覆土中の出土である。

14～16は肩部破片。14はR Lの単節斜縄文を施し、下端にはS字状結節文がみられる。以下はヘラミガキされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は暗灰黄色（2.5YR4/2）を呈する。ハケメ痕の中に赤色顔料の痕跡がみられ、赤彩された可能性がある。胎土には砂粒、細礫、白・黄橙色粒子を含む。



第151図 床硬化面

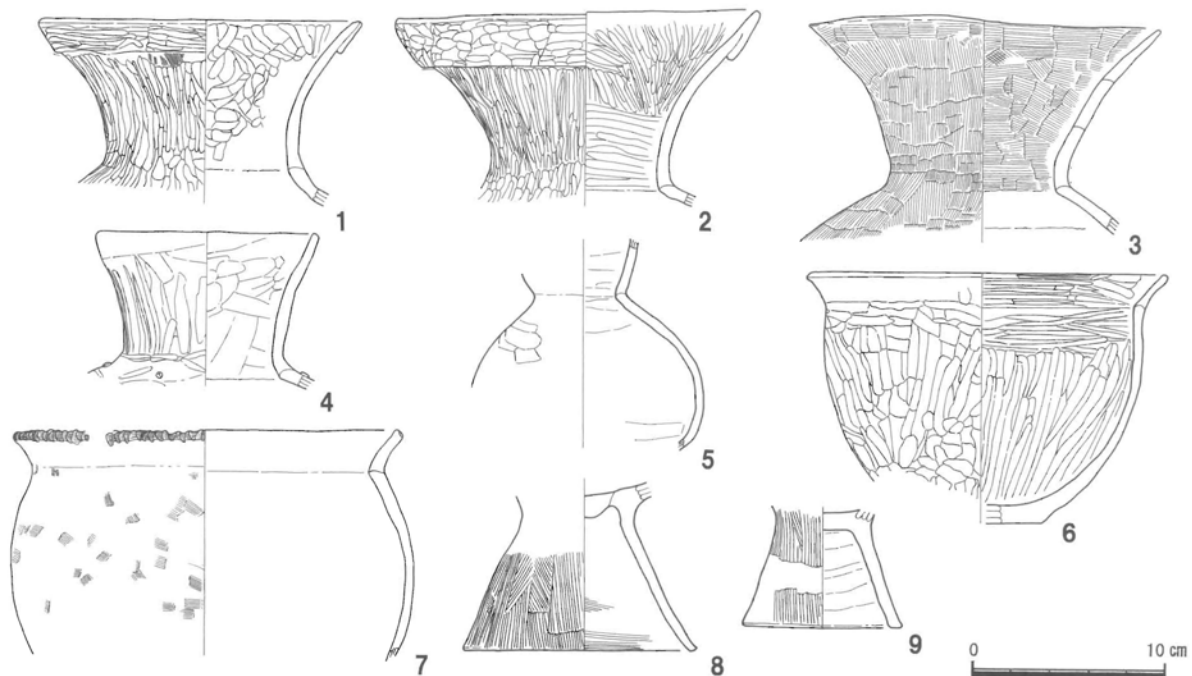
15は外面には端末処理されたLRの単節斜縄文が施され、内面は丁寧にヘラミガキされる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白・黄橙色粒子を含む。16は外面にRの無節斜縄文が施され、以下ヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/2)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含む。ともに覆土中からの出土。

鉢形土器(6)

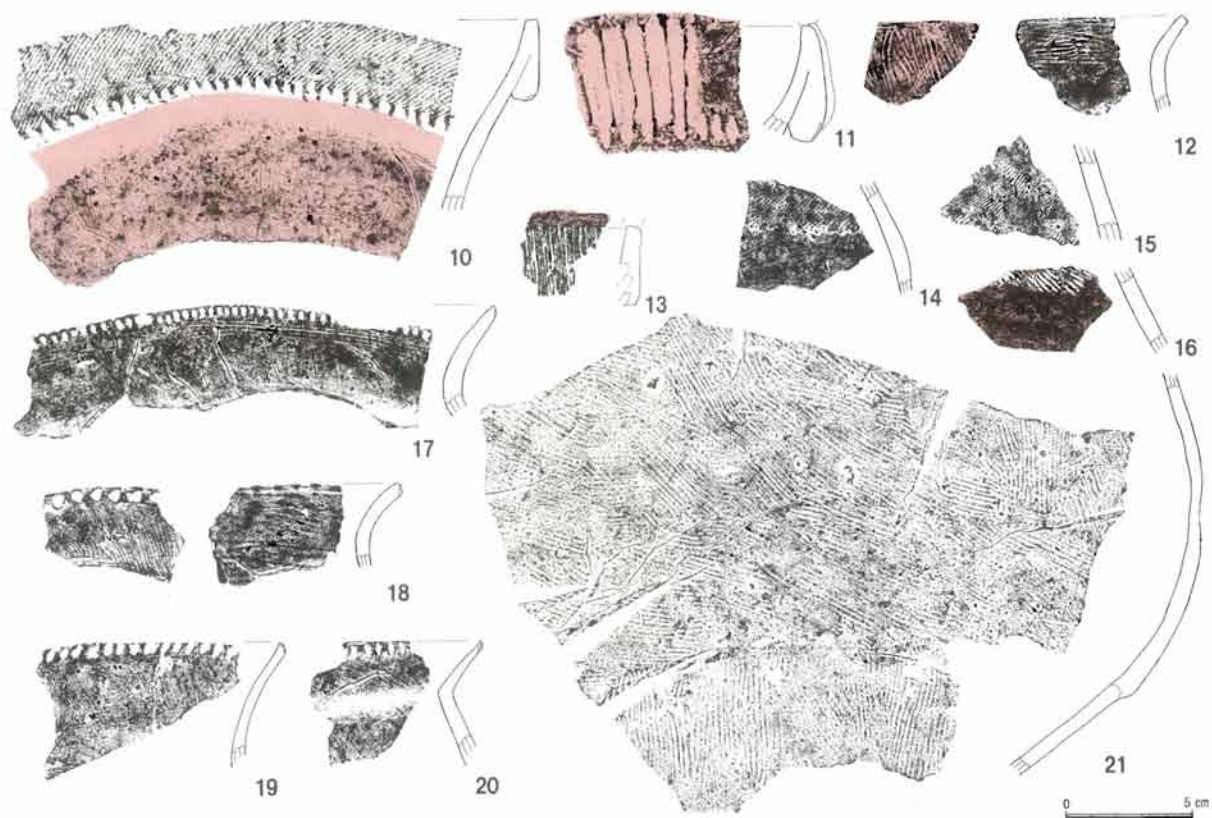
底部の一部を欠損する。口径18.3cm・底径6.2cm・器高13.3cmを測る。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は横方向にナデられる。外面は口縁部横方向のナデ、頸部以下はハケメ調整後、丁寧にヘラミガキされ光沢をおびる。内面は口頸部横方向、以下縦方向にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈する。体部には焼成時についたと思われる黒斑がみられる。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる橙色粒子を含むが細かく堅緻である。南コーナー床面上の出土である。

甕形土器(7~9・17~21)

7~9は台付甕形土器。7は甕部上半2/3が遺存する。口径20.5cmを測る。最大径は口縁部と体部が拮抗する。頸部はやや「く」字状に屈曲し、口縁部は僅かに外湾して開く。口唇部は左方向からヘラ状工具で刺突した刻みが一周する。外面はヘラナデされるが僅かにハケメ痕を残す。内面は横方向にヘラナデされるが、器面の荒れが顕著である。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。煤が僅かに付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。南コーナー床面上の出土である。8は脚台部のみ遺存。裾径11.9cmを測る。裾部に向けて「ハ」字状に開く器形で、天井部に突起のついた粘土板を挿入していて、成形方法のよくわかる土器である。内外面ともにヘラナデされるが外面縦方向、内面横方向のハケメ痕を残す。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈する。甕部内面には炭化物が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。床面上の出土である。9も脚台部のみ。裾径8.2cmで裾部に向けてやや直線的に開く。脚台部外面はヘラナデされるが縦方向のハケメ痕を残す。内面は横方向にナデられる。甕部内面は摩耗が著しく不明。色



第152図 234号住居跡出土遺物1 (1/4)



第153図 234号住居跡出土遺物2 (1/3)

調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を多く含む。床面上の出土である。17~20は口頸部破片。17は口唇部に先端に丸みのある工具で浅く細かく刺突した刻みがめぐる。内外面ともにヘラナデされる。色調は明赤褐色 (5YR5/6) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。南コーナー床面上の出土。18は口唇部に丸みのある工具でやや左方向から刺突した刻みがめぐる。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は黄灰色 (2.5YR4/1) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。19は棒状の工具で刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。南コーナー床面上の出土。20は口唇部に鋭いヘラ状工具でやや右方向から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。南コーナー床面上の出土。

21は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデ。色調は褐色 (7.5YR4/3) を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。西コーナー床面上の出土。

235号住居跡 (第150図)

〔位置〕 D-2 G。

〔住居構造〕 234号住居跡に切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 370×300cm。(主軸方向) N-35°-W。(壁高) 22~29cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 全体に厚さ4cmの貼床を施してあり、床面はよく硬化している。(炉) 住居中央から南東に偏って位置する。60×30cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子、焼土粒子を多く含む。

11層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。

12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

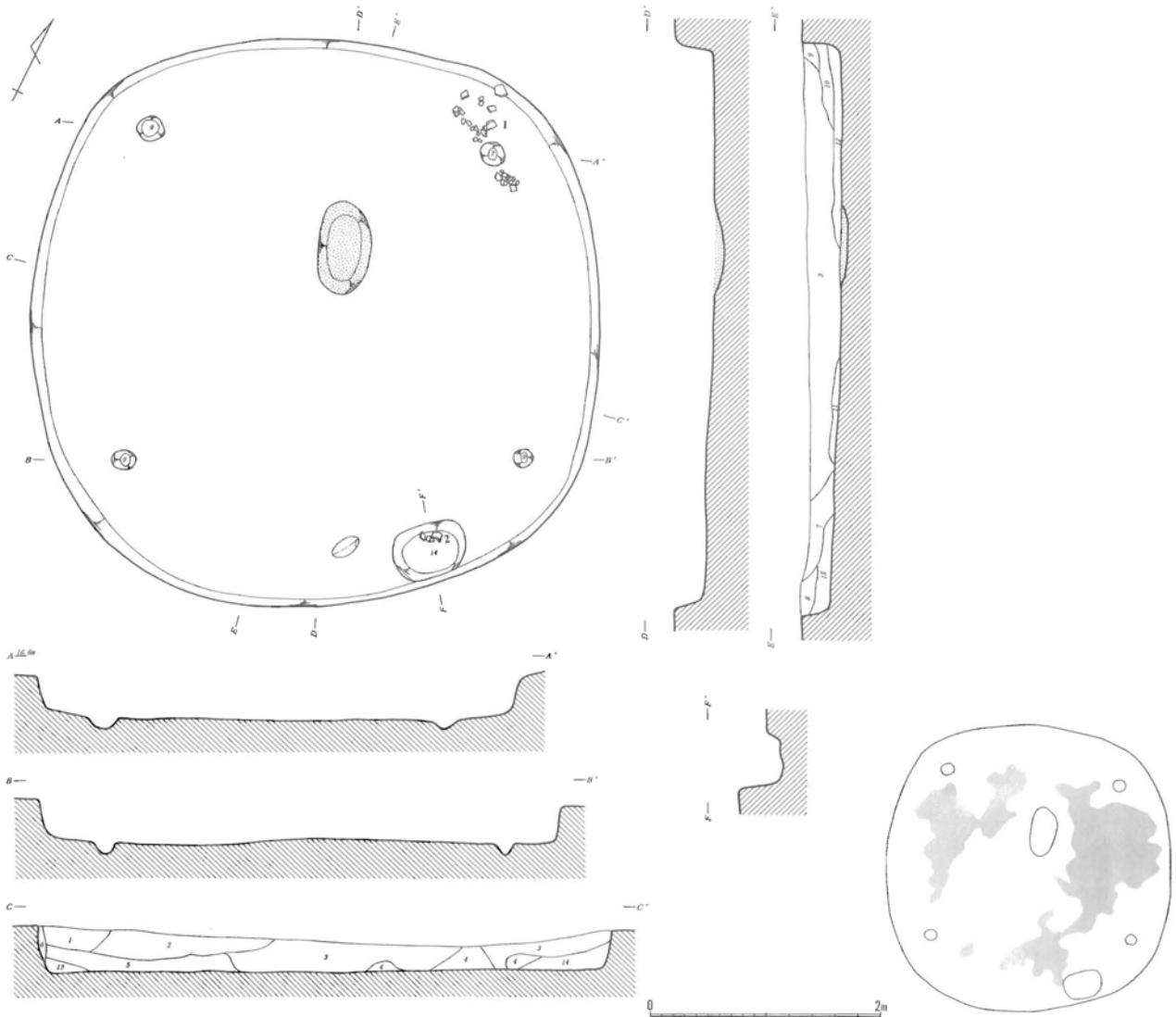
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

236号住居跡 (第154・155図)

〔位置〕 C-1 G。

〔住居構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 500×490cm。(主軸方向) N-10°-W。(壁高) 24~40cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 住居東側と西側の一部分がよく硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。80×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴になろう。(貯蔵穴) 南壁下、東に偏って位置する。48×60cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。



第154図 236号住居跡 (1/60)

第155図 床硬化面

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロック、炭化物粒子を含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 12層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子、炭化物粒子を含む。
- 15層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 床面上と貯蔵穴内から破片が僅かに出土した。

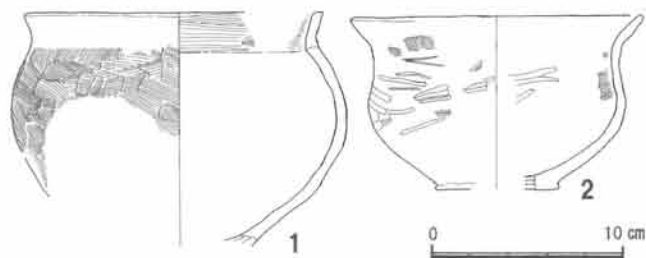
〔時期〕 古墳時代初頭。

236号住居跡出土遺物 (第156・157図)

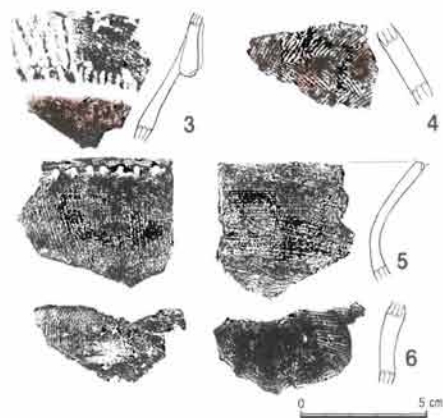
壺形土器 (3・4)

3は口頸部破片。複合口縁部外面に単軸絡条体第5類による撚糸文が施され、棒状浮文が貼付される。下端にはヘラ状工具による刻みを加えられる。頸部外面及び内面はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、縄文帯以外は赤彩される。胎土には細礫、白色粒子、軽石と思われる灰白色粒子を含む。

4は肩部破片。RLの単節斜縄文を羽状に3段施している。縄文帯内には円形赤彩文がみられる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈する。胎土には細礫、白色粒子、軽石と思われる灰白・橙色粒子を含む。



第156図 236号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第157図 236号住居跡出土遺物 2 (1/3)

ともに覆土中の出土である。

鉢形土器（2）

1/3程度遺存する。口径15.4cm・底径6.5cm・器高9.2cmを測る。最大径を口縁部にもつ。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部は直立ぎみで口縁部は外反する。口唇部はやや平坦にナデられる。内外面ともにヘラナデされるが僅かにハケメ痕を残す。一部に横方向のヘラミガキがみられる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる黄橙色粒子を含む。貯蔵穴からの出土。

甕形土器（1・5・6）

1はやや小型の台付甕形土器。甕部1/2程度が遺存する。口径15.3cmを測る。球状の体部から頸部でくびれ、口縁部は直立ぎみに立ち上がり僅かに開く。口唇部は平坦にナデられる。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面口縁部はヘラナデされるが横方向のハケメ痕を残す。頸部以下は横方向にナデられるが摩耗が顕著である。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。全面に煤が付着し、特に上半部に顕著である。胎土には砂粒、細礫を含む。北側ピットそば床面上の出土である。

5は口頸部破片。口唇部には左方向から浅く刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は灰褐色（10YR4/2）を呈する。胎土に砂粒、白色粒子を多く含む。覆土中の出土である。

6は頸部破片。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土は砂粒、細礫、橙色粒子を含み粗い。覆土中の出土である。

237号住居跡（第66図）

〔位置〕 A-4 G。

〔住居構造〕 202・203号住居跡、17号方形周溝墓に大きく切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（壁高）24～30cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）全体に軟弱。（炉）不明。

〔覆土〕 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

238号住居跡（第158・159図）

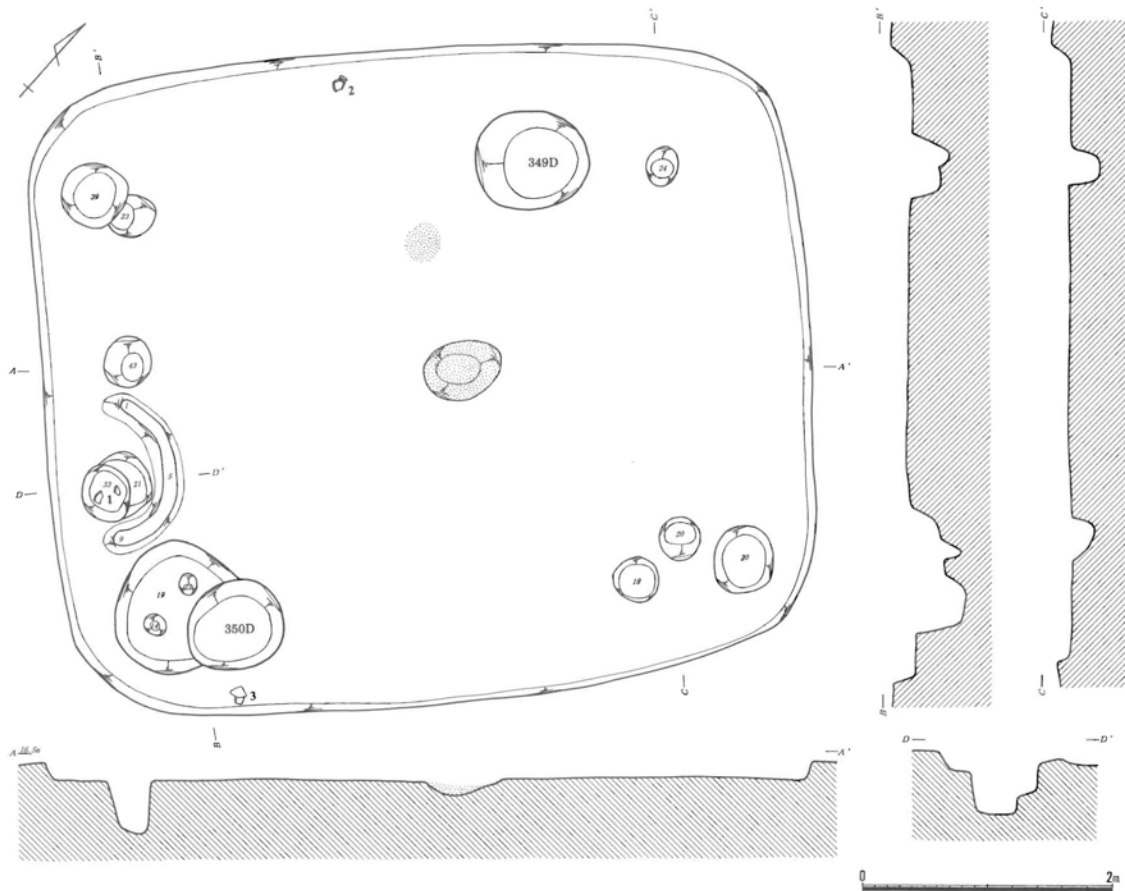
〔位置〕 C-1 G。

〔住居構造〕 住居内349・350号土坑に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）700×520cm。（主軸方向）N-48°-E。（壁高）13～17cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（床面）貯蔵穴東側と炉の東側の一部が硬化している。（炉）住居中央から東に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴になろう。南西壁下に位置する1本は入口施設かと思われる。（貯蔵穴）南西壁下、やや南に偏って位置する。46×40cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。貯蔵穴東側に高さ1～9cm・幅22～25cmの凸堤が弧状に構築されている。

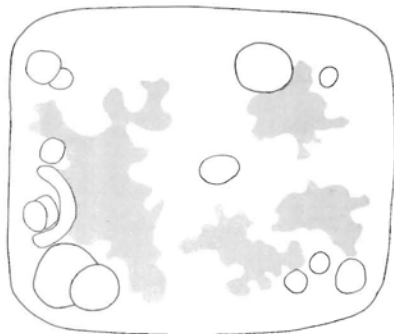
〔覆土〕 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 床面上と貯蔵穴から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。



第158図 238号住居跡 (1/60)



第159図 床硬化面

238号住居跡出土遺物 (第160・161図)

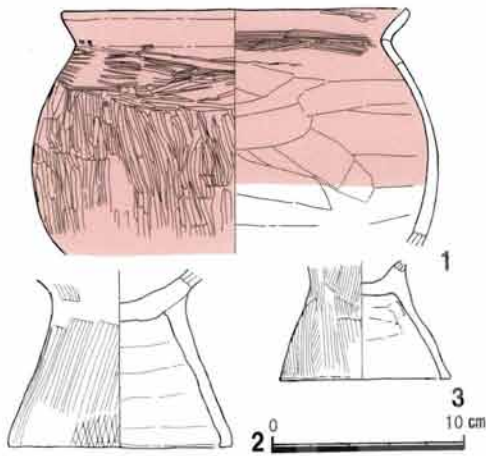
壺形土器 (4~9)

4は口頸部破片。短い複合口縁部の外面にはヘラで押さえつけた痕が残る。口縁部を除き、内外面ともにハケメ調整後ヘラミガキされたと思われるが、摩耗が著しく確認困難である。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土。

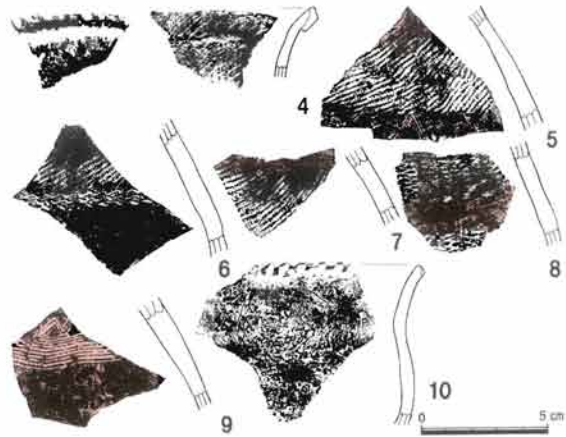
5・6は肩部破片。5はLRの単節斜縄文が施され、下位には鋸歯文がみられる。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、縄文帯以外と鋸歯文内は赤彩される。胎土には砂粒を含む。6はLRの単節斜縄文を施し、下位には3条のS字状結節文がみられる。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデされる。色調は暗赤褐色 (5YR3/2) を呈し、外面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。ともに覆土中の出土。

7は頸部から肩部にかけての破片。肩部にはLRの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫、橙色粒子を含む。覆土中の出土である。

8・9は肩部破片。8は単軸絡条体第5類による網目状撚糸文が施される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、無文部は赤彩される。9は9本を1単位とする櫛歯状工具による波状文が、下位には横線文が施される。以下ヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を



第160図 238号住居跡出土遺物1 (1/4)



第161図 238号住居跡出土遺物2 (1/3)

呈する。外面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる灰白色粒子を含む。ともに覆土中の出土である。

鉢形土器 (1)

口縁部と体部の一部が遺存する。最大径を体部中位にもち、球状を呈すると思われる体部から頸部はやや「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部はヨコナデされ丸みをおびる。外面は体部上位以上横方向、以下縦方向にヘラミガキされるが、僅かにハケメ痕を残す。内面口縁部は横方向にナデられるがハケメ痕を残す。上部に僅かに横方向のヘラミガキがみられる。頸部以下は横方向にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土は砂粒、細礫、浅黄橙色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。貯蔵穴からの出土である。

甕形土器 (2・3・10)

2・3は台付甕形土器の脚台部。2は裾径11.6cmを測る。直線的に開く器形で、甕部と別に作り成形している様子が観察できる。外面はヘラナデされるが縦方向の粗いハケメ痕を残す。内面は丁寧にヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。北西壁際の床面上の出土。3は裾径8.9cmで直線的に開く。甕部を接合した際のくぼみがみられる。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。外面には一部煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、白・橙色粒子を含む。南側コーナー床面上の出土。

10は口頸部破片。口唇部には先端に丸みのある工具で刺突された刻みがめぐる。内外面ともにヘラナデされる。色調は黒褐色 (2.5YR3/1) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

239号住居跡 (第162・163図)

〔位置〕 B-2 G。

〔住居構造〕 壁際が一部破壊されている。(平面形) 楕円形。(規模) 400×380cm。(主軸方向) N-62°-E。(壁高) 32~38cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 住居壁際と炉の周辺を除き、部分的に硬化している。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。65×40cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴になろう。西側に位置する1本は、住居内側に傾斜をもって穿たれていて、梯子穴を想定させる。(貯蔵穴) 西壁下、やや南に偏って位置する。30×40cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。貯蔵穴東側に高さ1~3cm・幅20~30cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子、炭化物粒子・小片を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子、炭化物粒子を含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 床面上から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

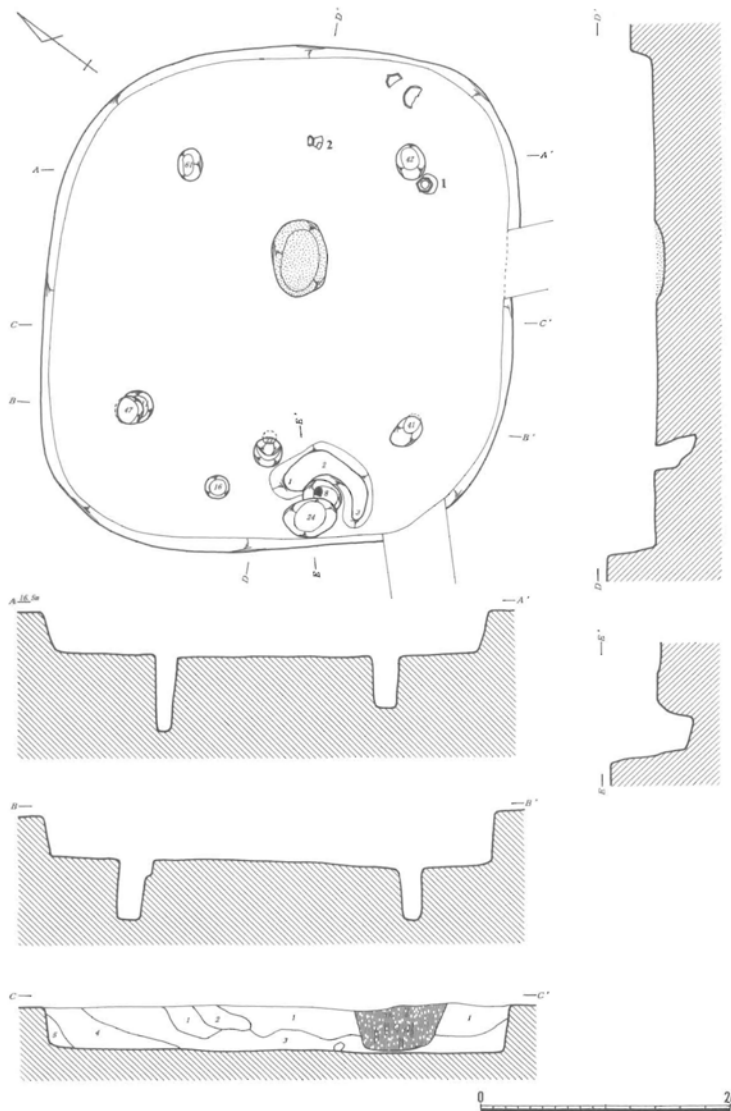
239号住居跡出土遺物 (第164・165図)

壺形土器 (1・3～5・8)

1は体部下位と口縁部上部を欠損する。体部は球状を呈すると思われ、頸部はやや直線的に立ち上がり、口縁部はラッパ状に開く。肩部には端末結節したLRの単節斜縄文を羽状に施している。縄文帯上部には細い円形竹管文を5・6・7・8個を各1単位として4カ所に配される。外面はヘラミガキされるが、頸部に僅かにハケメ痕を残す。

内面は口縁部上位横方向、下位縦方向にヘラミガキされるがハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、外面は縄文帯以外、内面は口頸部が赤彩される。縄文帯内にも一部赤彩がみられる。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。住居東側ピット横の床面上の出土。

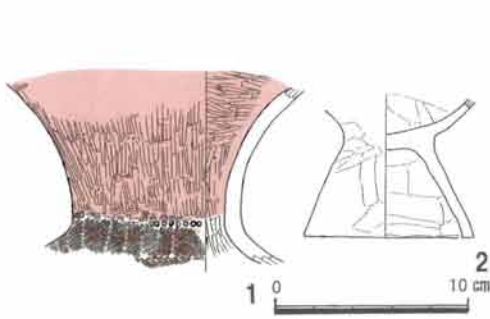
3は234号住居跡出土土器13と同一個体と思われる。複合口縁部外面にはRLの単節斜縄文が施され、縦位の集合する沈線がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、口唇端部と内面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。覆土中の出土。



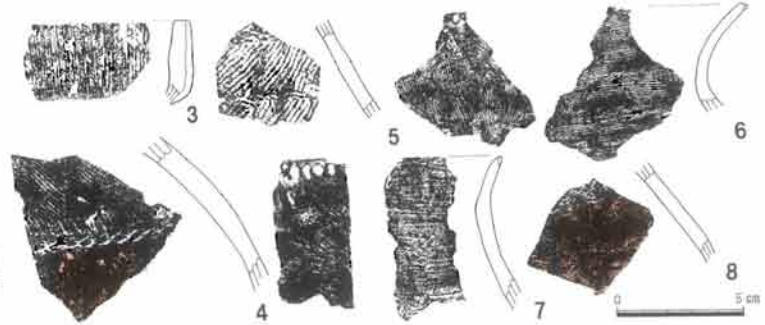
第162図 239号住居跡 (1/60)



第163図 床硬化面



第164図 239号住居跡出土遺物1 (1/4)



第165図 239号住居跡出土遺物2 (1/3)

4・5・8は肩部破片。4は外面にRLの単節斜縄文を施し、下位には2条のS字状結節文がみられる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、縄文帯以外は赤彩される。縄文帯内には不定形の赤彩文がみられる。胎土には砂粒、細礫を含む。5はLRの単節斜縄文を数段施し、各段の境にはZ字状結節文が施される。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる淡黄橙色粒子が含まれる。8はLRの単節斜縄文を施し、下位に3条のS字状結節文がみられる。以下ヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒を含む。いずれも覆土中の出土である。

甕形土器(2・6・7)

2は台付甕形土器。甕部底部から脚台部にかけて遺存する。裾径8.8cmを測る。裾部はやや内湾ぎみに開く。外面は甕部との接合部横方向、脚台部縦方向にヘラナデされる。内面は横方向にナデられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。北東床面上の出土。

6は頸部破片。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は褐灰色(10YR4/1)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中からの出土。

7は口頸部破片。口唇部には先端が角状の工具でやや左から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。頸部外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

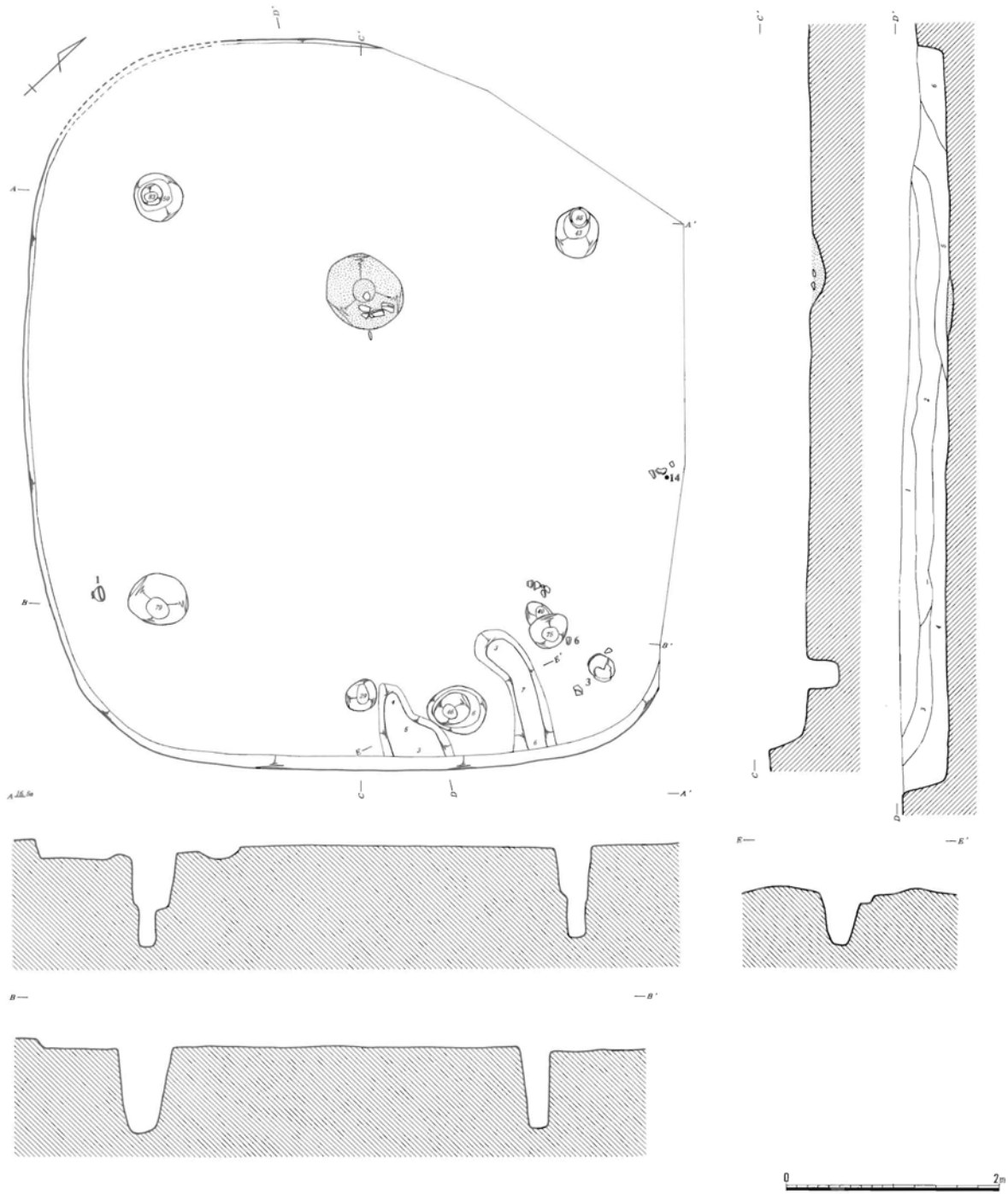
240号住居跡(第166・167図)

〔位置〕B-1G。

〔住居構造〕北壁から南東コーナーにかけては調査区外にある。247号住居跡を切り、241・242号住居跡に切られる。(平面形)隅丸長方形。(規模)690×620cm。(主軸方向)N-45°-W。(壁高)33~40cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉)住居中央から北に偏って位置する。60×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ12cmを測る。焼土東側に礫と土器片が配置されている。(柱穴)各コーナーの4本が主柱穴になろう。南東壁下の小ピット1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南東壁下、東に偏って位置する。50×40cmの楕円形を呈し、深さ46cmを測る。貯蔵穴南側と北側に袖状に壁際から中央に向かって、高さ3~7cm・幅30~60cmの凸堤が構築される。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。



第166図 240号住居跡 (1/60)

- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 南東コーナー、床面上に比較的多いが、ほとんどが覆土中から出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

240号住居跡出土遺物（第168・169図）

壺形土器（4～12）

4～10は口頸部破片。4は複合口縁部外面と口唇端部にR Lの単節斜縄文を施し、下端にはハケ状工具による刻みが加えられる。棒状浮文が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。

5は複合口縁部外面に羽状縄文が施される。上段は端末結節したRの無節縄文、下段は折り曲げたLの無節縄文を用いている。口唇端部にもRの無節縄文が施される。口縁部下端にはヘラ状工具による刻みが加えられる。縄文帯内には円形赤彩文が3カ所にみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、外面頸部及び内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。6は複合口縁部外面と口唇端部

にRの無節斜縄文を施す。3個1単位の円形浮文が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、口縁部は外面を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。7は口縁部内面に端末を結節したLの無節斜縄文を施す。内外面ともにヘラミガキされるが、外面にはハケメ痕を残す。縄文帯内には円形赤彩文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には細礫、白・橙色粒子を含む。8は複合口縁部外面及び口唇端部にR Lの単節斜縄文を施す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、外面頸部と内面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。9は口縁部内面にR Lの単節斜縄文を羽状に施す。外面はハケメ調整後ヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。10は口縁部内面にR Lの単節斜縄文が施される。縄文帯内には円形浮文が貼付される。外面はハケメ調整後ヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子が含まれる。6は床面上、他は覆土中の出土である。

11は頸部破片。外面には2条のS字状結節文を上端に施し、Rの無節斜縄文を羽状に施文する。縄文帯内には2個の円形浮文が確認される。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、縄文帯を除き赤彩される。縄文帯内にも赤彩が認められる。胎土は砂粒、細礫、白色粒子を含み粗い。覆土中の出土である。

12は肩部破片。外面にはR Lの単節斜縄文を羽状に3段施す。下端には複数条のS字状結節文が施される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。覆土中の出土である。

高坏形土器（1・2）

1は口径12.5cmと小型で、脚台部下半を欠損する。坏部は下半に段をもち、口縁部は僅かに内湾しながら開く。脚台部はやや内湾ぎみに開く。口唇部ヨコナデ。外面は縦方向に丁寧なヘラミガキされる。坏部内面は横方向のヘラミガキ。脚台部内面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、全面赤彩される。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。南側コーナー床面上の出土である。

2はミニチュア土器の脚台部破片。裾部に向けて末広がりに大きく開く。脚台部中位に4孔が外側から穿孔される。外面と坏部内面はナデられるがハケメ痕を残す。脚台部内面はナデられる。色調はにぶ

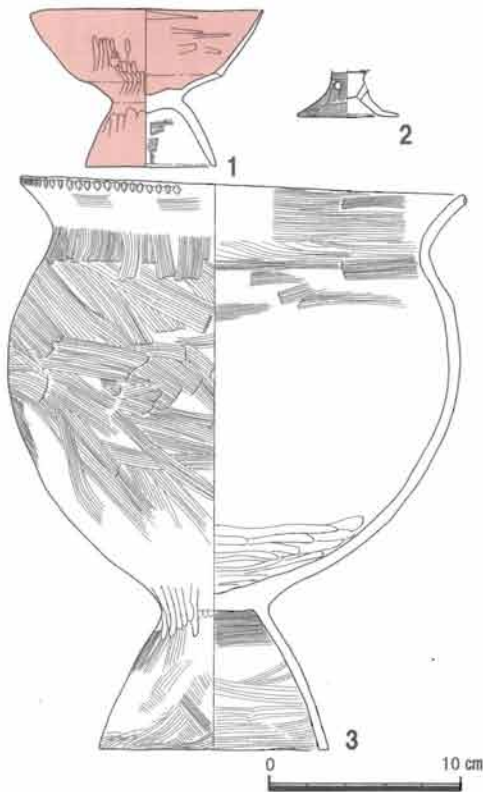


第167図 床硬化面

い褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土である。

甕形土器 (3・13~16)

3は台付甕形土器。口縁部の大部分と脚台部下半を欠損する。最大径を中位にもつ球状の体部から頸部でやや「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。脚台部は内湾ぎみに開く。口唇部はハケ状工具を左方向から刺突した刻みがめぐる。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面もヘラナデされるが、頸部と脚台部には横方向のハケメ痕が残る。甕・脚台接合部と甕部底部内面は、粘土がある程度乾燥してからナデられたのだろうか、光るほどに調整されている。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。



第168図 240号住居跡出土遺物1 (1/4)

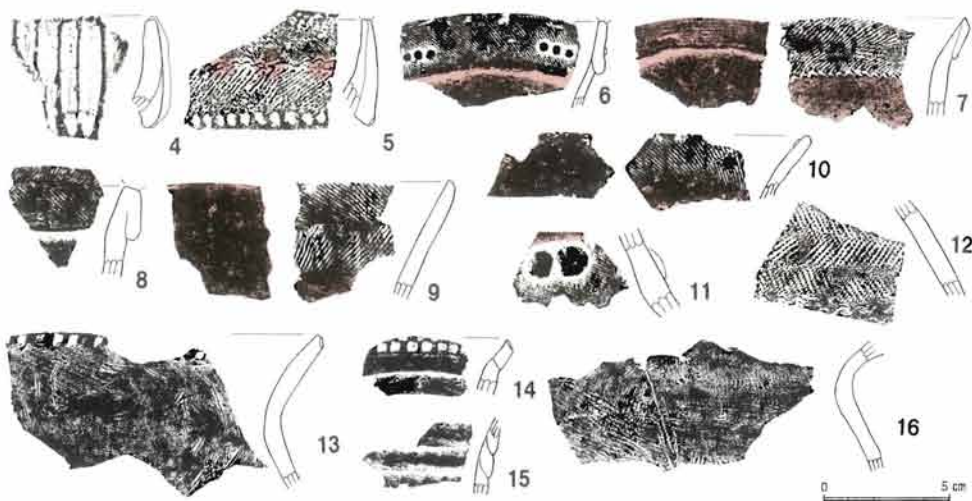
全面に煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。東コーナー床面上の出土。

13は口頸部破片。口唇部はヘラ状工具で浅く刺突された刻みが施される。内外面ともにハケメ調整後ヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土には細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土。

14は輪積痕を残す口頸部破片。口唇部は先端に丸みのある工具で浅く刺突される。内外面ともにヘラナデされる。色調は褐灰色 (10YR4/1) を呈する。胎土には砂粒を含む。覆土中の出土。

15は輪積痕を残す頸部破片。内外面ともにヘラナデされる。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫、橙色粒子を僅かに含む。覆土中の出土。

16は頸部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。外面には煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。



第169図 240号住居跡出土遺物2 (1/3)

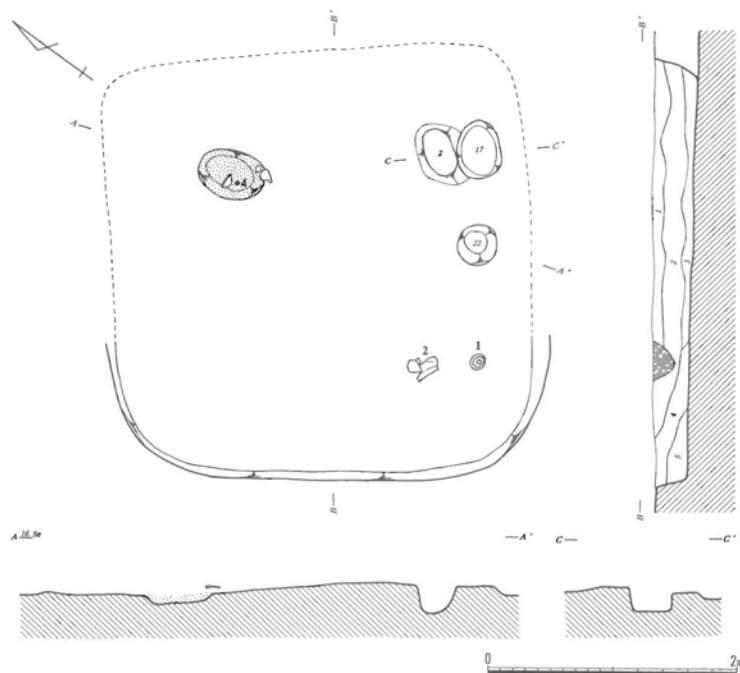
241号住居跡（第170・171図）

〔位置〕 B-2 G。

〔住居構造〕 240号住居跡を切る。（平面形）隅丸方形。（規模）360×360cm。（主軸方向）N-40°-W。（壁高）28~36cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）厚さ4cm前後の貼床で、住居中央がよく硬化している。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。50×30cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。（柱穴）南西壁際の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東コーナーに位置する。50×30cmの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。

〔覆土〕

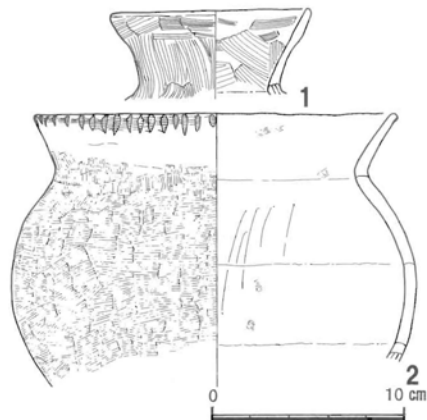
- 1層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。



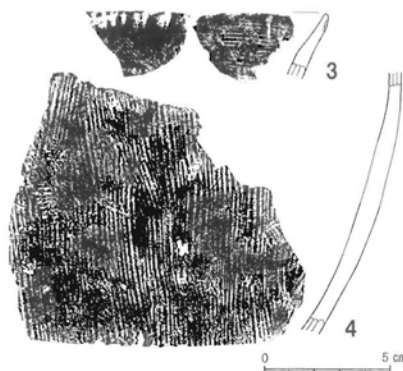
第170図 241号住居跡（1/60）



第171図 床硬化面



第172図 241号住居跡出土遺物1（1/4）



第173図 241号住居跡出土遺物2（1/3）

5層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕床面上からは僅であり、大部分が覆土中から出土した。

〔時期〕古墳時代初頭。

241号住居跡出土遺物 (第172・173図)

壺形土器 (1)

口頸部が遺存する。頸部でくびれ、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は横方向にナデられる。内外面ともにヘラナデされるが広く粗いハケメ痕を残す。ハケメの方向は一定でない。頸部は輪積部分で破損しているが、成形時、口頸部外面に粘土をたし、ナデつけて体部に接合している様子がよく観察できる。その際、肩部のハケメの痕が頸部との接合部に写っている。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。床面上の出土である。

甕形土器 (2～4)

2は台付甕形土器で甕部1/2程度が遺存する。口径19.2cmを測り、最大径を体部中位にもつ。体部は球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し口縁部は外反する。口唇部はハケ状工具で調整した後、同一工具で刺突した刻みが加えられる。外面はヘラナデされるが、頸部縦方向、体部横方向のハケメ痕が残る。内面もヘラナデされるが、僅かにハケメ痕を残す。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈する。外面には煤が付着するが、体部上半に顕著である。胎土には砂粒、細礫を含む。床面上の出土である。

3は口縁部破片。口唇部はハケ状工具で浅く刻まれる。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土。

4は体部破片。外面は縦方向のハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土は輝石、砂粒、細礫、白色粒子を含む。精製されている。炉跡から出土した。

242号住居跡 (第174図)

〔位置〕A-2G。

〔住居構造〕240号住居跡を切る。(平面形)不明。(規模)不明。(壁高)34～36cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)部分的に硬化している。(炉)調査区外にあるものと思われる。(柱穴)検出されなかった。

〔覆土〕黒褐色土 (10YR2/2)。焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。

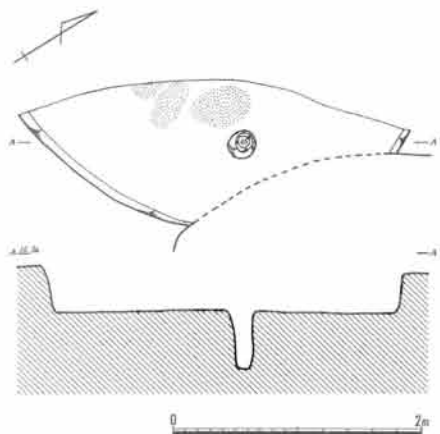
〔遺物〕覆土中から数点出土した。床面上に炭化材がみられた。

〔時期〕古墳時代初頭。

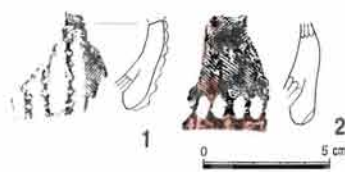
〔所見〕覆土中の焼土や、床面上の炭化材の存在から焼失住居の可能性が大きい。

242号住居跡出土遺物 (第175図)

壺形土器 (1・2)



第174図 242号住居跡 (1/60)



第175図 242号住居跡出土遺物 (1/3)

いずれも複合口縁部破片。1は口縁部外面にLRの単節斜縄文を羽状に施し、刻みのある棒状浮文が貼付される。口唇端部にも縄文が施文される。内面は丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫、軽石と思われる灰白色粒子を含む。2は口縁部外面にLの無節斜縄文を羽状に施し、下端にはヘラ状工具による刻みが加えられる。色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、口縁部下端と内面は赤彩される。また、縄文帯内には不規則な赤彩がみられる。胎土には砂粒、細礫を多く含む。ともに覆土中の出土である。

243号住居跡 (第176・177図)

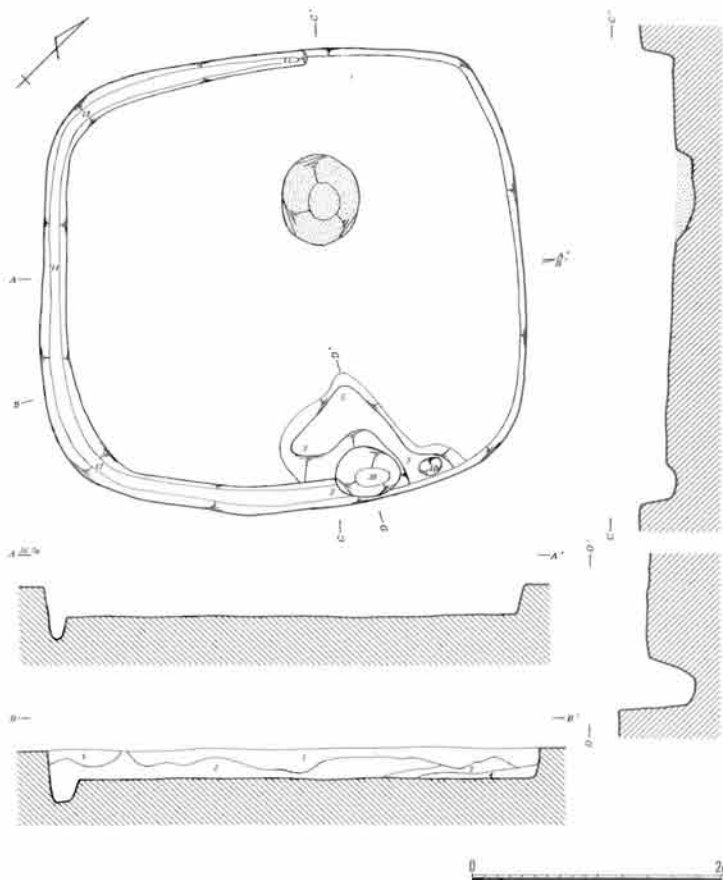
〔位置〕 A-5 G。

〔住居構造〕 197号住居跡に切られる。(平面形) 隅丸方形。(規模) 380×360cm。(主軸方向) N-40°-W。短軸が主軸。(壁高) 26~52cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 住居南半の壁下に確認できる。上幅12~30cm・下幅10~15cm・深さ2~17cmを測る。(床面) 壁際を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。80×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ20cmを測る。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 南東壁下、東に偏って位置する。50×40cmの楕円形を呈し、深さ38cmを測る。貯蔵穴の周囲には、高さ3~5cm・幅20~50cmの凸堤が弧状に巡っている。

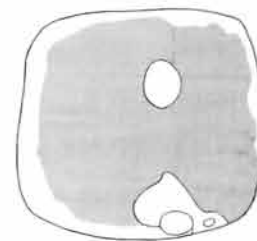
〔覆土〕

1層 暗褐色土(10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。197号住居跡貼床。

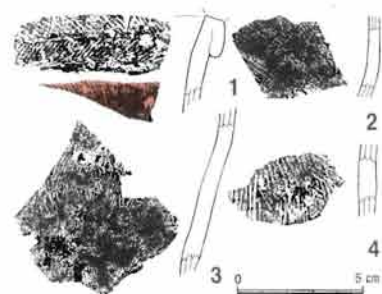
2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・ブロックを多く含む。



第176図 243号住居跡 (1/60)



第177図 床硬化面



第178図 243号住居跡出土遺物 (1/3)

3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。

4層 黒褐色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

243号住居跡出土遺物 (第178図)

壺形土器 (1)

複合口縁部破片。口縁部外面と口唇端部にRLの単節斜縄文を施す。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、縄文帯以外の内外面ともに赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土。

甕形土器 (2~4)

いずれも体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。2の色調は灰褐色 (7.5YR4/1) を呈する。胎土には輝石、細礫、砂粒を含む。3は灰黄褐色 (10YR5/2) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。4は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。すべて覆土中の出土である。

244号住居跡 (第124図)

〔位置〕 B-2G。

〔住居構造〕 245・246号住居跡を切り、222号住居跡に切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 600×480cm。(主軸方向) N-65°-E。(壁高) 29~37cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 壁際と炉の周辺を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。85×64cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。(柱穴) 各コーナーに主柱穴4本が検出された。(貯蔵穴) 西壁下、やや南に偏って位置する。径50cmの円形を呈し、深さ29cmを測る。貯蔵穴南側に高さ5~10cm・幅25~30cmの凸堤が弧状に構築される。

〔覆土〕 不整合な堆積で埋め戻されている感が大きい。

5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化材小片を部分的に含む。

7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。炉跡上部では焼土粒子・小ブロック、炭化物粒子を多く含む。

8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。

9層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

10層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。

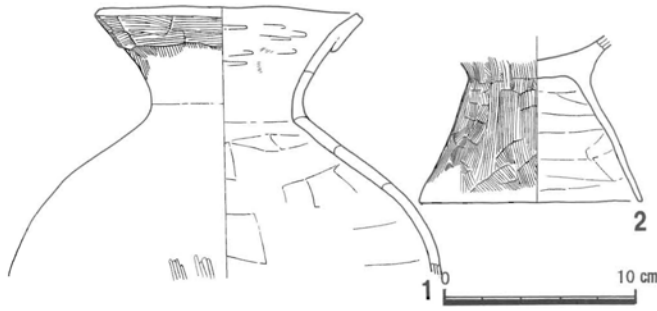
〔遺物〕 凸堤の東側に比較的多く出土した。

〔時期〕 古墳時代初頭。

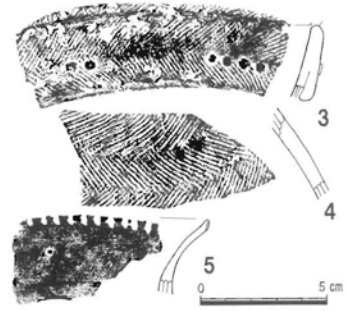
244号住居跡出土遺物 (第179・180図)

壺形土器 (1・3・4)

1は体部中位以上が遺存する。口径13.4cmを測る。体部は球状を呈すると思われ、頸部はゆるやかにくびれ、複合口縁部はラップ状に大きく開く。外面は丁寧にヘラナデされるが、口縁部にハケメ痕を残す。頸部以下は摩耗が著しく観察が困難であるが、体部中位に縦方向のヘラミガキが僅かにみられる。内面口縁部はハケメ調整後、横方向にヘラミガキされる。頸部以下は横方向にヘラナデされ、その際の



第179図 244号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第180図 244号住居跡出土遺物 2 (1/3)

工具痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。外面体部中位には黒斑がみられる。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる黄橙色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。凸堤上の出土である。

3・4は同一個体と思われる。3は複合口縁部外面にLRの単節斜縄文を羽状に施し、円形赤彩文が施文される。口唇端部にも縄文がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。4は肩部破片。LRの単節斜縄文を羽状に3段施す。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。いずれも覆土中の出土である。

甕形土器 (2・5)

2は台付甕形土器脚台部。裾径11.5cmで、裾部にかけて直線的に「ハ」字状に開く。外面はヘラナデされるが縦方向のハケメ痕を残す。内面と裾端部は横方向のヘラナデが施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。甕部内面に炭化物が付着する。胎土は砂粒、細礫を含むが細かい。炉横からの出土である。

5は口唇部にヘラ状工具でやや左方向から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR3/2) を呈する。胎土には砂粒を含む。覆土中の出土。

245号住居跡 (第124図)

〔位置〕 B-2 G。

〔住居構造〕 246号住居跡を切り、222・245号住居跡に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(壁高) 15~19cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 軟弱。(炉) 不明。

〔覆土〕 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 破片が数点出土。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。

246号住居跡 (第124図)

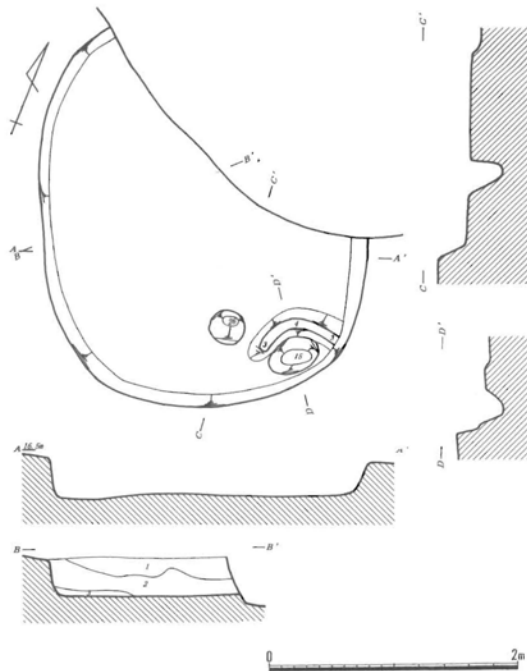
〔位置〕 B-2 G。

〔住居構造〕 222・244・245号住居跡に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(壁高) 9~13cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 軟弱。(炉) 不明。

〔覆土〕 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含み、部分的に焼土粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。



第181図 247号住居跡 (1/60)



第182図 床硬化面

247号住居跡 (第181・182図)

〔位置〕 B-2 G。

〔住居構造〕 240号住居跡に切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×260cm。(主軸方向) N-20°-W。(壁高) 25~31cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 住居中央がよく硬化している。(炉) 不明。(柱穴) 支柱穴は検出されなかった。南壁際の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東コーナーに位置する。30×40cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。貯蔵穴北側には高さ3~4cm・幅20~25cmの凸堤が構築されている。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR2/1)。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。ロームブロックを含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉。

248号住居跡 (第110図)

〔位置〕 D-3 G。

〔住居構造〕 215・217住居跡に大部分切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×350cm。(壁高) 19~20cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱。(炉) 南東に偏って位置する。70×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。焼土は50×45cmの範囲で検出される。

〔覆土〕 ローム粒子、焼土粒子を含む黒褐色土である。

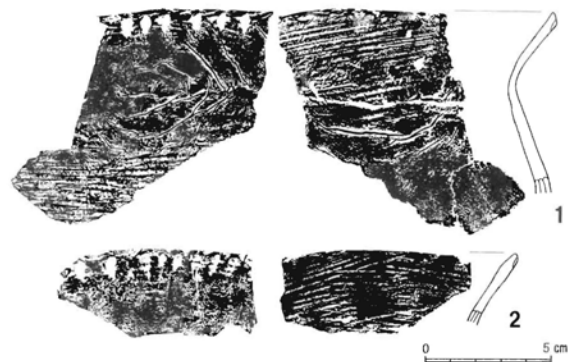
〔遺物〕 炉の上から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉。

248号住居跡出土遺物 (第183図)

甕形土器 (1・2)

いずれも口頸部破片で、同一個体か。口唇部にはヘラ状工具でやや左方向から刺突した刻みが施される。内外面ともにヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調



第183図 248号住居跡出土遺物 (1/3)

は1が褐灰色(10YR4/1)、2が黒褐色(10YR3/2)を呈する。煤が付着する。1・2ともに胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含み粗い。炉跡からの出土である。

249号住居跡(第184・185図)

〔位置〕B-3G。

〔住居構造〕219号住居跡に切られる。(平面形)正方形。(規模)240×240cm。(主軸方向)N-40°-W。(壁高)5~15cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面)住居西側が一部硬化している。(炉)不明。(柱穴)2本検出したが主柱穴とは断定できない。

〔覆土〕黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉~古墳時代初頭。

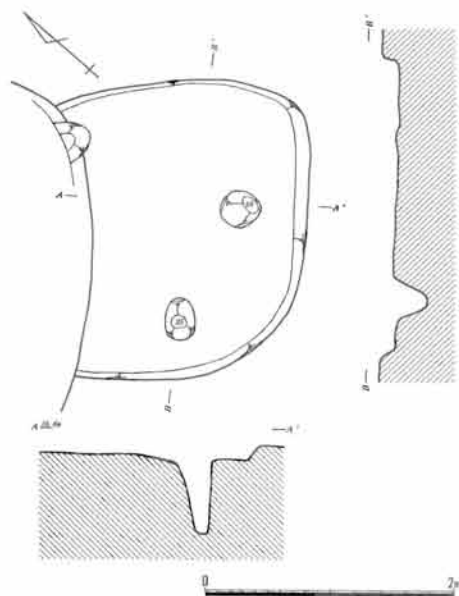
249号住居跡出土遺物(第186図)

壺形土器(1)

複合口縁部破片。口縁部内面と口唇端部にはLRの単節斜縄文が施される。口縁部外面にはヘラ状工具を連続して押捺した痕がみられる。頸部はヘラミガキされるが、口縁部下位にはハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、外面は赤彩される。胎土には砂粒を含む。覆土中の出土である。

甕形土器(2)

体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされ炭化物が付着する。色調はにぶい褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には砂粒を含む。覆土中の出土である。



第184図 249号住居跡(1/60)



第185図 床硬化面



第186図 249号住居跡出土遺物(1/3)

250号住居跡（第187・188図）

〔位置〕 F-4 G。

〔住居構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）580×480cm。（主軸方向）N-60°-E。（壁高）34~44cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）壁際と炉の周辺除き、よく硬化している。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。65×50cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る地床炉である。（柱穴）各コーナーに主柱穴が4本検出される。南西壁際に位置する1本は住居内側に傾斜をもって穿たれていて、入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下、やや南に偏って位置する。径36cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。貯蔵穴南側に高さ1~8cm・幅35~50cmの凸堤がL字状に構築されている。

〔覆土〕 不整合な堆積で、埋め戻されている感が大である。

- 1層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。
- 2層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。硬質で粘性あり。
- 4層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ロームブロックを多く含む。
- 8層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ロームブロックを多く含む。
- 9層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 10層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・小ブロックを僅かに含む。
- 11層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を僅かに含む。
- 12層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子、焼土粒子を僅かに含む。
- 13層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を僅かに含む。
- 14層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック、焼土粒子を僅かに含む。
- 15層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。
- 16層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を僅かに含む。
- 17層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 18層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子を多く含む。

なお、南側コーナーに厚さ4cm前後の暗赤褐色土が堆積していた。

〔遺物〕 覆土中から比較的多く出土した。

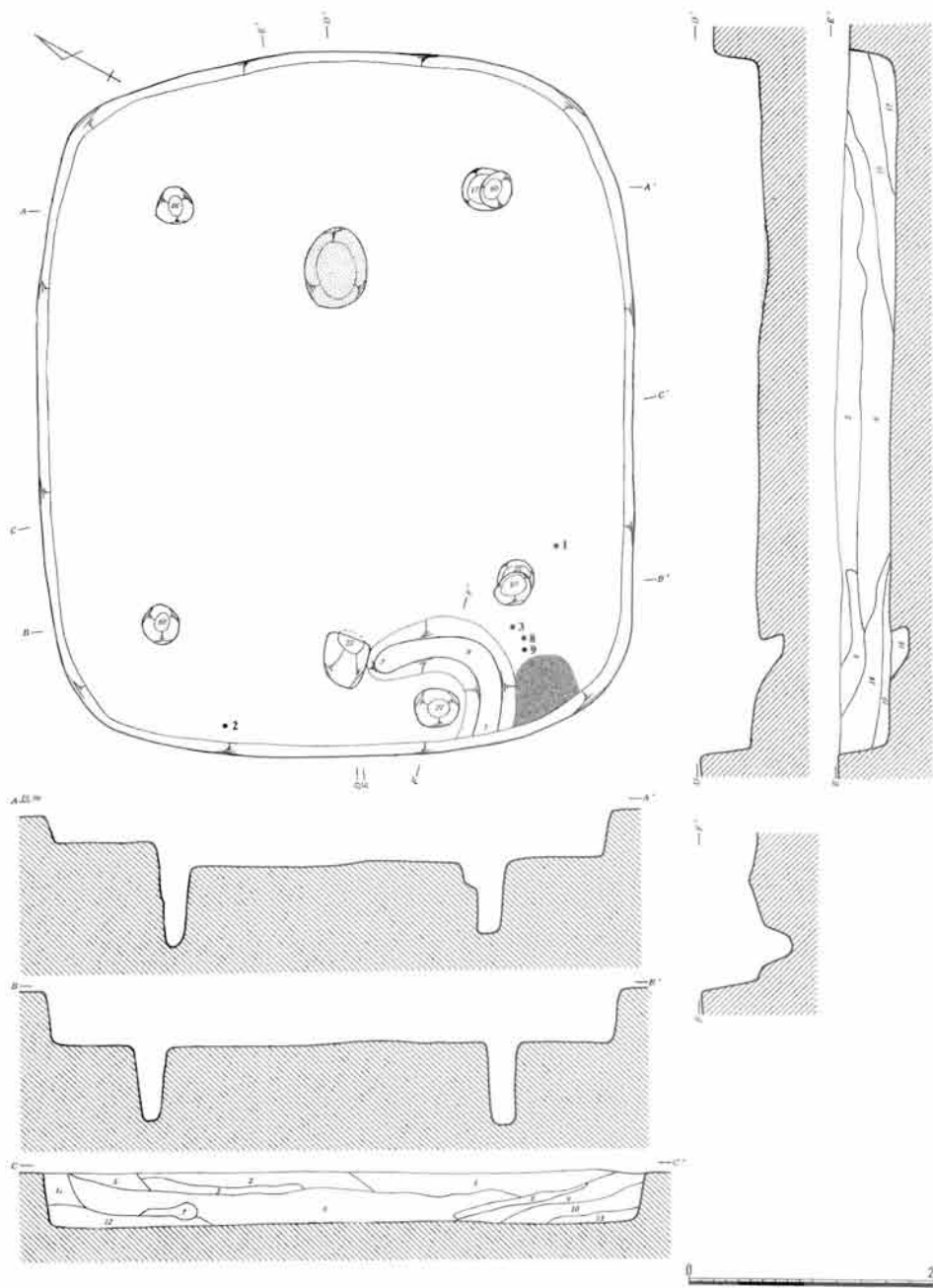
〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。

250号住居跡出土遺物（第189・190図）

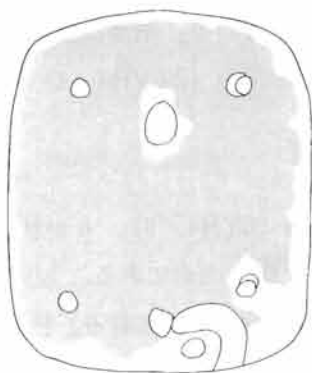
壺形土器（1・7・10）

1は体部下半以下1/2程度が遺存する。底径5.5cmと小型で、平底の底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、体部は球状を呈すると思われる。外面はハケメ調整後、丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるが、その際の工具痕を残す。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。外面は赤彩される。体部下半には煤が付着する。胎土は砂粒を含むがきめ細かく堅緻である。南コーナー、ピット横床面上の出土である。

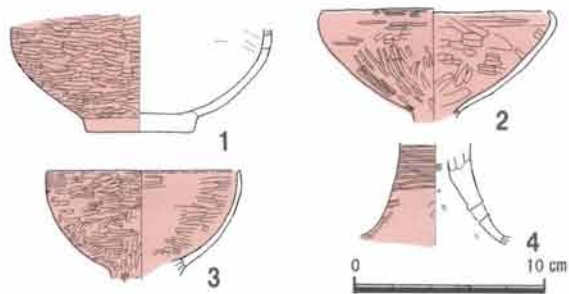
7は肩部破片。外面には3条のS字状結節文を施し、RLの単節斜縄文を羽状に3段施文する。縄文



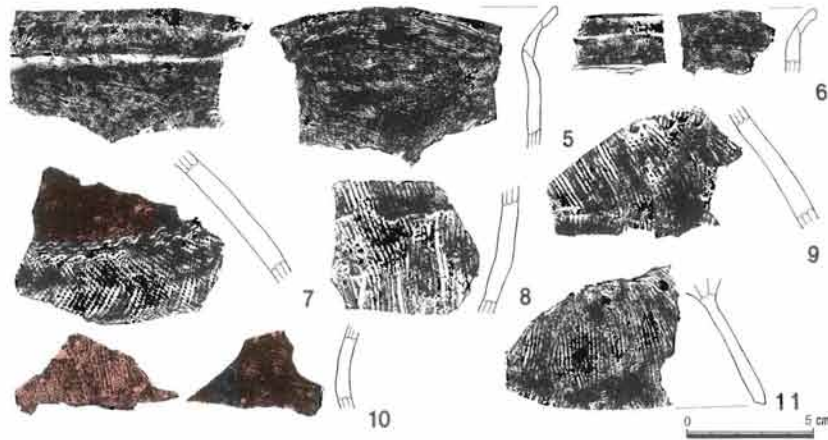
第187图 250号住居跡 (1/60)



第188图 床硬化面



第189图 250号住居跡出土遺物1 (1/4)



第190図 250号住居跡出土遺物2 (1/3)

帯以外はヘラミガキされる。内面はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、縄文帯を除き赤彩される。胎土は砂粒を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中の出土である。

10は頸部破片。外面はハケメ調整後ヘラミガキされる。内面は横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3) を呈する。内外面ともに赤彩される。胎土には砂粒、白色粒子を含む。覆土中の出土である。

高坏形土器 (2~4)

2は脚台部を欠損する。坏部は碗状を呈し、口径12cmを測る。器壁は薄い。脚台部との接合部分のみるかぎり脚柱部は極端に細い。外面は口縁部横方向、以下縦方向にヘラミガキされるが、ミガキの下に薄くハケメ痕が観察できる。内面は横方向にヘラミガキが丁寧に施される。口唇部はヨコナデされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、赤彩が施される。内外面ともに赤彩される。外面口縁部に僅かに煤が付着する。胎土は砂粒、白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。南西壁際床面上の出土である。

3は坏部1/3程度が遺存する。口径10.5cmを測る。深い半球状を呈し、器壁は薄く丁寧な作りである。内外面ともに横方向のヘラミガキが施されるがハケメ痕を残す。ミガキの下にもハケメ痕が薄く観察できる。口唇部はヨコナデされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、内外面ともに赤彩される。胎土は砂粒を含むがきめ細かく堅緻である。南コーナー凸堤横、床面上の出土である。

4は脚台部の一部が遺存する。裾部は大きく広がると思われる。2孔が確認された。脚柱部には横線文が施される。文様は櫛状工具を右廻りに数回止めながら一周させ施文している。裾部は縦方向にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、外面は赤彩される。胎土には砂粒、細礫を含む。覆土中の出土である。

甕形土器 (5・6・8・9・11)

5・6は2段の輪積痕を残す口頸部破片。色調は5がにぶい赤褐色 (5YR4/3)、6が灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。胎土にはいずれも砂粒、細礫を含む。ともに覆土中の出土である。

8・9は体部破片。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされる。色調は8がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、9がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土にはいずれも砂粒、細礫、軽石と思われる灰白色粒子を含む。南コーナー床面上の出土である。

11は脚台部破片。やや直線的に開く。外面はヘラナデされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデ。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈する。胎土には砂粒、細礫、白色粒子を含む。覆土中の出土。

251号住居跡(第191・121図)

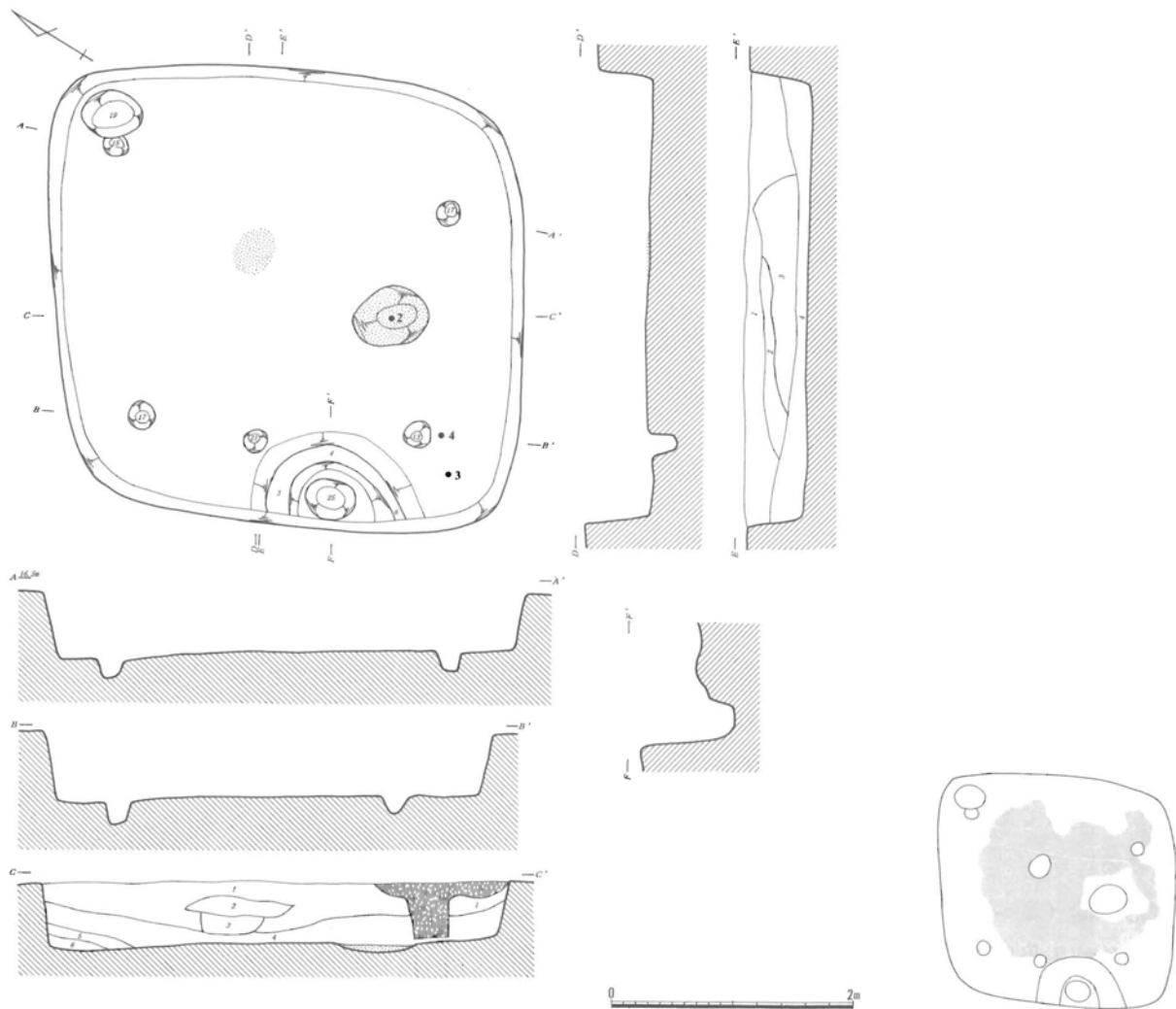
〔位置〕 F-3 G。

〔住居構造〕(平面形) 長方形。(規模) 400×380cm。(主軸方向) N-58°-E。(壁高) 45~53cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 壁際を除き、よく硬化している。(炉) 住居中央から南東側に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。中央の焼土も炉の可能性もある。(柱穴) 各コーナーに支柱穴を4本検出した。南西壁際の小ピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁下、南に偏って位置する。40×30cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。貯蔵穴の周囲には高さ3~6cm・幅34~40cmの凸堤が半円形に巡らされている。

〔覆土〕 不整合な堆積で、埋め戻されている感が大きい。

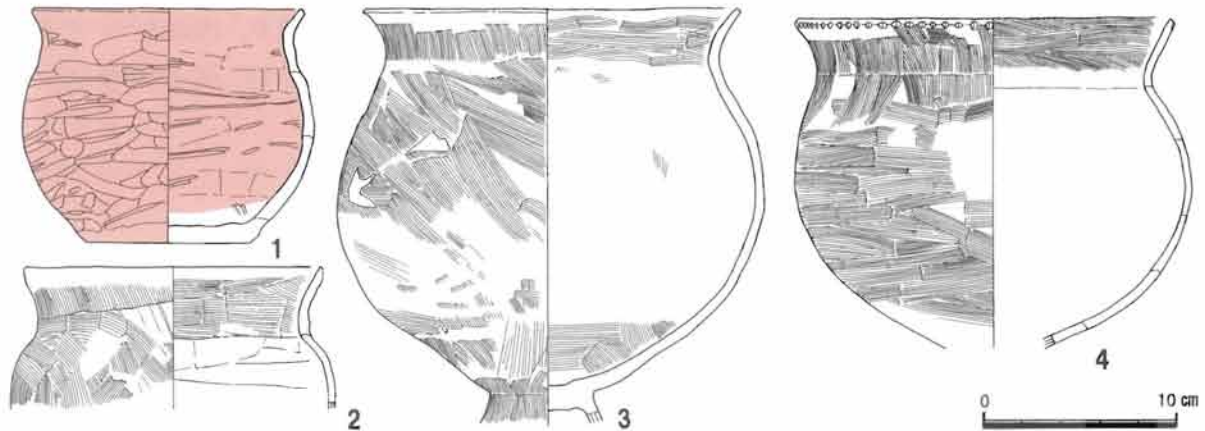
1層 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。

2層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。



第191図 251号住居跡(1/60)

第192図 床硬化面(1/3)



第193図 251号住居跡出土遺物1 (1/4)

3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子、ロームブロックを含む。

4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

5層 黒褐色土 (7.5YR2/3)。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。

6層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。

〔遺物〕南コーナーに多量に出土した。覆土中にも比較的多く出土した。

〔時期〕弥生時代末葉。

251号住居跡出土遺物 (第193・194図)

壺形土器 (5・6)

5は肩部破片。RLの単節斜縄文を羽状に施す。体部は丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (5YR5/3) を呈し、外面縄文帯以外は赤彩される。胎土には砂粒、赤褐色粒子を含む。

6は頸部から肩部にかけての破片。肩部にはLRの単節斜縄文が施される。頸部はハケメ調整後ヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、頸部内外面は赤彩される。胎土は砂粒を含むが細かく堅緻である。

ともに覆土中の出土である。

鉢形土器 (1)

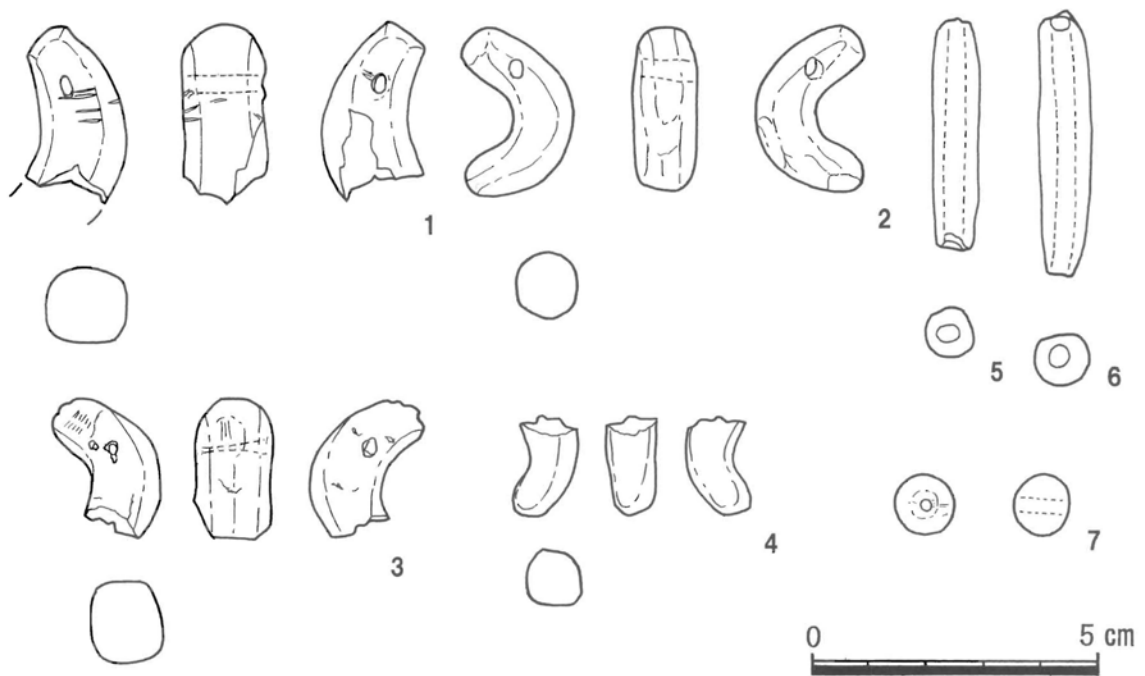
体部の一部を欠損するがほぼ完形である。口径14cm・底径8.5cm・器高12.4cmを測る。体部は最大径を中位にもち球状を呈する。頸部はゆるやかにくびれ、短い口縁部は外反する。口縁部内外面はヨコナデ。頸部以下外面は横方向にヘラミガキされるがハケメ痕を残す。内面はヘラナデされるが、部分的に横方向のヘラミガキがみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、底部を除き内外面は赤彩される。胎土は砂粒、細礫、軽石と思われる白色粒子を含むが細かく堅緻である。覆土中の出土で250号住居出土破片と接合する。

甕形土器 (2~4)

2は体部上半以上が遺存する。口径15.8cmを測る。頸部はゆるやかにくびれ、口縁は僅かに外湾しながら開く。外面はヘラナデされるが、口縁部縦方向、頸部以下斜方向の粗いハ



第194図 251号住居跡
出土遺物2 (1/3)



第195図 土製品 (3/4)

ケメ痕が残る。内面口縁部はヘラナデされるが横方向のハケメ痕を残す。頸部以下はヘラナデされるが、その際の工具痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。口縁部外面には煤が付着する。胎土は砂粒、細礫を含むが細かく堅緻である。炉跡からの出土である。

3は脚台部下位を欠損する。口径20cmを測る。最大径を中位にもつ球状の体部からゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。脚台部は「ハ」字状に開く。外面はヘラナデされるが、口頸部・甕底部・脚台部は縦方向、体部は斜方向のハケメ痕が残る。内面は口縁部と甕底部にハケメ痕を残す。脚台部内面はヘラナデ。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。外面には煤が付着するが、上半部に顕著である。内面甕底部には炭化物がこびりつく。胎土は砂粒、細礫を含み粗い。南コーナー床面上の出土。

4は脚台部を欠損する。口径20cmを測る。最大径を中位にもつやや偏球状の体部からゆるやかにくびれ、口縁部はほぼ直線的に開く。口唇部はハケ状工具で一度平坦にし、やや右方向からの刺突を加える。内外面ともにヘラナデされるが、外面口縁部縦方向、以下横方向、内面横方向のハケメ痕が残る。色調は褐色 (7.5YR4/4) を呈する。外面には煤が付着する。胎土は砂粒、細礫を含み粗い。南側コーナー床面上の出土。

第2節 古墳時代初頭の方形周溝墓

17号方形周溝墓 (第196・197図)

〔位置〕 A～C-4～6 G。

〔周溝〕 北溝から方台部中央にかけて攪乱が入る。182～185・197～199・202・203・205～207・211・223・224・237号住居跡を切る。方台部上の181・210・243号住居跡も当該周溝墓に先行する。また、周溝内に346・347号土坑が検出された。

(平面形) 全周型でほぼ正方形を呈するが、南東溝がややふくらむ。

(規模) 周溝の外縁は北東-南西24.7m・北西-南東24.4m、方台部は北東-南西16.6m・北西-南東17mを測る。長軸方向はN-54°-E。

(北東溝) 長さ20.2m・上幅4~4.4m・下幅2~2.2m・深さ0.9~1.1mを測る。法面の傾斜は方台部側が急斜で、溝底はほぼ平坦である。周溝外縁には舌状に突出した部分があり、その両側は0.5~1m幅で溝底から0.3m程高くなっていてテラス状を呈する。溝底には土坑(347号土坑)とそれに接して2本のピットが存在する。

(南東溝) 長さ21.5mを測る。東コーナー付近で上幅2.1m・下幅0.7m・深さ0.7mと狭いが、南コーナーに向かって溝幅を広げ、南コーナー直前で上幅3.4m・下幅1.2m・深さ0.8mを測り、北コーナーで上幅2.5m・下幅1.2m・深さ0.4mと再び狭まる。法面の傾斜は方台部側が急斜で、溝底はほぼ平坦である。南コーナー付近に大小2本のピットが接して存在する。

(南西溝) 長さ20.6m。南コーナー付近で上幅2.6m・下幅1.6m・深さ0.6mと狭いが、それ以外は上幅4m・下幅2.6m・深さ0.81mを測る。法面の傾斜は方台部が急斜で、溝底はほぼ平坦である。方台部側の法面下端に沿って上幅0.3~0.4m・下幅0.1~0.2m・深さ0.05m前後の溝が認められた。南コーナー付近には土坑(346号土坑)が、中央部から西コーナーにかけて10本のピットが検出された。

(北西溝) 攪乱が大きく入り、不明な点が多い。長さ22.5m・上幅4.4m・下幅3.5m・深さ0.5mを測る。法面の傾斜は方台部側が急斜であるが、浅いせいもあり他の三方向の溝に比べて顕著ではない。溝底はほぼ平坦であった。西コーナー付近に2本のピットが検出された。

〔埋葬施設〕 表土が浅かったことと、方台部に北西方向から中央部にかけて大規模な攪乱が入っていたため、埋葬施設を確認することはできなかった。

〔覆土〕 深い部分で7~8層、浅い部分で4~5層に分層できる。土層の観察からは方台部からの土砂の流れ込みを思わせるような堆積状態は顕著ではない。また、覆土中に焼土や炭化物などを特に含んだ層は検出されなかった。

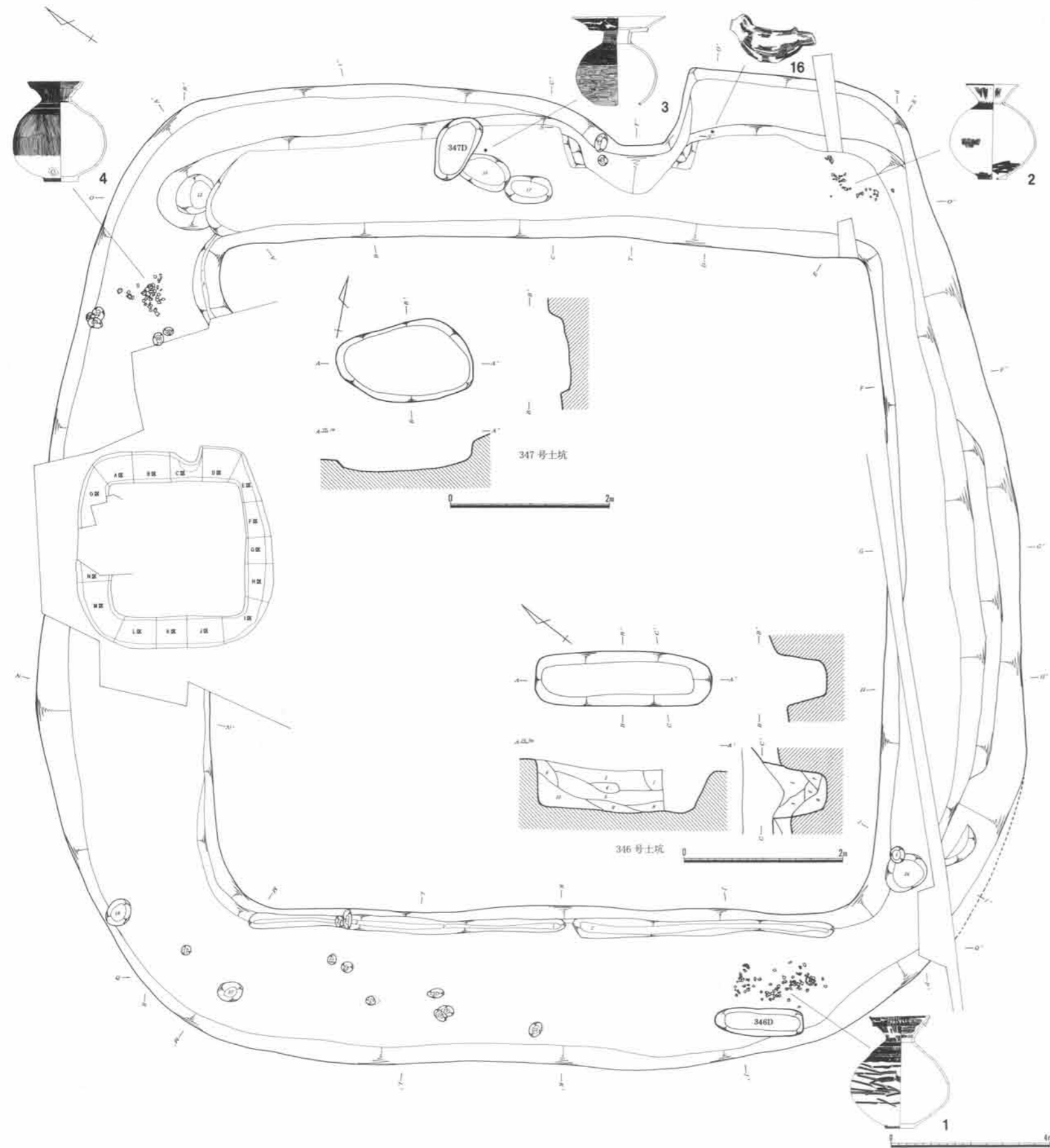
〔遺物〕 北東溝の外縁突出部および北・東・南コーナー付近から出土した5点の遺物が特徴的である。B区の突出部北東脇の3層からは二重口縁壺形土器(第198図 3)の破片がまとまった状態で、D区の突出部南西脇のテラス部分の4層下位からは完形の鳥形土器(第199図 16)が出土した。また、北コーナー付近のO区1層中位からは複合口縁壺形土器(第199図 4)が押しつぶされたような状態で、東コーナー付近のE区1層中位からは単純口縁壺形土器(第198図 2)の破片が190cm程の範囲に散乱したような状態で、南コーナー付近のI区1層中位からは複合口縁壺形土器(第198図 1)が約180cmの範囲に散らばるような状態で検出された。溝内覆土中からは比較的多くの遺物が出土したが、本周溝墓が多数の住居跡を切って存在しているため、多分にそこからの流れ込みが考えられる。

溝内土坑

346号土坑(第196図)

〔位置〕 南西溝のJ・K区にまたがって位置する。

〔構造〕 周溝内が20cm前後埋没した段階で掘り込まれている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 228×63cm・深さ65~80cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急斜である。(長軸方向) N-39°-E。



第196図 17号方形周溝墓 (1/120)、346・347号土坑 (1/60)

土層図A

- 1層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

土層図B

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 5層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。

土層図C

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。
- 8層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ロームブロックを多く含む。

土層図D

- 1層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。

土層図E

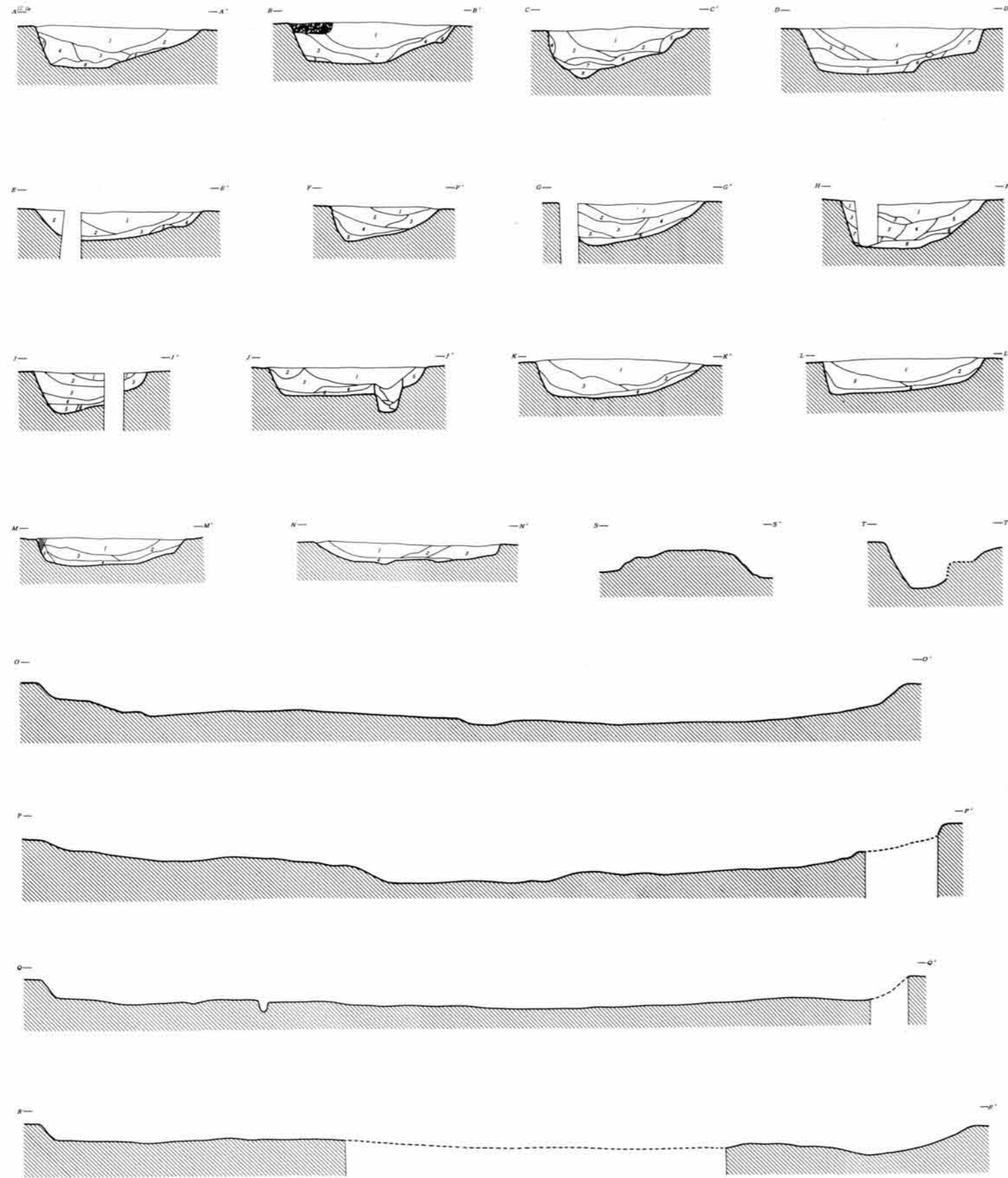
- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ロームブロックを多く含む。

土層図F

- 1層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

土層図G

- 1層 黒色土 (7.5YR1.7/1)。ローム粒子を含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子、炭化物粒子を含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。



土層H図

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

土層図I

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム小ブロックを含む。

土層図J

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを含む。

土層K図

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

土層図L

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

土層図M

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

土層図N

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

第197図 17号方形周溝墓土層・断面図 (1/120)

〔覆土〕 堆積状態は不整合で、全体的にローム粒子・小ブロックを多く含み、埋め戻された感が大きい。

1層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

3層 黒褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。

6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。

7層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子・小ブロックを多く含む。

8層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

9層 黄褐色土 (10YR5/6)。ロームブロック。

10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 古墳時代初頭。

347号土坑 (第196図)

〔位置〕 北東溝のB区に位置する。

〔構造〕 (平面形) 不整楕円形。(規模) 170×130cm・深さ6~24cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはゆるやかである。(長軸方向) N-83°-E。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む褐色土 (10YR4/4) の単一土層である。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 古墳時代初頭。

17号方形周溝墓出土遺物 (第195図 3・4、第198~202図)

壺形土器 (1~8)

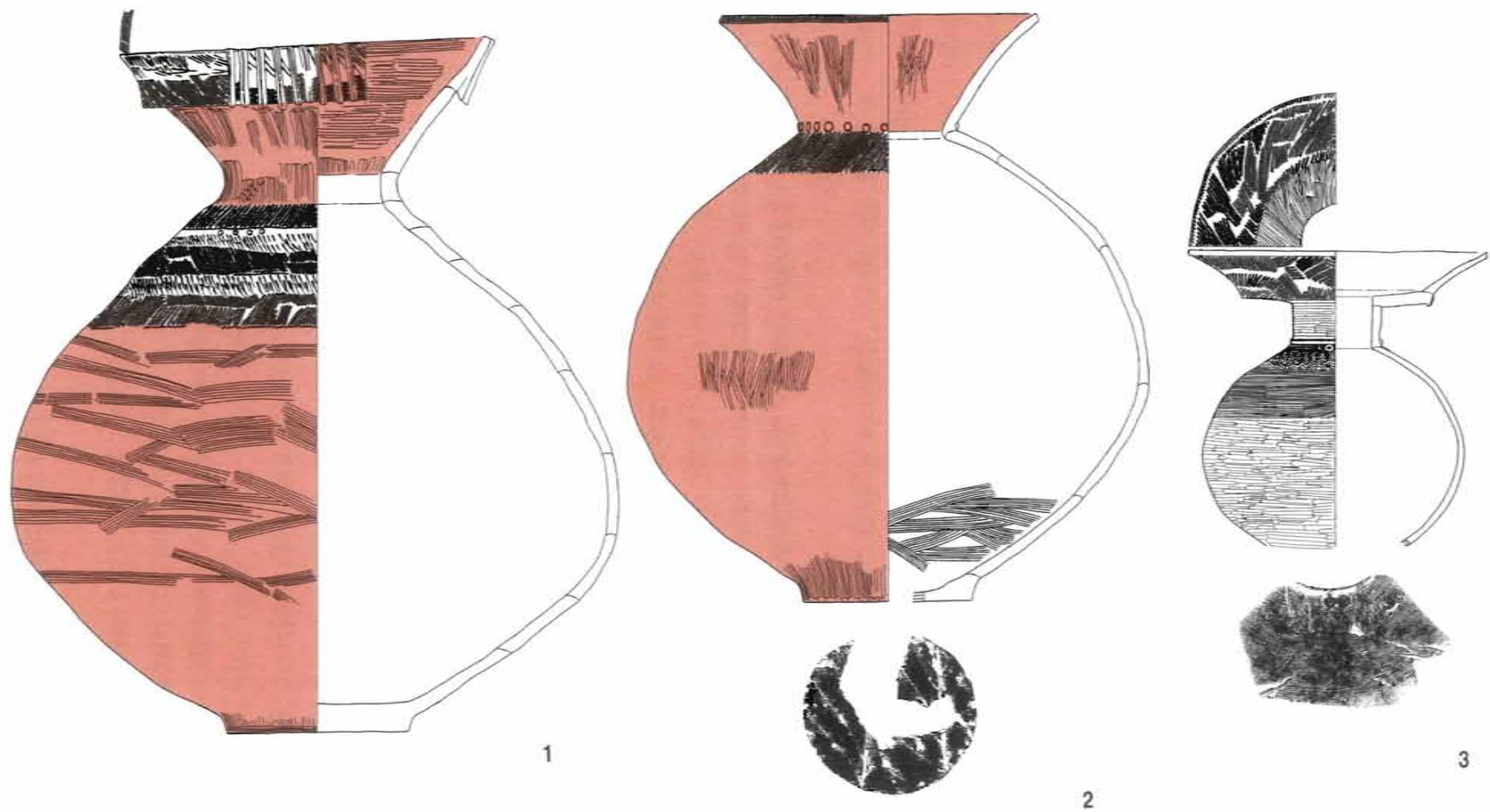
1は複合口縁壺形土器である。口径23.4cm・器高42.3cm・底径11.3cmを測る。底部の一部が欠損する。肩部から頸部にかけて「く」字に屈曲しながら、直線的に外反する。口縁複合部は幅広く、僅かに外湾しながら開く。体部は肩部がゆるやかに下がり、体部中位に最大径をもち、玉葱状を呈する。外面肩部文様帯はLRの単節斜縄文を幅狭く3段に設定し、それぞれの下端は2条のS字状結節文で区画し、上・中段間と中・下段間にある空間帯には、反撚りの無節斜縄文がみられる。この施文の仕方は原体の閉端部を器面に対して上に向け、左から右へと原体を回転させたと思われる。なお、上段下には4個の円形浮文を1組として4単位貼付されている。体部外面は左から右方向にハケメ調整後、丁寧にヘラミガキされている。体部の破損状況から、製作方法は粘土紐ではなく粘土帯を積み上げたと思われる。口縁の折り返し部の下段はLRの単節斜縄文を、上段は反撚りの無節斜縄文を施し、9本の棒状浮文を1組としたものを4単位貼付する。口唇端部にもLRの単節斜縄文を施す。口縁部内面は横方向にヘラケズリ後、ヘラミガキしている。頸部は縦方向にヘラケズリ後ヘラミガキし、肩部には一部指頭による押圧痕が残る。体部から底部にかけても、ヘラケズリ後ヘラミガキがなされ平滑になっている。なお、焼成時に生じた黒斑が、体部中位に2ヶ所と同じ中位の反対側にみられる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR 5/4) を呈する。胎土には砂粒を多く含み、4mm程の細礫も散見される。焼成は良好とはいえない。南

西溝内、I区のコナー1層から出土。

2は単純口縁壺形土器で、1/4程度の遺存度である。口径19.6cm・器高36.2cm・底径10.6cmを測る。体部最大径を中位にもち、肩部にかけては丸く内湾する。頸部は鋭く「く」字に屈曲しながら口縁部に向かって直線的に外反する。口唇部直下は僅かに外傾する。体部はほぼ球形である。口唇端部は平坦でLRの単節縄文が施される。肩部外観はLRの単節斜縄文帯を一段設け、頸部はヘラケズリ後、縦にヘラミガキされる。頸部と肩部の結合部には、28個の円形浮文を貼付する。体部はヘラケズリ後、ヘラミガキで整形し、下位は下から上方向に粗いハケメ痕を残している。底部立ち上がりは指頭による押圧で整える。肩部の縄文帯を除き焼成前に赤彩がなされている。底部には木葉痕があり、焼成後外部から打撃された穿孔があるが、意図的なものがどうかは不明である。体部の中位から下位にかけて焼成時に生じた黒斑がある。なお、器面全体に円形の斑点状の剥離が顕著である。体部内面は下位が横に粗いハケメ調整。他はヘラケズリ後ヘラミガキされる。口縁部はヘラミガキされている。外面同様に円形の斑点状の剥離が顕著である。なお、破碎状態が輪積痕に沿って幅広くあるところから、粘土紐でなく粘土帯を積み上げて製作したものと考えられる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒を僅かに含む。北東溝E区のコナー1層から出土。

3は二重口縁壺形土器である。口径18.6cmを測る。体部下端から底部にかけては欠損する。頸部は僅かに膨みをもって直立し、口縁部は大きくゆるやかに外反する。体部中位に最大径をもち、体部は玉葱状を呈する。口縁内文様帯はRL撚りの斜行縄文を施し、以下ヘラミガキされている。口縁外文様帯も同じで斜行縄文を施し、口縁下端に円形竹管文を加飾した円形浮文を2個1組で6単位を貼付する。頸部は横方向にヘラミガキされ、頸部と肩部の結合部には、粘土紐を凸帯状にめぐらして、その上に刻み目を付している。肩部上部は櫛状工具による12条の横線文を左から右方向に施した上に、円形竹管文で加飾した円形浮文を2個1組で4単位貼付する。中段の櫛状工具による波状文帯を狭んで、下段にも同様の横線文帯が幅広く存在している。体部外面中位は横方向にヘラケズリ後、ヘラミガキして調整する。なお、体部中位から下位にかけて焼成時に生じたと思われる黒斑がみられる。赤彩は施されていないが口縁内文様帯と体部の一部に赤彩斑点らしきものが見られる。内面は頸部下端から肩部にかけて指頭による押圧で整形され、他はヘラケズリ後ヘラミガキして調整する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土は砂粒を僅かに含むが精選され締まりがある。焼成は堅固である。北東溝C区3層から出土。

4は複合口縁壺形土器である。口径21cm・器高38cm・底径12.7cmを測る。体部の1/4、口縁部の一部と底部の一部をそれぞれ欠損する。肩部から頸部にかけて「く」字に屈曲しながら、直線的に外反する。口縁複合部は受け口状に僅かに内湾する。体部は下位に最大径をもち、下膨れである。体部下端には焼成後、内部より打撃をうけたと思われる穿孔がある。外面文様帯は肩部にLRの単節斜縄文を2段設けるが、その中間の幅3mmの無文の空間帯は、その上下を区画させているように存在する。また、各縄文帯の上端は縄文原体の開端部の横走痕により、あたかもS字状結節文による区画を思わせる。頸部は下から上方向に、口縁部は左から右方向にハケメ調整される。体部はヘラミガキされるがハケメ痕を残す。上位から中位にかけて肩部文様帯を除き、焼成前に赤彩されている。底部立ち上がり部分には、ハケメ痕が顕著に残る。なお、口縁部の一部と、体部下位から中位にかけて、焼成時に生じた黒斑がある。口縁部内面は、ヘラミガキした後、頸部まで赤彩がなされ、肩部は指頭による横と縦方向にナデ調整する。体部は軽くヘラケズリ後、ヘラミガキしている。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈する。胎土には細礫が散見されるが砂粒は少ない。焼成は良好である。北西溝O区のコナー1層からの出土。



第198图 17号方形周沟墓出土遗物1 (1/4)

0 10 cm

5は単純口縁壺形土器の口縁部破片で、1/4程度の遺存度である。頸部はゆるやかに湾曲しながら口縁部で外反する。口縁外観は口唇部から、細い折り返し部を設け、折り返し直下には一部短い刻みをもつ。頸部は下から上方向に丁寧にヘラミガキされているが、一部に縦方向のハケメ痕が残る。口縁部内面はLの無節縄文を施し、下端をS字状結節文で区画する。S字状結節文上に直径約2mmの浮文が1個確認された。頸部内面の上位は、左から右方向にハケメ調整、下位は右から左方向にヘラミガキされる。文様帯を除き内外面ともに焼成後の赤彩がなされている。胎土は砂粒を多量に含み焼成は良好。色調は赤褐色(10YR4/4)を呈する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。北西溝O区1層から出土。

6は小型壺形土器で、口縁部のみ1/4程度の遺存度である。肩部から頸部にかけてゆるやかに立ち上がり口縁部は僅かに外反する。口縁部から頸部にかけて指頭による押圧整形後、やや粗いハケ状工具で縦方向、更に細かいハケ状工具で左から右方向に横に調整している。内面は指頭による押圧整形後、細かいハケ状工具で横方向に調整する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。北東溝B区3層から出土。

7は小型壺形土器で、口縁部のみ1/5程度が遺存する。頸部は「く」字に開き、口縁部は僅かに内湾する。外面は指ナデによって整形した後、左から右方向にヘラナデが加えられているが、口頸部は縦方向、肩部は斜方向のハケメ痕を残す。口縁部内面はナデられるが、頸部および肩部に輪積痕を残す。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。北東溝C区3層から出土。

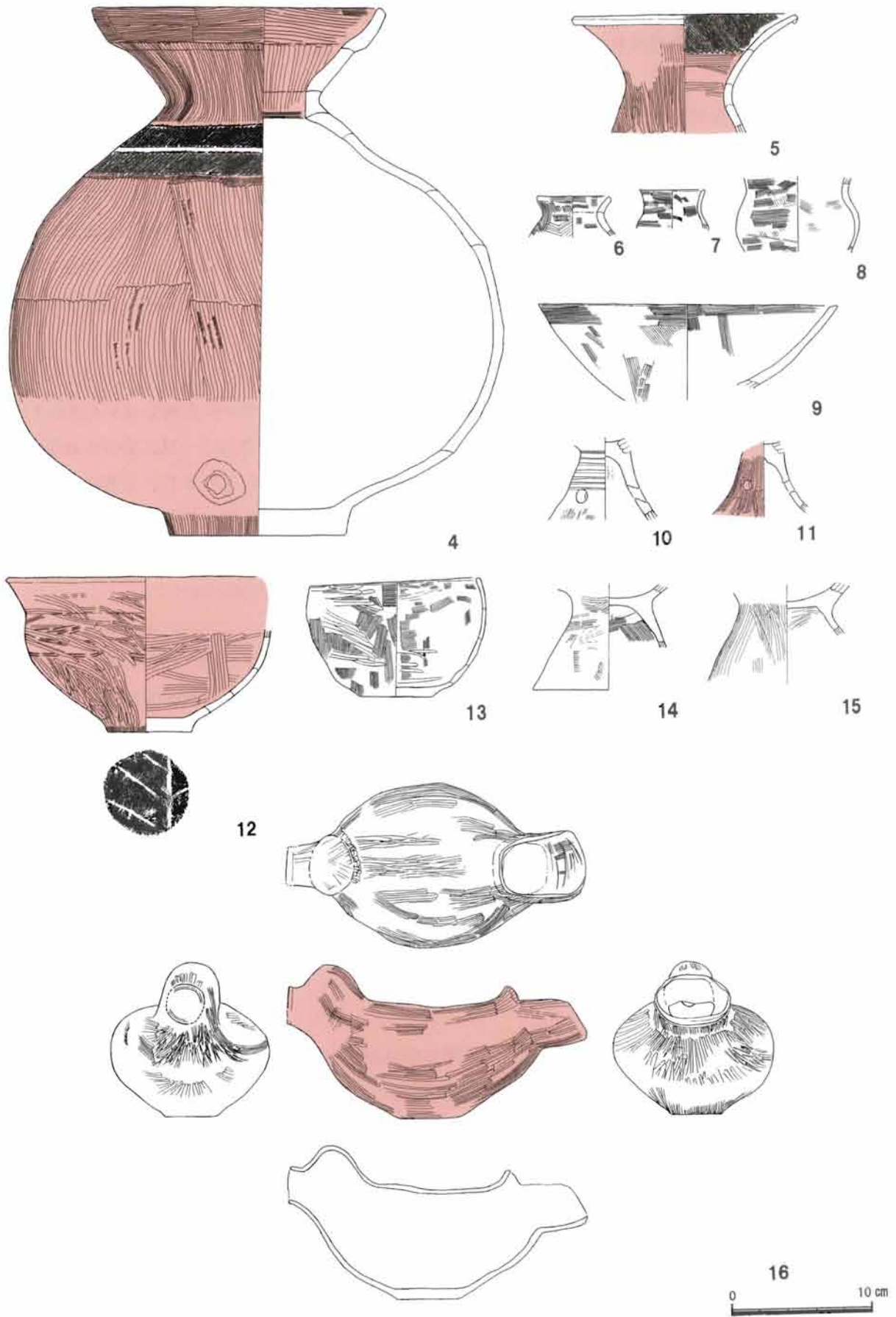
8は小型壺型土器の体部破片で、1/8程度が遺存する。体部中位に最大径をもち、頸部はゆるやかに外湾する。外面は指頭による整形後、縦方向に粗いハケ状工具で調整した上に細かいハケ状工具で横方向に調整する。内面は指ナデによる整形を施すが、僅かにハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。北東溝D区3層から出土。

高坏形土器(9~11)

9は坏部のみが遺存する。口径は21.9cmを測る。体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら、酒坏状に立ち上がり口唇部先端で僅かに外反する。口唇部はやや内傾する。坏部外面は、ヘラケズリ後、丁寧にヘラミガキして整形しているが、口縁部に一部細かいハケメ痕が残る。体部にも縦ないし斜方向のハケメ痕が一部残っている。内面もヘラケズリ後、丁寧にヘラミガキして整形しているが、口縁部に一部、横と縦方向のハケメ痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で堅く焼き締められている。南西溝J区1層から出土。

10は脚台部の一部のみが遺存する。脚台部上端から下に向かってゆるやかに開き、中位で僅かに屈曲し下位にかけて「ハ」字状にさらに開く。中位には3ヶ所透し孔を配置している。脚台部外面は縦方向にハケ調整後、丁寧にヘラミガキして整形している。上位に7本の沈線文を施し、その下部に3ヶ所透し孔をもっている。坏の底部は剥離が激しく不明である。脚台部内面は、指頭によるナデの後、横方向に軽くハケメ調整している。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒を多く含む。焼成は良好。南西溝J区2層から出土(時期は、弥生時代末期の東海地方の「欠山・元屋敷式」土器といえる)。

11は脚台部の一部だけが遺存している。脚台部は上位から裾部に向かってゆるやかに開き、中位に透し孔をもつ。外面はヘラケズリ後、丁寧に縦方向にヘラミガキしている。坏部の底部もヘラミガキされ



第199图 17号方形周沟墓出土遗物2 (1/4)

る。外面及び坏部は焼成後に赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒を含み、細礫が僅かに散見される。焼成は良好。南西溝L区1層から出土。

鉢形土器(12)

口頸部の大部分を欠損する。器高11.1cm・底径6cmを測る。頸部は短く、ゆるやかに直立して口縁部は外反する。体部最大径は上位にある。口縁部から底部にかけて横方向にハケメ調整後、丁寧に斜方向にヘラミガキされている。底部立ち上がりに粗いハケメ痕と細かいハケメ痕を残す。底部には木葉痕をもち、底部から体部中位にかけて焼成時の黒斑がある。口縁部内面は横方向に、体部から底部にかけては、横・縦・斜方向にヘラミガキして整形する。内外面ともに焼成前に赤彩されている。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒を含み、細礫も散見される。焼成は良好。北西溝O区2・1層から出土。

碗形土器(13)

口径8.6cm・器高8.2・底径5.2cmを測る。底部から体部にかけて、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁部はやや鋭く内湾し、口唇部には丸味がある。内外面とも凹凸が目立ち、一見、手づくね造りを思わせるが輪積みによる成形である。外面は横方向にヘラミガキして整形しているが、丁寧になされていないため、縦方向のハケメ痕を残す。底部にもハケメ痕が顕著である。なお、体部には焼成時に生じた黒斑がある。内面はハケメ調整後ヘラミガキが部分的になされている。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫、砂粒を含む。焼成は不良。南東溝G区2層から出土。

甕形土器(14・15)

14は台付甕形土器で、甕底部と脚台部2/3程度の遺存である。脚台部はやや外湾ぎみに「ハ」字状に開き、甕は底部のみで形態は不明である。脚台部外面は底部と台部の結合部に指頭による押圧痕が残る。脚台部はヘラナデされるが、縦方向の粗いハケメ痕を残す。内面は指で輪積み痕を荒く消した後、粗いハケ状工具で横方向に軽く調整している。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒、細礫を僅かに含む。焼成は良好とはいえない。南コーナーI区1層から出土。

15は台付甕形土器で、脚台部1/2程度と甕底部が遺存する。脚台部はやや内湾ぎみに「ハ」字に開き、甕は底部のみで体部の形態は不明である。脚台部外面と底部との結合部は指頭による押圧がなされ、ヘラケズリにより整形した後、横方向にハケメ調整を施している。内面は斜方向にヘラナデされている。焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には砂粒、細礫を含む。焼成は良好である。北東溝D区1層から出土。

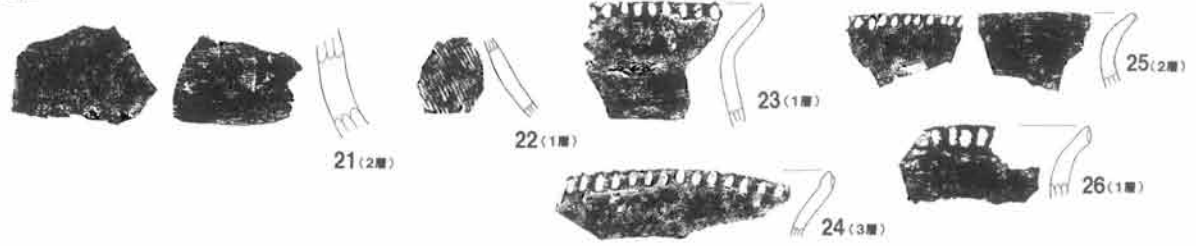
鳥形土製品(16)

当該周溝墓出土品の中でも注目すべきもので、嘴の部分が僅かに欠けるだけでほぼ完形品である。全長21.4cm、横幅は体部最大幅で11.7cmを測る。頭部は瘤状に突出し、嘴は薄く折り返し状に輪郭を設けて口は丸く開く。腹部は胃袋状にふくらむ。尾は短く、受け口状に開口している。全体の姿態は一見、鳩を思わせるが水鳥が無難と思われる。頭部には、僅かに指圧痕を残すがハケ状工具で調整する。尾部も同様である。体部(腹部)外面は、指頭でナデた後に、ハケ状工具で左から右方向に調整し、さらにヘラミガキしているが平滑さにやや欠けるところがある。胸の側面から背中にかけて、焼成時に生じたと思われる大きな黒斑がある。体部(腹部)内面は、ほとんど指ナデして整形し、嘴部は指ナデされる。頭部は指頭で押圧しながら整えている感じである。尾部は指ナデ後、ヘラナデして整形している。外面と尾部内面は焼成後に赤彩されている。製作方法は体部を上・下別々に製作して、それを継ぎ合わせた

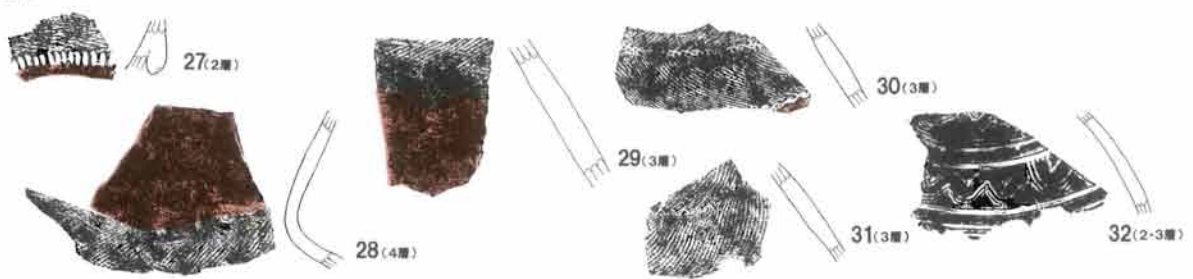
A区



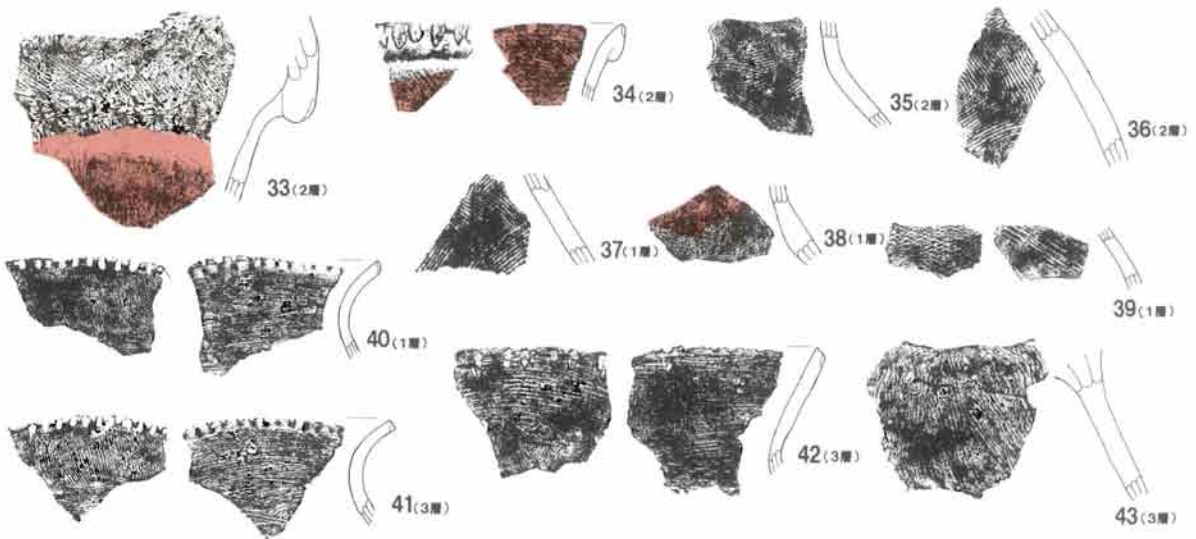
B区



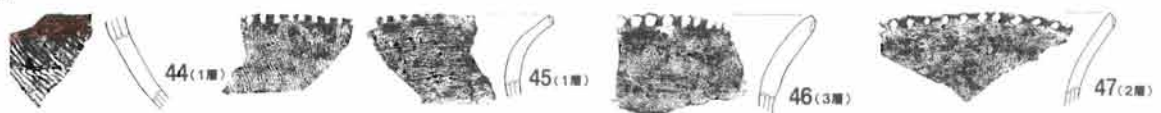
C区



D区



E区



第200图 17号方形周沟墓出土遗物3 (1/3)

後、頭部と尾部は手づくねで体部にそれぞれ接合させて完成したものと思われる。特に目や羽根を強調する痕跡はない。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は堅固で良好である。北東溝C区4層下位から出土。

土製勾玉(第195図3・4)

3は頭部と体部の一部が遺存する。長さ2.2cm・頭部幅は1.0cmを測る。頭部にふくらみはなく体部はやや太目。頭部には穿孔が2つあり、そのうち1つは貫通し、径1mmを測る。指による整形後、細かいハケ状工具で、一部をナデる。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明褐色(7.5YR5/6)である。南西溝J区2層から出土。

4は体部の一部と尾部が遺存する。長さ1.6cm・体部幅0.7cmを測る。体部から尾部にかけてゆるやかに湾曲する。全体に指による整形である。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。北東溝B区2層から出土。

以下の土器は、多くの住居跡を切って造られていた周溝墓の溝の覆土から出土したところから、住居跡からの流れ込みも考慮しなければならない。

A区出土

壺形土器17・18は複合口縁壺形土器の口縁部破片である。17は口縁部に刻みをもつ2本の棒状浮文を付し赤彩する。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)。18は折り返し部が横方向にヘラミガキ、直下は縦方向にヘラミガキする。内面は赤彩される。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)。19は頸部破片でゆるやかに外反し、ハケメ調整後ヘラミガキし赤彩する。肩部はLRの単節斜縄文を施す。色調は灰赤色(2.5YR4/2)。甕形土器20は口縁部の破片で、口唇部に刻みをもつ。頸部は縦と斜方向にハケ状工具で調整する。ゆるやかに外反する。色調は黒褐色(10YR3/1)。

B区出土

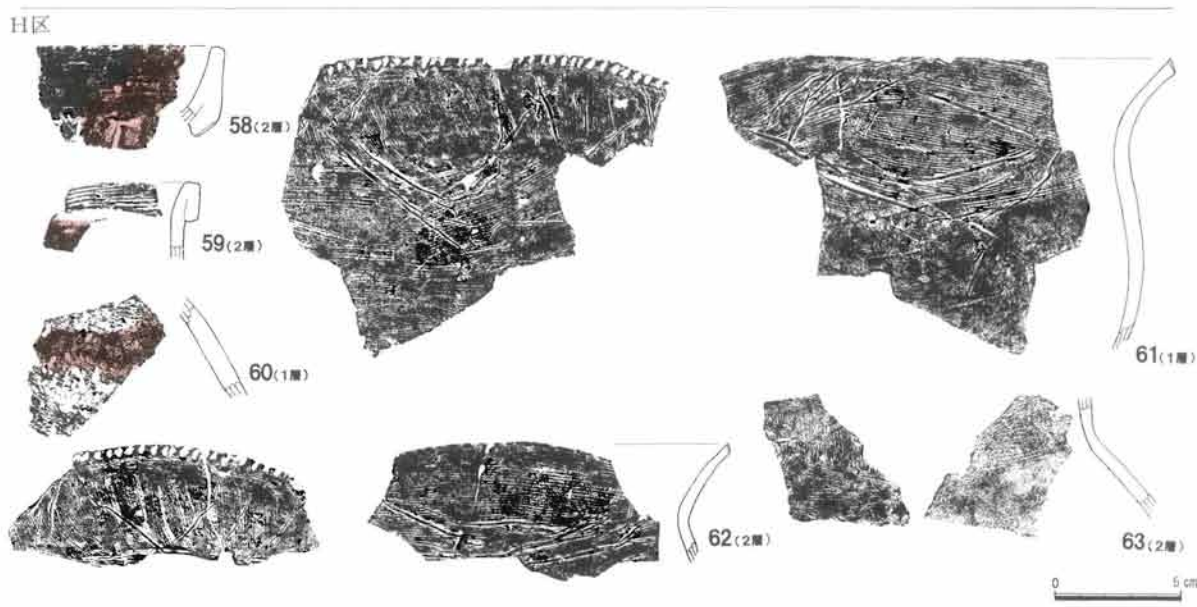
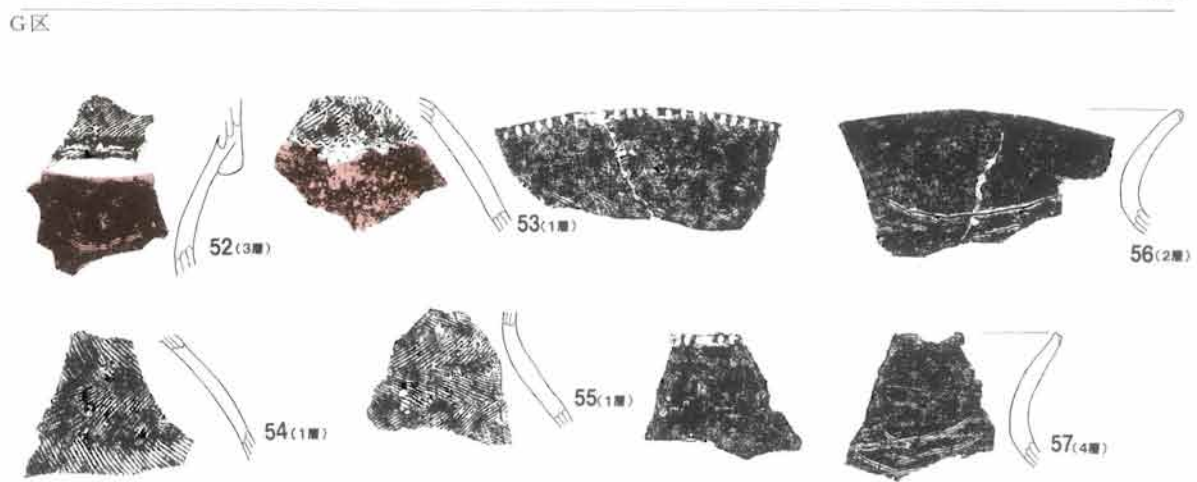
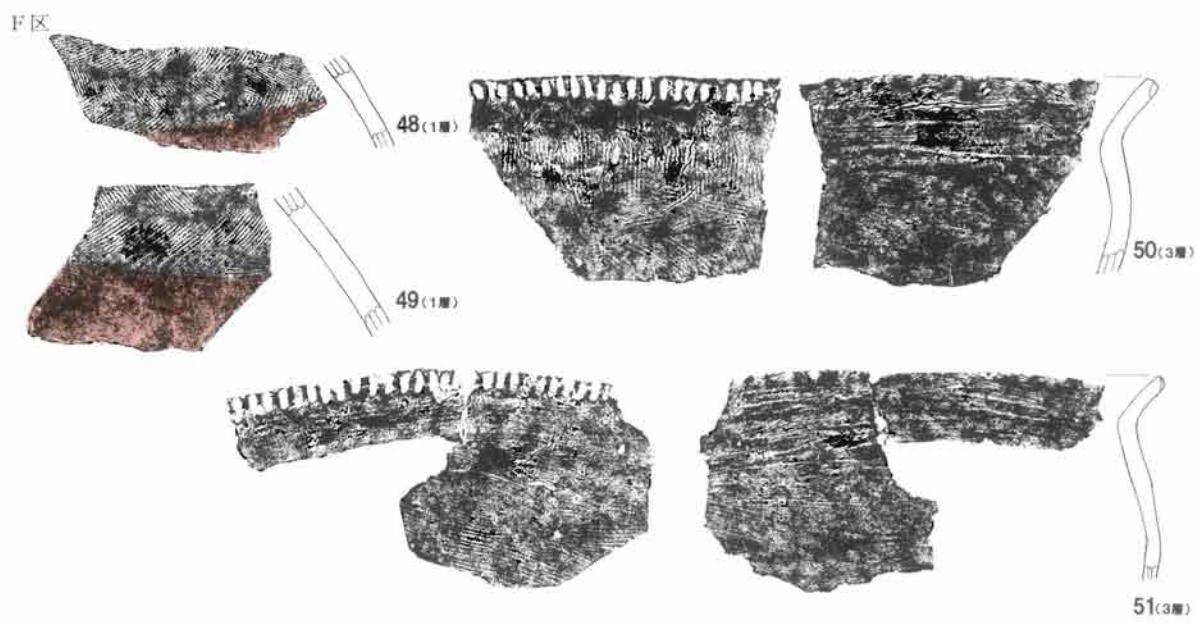
壺形土器21は頸部破片で、縦方向にハケメ調整後ヘラミガキする。S字状結節文を付す。内面は横方向のハケメ痕を残す。色調は黄灰色(2.5YR4/1)。22は肩部破片で、RLの単節斜縄文を施す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)。甕形土器23~26は口縁部破片である。23・24は口唇部に刻みをもつ。23は「く」字に屈曲し、24は直線的に外反する。25・26は口唇部に刻みをもち、ゆるやかに外反する。25は外面が縦方向、内面は横方向にハケメ痕を残す。26の焼成は堅固である。色調は23が灰褐色(5YR4/2)、24が灰褐色(7.5YR4/2)、25が褐灰色(5YR4/1)、26がにぶい赤褐色(5YR4/3)。

C区出土

壺形土器27は口縁部破片で、複合口縁部に付加条の縄文を施し、下端にヘラ状工具による刻みを付す。その下は赤彩される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)。28は肩部から口縁にかけての破片である。頸部はゆるやかに屈曲し、ヘラミガキして赤彩する。肩部はLRの単節斜縄文を施す。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)。29~32は共に肩部破片である。29はLRの単節斜縄文帯をS字状結節文で区画し、以下赤彩する。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)。30は上段がLRの単節斜縄文、下段がRLの単節斜縄文を各々S字状結節文で区画する。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)。31はLRの単節斜縄文をS字状結節文で区画する。以下赤彩する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)。32は櫛状工具による波状文と横線文を交互に施す。色調はオリーブ黒色(5YR3/1)。

D区出土

壺形土器33・34は複合口縁部の破片である。33は複合口縁部にRLの単節斜縄文を施し、下端には刻



第201图 17号方形周溝墓出土遺物4 (1/3)

みが加えられる。その下部と内面は赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4)。34は口縁部に刻みをもつ。内外面は赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3)。35は頸部破片で、R Lの単節斜縄文を羽状に3段施す。部分的にハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4)。36～39は肩部破片。36・37はL Rの単節斜縄文を羽状に3段施す。色調は36が黄灰色 (2.5YR4/1)、37が灰褐色 (7.5YR5/2)。38はR Lの単節斜縄文を施す。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4)。39は外面網目状捺糸文、内面は粗いハケメ痕を残す。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4)。甕形土器40～42は口縁部破片である。40・41は口唇部に刻みをもち外面は縦方向、内面は横方向にハケメ痕を残す。ゆるやかに外反する。42は口唇部に刻み。内外面ともに横方向にハケメ痕を残す。直線的に外反する。43は台付甕形土器の脚台部破片で、縦方向にハケメ痕を残す。僅かに内湾しながら「ハ」字状に開く。色調は40がにぶい褐色 (7.5YR5/3)、41がにぶい褐色 (7.5YR5/4)、42がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、43がにぶい赤褐色 (5YR5/4)。

E区出土

壺形土器44は肩部破片でR Lの単節斜縄文を施し、他は赤彩される。内面も一部赤彩される。色調は赤褐色 (10YR4/3)。甕形土器45～47は共に口縁部破片で口唇部に刻みをもつ。色調は45が暗褐色 (10YR3/3)、46が黄灰色 (2.5YR4/1)、47が灰黄褐色 (10YR4/2)。

F区出土

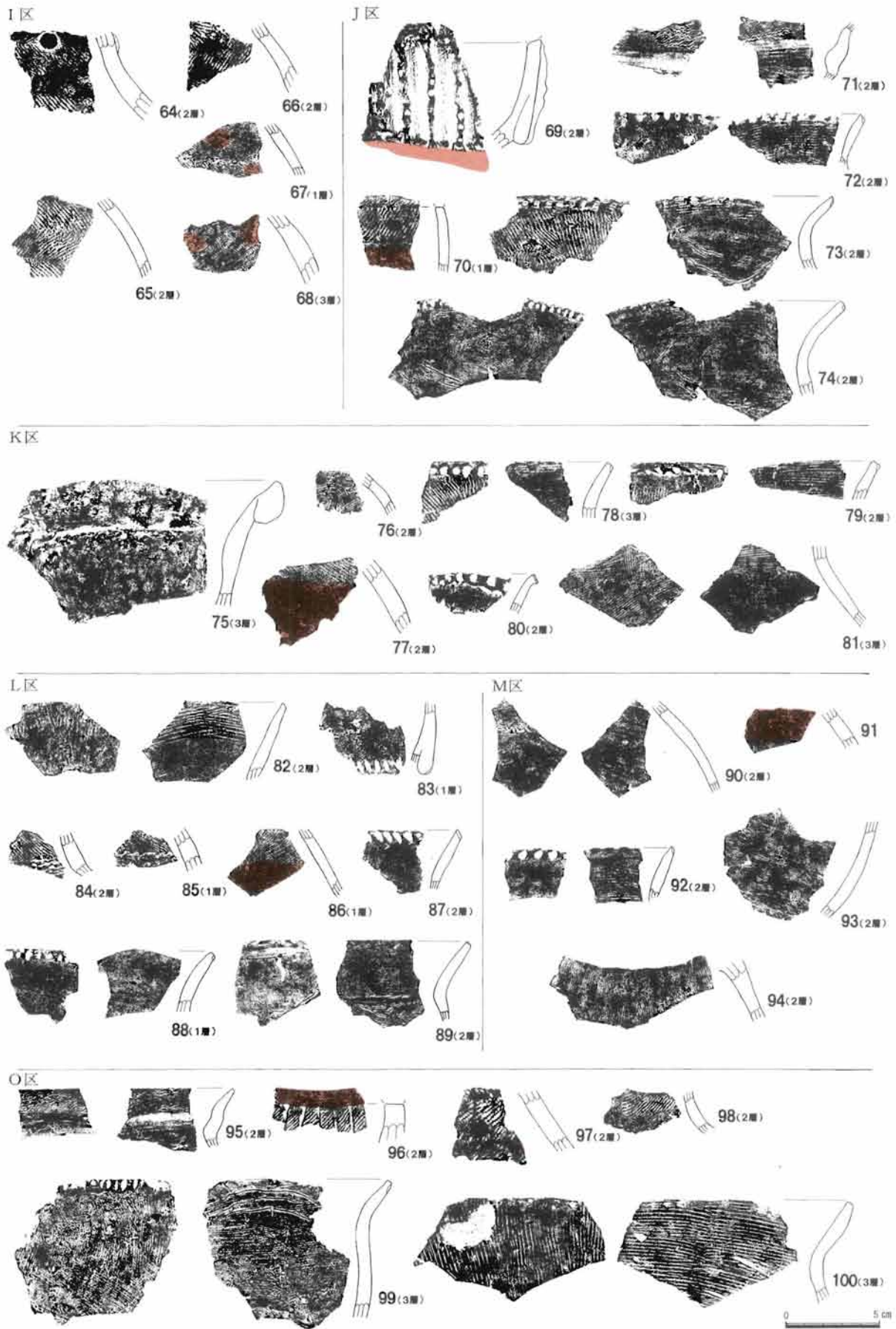
壺形土器48・49は共に肩部から体部にかけての破片。48は上・下段にL R、中段にR Lの単節斜縄文を施す。縄文帯を除き上下は赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3)。49はR Lの単節斜縄文を羽状に施す。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3)。甕形土器50は口縁部破片で、外面は上部に縦方向、下部に横ないし斜方向のハケメ痕を残す。内面は横方向にハケメ調整する。ゆるやかに外反する。色調は褐灰色 (10YR4/1)。51は口縁部破片でゆるやかに外反し、内外面ともに横方向のハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4)。

G区出土

壺形土器52は口縁部破片で、複合口縁部にL Rの単節斜縄文を施す。それ以下は赤彩される。内面も赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR4/3)。53は肩部破片でL Rの単節斜縄文帯の下を赤彩する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4)。54は肩部破片でR Lの単節斜縄文を3段羽状に施す。色調は灰黄褐色 (10YR5/2)。55は頸部破片でL Rの単節斜縄文を5段羽状に施す。内面は赤彩される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3)。甕形土器56・57は共に口縁部破片で口唇部に刻みをもち、ゆるやかに外反する。内外面ともヘラミガキされる。色調は56がにぶい褐色 (7.5YR5/4)、57がにぶい橙色 (7.5YR6/4)。

H区出土

壺形土器58・59は複合口縁部破片である。58は複合口縁部にハケメ調整後赤彩する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3)。59は複合口縁部に横方向のハケメ痕を顕著に残し、その下は赤彩される。色調は灰褐色 (5YR4/2)。60は肩部破片で上・下2段に網目状捺糸文を施し、その中間帯はヘラミガキ後赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3)。甕形土器61・62は共に口縁部破片で口唇部に刻みをもち、ゆるやかに外反する。61は横方向のハケメ痕を、62は外面縦方向、内面横方向にハケメ痕を残す。色調は61が灰褐色 (7.5YR4/2)、62が褐色 (7.5YR4/3)。63は頸部破片でゆるやかに外湾し、内外面ともに上部は縦方向、下部は横方向に細かいハケメ痕がみられる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2)。



第202図 17号方形周溝墓出土遺物5 (1/3)

I区出土

壺形土器64は頸部破片で、R Lの単節斜縄文の上に円形浮文を貼付する。ゆるやかに湾曲する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)。65・66は肩部破片で、R Lの単節斜縄文を羽状に施文する。色調は65がにぶい褐色(7.5YR5/4)、66がにぶい赤褐色(5YR5/4)。67は肩部破片でR Lの単節斜縄文を施し、S字状結節文で区画し一部に赤彩をもつ。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)。68は肩部破片でL Rの単節斜縄文が施される。一部赤彩される。色調は灰褐色(5YR4/2)。

J区出土

壺形土器69は複合口縁部の破片で、棒状浮文が貼付され刻みをもつ。口唇端部にはR Lの単節斜縄文が施される。複合口縁部以下は赤彩される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)。70は単純口縁壺形土器の口縁部破片でL Rの単節斜縄文を施し、下端をS字状結節文で区画する。以下赤彩が施される。口唇端部にも縄文がみられる。内面も赤彩されている。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)。71は頸部破片で、内外面共に網目状撚糸文を施す。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)。甕形土器72～74は口縁部破片で72は斜方向に、73は縦方向に、74は縦・横方向にハケメ痕を残す。口唇部にはともに刻みをもつ。色調は72がにぶい黄褐色(10YR5/3)、73がにぶい黄褐色(10YR5/3)、74がにぶい褐色(7.5YR5/4)、75がにぶい褐色(7.5YR5/4)。

K区出土

壺形土器75は複合口縁部破片である。胎土には白色粒子と雲母を多量に含む。風化が進んでいる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)。76は肩部破片で櫛状工具による施文がなされる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)。77は肩部破片でR Lの単節斜縄文帯をS字状結節文で区画し、以下赤彩される。色調は灰褐色(5YR4/2)。甕形土器78～80は口縁部破片で、ともに口唇部に刻みをもち、縦方向にハケメ調整する。色調は78がにぶい黄褐色(10YR5/3)、79が褐色(7.5YR4/6)、80が褐灰色(10YR4/1)。81は頸部破片で縦・横方向にハケメ痕を残す。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)。

L区出土

壺形土器82は単純口縁壺形土器の口縁部破片で直線的に外反する。外面は縦方向に、内面は斜方向にハケメ調整する。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)。83は複合口縁部の破片で細かいL Rの単節斜縄文を施し、下端には刻み目をもつ。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)。84は頸部破片でR Lの単節斜縄文を施し、3条のS字状結節文で区画する。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)。85は肩部破片でR Lの斜縄文を施し、1条のS字状結節文で区画する。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)。86は肩部破片でL Rの単節斜縄文を施し、以下赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)。甕形土器87～89はともに口縁部破片で87・88は斜方向に、89は縦方向にハケメ痕を残す。88はゆるやかに外反し、89はゆるやかに「く」字に屈曲する。色調は87がにぶい黄橙色(10YR6/3)、88がにぶい橙色(7.5YR6/4)、89が黒褐色(10YR3/1)。

M区出土

壺形土器90は肩部破片で、網目状撚糸文帯をS字状結節文で区画し、以下丁寧なヘラミガキしている。内面には横方向の粗いハケメ痕が残る。色調は赤褐色(10YR4/4)。91は肩部破片でRの無節斜縄文を施し、その上に赤彩を施す。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)。甕形土器92は口縁部破片で口唇部に刻みをもつ。ほぼ直線的に外反する。外面はヘラミガキし、内面は横方向のハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)。93は体部破片で、斜方向のハケメ痕がみられる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)。

94は台付甕形土器の脚台部の破片で、縦方向のハケメ痕を残す。「ハ」字状に開くか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）。

○区出土

壺形土器95は口縁部破片で網目状撚糸文を施す。一段の稜をもって外反する。焼成は堅緻である。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）。96は複合口縁部破片でLRの単節斜縄文を施した上に、ヘラ状工具で鋭く5本の沈線文を切り込んで、棒状浮文を模している。口唇端部にもLRの単節斜縄文を施し、赤彩する。内面は丁寧なヘラミガキ後赤彩される。色調は灰黄褐色（10YR4/2）。97は肩部破片でLRの単節斜縄文を施し、円形赤彩文を付す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）。98は頸部破片でLRの単節斜縄文を施す。ゆるやかに外反する。色調は灰褐色（5YR4/2）。甕形土器99は口縁部破片で外面は縦・斜方向にハケメ痕を残す。ゆるやかに外反する。胎土には白色粒子が目立つ。内面は横方向にハケメ痕を残す。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）。100は口縁部破片でゆるやかに外反し、外面は縦方向、内面は横方向にハケメ痕を残す。色調は灰黄褐色（10YR4/2）。

第3節 古墳時代後期の住居跡

11号住居跡（第203～205図）

〔位置〕 C-10G。

〔住居構造〕（平面形）正方形。（規模）520×516cm。（主軸方向）N-90°。（壁高）45～57cmを測り、南壁はゆるやかだが、全体にはほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅18～28cm・下幅5～13cm・深さ6～12cmを測り全周する。（床面）カマド前が部分的に硬化しているが全体に軟弱である。（カマド）北壁中央から東に偏って位置する。長さ130cm・幅200cmを測る。天井部・袖部は灰色粘土を被覆させ構築している。覆土は、1層 暗褐色土（7.5YR3/3）粘土粒子、焼土粒子を含む。2層 暗褐色土（7.5YR3/4）焼土粒子・小ブロックを多く含む。3層 暗褐色土（7.5YR3/3）焼土粒子・小ブロックを含む。4層 暗赤褐色土（5YR3/4）焼土ブロック。5層 黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む。（柱穴）対角線上の4本が主柱穴である。（貯蔵穴）カマド右側の北東コーナーに位置する。80×60cmの長方形を呈し、深さ75cmを測る。

〔覆土〕

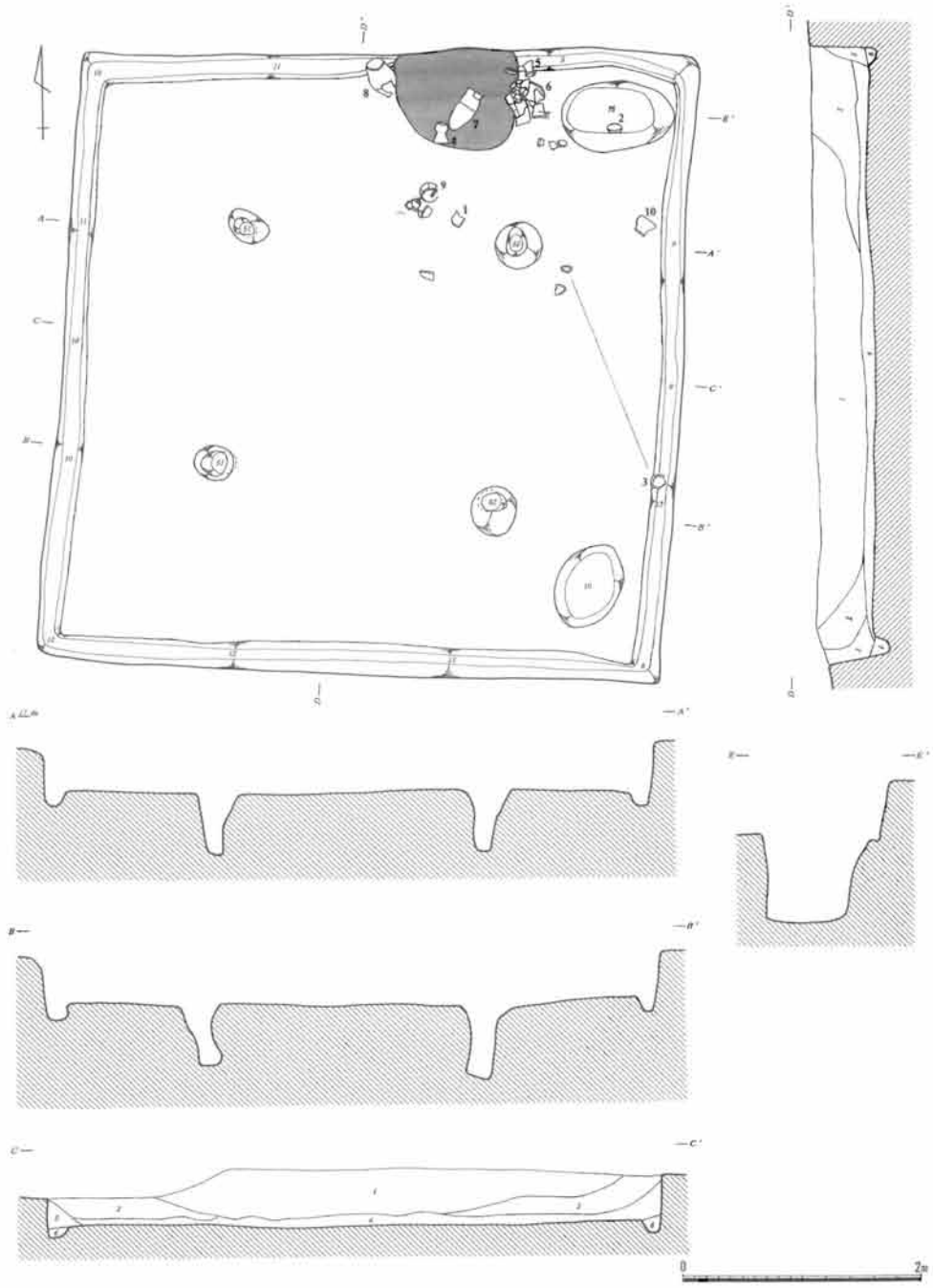
- 1層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕カマド周辺に多量に出土した。

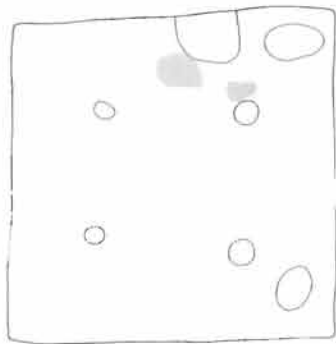
〔時期〕古墳時代後期。

11号住居跡出土遺物（第206図）

土師器坏形土器（1・2）

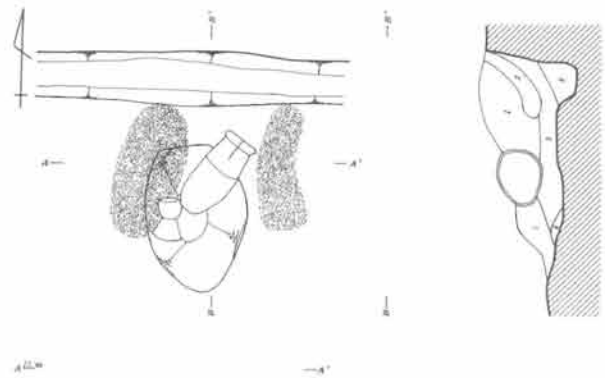


第203图 11号住居跡 (1/60)



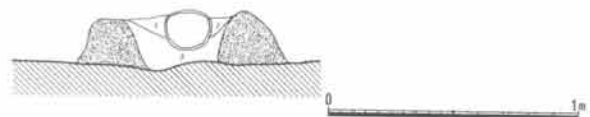
第204图 床硬化面

1は1/3程度の遺存度である。推定口径19.2cm・器高5.1cmを測る。器形はやや偏平ぎみの丸底の底部から、体部は内屈して立ち上がり、口縁部は僅かに内湾しながら開く。口縁部内外面の調整はヨコナデ。体部と底部の内外面はナデられるが、外面は斜位のヘラ削り痕が残る。色調は、内面は黒褐色（10YR3/1）、外面はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。胎土には砂粒、1mm大の細礫を含む。住居中央から北によった床面上の出土である。



第205図 11号住居跡カマド（1/30）

2はほぼ完形で、口縁15cm・器高4cmを測る。丸底ぎみの底部から、内湾気味に開き、体部上位に明瞭な段を有し、口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ、以下ナデられるが底部外面にはヘラ削り痕が残る。色調は内外面ともに黒褐色（10YR3/1）を呈し、黒色処理が施される。胎土には砂粒、輝石を含む。貯蔵穴からの出土である。



土師器埴形土器（4）

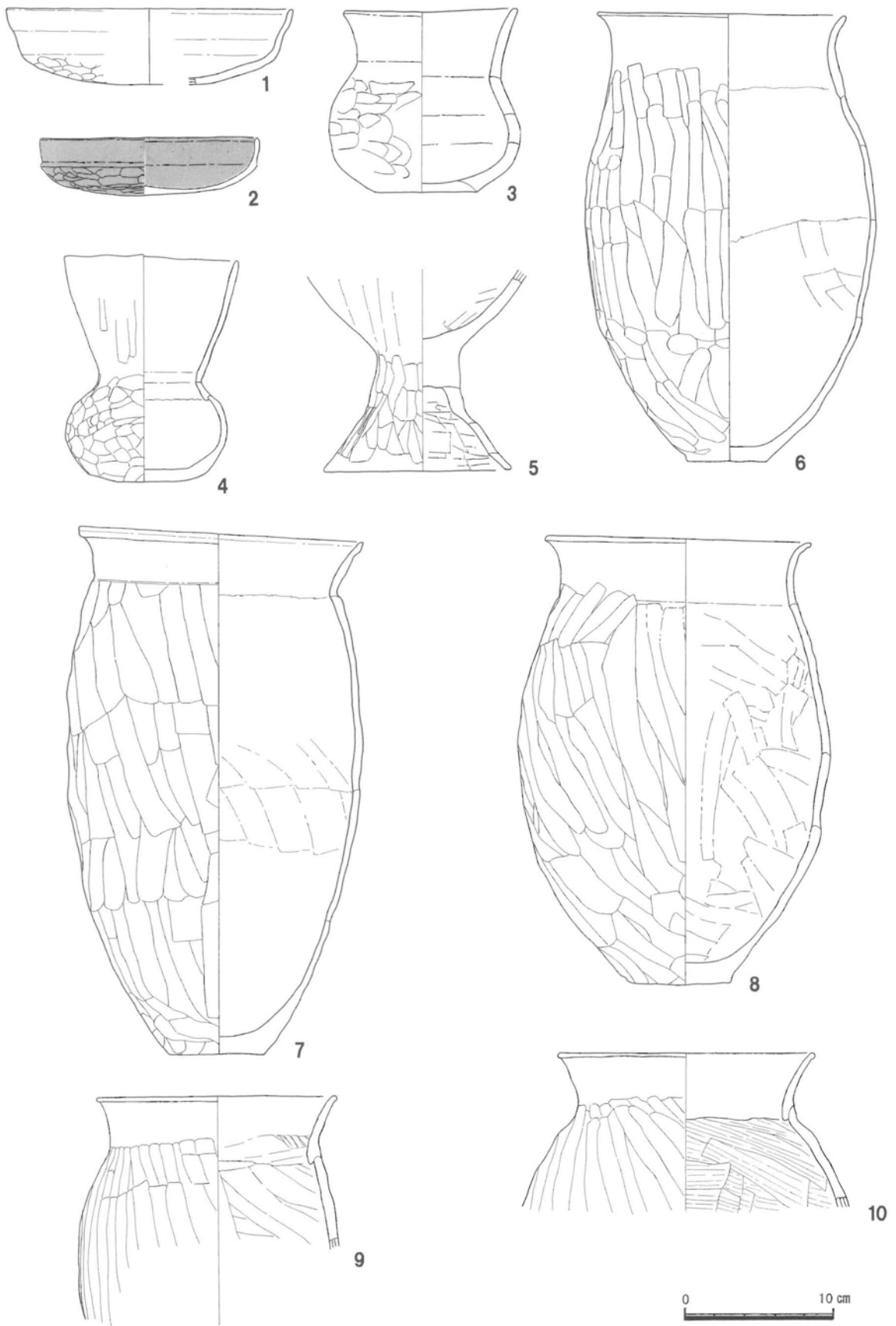
完形で、口径11.5cm・底径4.0cm・器高15.5cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部は算盤玉状を呈する。頸部は屈曲し、長い口縁部は直線的に外反する。口唇部はヨコナデ。口縁部外面は縦方向にヘラナデされるが、内面はヨコナデされる。体部と底部の外面はヘラナデされるが、ヘラ削り痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には砂粒、細礫、輝石を含む。カマド上から7の土器とともに出土しており、底部に火を受けた痕がある。

土師器甕形土器（3・5～10）

3は小形の甕形土器で、2/3程度遺存する。口径12cm・底径7cm・器高12cmを測る。底部は平底で、体部は球状を呈し、頸部でややくびれて口縁部は僅かに外傾する。口縁部内外面はヨコナデ。以下内外面ともにナデられるが、体部と底部の外面にはヘラ削り痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には砂粒、細礫、輝石、1～2mmの黒色粒子を含む。住居東側壁溝上と床面上からの出土である。

5は台付甕形土器と推測される。甕部底部と脚台部のみ遺存する。裾径12.6cm。甕部は内湾しながら立ち上がる。甕部と脚台部の間が分厚く、脚柱部は直線的に伸び、裾部へかけて開く器形である。甕部内面、脚部内面はヘラナデされるが、ヘラ状工具痕が残る。甕部外面、脚台部内外面はヘラナデされるが、甕部外面と脚柱部外面にはヘラ削り痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には砂粒、細礫多くを含み、雲母を僅かに含む。カマド東側の壁際から出土している。

6～10は長甕。6はほぼ完形。口径16cm・底径5.4cm・器高31.5cmを測る。平底の底部から立ち上がり、最大径を体部中位にもち、やや膨らむ器形である。口縁部はゆるやかに外反する。口頸部内外面ヨコナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、縦方向のナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、体部には棒状黒斑が見られる。胎土には砂粒、細礫を多く含み、雲母を僅かに含む。カマド東側からの出土である。



第206图 11号住居跡出土遺物 (1/4)

7はカマドに掛かっている状態で、4の埴形土器とともに出土した土器で、ほぼ完形。口径19cm・底径6cm・器高35.8cmを測る。底部は平底で、体部はやや膨らむ器形である。頸部には明瞭な稜をもち、口縁部はやや外反する。口唇部は直立気味に調整され、僅かな窪みが一周する。口唇部内面にも僅かな窪みがめぐる。口頸部内外面ヨコナデ、以下内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、縦方向のナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には砂粒、細礫を含み、雲母を僅かに含む。

8は体部1/4程度を欠くがほぼ完形。口径17.6cm・底径7cm・器高30.5cmを測る。丸底気味に粗く削られた底部から、中位にやや膨らみをもつ体部へとゆるやかに立ち上がる。頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面ヨコナデ、以下内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、縦方向のナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。色調は、灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、体部には棒状黒斑が見られる。胎土には砂粒、細礫を多く含み、雲母を僅かに含む。カマド西側の壁際からの出土である。

9は体部中位以下を欠損する。口径15.9cmを測る。僅かに膨らみを持つ体部から口頸部にかけてゆるやかに外反する。頸部には輪積痕が明瞭に残る。口頸部内外面ヨコナデ、以下内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、縦方向のナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には砂粒、細礫を多く含み、雲母を僅かに含む。カマド南側床面上の出土である。

10は口頸部と体部上半1/3程度遺存する。推定口径17.2cmを測る。球状を呈すると思われる体部から頸部でくびれ口縁部は外反する。頸部には輪積痕が残る。口頸部内外面ヨコナデ、以下内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、縦方向のナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、砂粒、細礫と僅かに雲母を含む。住居東側の壁際からの出土。

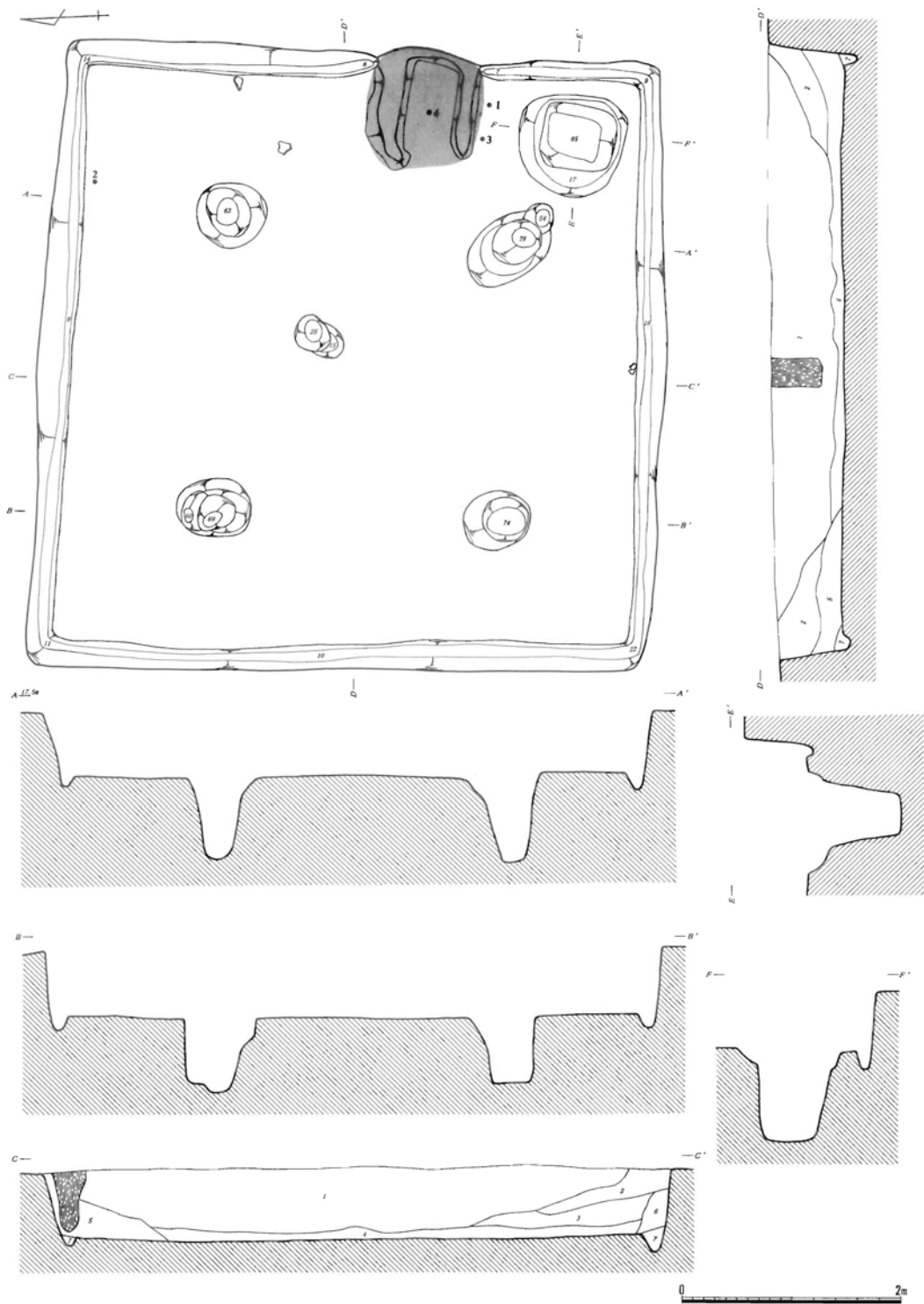
12号住居跡(第207~209図)

〔位置〕C-11G。

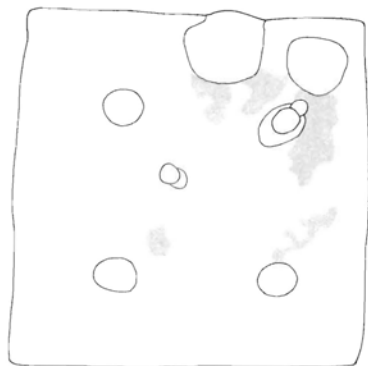
〔住居構造〕(平面形)正方形。(規模)570×560cm。(主軸方向)N-80°-W。(壁高)56~68cmを測り、南・北壁はゆるやかだが、東・西壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)上幅18~30cm・下幅5~13cm・深さ6~22cmを測り、カマド部分を除いて全周する。(床面)カマド前から南側が一部分硬化している。(カマド)東壁中央からやや南に偏って位置する。長さ160cm・幅180cmを測り、天井部・袖部は暗灰色粘土を被覆させ構築している。覆土は、1層 暗赤褐色土(5YR3/4)粘土粒子を多く、焼土粒子・小ブロックを僅かに含む。2層 暗赤褐色土(5YR3/6)焼土粒子・小ブロックを多く含む。3層 暗褐色土(10YR3/3)焼土小ブロックを僅かに含む。4層 暗褐色土(7.5YR3/4)粘土粒子、焼土粒子・小ブロックを含む。5層 暗褐色土(10YR3/3)粘土粒子を多く含む。焼土粒子を含む。6層 暗褐色土(10YR3/3)ローム小ブロックを僅かに含む。(柱穴)支柱穴4本で構成される。(貯蔵穴)カマド右側の南東コーナーに位置する。70×60cmの長方形を呈し、深さ85cmを測る。また、貯蔵穴周囲に深さ17cm前後の堀り込みを巡らせている。蓋を掛ける施設ではないかと思われる。

〔覆土〕

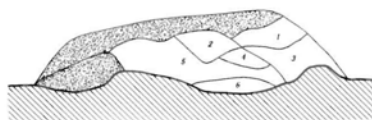
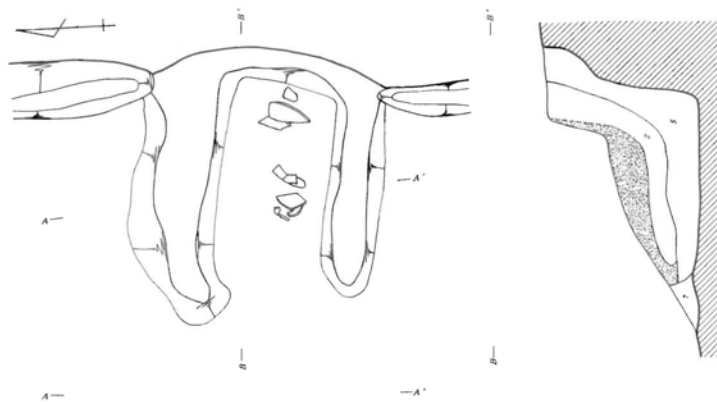
- 1層 黒色土(10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。



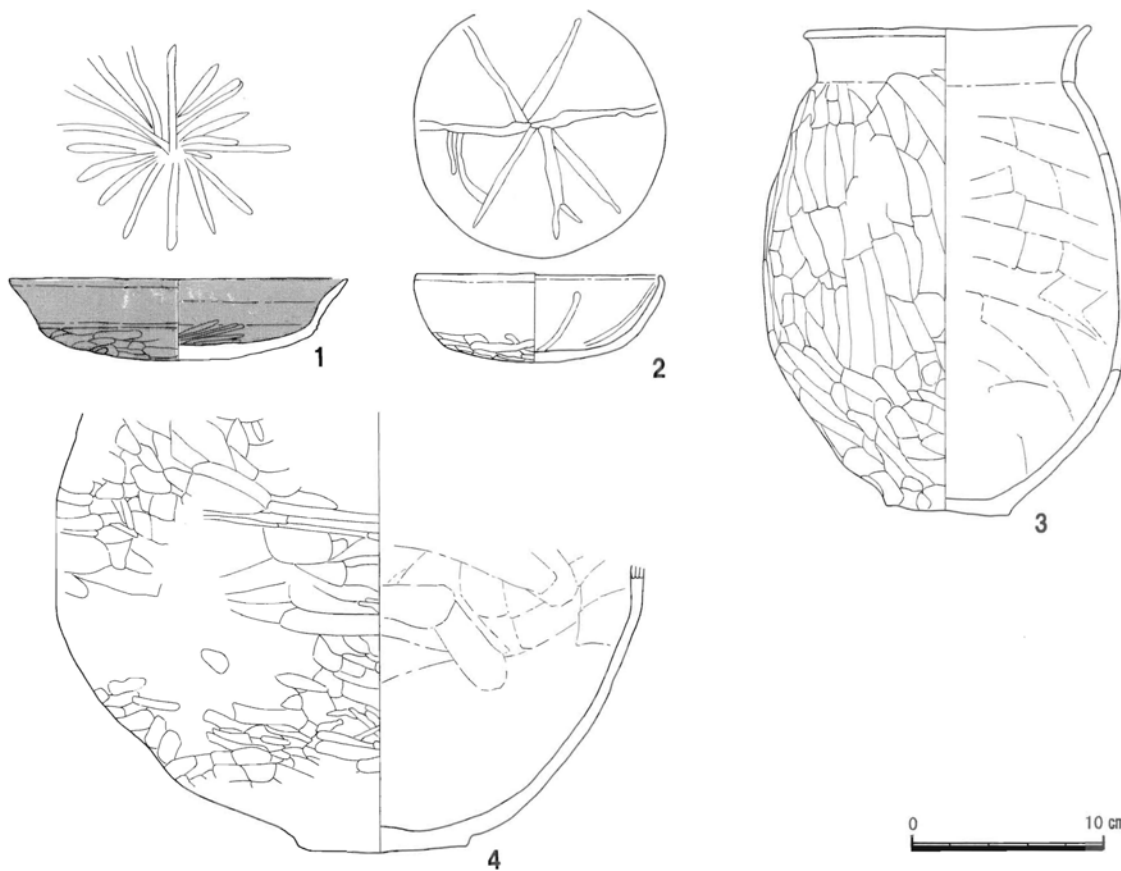
第207图 12号住居跡 (1/60)



第208図 床硬化面



第209図 12号住居跡カマド (1/30)



第210図 12号住居跡出土遺物 (1/4)

5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。

6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 カマド、貯蔵穴付近から多く出土した。

〔時期〕 古墳時代後期。

12号住居跡出土遺物 (第210図)

土師器坏形土器 (1・2)

1は1/3程度遺存する。推定口径18cm・器高4.3cmを測る。丸底の底部から、体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部に段をもち口頸部は外反する器形である。口頸部内外面はヨコナデされる。以下ヘラナデされるが、底部外面にはヘラ削り痕が残る。底部内面には放射状の暗文が施される。色調は黒褐色 (10YR3/1) を呈し、黒色処理される。胎土には砂粒、細礫を僅かに含む。雲母と輝石を含む。カマド南側からの出土。

2は完形。口径12.8cm・器高4.7cmを測る。やや丸底気味の底部から、僅かに内湾しながら立ち上がり、口唇部は若干屈曲する。口頸部内外面はヨコナデされる。以下ヘラナデされるが、底部外面にはヘラ削り痕が残る。底部内面には放射状の暗文が施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には砂粒、細礫と僅かに雲母を含む。住居北側壁際からの出土である。

土師器甕形土器 (3・4)

3はほぼ完形の長甕。口径14.7cm・底径6.3cm・器高26.8cmを測る。体部中位に最大径をもち、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面ヨコナデ、以下内面ヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、体部には棒状黒斑が一部に見られる。胎土には砂粒、細礫、雲母を含む。カマド南側からの出土。

4は大型の丸甕の体部中位以下が遺存する。底径8.9cmを測る。粗く削られた平底気味の底部から立ち上がり、体部は球状を呈する。内面はヘラナデ。外面はヘラ削り後ヘラナデが施されるが、ヘラ削り痕が残る。体部中位の横方面のヘラナデは光るほどである。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、外面体部中位には僅かに煤が付着する。胎土には砂粒、細礫を含む。カマド南側からの出土である。

第4節 土坑

345号土坑 (第211図)

〔位置〕 D-3G。

〔構造〕 180号住居跡に切られる。(平面形) 正方形。(規模) 65×65cm・深さ60cm前後を測る。坑底は平坦で、壁の立ち上がりは南壁がゆるやかで、北壁は急斜である。(長軸方位) N-25°-W。

〔覆土〕 黒褐色土。(10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

348号土坑（第211図）

〔位置〕 B-1G。

〔構造〕 238号住居跡を切る。（平面形）楕円形。（規模）145×120cm・深さ25cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。（長軸方位）N-35°-E。

〔覆土〕 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 小破片1点

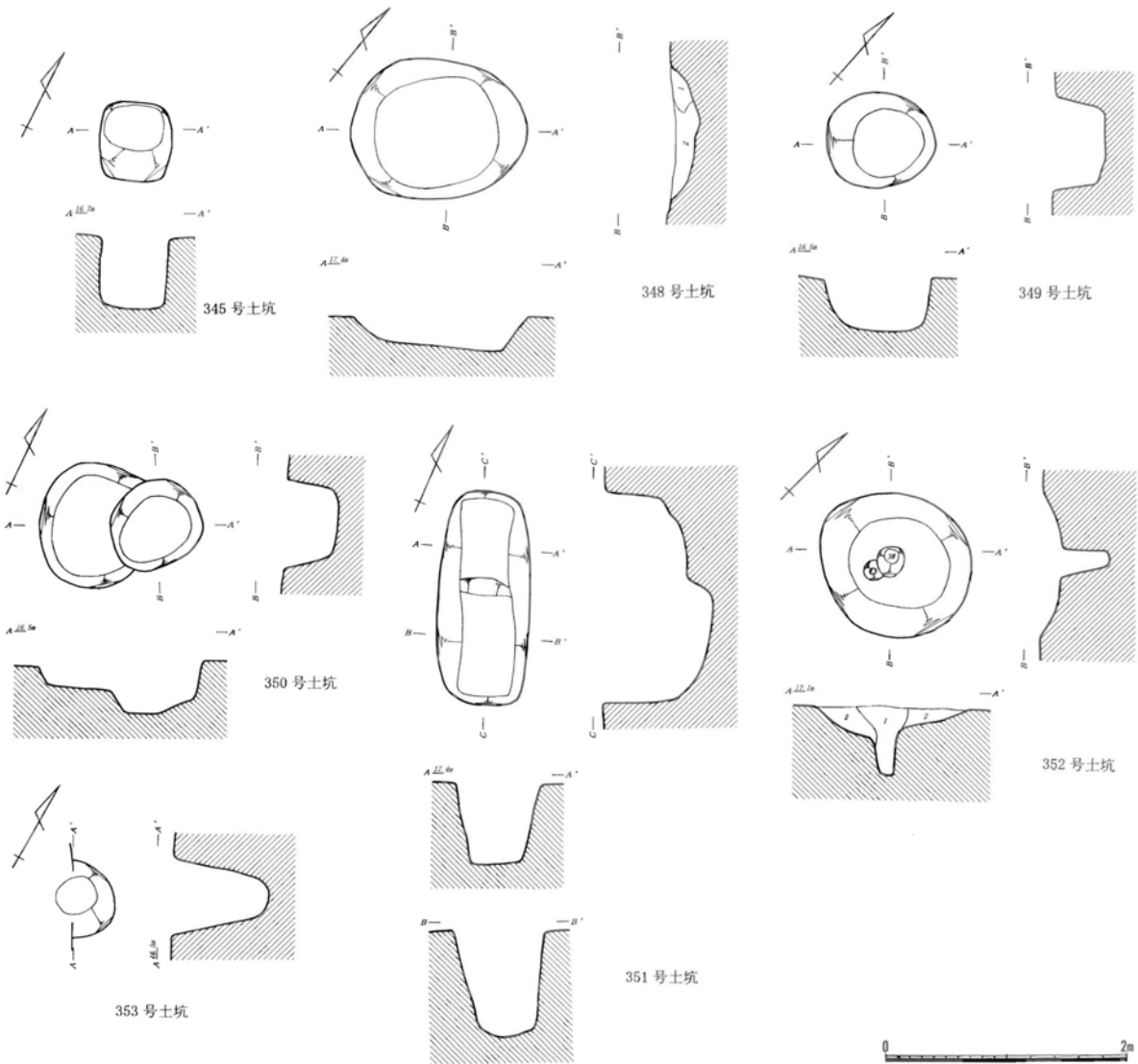
〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

349号土坑（第211図）

〔位置〕 B-1G。

〔構造〕 238号住居跡を切る。（平面形）楕円形。（規模）92×80cm・深さ46cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。全体に整った形状をなしている。（長軸方位）N-42°-E。

〔覆土〕 黒褐色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。



第211図 土坑（1/60）

〔遺物〕 小破片が2点。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

350号土坑（第211図）

〔位置〕 C-2G。

〔構造〕 238号住居跡を切る。（平面形）不整楕円形。（規模）135×85cm・深さ19～43cmを測る。坑底は段差があり、壁は急斜に立ち上がる。（長軸方位）N-45°-E。

〔覆土〕 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。

〔遺物〕 小破片4点。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

351号土坑（第211図）

〔位置〕 E-12G。

〔構造〕（平面形）長方形。（規模）185×78cm・深さ55～90cmを測る。坑底の中央に20cm前後の段差があり、壁は急斜に立ち上がる。全体に整った形状をなしている。（長軸方位）N-20°-W。

〔覆土〕 黒色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。粘性に欠ける。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

352号土坑（第211図）

〔位置〕 E-8G。

〔構造〕（平面形）円形（規模）125×124cm・深さ55cmを測る。坑底中央には径25cm・深さ40cmのピットがある。覆土の堆積状態から柱などを立てた可能性が大きい。壁はゆるやかですり鉢状である。（長軸方位）N-40°-W。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム小ブロック、炭化材片を多く含む。

2層 黒褐色土（10YR2/3）。ローム粒子を多く含む、炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

第3章 まとめ

1 弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡について

今回の発掘調査で検出された住居跡は72軒を数えたが、この中には住居跡の大半が調査区域外にあり、大型の方形周溝墓や住居跡同士の重複により全体が不明のものもある。しかし、これらの住居跡の中には注視すべき点がいくつかあり、ここではそれらについて若干触れてみたい。

(1) 住居跡の平面形と規模

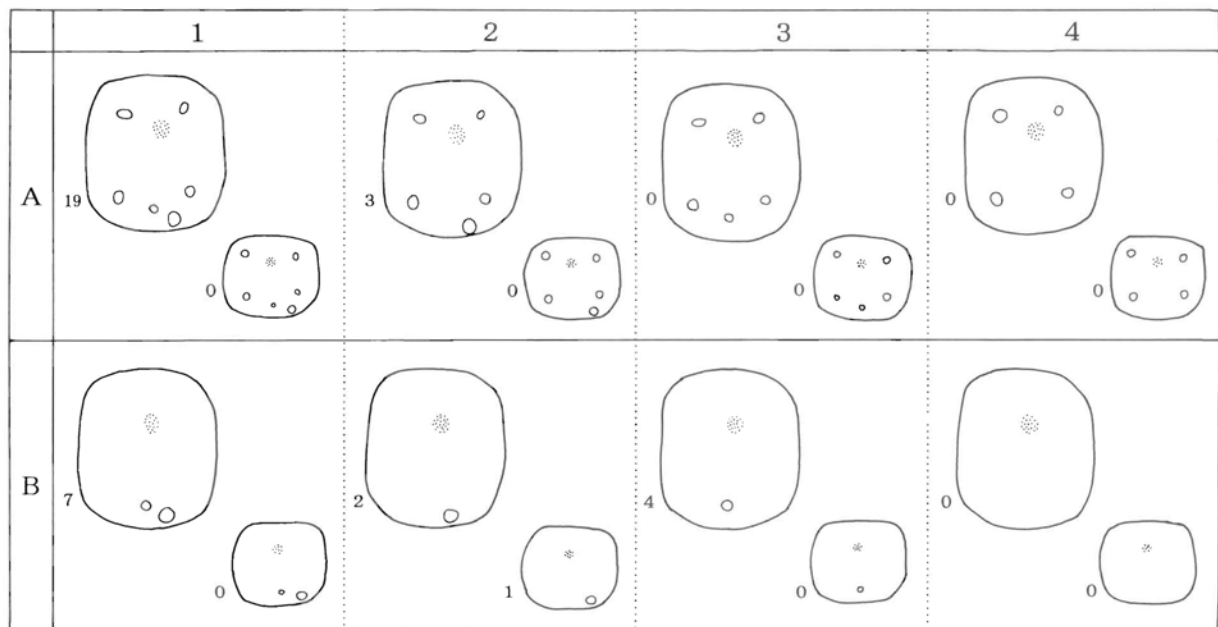
平面形には、長方形・隅丸長方形・楕円形・正方形・隅丸正方形・円形などが存在する。ただし、長方形・正方形といったものも壁が直線的でなく、弥生時代的な住居の形といえなくもない。

次に、長軸の長さを基準にして規模をみると、最小のもので2.4×2.0m、最大のもので7×5.4m（短軸6.7mという住居跡もあり、柱穴や炉跡の位置からして長軸は7mを優に越しそうであるが）という住居跡がある。

長軸の長さについては推定できるものも含めて60軒の住居跡がある。その内訳をみると2m台2軒（3%）、3m台17軒（28%）、4m台13軒（22%）、5m台16軒（27%）、6m台9軒（15%）、7m台3軒（5%）となり、3～5m台の住居跡が多くを占めていることがわかり、しかも比較的小型のものが優勢である。

ところで、長・短軸の長さを知ることができた住居跡は44軒あったが、その差が10cm以内にあるものは10軒を数えた。これらの住居跡は5m台（5×4.9m）の1軒を除いて小型の住居跡である。

また、時期・規模が明らかである弥生時代末葉16軒、古墳時代初頭17軒の住居跡の中で、平面形が正方形に近いものは各々1・6軒であり、その比率が異なっていることがみてとれる。これは、従来から指摘されてきたように住居の正方形化が進むという傾向に合致するものである。



第212図 住居跡の形状

(2) 住居内の施設と住居の形状

住居内には様々な施設があり、今回調査した住居跡にも炉・柱穴・貯蔵穴（凸堤が付随するものもある）・出入口の昇降に使われた梯子を固定したとされるピット（梯子穴）・壁下をめぐる壁溝などがあった。また、ベッド状遺構と呼称されている施設をもつ住居跡もある。ここでは支柱穴・貯蔵穴・梯子穴のそれぞれのあり方から、住居の形状の違いをみてみたい。なお、炉跡の検出されなかった住居跡は除いた。

第212図は縦長（主軸＝長軸）の住居跡を支柱穴の有無により2分し、更に貯蔵穴・梯子穴のあり方を加味してモデル化したものである。なお、数例ある横長（主軸＝短軸）の住居跡はこれに付随させた。

ここに設定した8種のモデルは理論上の組み合わせであって、これに沿って分類できたものは全住居跡の半数にみえない39軒を数えるにすぎない。しかし、ここに表れた数値をみてみると、ある程度のまとまりは知ることができるようである。つまり、

- 半数を越える22軒と最多のA Iは、4本の支柱穴と貯蔵穴・梯子穴の全てを備えている住居で、最も基本的な形と考えられる。それ以外の住居はこれから派生したものであり、どれかを省略したものと考えられる。
- A I・IIとした25軒の住居跡は、横型の1軒を除き4～7m台の規模をもつものに対して、B I～IIIの14軒の住居跡は4m台以下で3m台が大半を占める。住居の小型化と住居内の柱の有無が関連していることは明らかである。

(3) 住居跡に堆積する暗赤褐色土壌について

今回の調査では、住居の一角に砂粒・細礫を含む暗赤褐色を呈する土壌が認められる住居跡があり、本遺跡のこれまでの調査でも検出されている。

このような類例については、荒川水系や多摩川水系を中心とする地域に分布していて、農耕祭祀を行った施設（祭壇）として積極的に捉えようとする考え方がある（小倉 1990）。

暗赤褐色の土壌は、炉の反対側を入口とした場合、その右側のコーナー付近にあるのが大部分であり、ときには同じような位置にある貯蔵穴を覆うように検出される。

この土壌については、今回掲載することができなかったが、蛍光X線分析と顕微鏡観察などによる報告がある。それを要約すると、熱を受けている可能性が高いこと、暗赤褐色を呈する色調は水銀や鉛によるものではなく鉄に起因するものであるが、直接ベンガラによって着色された可能性が低いこと、他の部分の覆土よりマンガンが比較的多く含まれていることなどがあげられている。

以上のことから、他で焼かれて赤化した土壌を、住居内の特定の場所に置くという行為があり、それが住居の廃絶後あるいは貯蔵穴が機能を失った後に行われたということが考えられる。

また、暗赤褐色土壌中に含まれるマンガンについてであるが、これは一般的に水田土壌に集積するといわれている。本分析からはそれを示したという状況的な証拠は得られなかったが、農耕祭祀との関連を問おうとしたときには興味をもたれる分析結果である。

2 弥生時代末葉から古墳時代初頭の土器について

ここでは、住居跡から出土した土器について概観してみたい。

今回の調査で検出された住居跡は72軒であるが、まとまった土器が出土した住居跡がみられず、完形

	甕A類	甕B類	壺A類	壺B類	高坏A類	高坏B類	高坏C類	鉢類
I 期								
II 期								

第 213 図 出土器の分類

品も少ないという実情がある。そのためここでは、比較的出土量の多い甕形土器の器形と、調整技法の特徴を基本として分類を行うことにとどめ、共伴する他の壺形土器や高坏形土器、鉢形土器とともに簡単にまとめることにする。

今回出土した甕形土器について、まず口唇部に刻みが施されるものをA類、口唇部に刻みをもたず横ナデされるものをB類として分類する。A類はB類より多く出土していて、180Y-3、181Y-4、183Y-2~4、195Y-3、196Y-3、200Y-2・3、226Y-1、227Y-3、240Y-3などを中心とするものである。B類には187Y-3、194Y-2、209Y-1、236Y-1、251Y-3などの土器がある。

A類とB類は、さらに口頸部の成形の特徴から、180Y-3や181Y-4などのように頸部がゆるやかにくびれて口縁部が外反する土器と、187Y-3や241Y-2などのように頸部がやや「く」字状に屈曲し口縁部が直線的に外反する二つのタイプに分けられる。また、それぞれに残されているハケメ調整に注目すると、前者では器面がヘラナデされるものの、口頸部は縦方向、体部は横か斜方向、甕底部以下は縦方向のハケメ痕が明瞭に残されているのに対して、後者はハケメ痕をあまり残さず、ハケメの方向も不規則になる傾向が認められる。

以上のように、A類とB類にはともに、口頸部の形状とハケメ痕のあり方に違いがみられた。先行する土器研究によると、甕形土器については新しくなるほど口頸部の屈曲が強くなり、ハケメ痕も消される傾向にあるとされる。これを参考にして口頸部のくびれがゆるやかで、ハケメ痕が比較的明瞭なものをI期、口頸部の屈曲が強くなり、ハケメ痕があまり残らないものをII期として設定した。

次に、壺形土器や高坏形土器、鉢形土器について、甕形土器との共伴関係を基本にしながら検討してみたい。

壺形土器は出土数が少なく分類が困難であるが、複合口縁の土器をA類、単純口縁の土器をB類とした。

A類は187Y-1、215Y-1、234Y-1・2などがあるが、肩部の縄文が羽状構成で、上下を2条のS字状結節文によって区画される188Y-1・2は比較的古い要素をもちI期に置いた。なお、複合口縁部外面に単節羽状縄文が施される215Y-1は、より古い時期が与えられよう。複合口縁部外面に文様をもたず、頸部の屈曲が強くなるという新しい要素をもつ187Y-1、234Y-1・2、244Y-1は甕形土器との共伴関係などからII期に置かれる。

B類では、頸部の屈曲がゆるやかで、体部が下膨れを感じを残している199Y-1、231Y-1にやや古い要素がみられI期に含まれると考えられる。他の土器は頸部の屈曲が強まり、体部が球形化するという比較的新しい変化を示している。216Y-1・2、234Y-3、241Y-1は、甕形土器との共伴関係などからII期に置いた。

高坏形土器もやはり出土数が少なく、細かい分類は困難である。ここでは簡単なまとめを行うこととし、坏部に段を有するものをA類、坏部が碗状になるものをB類、坏部が鉢状になるものをC類と分別した。A類には240Y-1が、B類には183Y-1、250Y-2・3が、C類には186Y-1、194Y-1が該当する。これらの土器と伴出した甕形土器の関係をみると、I期にはA類の240Y-1とB類の250Y-2・3が、II期にはB類の183Y-1とC類の194Y-1が伴う。僅かな資料で判断するのは危険であるが、A類→B類→C類という変遷が考えられなくもない。

ここで鉢形土器とした土器は、甕形土器の形をもちながら丁寧なヘラミガキがあったり、赤彩された

りするものである。ほとんどが甕形土器と共伴していて、Ⅰ期には231Y-3、251Y-1が、Ⅱ期には234Y-6、236Y-2が置かれる。Ⅰ期とⅡ期の差異をみると、前者では最大径が体部にあるのに対して、後者ではそれが口縁部に移る。また、Ⅰ期のもは赤彩される傾向にあるようである。これからすると238Y-1はⅠ期に含まれる可能性がある。

以上のように出土土器について簡単にまとめてみた。ここで取り上げた土器は、床面上出土の実測可能な比較的遺存度の高いもので、全てを概観したとはいえない。重複する住居跡もあるが、なにぶんにも出土量が少なく現段階で可能な範囲での分析にとどめた。また、17号方形周溝墓出土土器との関連も本来述べたいところであるが、集落の全体像を把握した段階で考えてみたい。ただし、住居跡との切り合い関係から、今回出土した住居跡の主な土器群が、17号方形周溝墓出土土器に先行することは明らかである。

今回設定したⅠ期は弥生時代末葉から古墳時代初頭に、Ⅱ期は古墳時代初頭と考えられるが、さらに細分化の作業が必要と思われる。

西原大塚遺跡の土器群の推移や編年の細分化、集落の変遷については当遺跡の調査が進んだ段階で稿を改めて考察したい。

3 方形周溝墓について

(1) 西原大塚遺跡における方形周溝墓

西原大塚遺跡では、これまで20基近くの方形周溝墓が検出されている。その多くは、一辺が10m前後の規模で、弥生時代後期～古墳時代前期にかけてのものである。こうした中で、今回報告する17号方形周溝墓と、この地点から約100m離れた所に存在し、すでに報告済みの1号方形周溝墓（尾形 1990）と最近その一部が報告された10号方形周溝墓（尾形 2000）は、共に一辺が20m級の大型の方形周溝墓で、いずれも溝の一辺にブリッジをもつ。

ところで、西原大塚遺跡周辺の方形周溝墓の分布（武蔵野台地と一部荒川低地）をみると、市内では市場裏遺跡、上福岡市権現山遺跡、富士見市北通遺跡・東台遺跡、三芳町本村南遺跡、所沢市宮前遺跡・東の上遺跡、新座市新開遺跡、朝霞市ハケタ中道遺跡・向山遺跡、和光市新倉午王山遺跡・榎堂遺跡などがあるが、一辺が20m級の方形周溝墓は数少ない。

ここで、注目すべき例をあげてみると（第214図）、

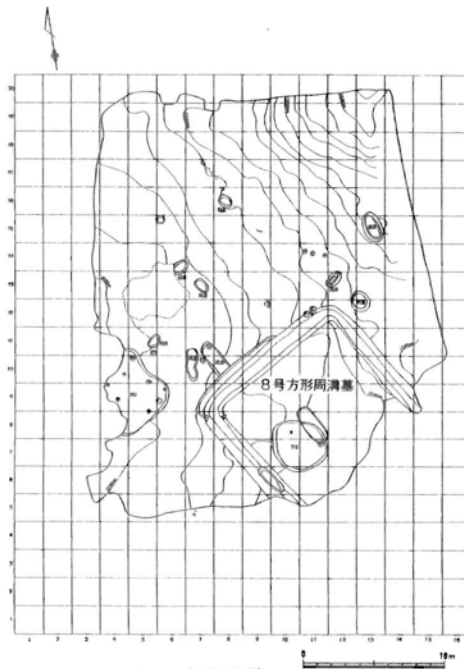
西原大塚遺跡の北方約7kmに位置する権現山墳墓群は、これまで11基の方形周溝墓が確認されているが、そのうち2号周溝墓は前方後方形の周溝墓（後方部は一辺20mの正方形、前方部は10mまで確認されたが詳細は不明）で、遺物は高坏形土器・焼成前底部穿孔の壺形土器・折り返し口縁をもつ大型壺形土器などが出土している。時期は五領期とされている。その他、1号周溝墓も前方後方形の可能性があり、7号周溝墓の規模は、19.5×20mとある（笹森 1982～1984、上福岡市 1999）。

北通遺跡は本遺跡の西を流れる柳瀬川の対岸に位置する。8号方形周溝墓は南溝が土取りにより破壊されているが、東西溝の外側は12mを測り、確認できた主体部から鉄剣・ガラス小玉31個が出土し、北溝中の壺棺墓の土器は弥生時代末～古墳時代前期のものとして報告されている（高橋 1987）。

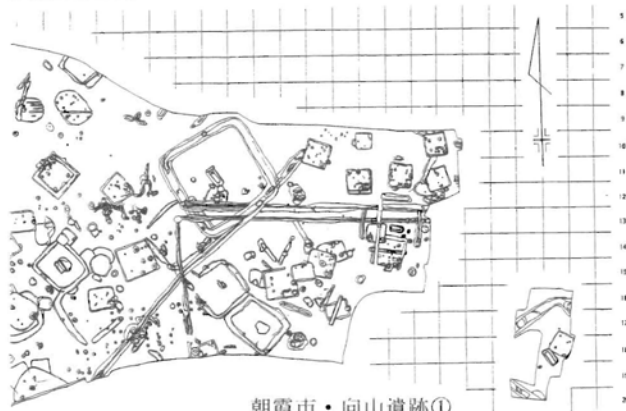
本遺跡の東方約4.5kmに位置する向山遺跡は部分的な報告のため詳細は不明だが、主として弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓が約40基あり、その中には一辺15mを超え主体部から鉄剣やガラス玉が出土している方形周溝墓も存在する（照林1995・2000）。



上福岡市・権現山墳墓群



富士見市・北通遺跡



朝霞市・向山遺跡①



朝霞市・向山遺跡②

(各報告書より)

第214図 周辺地域の方形周溝墓

以上のような周辺の事例と比較した場合、17号方形周溝墓は規模の大きさと出土遺物の様相から、権現山墳墓群2号周溝墓や北通遺跡8号方形周溝墓と並んで、北武蔵南部の「首長墓」とも考えられる。

西原大塚遺跡には前述したとおり、当該17号方形周溝墓を含めて3基の大型方形周溝墓が確認されている。すでに報告されている1号方形周溝墓は遺物が少なく判断材料に乏しいが、壺形土器の口縁部や頸部、甕形土器の口唇部や口縁部、高坏形土器の脚台部などから判断して、一応、弥生時代後期末（弥生時代IV段階）に相当するものと思われる。

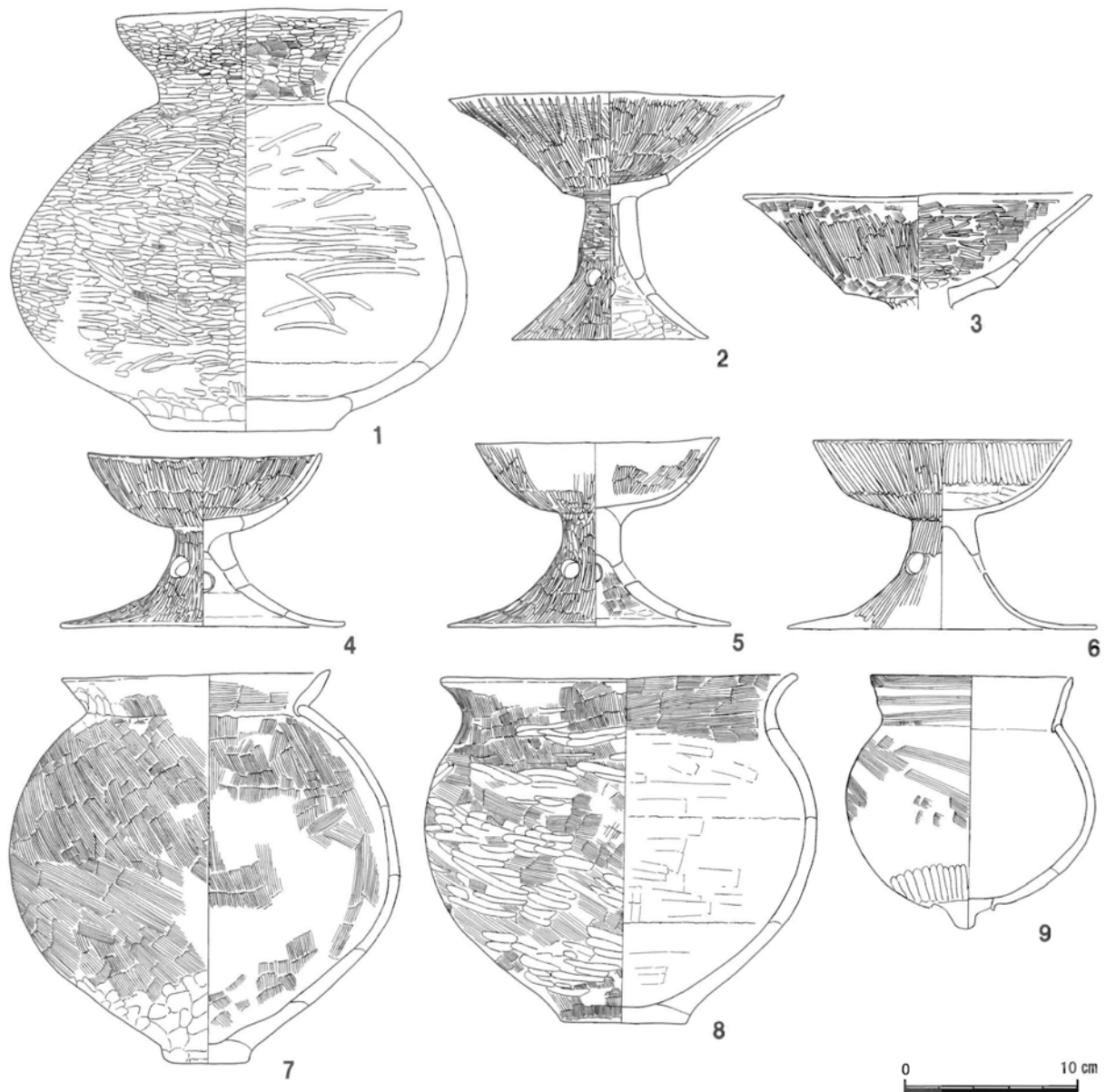
10号方形周溝墓については既に報告されている以外に、未発表ではあるが平成9年度に当地の区画整理事業に伴う発掘調査で、ほぼ中央にブリッジをもつ南溝が検出されている。ブリッジ東側からは溝底から僅かに浮いた状態で、破碎されたような土器がまとまって出土したが、今回参考資料としてここに掲載することにした（第215図）。

1は単純口縁壺形土器である。器高24.5cm・口径16.5cm・底径10.5cmを測る。肩部から頸部にかけて「く」字に鋭く屈曲し、口縁部は僅かに内湾しながら開く。肩部は張らずゆるやかに内湾し体部に至る。最大径は体部中位にあるが、こころもち下膨れ状で、玉葱状あるいは算盤玉状を呈する。体部下位は鋭く内湾し底部に至る。製作は粘土帯を積み上げたものと思われるが、ヘラケズリは少なく器壁は厚く重量感がある。全体に丁寧なヘラミガキで整形されている。色調は赤褐色（10YR4/3）を呈する。器面は赤彩される。口縁部内面も丁寧なヘラミガキ後赤彩される。体部のヘラミガキは粗い。胎土・色調から在地性の強い土器といえる。時期は古墳時代I段階古相（五領I式期古相）に比定してみた。

2は高脚高坏形土器である。器高14.5cm・口径19.5cm・裾径10.5cmを測る。坏底部に稜をもち、脚台部から口縁にかけてゆるやかに外反する。脚柱部は長く、やや膨らみをもっている。裾部は打楽器のシンバルのように大きく広がる。裾部の上位には、3ヶ所の透し孔をもつ。坏部は極めて薄い、脚柱部は厚くつくられているため、全体的に重量感があり安定度が高い。内外面とも丁寧なヘラミガキがなされ、ハケメ痕を僅かに残すが極めて平滑である。実に洗練された土器である。基盤である坏の底部には粘土の上塗りがなされている。胎土は精良な粘土を用い、色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。外来系土器とみる。搬入品の可能性もある。類例として奈良県纏向遺跡東田地区土坑3から出土の高脚高坏形土器があげられる。従って、時期は庄内I式（纏向2式）期と考えたい。

3は高坏形土器である。口径20cm・坏部のみの高さ6cmを測る。脚台部は欠損している。坏部の形態は2とほぼ同じである。坏底部には、円形の刳り貫き部分があるところから、坏部と脚台部はソケット式にはめ込んで製作したものと思われる。坏部外面はヘラケズリ後、細かいハケ状工具で口縁部直下と体部下位部は横方向に、体部は縦方向に丁寧に調整されている。底部は指頭によって調整する。内面も横方向にハケ状工具で調整されるが表面の凹凸は十分に消されず、平滑さに欠けるところがある。内外面ともに赤彩される。胎土には細礫がかなり含まれ、色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）である。2の形態の土器を摸して製作した在地の土器といえる。時期はほぼ2の時期に並行するものと思われる。

4～6は塊形高坏形土器である。4は坏の底部と裾部の一部を欠くが、ほぼ完形品である。器高10cm・口径13.5cm・裾径16.5cmを測る。坏底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、半球状を呈する。脚台部は脚柱部が低くゆるやかに開き、裾部に至って打楽器のシンバルのように大きく開く。従って口径が裾径より小さい。裾部の上位のところに3ヶ所透し孔をもつ。坏部外面は縦にヘラケズリ後、丁寧にヘラミガキを繰り返して整形している。脚台部外面も縦方向に丁寧にヘラミガキして整形する。坏部内面は丁寧にヘラミガキされ暗文はない。脚柱部内面は指ナデで整形し、裾部は指ナデ後、細かいハケ状



第215図 10号方形周溝墓出土遺物 (1/4)

工具で横方向に調整している。なお、坏部から脚柱上部にかけて外面は黒色の光沢があり極めて平滑である。胎土には細礫が僅かにみられるが、精良な粘土を用いている。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) である。焼成は良好で堅緻である。5は器高11cm・口径14cm・裾径16cmを測る。遺存度は1/2程である。色調は橙色 (2.5YR6/6) を呈する。6は器高11.1cm・口径15cm・裾径18cmを測る。坏部は1割程、脚台部は1/2程欠損する。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) である。5・6は製作技法・胎土・焼成ともに4と同じくする。

ところで、4～6の3個の碗形高坏形土器は、庄内系碗形高坏形土器にみられるような脚裾部の屈曲がなく、器面も横ではなく縦方向にヘラミガキがなされ、坏部内面に放射状暗文がないところから、畿内ではなく東海地方西部のものを摸倣して製作された外来系の土器と思われる。類例は畿内の纏向遺跡辻地区土坑や東海地方西部の廻間遺跡・朝日遺跡出土の各碗形高坏形土器があげられよう。従って、時期は庄内2式 (廻間Ⅱ式) に相当するものと考えたい。

7は甕形土器である。器高22.5cm・底径4.5cmを測る。体部を一部欠損し、遺存度は4/5程である。頸部は「く」字状に鋭く屈曲して、口縁部は直線的に開く。肩部から体部にかけては球状で、体部最大径はやや上位に位置し逆卵形を呈する。体部下位にかけて鋭く内湾して小さな平底の底部に至る。一見「庄内甕」を思わせるが、器面には叩き目は残っていない。体部の器壁はかなり薄い。外面は左側からの斜方向のハケメ痕を残す。頸部と底部の立ち上がり部は、指頭による押圧痕を顕著に残す。なお、体部中位には炭化物の付着が見られる。胎土は砂粒を含み、細礫が僅かにみられる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)である。畿内の庄内甕を摸倣して製作したと思われ、時期は古墳時代I段階古相(五領I式期古相)としたい。類例としては美里町志渡川南遺跡3号住出土の甕形土器があげられる。

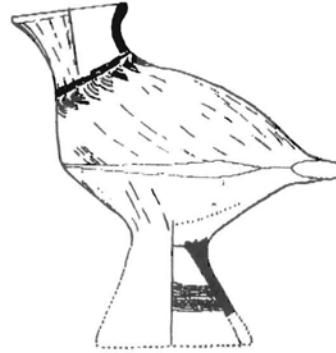
8は鉢形土器である。器高20cm・推定口径20.6cm・底径7cmを測る。遺存度は、口縁部1/4・体部1/2程である。口頸部はゆるやかに外湾する。体部最大径は中位にあり、全体に球状を呈する。底部は平底である。口唇部は指で軽くナデられる。頸部は縦方向、体部は横又は斜方向にハケメ調整した後、軽くヘラミガキされる。底部の立ち上がりには指頭による押圧痕がある。口縁部内面は横方向にハケメ痕を残す。体部はヘラナデされる。胎土には砂粒を含み、細礫も僅かにみられる。焼成は普通で、色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。時期は古墳時代I段階(五領I式期)に相当しよう。

9は台付甕形土器である。口径12cmを測る。器高は脚台部が欠損するため不明である。口縁部は幅広く2段の弱い凹凸をもって僅かに外反する。いわゆる「5」字を呈するといえないこともない。体部は球状を呈する。甕部の底面にはヘソ状の突起が露出していて脚台部にソケット状にはめ込む状態で製作したと思われる。口縁部外面はヘラケズリ後、口縁部は横方向、体部は横ないし斜方向にハケ状工具により調整した後、部分的にヘラミガキしている。胎土には白色粒子を多く含み、焼成は良好である。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。薄く化粧土をかけた(スリップした)可能性がある。外来系土器で北陸系のいわゆる「月影式」の土器を摸倣して製作した可能性も否定できない。類例として美里町志渡川南遺跡3号住から出土の甕形土器があげられよう。時期は古墳時代I段階古相と思われる。

以上の10号方形周溝墓出土の一括土器の観察から、築造時期を古墳時代I段階古相とすると、17号方形周溝墓を後述するように古墳時代I段階新相と置けば、3基の方形周溝墓の関係は、1号→10号→17号と新旧関係を設定することが可能となる。このことは当地を支配した「長」の地位を継承してきた被葬者の墳墓の変遷を物語ることになる。従って、17号方形周溝墓の被葬者と柳瀬川の左岸に存する北通遺跡の8号方形周溝墓の被葬者と権現山墳墓群の2号周溝墓の被葬者は、それぞれの地域を支配しながら互いに棲み分けていたと考えられようか。問題はこの次の段階、いいかえれば、高塚古墳築造の段階にどう連らなるのか。残念ながら、今日までこの地域にはいわゆる“前期古墳”といわれるものの確認がなされていなかった。ところが、最近、朝霞市向山遺跡において4世紀末頃と推定される円墳が検出されたとの発表があり(照林 1998)、上記の周溝墓の間にはまだヒアタスがあるとはいえ、その連なりを考える契機がやっと出てきたように思われる。今後、注目されるところである。

(2) 17号方形周溝墓出土の鳥形土器(土製品)について

周溝墓上の葬送儀礼については、これまで方形周溝墓を精力的に探求されてきた福田聖氏(但し、氏は最近出版された『方形周溝墓の再発見』において、それ以前の諸論文を再検討されているが)の儀礼プロセス論が一つの参考になる。火を使用した儀礼(福田 1992)については、いささか引きつけられるものがあり、当該17号方形周溝墓においても注意していたが、溝中覆土に炭化物・焼土の堆積層を検



静岡県・蔵平遺跡出土



神奈川県・羽根尾堰ノ上遺跡出土

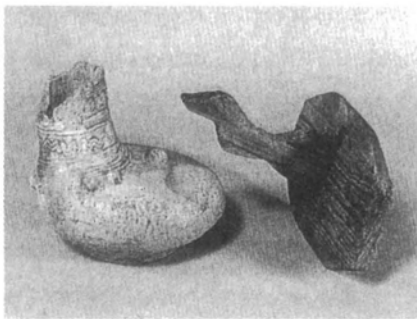
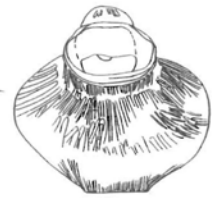
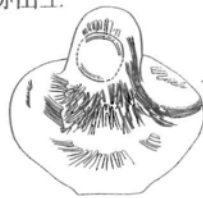
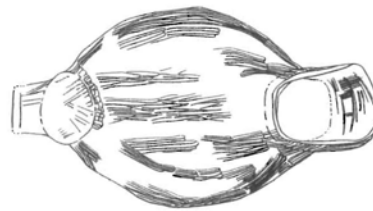
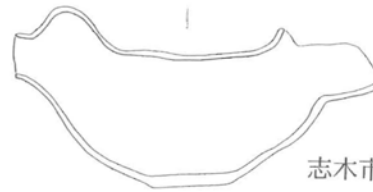
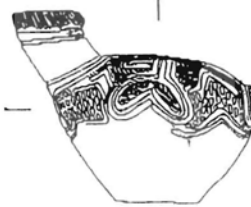


図6 鳥形土器（左）と板に差し込まれた鳥形木製品（右）

石川県・八日市地方遺跡出土
（季刊考古学・別冊9より）



志木市・西原大塚遺跡出土



長野県・塩崎遺跡群出土
（各報告書より）

第216図 鳥形土器（土製品）の類例

出すことはできなかつた。また、出土土器を火に当てた痕跡（煤の付着など）もほとんどなく、火の使用を伴う儀礼が行われた状況を確認することはできなかつた。

17号方形周溝墓で行われた葬送儀礼を考えるうえで注目すべき遺物に、北東溝の突出部脇のテラス部分の4層下位（ほぼ溝底にあたる）から、あたかもそこに置かれたような状態で出土した鳥形土器（土製品）がある。胎土・色調からして在地の製作のようである。

これまで弥生時代の鳥形土器の出土例は、鳥形木製品の出土（大阪府池上遺跡、奈良県纏向遺跡、石川県八日市地方遺跡など）に対して少なく、静岡県蔵平遺跡、愛知県朝日遺跡、長野県塩崎遺跡群、福井県吉河遺跡、神奈川県羽根尾堰ノ上遺跡、石川県八日市地方遺跡、岡山県甫崎天神山遺跡などにあり（第216図）、その用途は何らかの液体を入れる容器と考えられた。しかし、矢納健志氏は羽根尾堰ノ上遺跡（弥生時代中期末）の報告書の中で「頭部と尾部を欠損していたため、全形を再現できないが、頭部から尾部に向かって赤色顔料にて、8本ないし9本の線が半放射状で描かれ、その間に円形文を3～4点描いていることなど製作面から見て容器としての機能をもたず、祭儀を執行するにあたって、重要な機能を果たすもの」と判断されている（矢納 1986）。また、野中・福田両氏は鳥形木製品について「奈良県四条古墳の周溝から鳥形木製品が出土したことから、古墳時代における鳥形木製品に関する観念が「穀霊の運搬者」から「死者の魂の運搬者」へと変わっていった。そして大阪府雁屋遺跡での鳥形木製品の出土は「死者の魂の運搬者」の観念が、弥生時代まで遡る可能性を示す」と述べている。こうしたこれまでの研究成果をふまえて、当該17号方形周溝墓出土の鳥形土器も次のように考えることができるのではなからうか。

全体が赤彩されているこの鳥形土器は、体部が空洞になっていて腹部下端は一応平坦に作られていて置ける状態になっている。招き寄せた祖霊に捧げる酒などを盛った容器としての使い方が想定できる。

次に考えられるのは、この鳥形土器は嘴部が小さく開口していて、尾部にもこれに倍する大きさの孔があいている。嘴部ないし尾部の孔に唇を当てがい、息を吹き込むことにより天界から祖霊を呼び寄せるといふ祭祀用具としての使い方である（この際に音を出した可能性も考えて実験的に吹いてみたが、共鳴度が弱く「ポー」という低く弱い音しか発しなかつた）。

それはともかく、この鳥形土器は北東溝のほぼ中央のブリッジ状の高まりの一端から出土し、反対の端からは畿内系の二重口縁壺形土器（祭祀用の供献土器）が対となって出土しているところから、このブリッジ部分で、何らかの葬送儀礼なり土器祭祀が取り行われたことを推測させるに十分なものがある。最後に蛇足になるが、この鳥が具体的に何をさすのか。ハト・カモなどいろいろな名があげられているが、近くを流れる柳瀬川で現在もみられる水鳥が無難であろう。

(3) 17号方形周溝墓出土土器について

当該方形周溝墓からの出土土器は、それほど多くはない。それに加えて、西原大塚遺跡の調査は約18万㎡のうち、まだ約20%前後が終ったにすぎない。今後、方形周溝墓群として把握される可能性もあり、その意味で、西原大塚遺跡における集落と墳墓の土器編年は将来に先送りした方が妥当かと考えた。従って、ここでは今回調査した17号方形周溝墓出土の土器（第198・199図）について、若干言及してみたい。

前述した鳥形土器と「対」の状態では北東溝のブリッジ状の高まりから、3の二重口縁壺形土器が破碎された状態で出土している。底部は欠損しているが、ほぼ完形品である。体部中位に最大径をもち、全体的に玉葱状を呈する。肩部と頸部の結合部には一条の刻みをもった凸帯が貼りめぐらされており、頸

部は中央にやや膨らみのある筒状を呈する。一次口縁はやや傾斜して立ち上がり、二次口縁部を接合させている。接合に際して生じた粘土端のはみ出し部分を垂下させて断面三角形状をつくり出している。利根川分類（利根川 1993）での a-2 手法であり、野々口分類（野々口 1996）での B1 類（粘土帯付加手法）に相当しよう。さらに口唇部の成形は口唇部を内側に屈折させ、外側に幅の狭い面をつくり出しているところから、利根川分類の $\alpha-1$ 型に相当しよう。加飾部分は、二次口縁部内外面に R L 撚りの単節斜縄文を施し、肩部から体部上位にかけては櫛描波状文帯を挟んで上・下に櫛描横線文帯を設けている。そして、二次口縁部下端と上段の櫛描横線文帯上には、竹管状工具を刺突して加飾した円形浮文を貼付している。以上の観察からこの類例をあげるとすれば、奈良県ホケノ山古墳出土の例と、関東では平塚市南原 B 遺跡 2 号方形周溝墓から出土の例がそれに類似しよう（第 217 図）。以上のことから、当該二重口縁壺形土器の時期は、庄内Ⅲ～Ⅳ（纏向 3 式）期に該当するものとする。ただ、この 2 例と 17 号方形周溝墓の二重口縁壺形土器の大きな違いは、後者の二次口縁部には前述のように単節斜縄文が口縁部内外面に施されていることである。

本土器については、当初、縄文施文があるものの胎土・色調も含めて「畿内系」の様相を多くもっているため搬入品とも考えていた。しかし、後掲した土器胎土分析（附編「弥生末・古墳初頭の胎土材料」で取り上げた試料 No. 4）の結果をみると、砂粒組成からみた材料粘土の入手先は、近くでは比企丘陵などの松山層群に求められる可能性があるという。

この土器の製作者が、畿内人か、東海人か、在地人かは定かではない。ひとつ考えられることは、畿内の土器づくり集団が自らか、もしくはその技術などを伝えられた東海西部の土器づくり集団が関東に赴き土器を作り（その背景には政治的・経済的關係がある）、自らの土器づくりの誇りを一部抑えて、両者間の交流の安定と促進のために「縄文」を土器に施したとみることである。

ここまで、土器の胎土分析による結果をもとに、当該土器の製作について考えてみたが、前述したように、当初は搬入品であるという前提に立って、何故に縄文施文がなされたのかという疑問に苦慮していた。そこで考えついたのは、何らかの理由（葬送儀礼の習得など）で畿内にいた関東人が、儀式用の土器を製作するにあたって、畿内の土器をモデルにし当地の粘土を用いてそれを行い、そこに製作者の存在感を象徴させるために「縄文」を施した（あるいは、そのような土器を作らせた可能性もある）。そして、それを葬送儀礼の様式などと共に持ち帰ったという、かなり穿った見方である。

4 は北側のコーナー部分から破砕された状態で出土した。口縁の複合部は受け口状に僅かに内湾し、肩部から頸部にかけては「く」字に屈曲する。体部下位に最大径があり、やや下膨れである。底部には内部から打撃を受けたと思われる穿孔をもつ。肩部には単節斜縄文帯を 2 段設け、縄文帯を除き赤彩される。このような帯縄文帯の配置・胎土・色調・焼成からいって、在地の吉ヶ谷式土器の部類に属しよう。吉ヶ谷式土器について、柿沼幹夫氏は「研究ノート」（柿沼 1994）の中で「吉ヶ谷式土器の編年的位置は弥生後期初頭に充てられた時期もあったが、近年の資料増加に伴う検討では、後期中頃から後半に位置付けるのが妥当となってきている。そして古墳時代を迎え新しい様式の土器が西方から伝わってからも、吉ヶ谷式土器の系譜を引く土器は根強く併存して使われた（「吉ヶ谷式系土器」と呼ぶことにする）」と述べられ、さらに吉ヶ谷式土器を I～VII 期に細分されている。この見解と編年に従えば、当該複合口縁壺形土器も吉ヶ谷式系土器の部類に属し、時期的には柿沼編年でいう IV～V 期に相当しよう。

ところで、吉ヶ谷式土器（以下、吉ヶ谷式系土器も含める）の分布については、当初比企丘陵を中心

とした小文化圏とされていたが、その後の研究で入間台地、東松山台地、江南台地、本庄台地まで広がりがつある（柿沼 1994）。さらに、最近では当該西原大塚遺跡（墳墓）からの出土や富士見市南通遺跡（集落）、上福岡市権現山遺跡（墳墓）での出土がみられ、その広がりは武蔵野台地にまで及んでいそうである。ただ、この地域における吉ヶ谷式土器の在り方（主体性・客体性）は、今後の資料の増加を踏まえて、検討を重ねる必要がある。

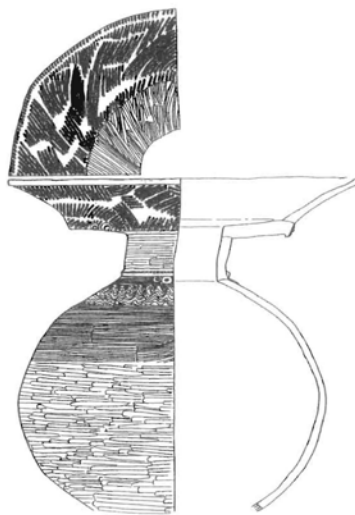
次に、吉ヶ谷式土器の文様メルクマールの帯縄文帯の区画について、柿沼氏は「ヘラによる磨消しによって界し、沈線やS字結節で界しないのを原則としている。ただ、花影遺跡第5方形周溝墓出土土器には沈線区画した例がある」と記述している（柿沼 1982）。この点について、いささか悩んだのは、東松山市駒堀遺跡の例（栗原他 1974）である。実測図では縄文帯下端にあたかもS字状結節文（但し、よく見ると「節」の記入はない）で区画されているように一見みえるが、説明文では「縄文原体末端の結節が残る」と記されている。当該土器にも縄文帯の上端にはS字状結節文を思わせる痕跡が残されているが、これは縄文原体の開端部の横走痕によるものである。吉ヶ谷式土器には、いわゆる「自縄結節文区画」にしる「端末結節文区画」にしる、縄文帯のS字状結節文による区画手法の導入はなされなかったのであろうか。

1の複合口縁壺形土器は、南コーナーの1層から破砕された状態で出土した。頸部は「く」字に屈曲し口縁部は直線的に開く。体部中位に最大径をもつ玉葱状あるいは、算盤玉状を呈する。複合口縁部分は、縄文を施した後9本の棒状浮文を貼付する。肩部から体部にかけては3段の単節斜縄文帯と各中間部分には反撚りの無節斜縄文がみられ、下端は部分的に2条のS字状結節文で区画する。上段の縄文帯には円形浮文を付する。縄文帯を除き赤彩されている。以上の文様構成や胎土・色調・焼成からみて当該壺形土器は在地のものと思われ、古墳時代I段階（五領期）内に収まるものと思われる。

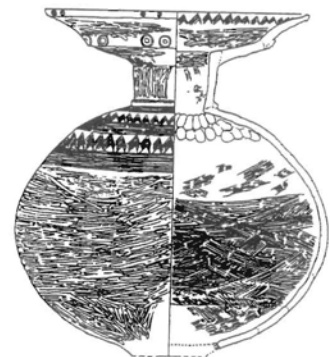
2は東コーナーの1層より出土した単純口縁壺形土器である。遺存率が低いうえに内外面ともに、全体に円形の斑点状の剥離が顕著で把握しにくい。頸部は鋭く「く」字に屈曲しながら口縁部に向かって



奈良県・ホケノ山古墳出土
（現説資料より）



志木市・西原大塚遺跡出土



平塚市・南原B遺跡出土
（報告書より）

第217図 二重口縁壺形土器の類例

直線的に開く。体部中位に最大径をもち、体部はほぼ球状を呈すると思われる。肩部には単節斜縄文を施し、頸部と肩部の結合部に円形浮文を貼付する。底部には外部から打撃を加えた穿孔があるが、意図的なものであるかどうかは不明である。形態・文様構成・胎土・色調・焼成からみて在地の土器とみる。時期は古墳時代Ⅰ段階（五領期）内に収まるものと思われる。

5の壺形土器は口縁の複合部が狭いが、一応、複合口縁壺形土器としておく。口縁部内面には無節斜縄文を施し、下端をS字状結節文で区画して内外面ともに赤彩されている。頸部はゆるやかに外反しながら口縁部へと立ち上がる。胎土・色調・焼成などからみて在地の土器と思われる。時期的には弥生時代末葉の可能性が強く、あるいは住居跡からの流れ込みかもしれない。

9は高坏形土器である。坏部は稜をもち、底部付近からゆるやかに大きく碗状に開く。口唇部は先端で僅かに外反して内傾する。内外面ともヘラケズリ後、丁寧にヘラミガキされるが、ハケメ痕を僅かに残す。胎土は砂粒を多く含むが焼成は堅緻で、色調はにぶい橙色であるところから在地性は薄い。外来系として東海西部の欠山・元屋敷式の影響を多分に受けたものと思われる。類例として、愛知県廻間遺跡、埼玉県附川遺跡、千葉県諏訪原遺跡出土のものなどが上げられる。ちなみに11の高坏形土器の脚台部破片は、脚台部の上位に7本の直沈線文が施され、その下3ヶ所に円形の透し孔が穿たれている。以下ヘラ状工具で丁寧に磨いて整形する。9の坏部とは別個体であるが、欠山・元屋敷式の可能性を否定できない。

12と13は鉢形土器である。13は平底の確かな底部をもつもので、内湾しながら立ち上がる。調整は一応ヘラミガキされているが、粗雑でハケメ痕の残存が顕著である。器面も全体的に平滑さに欠ける。口縁部の内湾がゆるくなっていることなども考慮して、古墳時代初頭のものと思われる。ただし、住居跡からの流れ込みの可能性もある。これに対して12は底部が明確で、体部はゆるやかに内湾し、口縁部は稜をもって、短く直線的に開く。口縁から底部にかけて丁寧に斜方向のヘラミガキが施されるが、横方向のハケメ痕を残す。整形は粗雑ではなくしっかりつくられ、内外面とも焼成前に赤彩される。胎土・色調・焼成などからみて在地の土器であり、時期的には古墳時代前期Ⅰ段階内に収まるものと思われる。

以上、17号方形周溝墓より出土した実測可能な土器を観察してきたが、中でも1～4の壺形土器と16の鳥形土器は共に土器祭祀に関わる主要な供献土器と見てよい。これらの土器の出土状況を鳥瞰してみると、1・2・4の壺形土器はコーナーの1層より破砕された状態で出土し、いずれも在地の土器である。これに対して3の二重口縁壺形土器と鳥形土器は北東溝中央のブリッジ状の高まりの両端から、あたかも「対」をなして出土している。ここから考えられることは、当該方形周溝墓における葬送儀礼が一度ですべてをとり行ったのではなく、時間差をおいて何回かにわけて行われたということである。

1・2・4のコーナーから出土した土器は、いずれも破砕された状態で出土している。そのうえ2と4の土器は底部ないし体部に穿孔をもつ可能性がある。これらが方台部からの転落であるか、儀式終了を意味づけるために故意に破砕して廃棄したのかはさだかではないが、福田聖氏が論文「方形周溝墓と境界」（福田 1990）で主張されているように、一定の「聖域」（「ハレ」と「ケ」の統合としての場）を設定するための遺棄行為であったと思われる。ただ、当該方形周溝墓においては西コーナーからはまとまった状態での土器の出土がない。それぞれのコーナーからいわゆる「対」をなした状態での土器の出土が報告されるが（本郷遺跡調査団 1995）、それが何を意味するのかはまだ明らかにされていない。また、底部ないし体部穿孔土器についても様々な議論がなされているが、神聖な祭祀行為を行う道具立てとして、又、死者があの世界で使う仮器としての意味は否定しえない。

また、これとは別に、北東溝中のブリッジ状の高まりの部分では、鳥形土器と儀礼用に作られたとも思われる二重口縁壺形土器を用いて祖霊を呼び寄せ、領域内での結束をはかる意味をもこめた祭祀行為が行われたのではないかと推測される。従って、当該方形周溝墓での築造から一連の祭祀行為が行われた時期は、古墳時代前期Ⅰ段階からⅡ段階初頭ぐらいの間で収まるものと考えられる。

最後に17号方形周溝墓出土の二重口縁壺形土器といい、10号方形周溝墓出土の高脚高坏形土器や甕形土器のように西原大塚遺跡には各地（畿内・東海・北陸など）から影響を受けた、いわゆる外来系土器が集まっている。この西原大塚遺跡の位置は、旧入間川の支流である新河岸川、さらにその支流の柳瀬川という入り組んだ河川筋をかかえ、人とモノの交流にかなり便宜な場所である。とって、河川が物流の役目を果たしたとは速断し得ないが、ケモノ道を使用するよりも河川沿いに歩いた方が、ある程度行動しやすいであろう。とすれば、ここからさらに、川筋を使って奥の方面にもモノが運ばれた可能性も考えられる。

これと同じような状況は鳩ヶ谷市三ツ和遺跡（弥生～古墳時代）にもみられる。荒川の支流の芝川沿に方形周溝墓群をかかえ、畿内系の二重口縁壺形土器や東海系のパレススタイル壺形土器、S字状口縁甕形土器、そして北陸系の甕形土器、その他小形丸底壺形土器など各地の実に豊かな土器が出土している（注）。ここは背後に有名な伊興遺跡をかかえているところから、西原大塚遺跡以上に一層物資の流通が盛んだったと思われる。

かつて、田部井功氏は外来系土器の分析を通して川が海と内陸を結び様々な物資や情報を運ぶ大きな役割をはたした、さながら川を媒介としたネットワークを想定できるとまとめられた（田部井 1987）。ただ、古墳時代になるとある程度政治的・経済的統合が進むところから水運だけでなく陸運にも目をむける必要があるのではないか。換言すれば河川の拠点地という地形上の有利さだけでなく、社会的に広範囲な物流ネットワークの設定を想定することである。この点について、岡安光彦氏が「弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、日本列島主要部の諸集団は近隣他集団との武力抗争を回避し、物流の安定を図るための秩序を自己組織化した」。その理由として、「弥生時代の長く激しい抗争を通して、列島の諸集団は目的合理的な経済行動をとることを学び、武力抗争を互いに強く規制し、自制する秩序を共有するようになったと推定される」として、古墳時代に入ると物流ネットワークが設定されたという示唆に富む意見を発表されている（岡安 1998）。この意見のように古墳時代の始めころにすでに物流ネットワークというものがかなり広がっているとすれば、このネットワークにのって関東の中心地とは決して言えないこの西原大塚遺跡がある地域にも、いろいろな地域からの影響を受けた土器が入ってきても、それほど驚くには値しないのではないか。

（注）三ツ和遺跡については、鳩ヶ谷教育委員会の浅野信英氏と黒済和彦氏より、ご教示をいただいた。

[引用・参考文献]

- 愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡』本文篇2
愛知考古談話会 1986『欠山式土器とその前後』
1987『欠山式土器とその前後』(研究・報告編)
赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
1991「壺を加飾する」『考古学フォーラム』第7号
1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
甘粕 健・春日真実編 1994『東日本の古墳の出現』山川出版社
伊藤敏行 1986 1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究」(I)(II)『研究論集』(東京都埋蔵文化センター) IV、VI
馬田弘稔 1982「弥生時代の土器祭祀について」『古代文化論集』(森貞次郎博士古稀記念)
大和古墳群調査委員会 2000『ホケノ山古墳』(現地説明会資料)
大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』史学編 第26号
大村 直 1982「前野町式・五領式の再評価」『神谷原』Ⅲ(八王子柵田遺跡調査会)
尾形則敏 1990「第4章 西原大塚遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
1999「第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集
2000「第2章 西原大塚遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群10』志木市の文化財第28集
岡安光彦 1999「古墳時代物流ネットワークモデルについての試論」『日本考古学協会第65回総会研究発表要旨』
小倉 均 1990「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構について」『埼玉考古第27号』
書上元博 1994『上尾市 稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第139集
柿沼幹夫 1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号
1994「吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『検証! 関東の弥生文化』(特別展図録) 埼玉県立博物館
榎原考古学研究所附属博物館編 1999『古墳のための年代学』(特別展図録)
金子彰男 2000「埼玉県における弥生後期土器編年について」『東日本弥生時代後期の土器編年』第一分冊 東日本埋蔵文化財研究会 福島県実行委員会
金井塚良一他 1971「シンポジウム・五領式土器について」『台地研究』第19号
金関 恕 1982「神を招く鳥」『考古学論考』(小林行雄博士古稀記念論文集) 平凡社
加納俊介 1997「廻間式か元屋敷式か」『西相模考古』第6巻
上福岡市史編さん室 1999『上福岡市史』資料編 第1巻(自然史・考古)
栗原文蔵 1974『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告-II・駒堀』埼玉県教育委員会
小出輝雄 1983『針ヶ谷遺跡群-第3地点の調査-』富士見市遺跡調査会調査報告第21集
小坂井町教育委員会 1994『欠山遺跡』
古墳時代土器研究会編著 1997『土器が語る-関東古墳時代の黎明-』第一法規出版
駒見佳容子 1985「葬送祭祀の一検討」『土曜考古』第10号
佐々木保俊 1985「第1章 西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地

- 点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集
- 1985「第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
- 1991「第2章 西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第16集
- 1996「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」
「市場裏遺跡第2地点の調査」 志木市の文化財第24集
- 1997「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集
- 1998『西原大塚の遺跡』西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報
- 佐々木保俊・尾形則敏 1987「第2章 西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査』志木市遺跡調査会調査報告第3集
- 1990「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」「第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
- 笹森紀己子 1990「弥生壺口縁内文様帯論」『古代』第90号
- 笹森健一 1982『埋蔵文化財の調査Ⅳ』上福岡市教育委員会
- 1983『埋蔵文化財の調査Ⅴ』上福岡市教育委員会
- 1984『埋蔵文化財の調査Ⅵ』上福岡市教育委員会
- 鮫島和大 1994「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号
- 志木市史編さん室 1984『志木市史』原始・古代資料編
- 柴田 稔 1980「静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器」『考古学雑誌』66巻1号
- 関川尚功 1976『纏向』奈良県立橿原考古学研究所編 奈良明新社
- 高橋 敦 1987『針ヶ谷遺跡群』針ヶ谷地区土地区画整理事業に伴う昭和60年・61年度の発掘調査富士見市遺跡調査会調査報告第27集
- 高橋一夫 1985「関東における非在地系土器の意義」『草加史研究』第4号
- 田口一郎 1981「二重口縁壺の系譜の検討」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田代克己 1985「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『村構造と他界観』（鳥越憲三郎博士古稀記念論文集）
- 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号
- 田部井功 1987「川を結ぶ遺跡の—考察—外来系土器を分析して」『埼玉考古』第23号
- 辻本宗久 1987「弥生時代の墳墓祭祀について」『花園史学』第8号
- 都築みどり 1983「元屋敷土器の再検討」『南山考古』第2号
- 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』橿原考古学研究所編
- 照林敏郎 1995「朝霞市向山遺跡第3地点の調査」『第28回埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨』
2000『向山遺跡第3、4、5、6地点発掘調査報告書』第1分冊 序編 朝霞市教育委員会
- 東海大学校地内遺跡調査団編 1992『シンポジウム西相模の三、四世紀、方形周溝墓をめぐる』
- 利根川章彦 1993「二重口縁壺小考」(上)(下)『埼玉県立さきたま資料館調査研究報告』第6、7号
- 富田和夫 1994『稲荷前遺跡(B・C区)』第3分冊 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集
- 長野市遺跡調査会 1986『塩崎遺跡群Ⅳ』

- 西口正純 1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
 1996『中里前原北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第176集
- 西谷正編 1999『邪馬台国時代の国々』(季刊考古学、別冊9) 雄山閣
- 日本考古学協会編 1988『シンポジウム、関東における古墳出現期の諸問題』学生社
- 野中 仁・福田 堅 1993「方形周溝墓出土の木製品」『研究紀要』第10号(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
- 野代恵子 2000「方形周溝墓にみられる儀礼的廃棄に関する一視点」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 野々口陽子 1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集
- 野村正太郎 1992「焼成後の穿孔土器についての一考察」『板橋区立郷土資料館紀要』第9号
- 比田井克仁 1981「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号
 「古墳出現前段階の様相について」『考古学基礎論』第3号
 1997「弥生時代後期における時間軸の検討」『古代』第103号
 1997「定型化古墳出現前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』第44巻2号
- 平塚市教育委員会 1993『山王B・稲荷前A遺跡他』
- 平塚市 1999『平塚市史』11上(別編)考古(I)
- 福田 聖 1990「方形周溝墓と境界」『戸田市史研究』第8号
 1992「方形周溝墓と火」『戸田市史研究』第9号
 1991「方形周溝墓と儀礼」『埼玉考古学論集』
 2000『方形周溝墓の再発見』同成社
- 藤波啓容・中村真理 1996「方形周溝墓と底部穿孔土器」『東京考古』第14号
- 富士見市遺跡調査会 1995『南通遺跡-第14地点発掘調査概要報告書-』
- 本郷遺跡調査団編 1995『海老名本郷』(X-4)
- 山川守男・福田 聖・石坂俊郎 1998「北武蔵における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』X

VI II

- 山岸良二編 1996『関東の方形周溝墓』同成社
- 矢納健志 1986「鳥形土器について」『羽根尾堰ノ上遺跡』(小田原考古学研究会)

附編 自然科学分析

1 弥生末・古墳初頭土器の胎土材料

藤根 久・今村美智子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土器は、古代人において日常生活において重要な道具であり、土器作りは重要な生産活動であったことが考えられる。土器胎土は、粘土とこれに混入された砂粒などから構成されるが、肉眼観察によりある程度識別されるものの、粘土の種類やミクロ的な構成物は、顕微鏡観察によらねばならない。最近では、胎土中に含まれる珪藻化石や骨針化石などの記載により、ある程度粘土の材料について知ることができることが分かってきた（車崎ほか 1996）。

こうした土器胎土の材料を調べることは、形態や形式とともに土器の構成要素として重要な事柄と考えられるが、土器の製作地や製作集団の違いなどについても情報を得ることができる。

ここでは、西原大塚遺跡から出土した古墳初頭および弥生末土器について、薄片を作成して偏光顕微鏡による観察を行なった。

2. 方法と記載

土器試料は、弥生末および古墳初頭の土器各2試料である。土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。なお、試料は、面積約6 cm²程度を使用した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なった。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行なった。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100 μm格子目盛を用いて任意の位置における約50 μm (0.05mm) 以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50 μm前後）を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が約100個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、孢子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

3. 分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる構成鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する（菱田ほか、1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[孢子化石]

孢子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。な

お、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO₂%が少ない深成岩、SiO₂%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO₂%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO₂%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などに見られる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるものをいう。完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。発泡斑晶質は、石基状のガラス質の部分に発泡した穴を伴うものである。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

[凝灰岩質]

非晶質でモザイクな文様構造を示し、石英・長石類やガラスなどが含まれるものをいう。火山砕屑物が固化したもので、起源となる火山によって鉱物組成が変化する。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片

として同定不可能な粒子を不明とする。

4. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(表3)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1 mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No.1 : 70~400 μ mが多い(最大粒径900 μ m)。石英・長石類>>複合石英類(微細)、砂岩質、角閃石類、単斜輝石、珪藻化石(陸域指標種群*Pinnularia borealis*)、骨針化石、植物珪酸体化石

No.2 : 70~300 μ mが多い(最大粒径1.3mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)、砂岩質、雲母類、単斜輝石、斜方輝石、放散虫化石(1個体)、骨針化石、植物珪酸体化石

No.3 : 80~400 μ m前後が多い(最大粒径1 mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)>砂岩質、ガラス質、角閃石類、珪藻化石(淡水種*Cymbella*属、*Pinnularia*属、不明種)、孢子化石、植物珪酸体化石

No.4 : 70~600 μ mが多い(最大粒径1.1mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)>、砂岩質、斜長石(双晶)、凝灰岩質、角閃石類、ジルコン、珪藻化石(海水種*Coscinodiscus*属、*Thalassiosira*属)、孢子化石、植物珪酸体化石

5. 化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μ m(実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μ m程度)、放散虫化石が数百 μ m、骨針化石が10~100 μ m前後である(植物珪酸本化石が10~50 μ m前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μ m以下、シルトが約3.9~62.5 μ m、砂が62.5 μ m~2 mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸本化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a) 外洋性粘土を用いた胎土、b) 海成粘土を用いた胎土、c) 淡水成粘土を用いた胎土、d) 水成粘土を用いた胎土、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

a) 外洋性粘土を用いた胎土 (No.2)

これらの胎土中には、放散虫化石が特徴的に含まれ、骨針化石も含まれていた。

b) 海成粘土を用いた胎土 (No.4)

これらの胎土中には、少ないものの海水種珪藻化石が含まれていた。

c) 淡水成粘土を用いた胎土 (No.3)

これらの胎土中には、珪藻化石が特徴的に含まれていた。なお、No.5の胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia praerupta* var. *bidens* が含まれていた。

d) 水成粘土を用いた粘土 (No.1)

これら胎土中には、骨針化石が含まれていた。なお、海成か淡水成かは明瞭な珪藻化石から見られないため不明である。

6. 砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行なった(表4)。岩石の推定は、砂岩質や複合石英類(微細)が堆積岩類、複合石英類や複合鉱物類(含輝石類・含角閃石類・含雲母類)が深成岩類、斑晶質が火山岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、ガラスがテフラ(火山噴出物)である。

これらは、起源岩石の種類および組み合わせにより堆積岩類を主体として凝灰岩類や深成岩類から構成されるA群に分類された。なお、このA群は、ほぼ堆積岩類から構成される組成(A₀群)、凝灰岩類を伴う組成(A₁群)に細分された。

7. 考察

土器の薄片を作成し顕微鏡観察を行なった結果、材料粘土については放散虫化石を含むような外洋成粘土、海水種珪藻化石を含む海成粘土、淡水種珪藻化石を含む淡水成粘土、骨針化石を含む水成粘土、に分類された。一方、砂粒については、ほぼ堆積岩類を主体としたA₀群、堆積岩類のほか凝灰岩類を特徴的に含むA₁群、に分類された。

土器製作地を指標する分類群は、製作地域の地質環境を反映した砂粒または微化石類である。ここでは、No.2の胎土において放散虫化石が含まれていたが、これら放散虫化石は、地質時代において外洋域で堆積した地層中に含まれていた化石である。

関東地方において外洋域で堆積した地層は、房総半島の上総層群や三浦半島の三浦層群、埼玉県比企丘陵や武蔵丘陵あるいは高麗川上流部毛呂山町周辺部に分布する松山層群(藤本・福田、1980)、群馬県の藤岡から富岡周辺地域に分布する藤岡層群(松丸、1977)が知られている。これらの地層は、いずれも新第三紀中新統(約520~2,300万年前)に堆積した地層である。これらの地層中には、骨針化石や海水種珪藻化石を多く含んでいる。また、これら地層中には、凝灰岩類(テフラ層)を複数層準に見られる。なお、群馬県の富岡層群や比企丘陵などの松山層群は、後背地に変成岩類を伴っている。このように、放散虫化石が含まれ得る地層は分布域が限られていることから、土器の製作地を指標する分類群である。

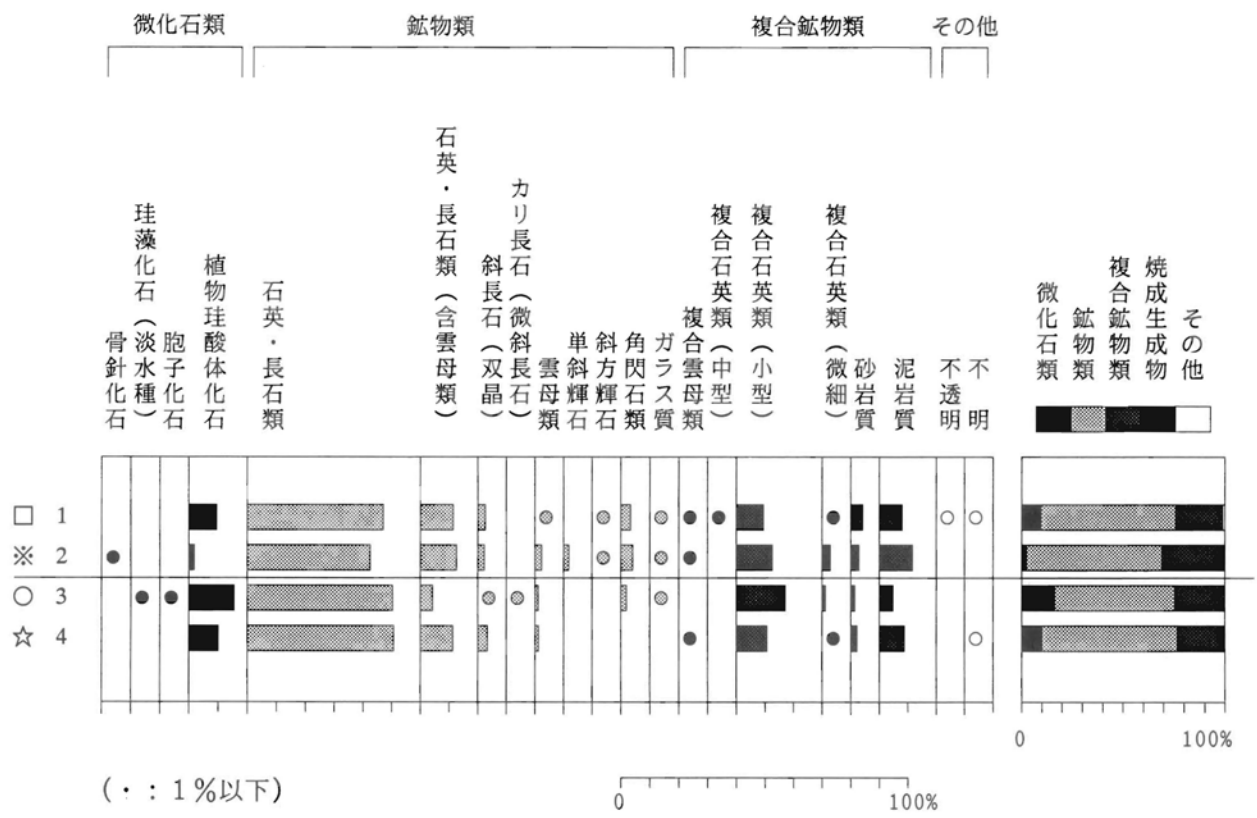
これらの中新統の地層は、ハンマーを用いないと採取できないほど硬い堆積物であることから、直接採取して土器の材料として利用したとは考え難い。実際的には、材料粘土は、こうした中新統の周辺部に形成される段丘堆積物中の粘土層などを採取・利用しているものと推定され、放散虫化石などは、後

分類群	1 2 3 4			
	微化石類			
骨針化石	-	1	-	-
珪藻化石 (淡水種)	-	-	1	-
孢子化石	-	-	2	-
植物珪酸体化石	25	4	54	32
鉱物類				
石英・長石類	123	91	176	161
石英・長石類 (含雲母類)	30	27	15	36
斜長石 (双晶)	7	5	1	11
カリ長石 (微斜長石)	-	-	1	-
雲母類	2	5	4	4
単斜輝石	-	4	-	-
斜方輝石	1	1	-	-
角閃石類	9	9	7	-
ガラス質	2	1	3	-
複合鉱物類				
複合雲母類	1	2	-	1
複合石英類 (中型)	1	-	-	-
複合石英類 (小型)	25	27	60	34
複合石英類 (微細)	1	6	4	2
砂岩質	11	6	5	7
泥岩質	21	25	17	28
その他				
不透明	1	-	-	-
不明	2	-	-	2
総ポイント数	262	214	350	318

表3 土器胎土中の粒子組成一覧表

No.	時期	器種	備考	粘土の特徴			砂粒の特徴		その他特徴
				分類	種類	特徴1	分類	砂粒組成 (頻度順、)は極端な場合、[]は稀)	
1	弥生時代末期	壺	在地	□	水成		A ₁	堆積岩類、[凝灰岩類]	大型砂粒少ない
2	弥生時代末期	甕	在地	※	(外洋成)	放散虫化石含む	A ₁	堆積岩類)凝灰岩類	大型砂粒少ない
3	古墳時代初頭	甕	外来	○	淡水成		A ₀	堆積岩類	大型砂粒少ない
4	古墳時代初頭	壺	外来	☆	(海成)		A ₁	堆積岩類)凝灰岩類	大型砂粒少ない

表4 土器胎土の粘土および砂粒の特徴



No. 1・2; 弥生末葉土器、No. 3・4; 古墳初頭土器

[粘土の区分 (試料番号左)]

- ※: 外洋成粘土 (放散虫化石の出現) ☆: 海成粘土 (海水種珪藻化石などの出現)
- : 淡水成粘土 (淡水種珪藻化石などの出現) □: 水成粘土 (不明種珪藻化石などの出現)

第218図 粒子組成図 (全分類郡を基数とした百分率で表示)

背地から流れ込んで再堆積したものと考える。

なお、No.1やNo.4は、No.2と同様の砂粒組成A₁群を示すため、類似した地質環境を示す地域と予想される。

8. おわりに

ここでは、胎土を構成する粘土および砂粒について、これら材料の特徴について検討した。従来から土器の胎土分析は、土器製作地の推定を目的として砂粒あるいは鉱物組成について検討されてきた。しかしながら、土器製作、材料となる粘土が基本であり、如何なる粘土を利用していたかなど、その特徴を知ることは土器の製作技法の一端を担う重要な事柄と考えている。

なお、土器製作地については、その特徴的な粘土の分布域あるいはこれに付随する砂粒組成から、製作地の範囲を含めて推定することが可能になるものと考えている。

〈引用文献〉

- 新井房夫（1964）群馬県の地質と地下資源. 20万分1 群馬県地質図解説書64P、内外地図株式会社.
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 2, 73-88.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』, 平凡社, 1612P.
- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—. 日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34-35.
- 藤本治義・福田 理（1980）埼玉県地質図20万分の1. 内外地図株式会社.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1, 20.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料—粘土の起源を中心に—. 日本考古学協会第62回大会研究発表要旨, 153-156.
- 松丸国照（1977）関東山地北縁～北東縁の新第三系の層序. 地質学雑誌, 83, 4, 213-225.

2 植物珪酸体分析

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

西原大塚遺跡第45地点の発掘調査においてワラ様の炭化した植物遺体が検出された。また、覆土に混じった状態で灰様の灰白色粒子が認められた。イネ科植物は別名珪酸植物とも言われ、根より大量の珪酸分を吸収し葉や茎の細胞内に沈積することが知られている。こうして形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）のうち機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。こうしたことから、西原大塚遺跡において検出されたイネ科植物とみられる植物遺体および灰試料より機動細胞珪酸体を検出・観察することにより、それらの母植物についての検討ができるものと考え、以下に植物珪酸体分析について示した。

1. 分析方法

得られた炭化植物遺体（228号住居跡）については現生植物の標本作製と同様の方法を用いて植物珪酸体の有無を調べた。すなわち、炭化植物遺体よりその一部を採りだし乾燥させる。この乾燥した植物遺体を管瓶にとり、電気炉を用いて灰化するのであるが、灰化する行程は藤原（1976）にはぼしたがって行なった。その行程は、はじめ毎分5℃の割合で温度を上げ、100℃において15分ほどその温度を保持、その後毎分2℃の割合で550℃まで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行なう。灰化した試料について一部を取り出し、グリセリンにてプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した。

また、灰試料（243号住居跡）については遺構覆土（ローム質土）と分けることが困難なため、土壤試料におけるプラント・オパール分析と同様の方法で分析を行なった。すなわち、観察から灰が多いと思われる部分（灰混じりローム質土）約1gをトールビーカーにとり、これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え脱有機物処理を行なう。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いてプレパラートを作成し、検鏡した。

2. 母植物について

1) 炭化植物遺体（228号住居跡）

検鏡の結果、若干の機動細胞珪酸体が観察されたのみで、多くは棒状に珪化？した組織（繊維状）であった。以下に若干認められた機動細胞珪酸体について記すと、断面形態は楔形をしており、裏面側においてこぶ状の凸部と溝状の凹状が認められるものもある。縦長は約30~40μm、横長は約25~30μmである。側面形態は長方形を呈しており、裏面側にこぶ状の高まりがみられる。また、裏面形態は長方形をなしている。こうした形状の機動細胞珪酸体はススキ属、チガヤ属などのウシクサ族と判断されるが、この機動細胞珪酸体が細胞内において連なっているものは認められなかった。また、ウシクサ族を支持する単細胞珪酸体も観察されていない。一方、他分類群の機動細胞珪酸体も認められていない。以上のことから得られた炭化植物遺体はススキ属、チガヤ属などのウシクサ族の可能性が高いと思われる

が、先にも記したが積極的にそれを支持できる観察結果は得られておらず、ここではウシクサ族の可能性があるに止めたい。

2) 灰試料 (243号住居跡)

観察の結果、棒状の珪酸体や珪化した植物組織片が多く観察された。また、機動細胞珪酸体も点在しているのが認められる。この機動細胞珪酸体についてはその形状からネザサ節型 (アズマネザサ、ゴキダケなど)、クマザサ属型 (チシマザサ、スズダケ、ミヤコザサなど)、ウシクサ族と判断される。その他、イネ型 (図版35-7) やキビ型 (図版35-8) の単細胞珪酸体列が観察されている。また、根拠は無いもののオオムギやコムギの穎部と思われる珪酸体の破片も認められる。

これらのうち、ネザサ節型、クマザサ属型、ウシクサ族の機動細胞珪酸体について、分析試料にはロームなども多く混入していることから、こうした土壤成分からもたらされた可能性が高いように思われる。すなわち、ネザサ節型やウシクサ族は遺跡周辺に普通に認められるアズマネザサやススキと考えられ、クマザサ属型もローム中に含まれていたものが観察されている可能性が高い。一方単細胞珪酸体について、イネ型にはイネやサヤヌカグサ属、ヨシ属などがあり、これらの機動細胞珪酸体は認められず、いずれの分類群であるかは単細胞珪酸体のみでは判断できない。これはキビ型も同様であり、この単細胞珪酸体についても分類群を特定できない。

以上のことから灰の母植物についてはイネ型やキビ型の単細胞珪酸体を持つイネ科植物と思われるが、その分類群については特定できない。また、ムギ類の穎部も含まれている可能性があるが、これらの同定根拠は現時点において確立されておらず、今後の課題である。

〈引用文献〉

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―. 考古学と自然科学, 9, P. 15-29.

藤原宏志・佐々木彰 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)―イネ (Oryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状―. 考古学と自然科学, 11, P. 9-20.

3 出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は埼玉県志木市幸町3丁目一帯に広がる大規模な遺跡である。ここでは、弥生時代末の住居跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。武蔵野台地北端部の標高約18m前後に立地する当遺跡では住居建築にどのような木材が利用されていたのか、弥生時代末の住居跡出土炭化材から当時の木材利用を明らかにする目的で、この調査は実施された。

2. 炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的で実体顕微鏡下の観察でも同定可能であるが、それ以外の分類群については3方向の破断面(横断面・接線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で観察し同定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

表5に樹種同定結果の一覧を表示し、表6に各住居ごとの検出樹種と点数を比較した。

186Yから出土した炭化材は、ヤマグワであった。213Yの2試料は、イヌエンジュとクヌギ節である。214Yの1試料はクリであった。215Yの3試料は、すべてクリであった。228Yの8試料は、クリが5点、クヌギ節が2点、ヤマグワが1点であった。

住居遺構 試料No.	樹種	時期
Niテ-186Y	ヤマグワ	弥生時代末
Niテ-213Y①	イヌエンジュ	弥生時代末
Niテ-213Y②	クヌギ節	弥生時代末
Niテ-214Y	クリ	弥生時代末
Niテ-215Y①	クリ	弥生時代末
Niテ-215Y②	クリ	弥生時代末
Niテ-215Y③	クリ	弥生時代末
Niテ-228Y①	クリ	弥生時代末
Niテ-228Y②	ヤマグワ	弥生時代末
Niテ-228Y③	クリ	弥生時代末
Niテ-228Y④	クヌギ節	弥生時代末
Niテ-228Y⑤	クヌギ節	弥生時代末
Niテ-228Y⑥	クリ	弥生時代末
Niテ-228Y⑦	クリ	弥生時代末
Niテ-228Y⑧	クリ	弥生時代末

表5 住居跡出土炭化材の樹種

以下に同定の根拠とした材組織観察を分類順に記載する。

(1) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版36 1a-1c(Niテ-228Y④)

年輪の始めに大型の管孔が1~3層配列し、その後は小形で厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースが発達している。

樹種	186Y	213Y	214Y	215Y	228	合計
クヌギ節		1			2	3
クリ			1	3	5	9
ヤマグワ	1				1	2
イヌエンジュ		1				1
合計	1	2	1	3	8	15

表6 住居別の検出樹種と点数

放射組織はほぼ同性、単列のもの集合状のものがあり、道管との壁孔は交互状や棚状である。

クヌギ節は暖帯の山林や二次林に普通に生育する落葉広葉樹で高木となる。材は重厚で割裂性が良い。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版36 2a-2c(Niテ-215Y②)

年輪の始めに大型の管孔が蜜に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は大きい。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工がやや困難だが粘りや耐朽性にすぐれている。特に縄文時代では柱材にクリが使われていることが多い。

(3) ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 図版36 3a-3c(Niテ-228Y②)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では小型から非常に小型の複数の管孔が斜状や塊状に複合して分布する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースが発達している。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きくて交互状に配列している。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。材は重硬・強靱で心材は特に保存性が高い。

(4) イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri* (Maxim) Kitamura
マメ科 図版37 4a-4c(Niテ-213Y②)

年輪の始めに大型の管孔が配列し徐々に径を減じて行き、孔圏外では多数の管孔が塊状や斜状に複合して年輪界に向かい更に径を減じてゆき年輪界では接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小さく交互状に配列し、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に3～4細胞幅である。

イヌエンジュは北海道以南から中部地方の温帯の山地や河原に生育する落葉高木である。材質はやや軽軟であるが耐水性は広葉樹材の中ではクリに次いで高い。

4. まとめ

弥生時代末の竪穴住居跡5軒から出土した炭化材15試料からは、落葉広葉樹のクヌギ節・クリ・ヤマグワ・イヌエンジュの4分類群が検出された。いずれの樹種も落葉広葉樹材の中で、材質が極めて固く丈夫であり耐久性も良好なことで知られている。従って建築材として良質な適材を、当遺跡においても選択使用していたことが判った。また全体的にはクリが最も多く、次にクヌギ節がやや多く検出された。そしてクリ・クヌギ節の材は、1年輪幅が約1cmほどの比較的成長のよい材が目立ったことから、二次林や樹木間がゆったりした立地環境で生育した材であったのではないかと想像された。

当遺跡の住居建築材に関わる樹種選択性を、周辺遺跡や同じ武蔵野台地北東部の遺跡の報告と若干の比較を試みた。周辺遺跡では、古墳時代前期(富士前遺跡第15地点1号住居跡)と古墳時代後期(城山遺跡第35地点129号住居跡)そして平安時代(中道遺跡第41地点第23号住居跡)の住居跡出土炭化材樹種調査の報告がある(志木市教育委員会 1999)。その結果は古墳時代ではクヌギ節が多くほかにコナラ節・クリ・マメ科が検出され、平安時代ではクリが優占しほかにトチノキ・コナラ節・ススキ属類似が検出されている。朝霞市岡に所在する岡・向山遺跡の弥生時代中期と後期の住居跡では、クヌギ節またはコナラ節が優占しほかにヤマグワ・クリ・イヌシデ類・タケ亜科が検出されている(藤根 1994)。富士見市鶴馬の2遺跡からは平安時代の調査結果が報告されていて、宮脇遺跡ではクリとクヌギ節が同

数であり、谷津遺跡ではコナラ節・クヌギ節・クリの順に多く検出されている（山田 1993）。当遺跡から南東に位置する下戸塚遺跡（東京都新宿区西早稲田）では、弥生時代後期と古墳時代はクヌギ節が圧倒的に多く、平安時代ではクリが卓越していた。（鈴木ほか 1996）。このように近隣および周辺域の弥生時代から平安時代の各時期の住居跡出土炭化材の樹種は、クヌギ節・コナラ節・クリが主体である点は共通だが、時代変化に伴い利用樹種が一定変化した傾向は読み取れない。当遺跡の結果も、弥生時代や古墳時代ではクヌギ節が優占する事例が多い中でクリの検出がクヌギ節よりも目立った。関東地方の各時期の建築材を集計して集落周辺の二次林化を調べようとした千野（1991）や、全国的の資料を集計した山田（1993）の報告を見ても、弥生時代はクヌギ節やコナラ節の材を多く利用した遺跡が多い。クリが目立つ当遺跡の結果は、単に検討した試料の偏りによるのか、同時期にもクリ材を多用する住居があったのか、今後も調査が蓄積されることにより、再検討されることが期待される。

〈引用文献〉

志木市教育委員会、1999「志木市遺跡群9」、埼玉県志木市教育委員会。

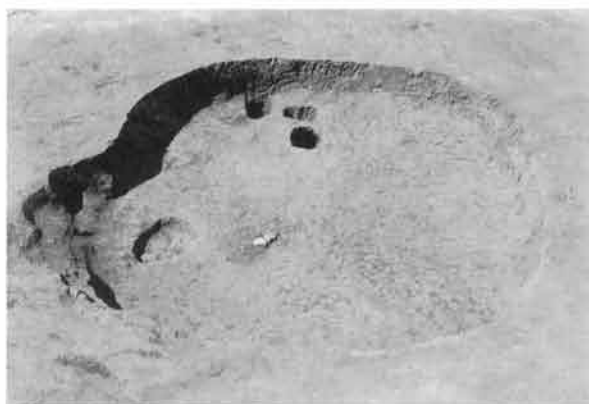
鈴木三男・能城修一・車崎正彦、1996、炭化材の樹種同定、693-707、図版177-186、「下戸塚遺跡の調査 第2部 弥生時代から古墳時代前期」、早稲田大学。

藤根 久、1994、住居跡出土の炭化材樹種同定、156-167、「岡・向山遺跡」、埼玉県朝霞市教育委員会・朝霞市遺跡調査会。

千野裕道 1991、縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー、214-249、東京都埋蔵文化財センター。

山田昌久 1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成ー用材から見た人間・植物関係史、1-242、植生史研究特別第1号。

版 圖



180号住居跡



180号住居跡遺物出土狀態



181号住居跡



182号住居跡



183号住居跡



183号住居跡遺物出土狀態



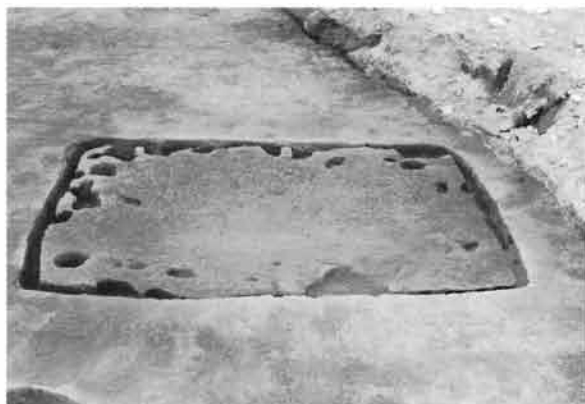
186号住居跡



187号住居跡



188 号住居跡



189 号住居跡



191 号住居跡、348 号土坑



192 号住居跡



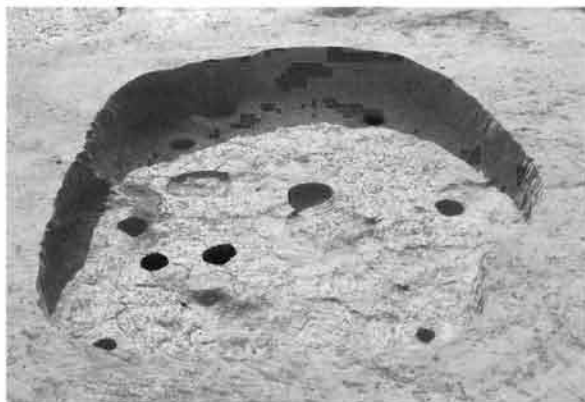
193 号住居跡



194 号住居跡



195 号住居跡



196 · 201 号住居跡



197 号住居跡



199 · 223 · 224 号住居跡



200 号住居跡



200 号住居跡遺物出土狀態



202 号住居跡



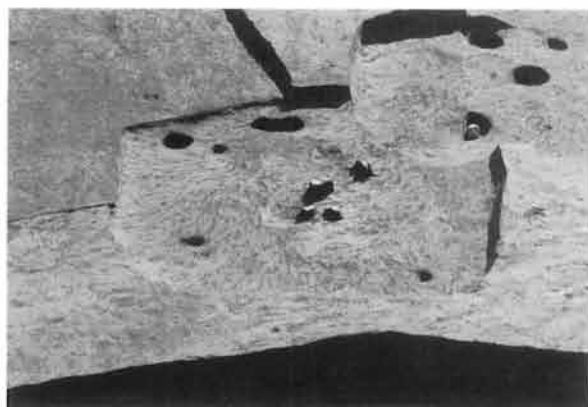
203 号住居跡



204 号住居跡



205 · 206 号住居跡



208 号住居跡



209 号住居跡



210 号住居跡



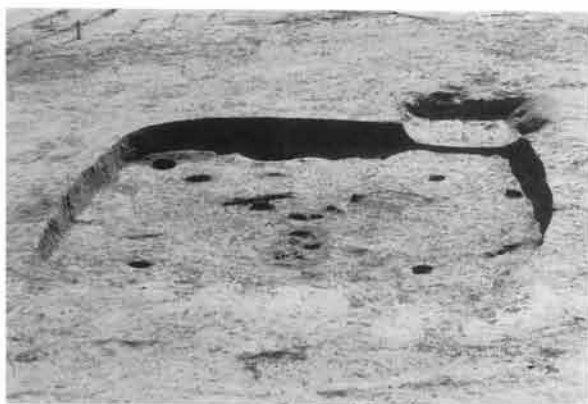
211 号住居跡



212 号住居跡



発掘調査風景



213 号住居跡



213 号住居跡遺物出土状態



214号住居跡



214号住居跡遺物出土状態



215号住居跡



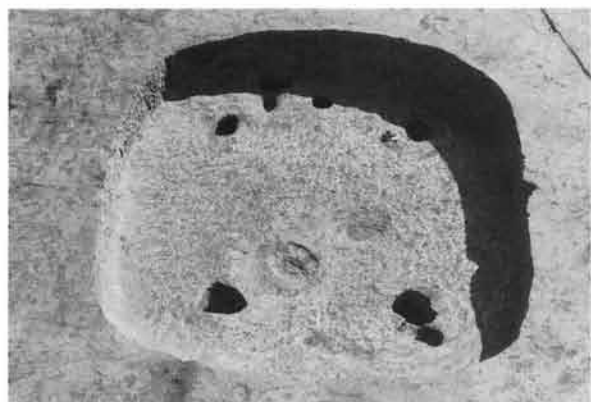
216号住居跡



217号住居跡



218・233号住居跡



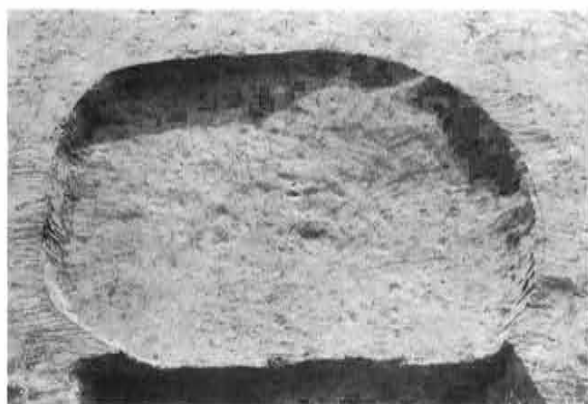
219号住居跡



発掘調査風景



222・244～246号住居跡



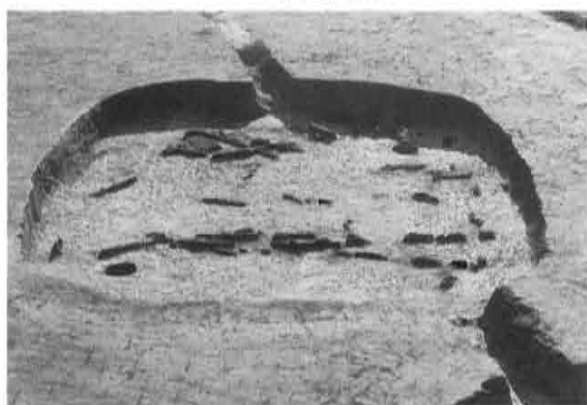
225号住居跡



226号住居跡



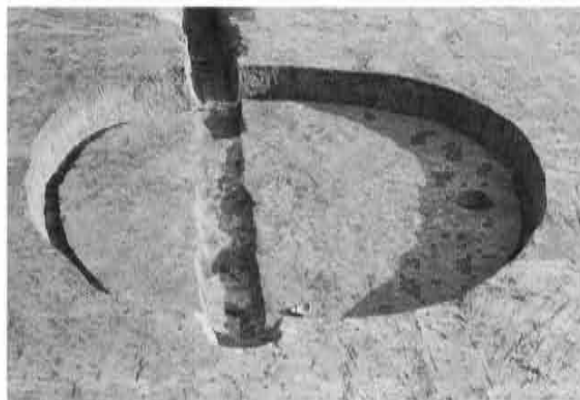
227号住居跡



228号住居跡



228号住居跡遺物出土状態



229号住居跡



230 · 232 号住居跡



232 号住居跡遺物出土狀態



231 号住居跡



231 号住居跡遺物出土狀態



234 · 235 号住居跡



234 号住居跡遺物出土狀態



236 号住居跡



236 号住居跡遺物出土狀態



238号住居跡



発掘調査風景



239号住居跡



239号住居跡遺物出土状態



240号住居跡



240号住居跡遺物出土状態



241号住居跡



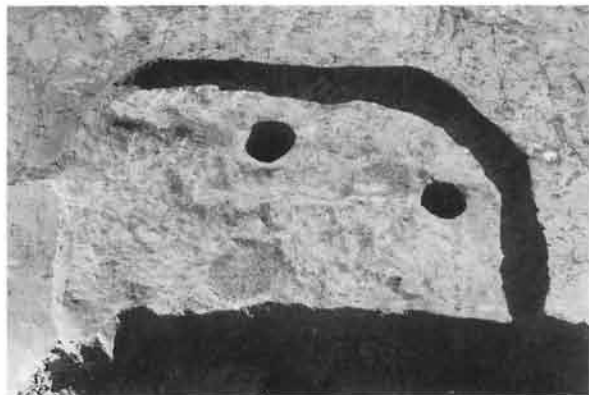
243号住居跡



244 号住居跡



244 号住居跡遺物出土状態



248 号住居跡



250 号住居跡



251 号住居跡



251 号住居跡遺物出土状態



17号方形周溝墓遺物出土状態



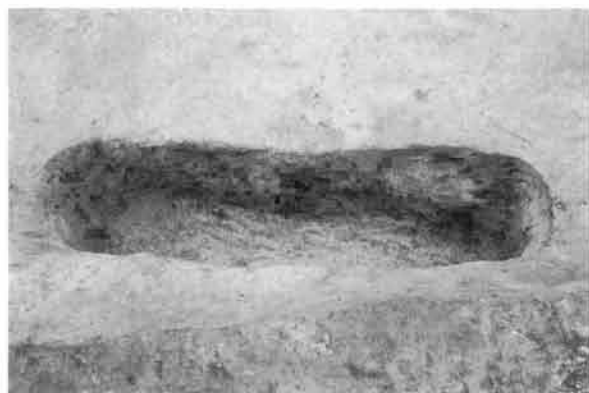
17号方形周溝墓北東溝



17号方形周溝墓南東溝



17号方形周溝墓南西溝



346号土坑



347号土坑



調査終了



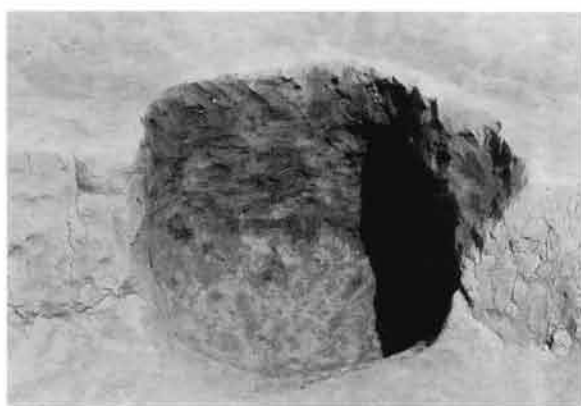
11号住居跡



11号住居跡遺物出土状態



12号住居跡



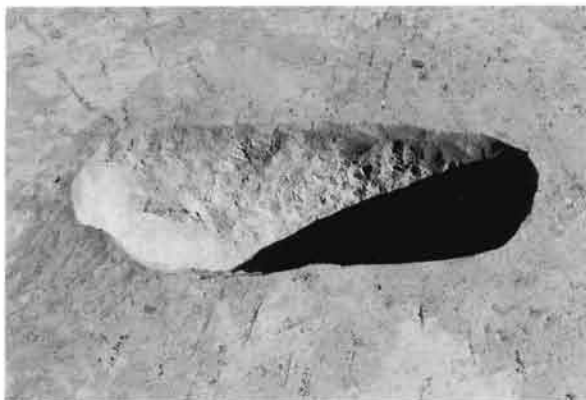
345号土坑



349号土坑



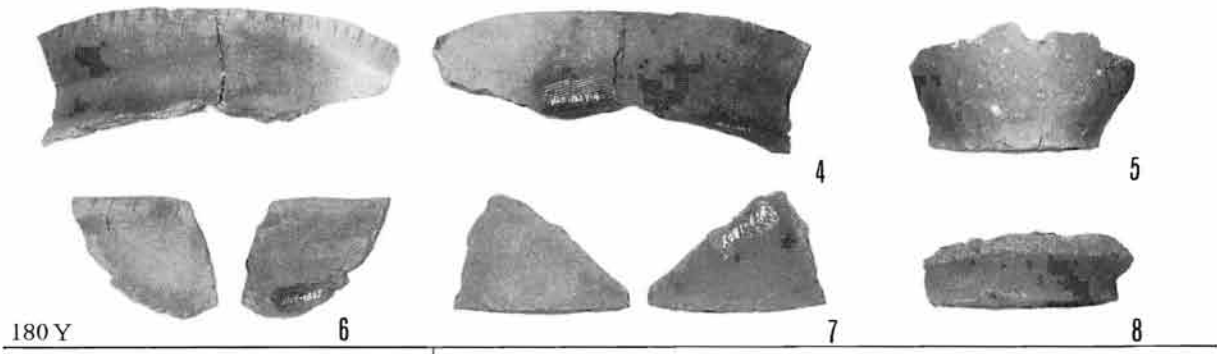
350号土坑



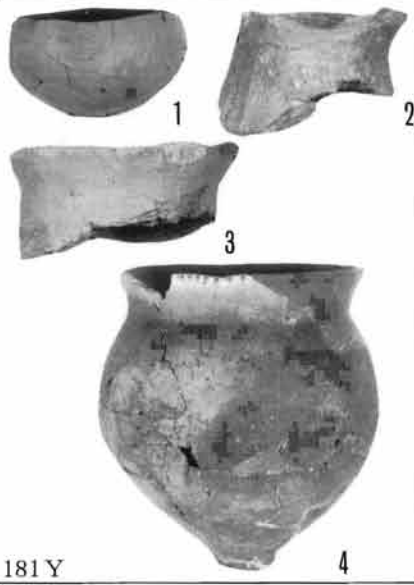
351号土坑



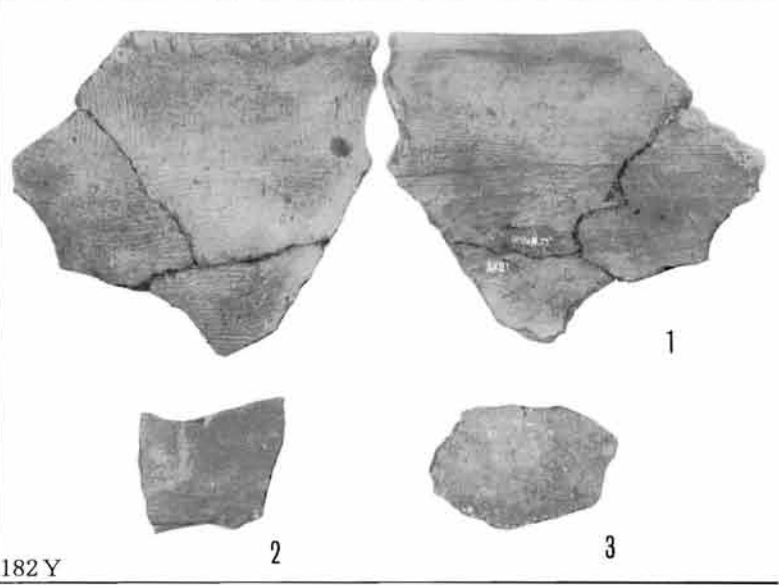
352号土坑



180 Y



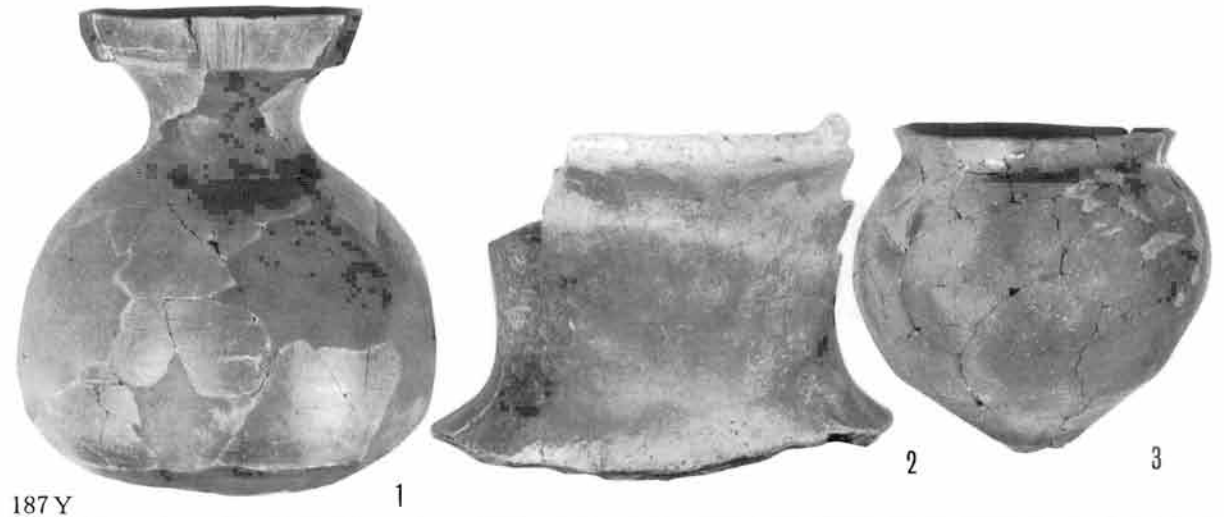
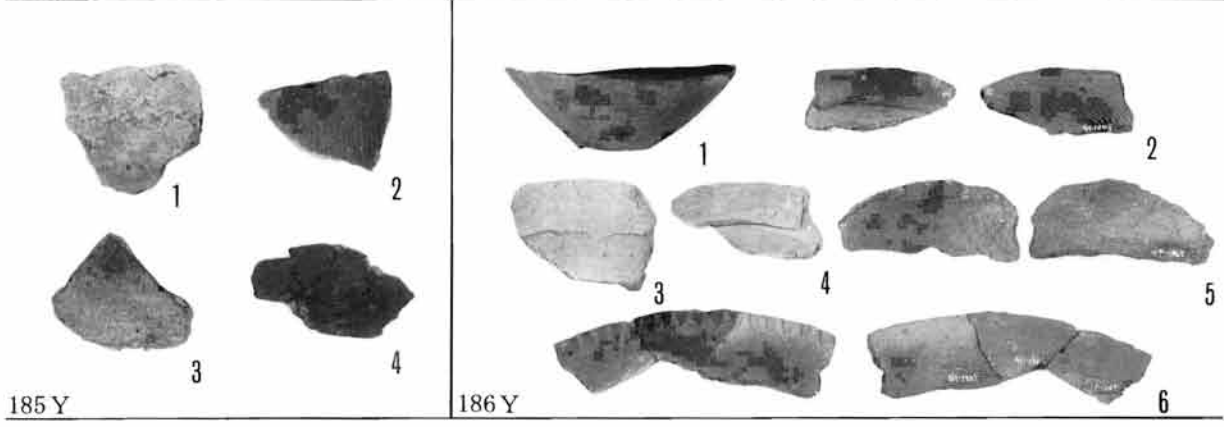
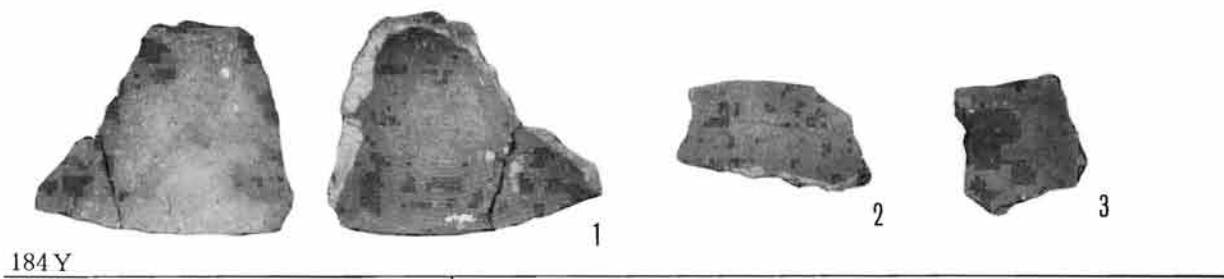
181 Y



182 Y



183 Y



189 Y



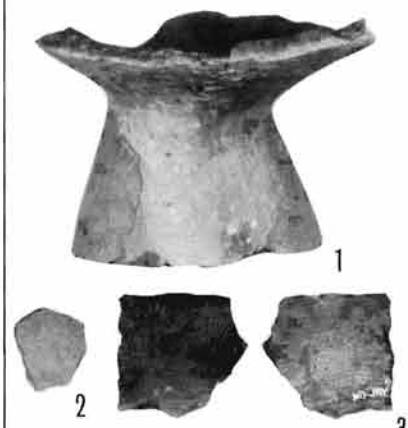
191 Y



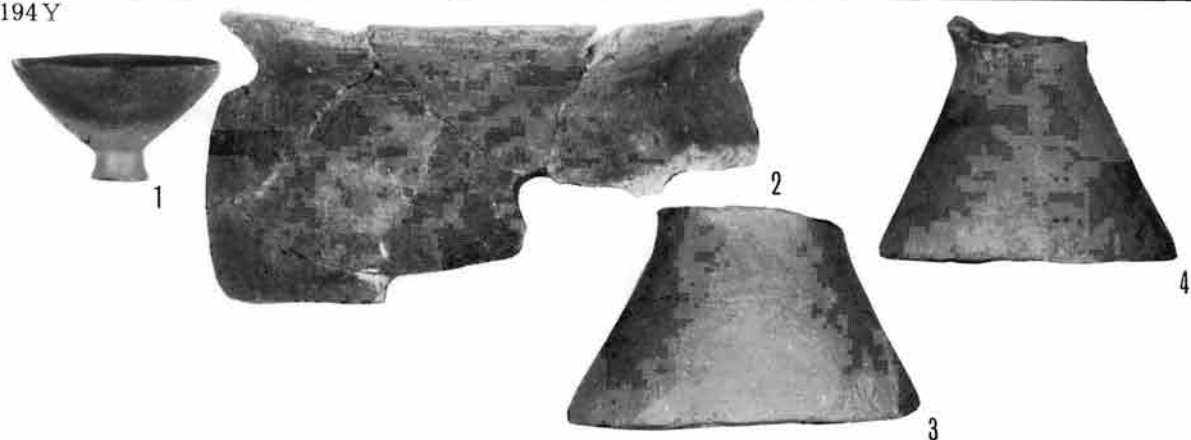
192 Y



193 Y



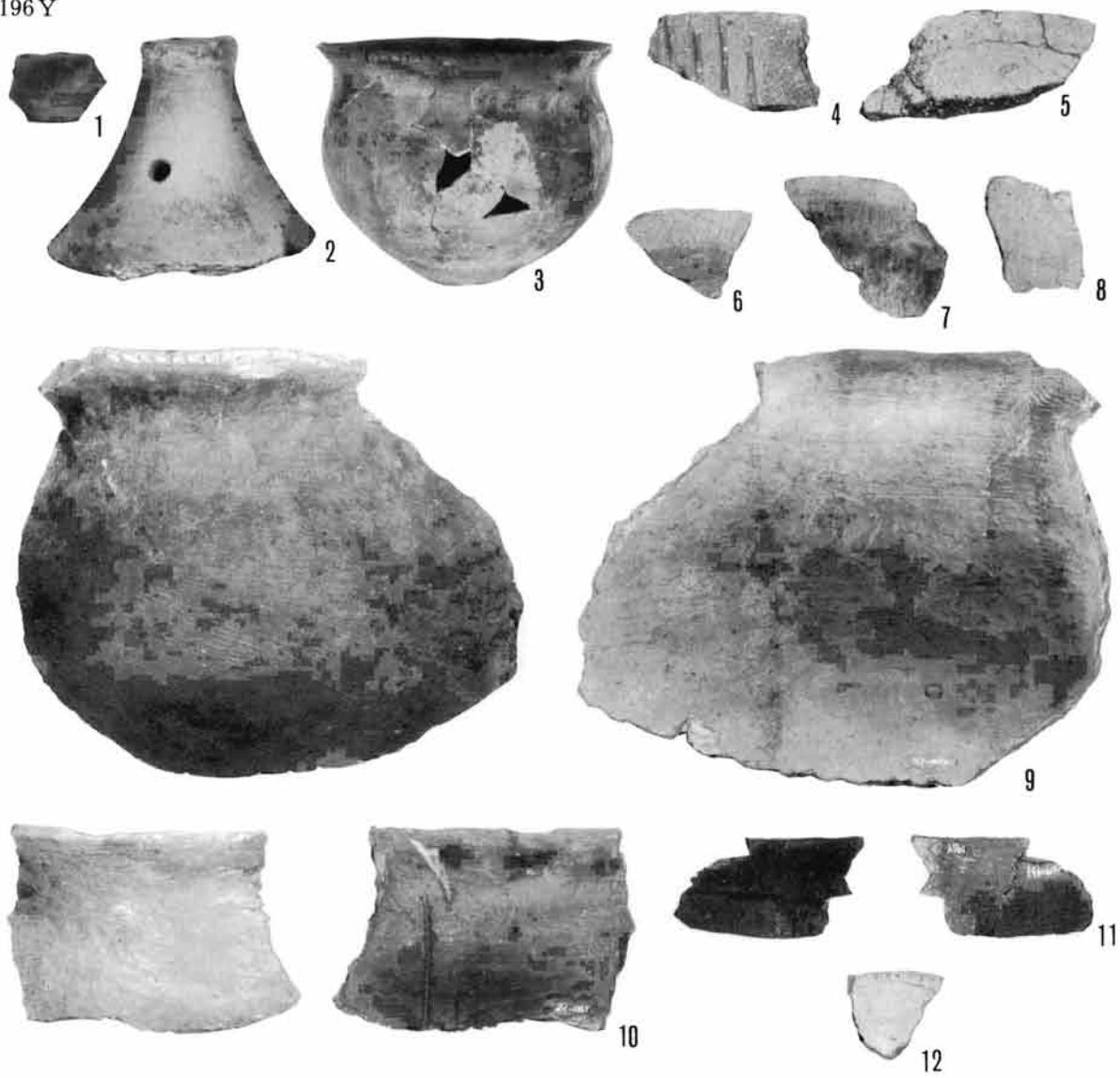
194 Y



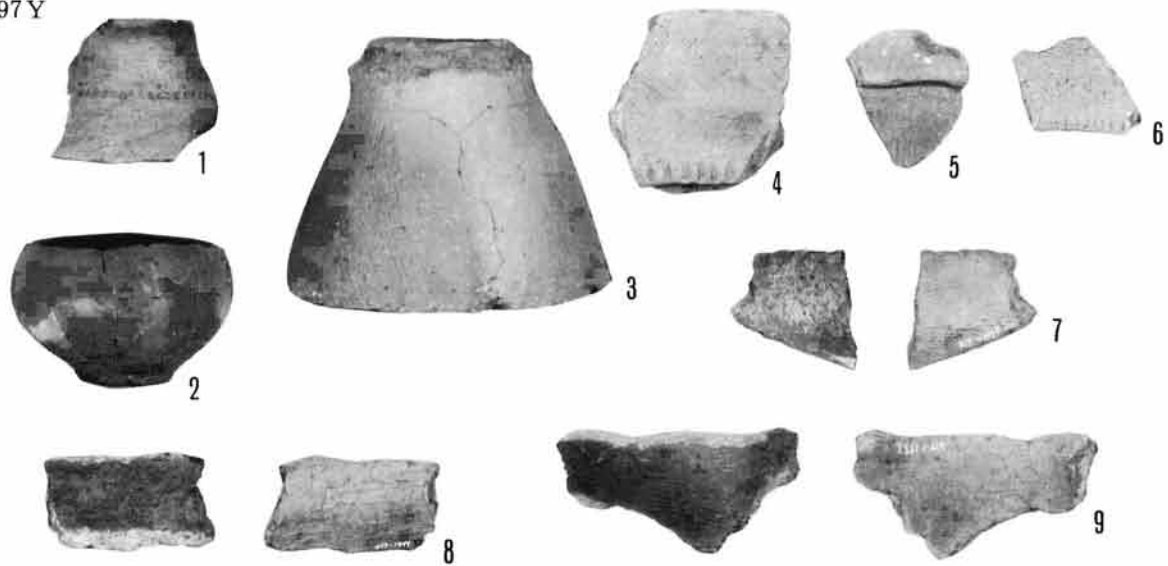
195 Y



196 Y



197 Y



199 Y



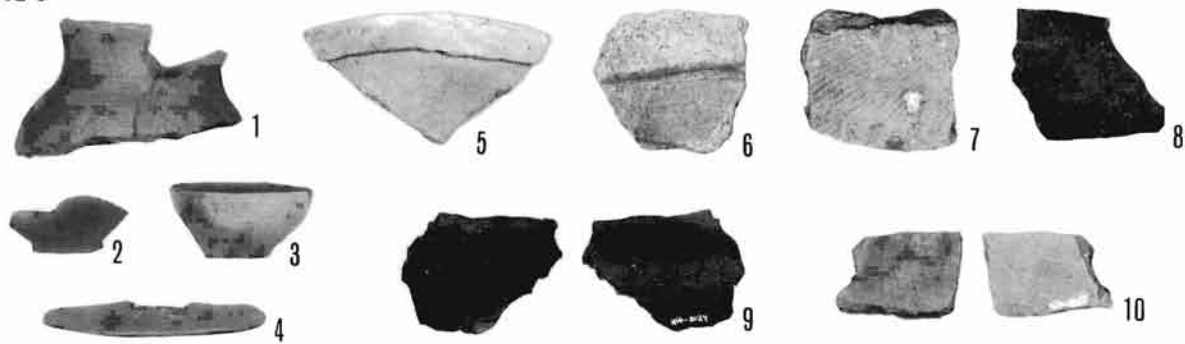
200 Y



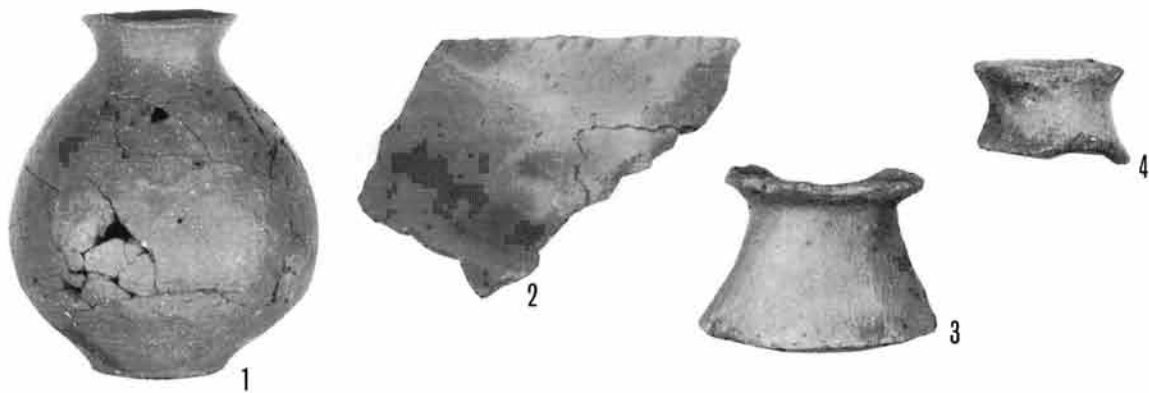
201 Y



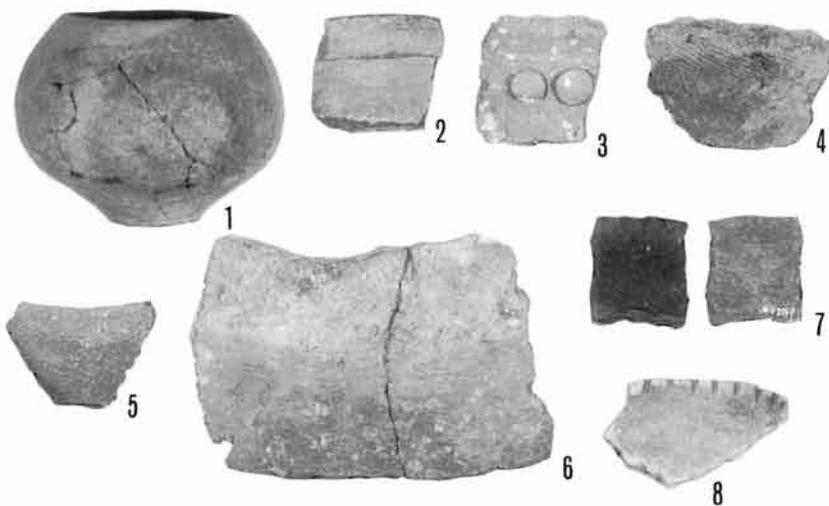
202 Y



203 Y

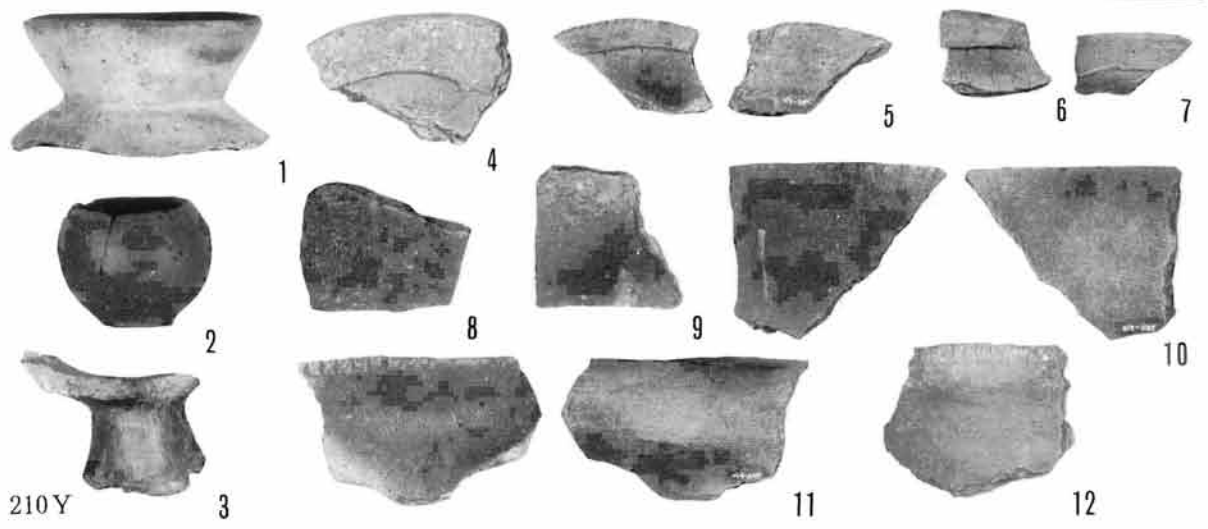
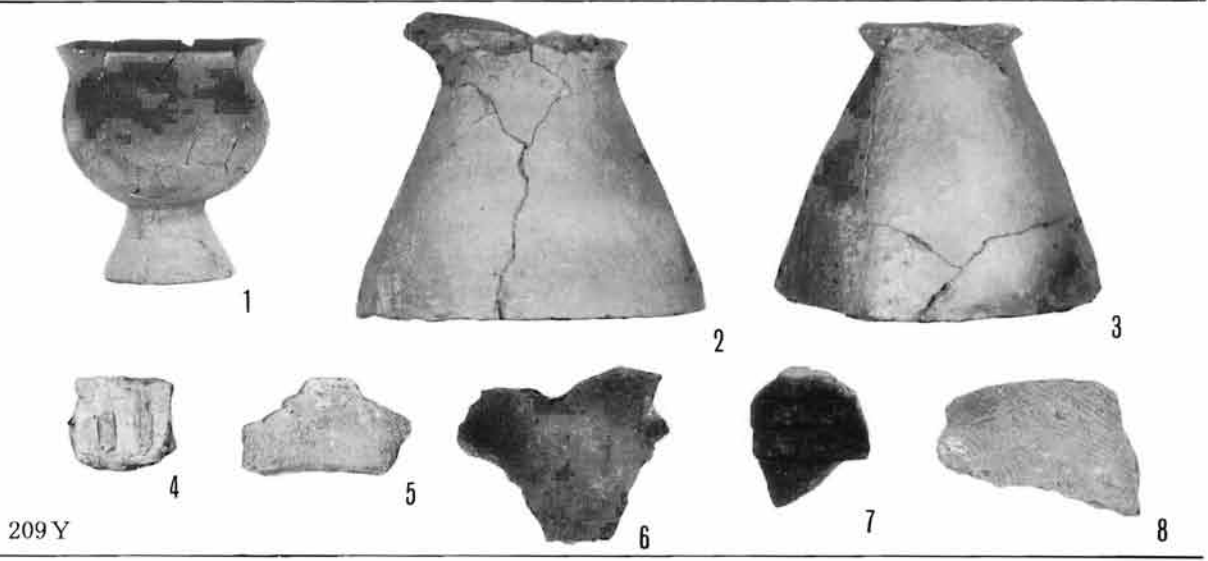
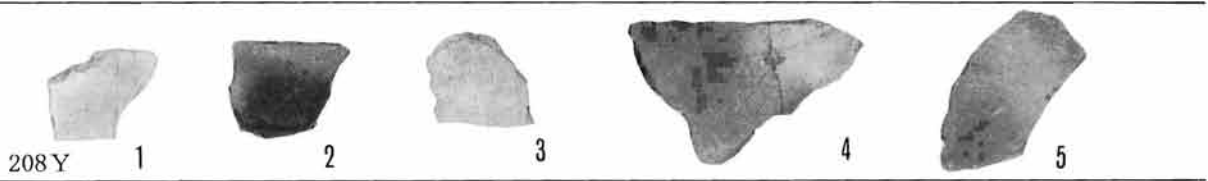
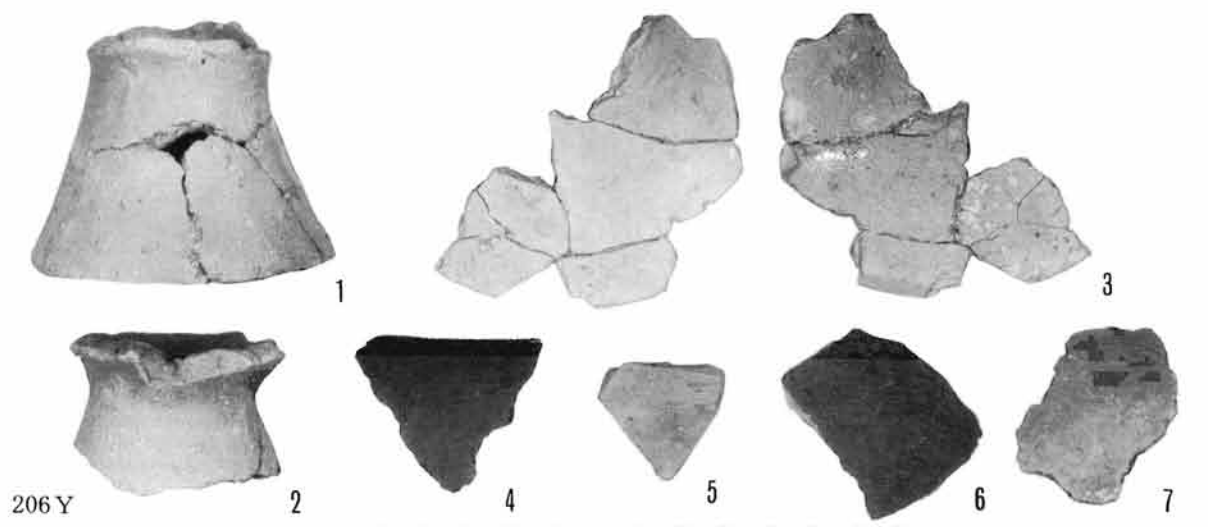


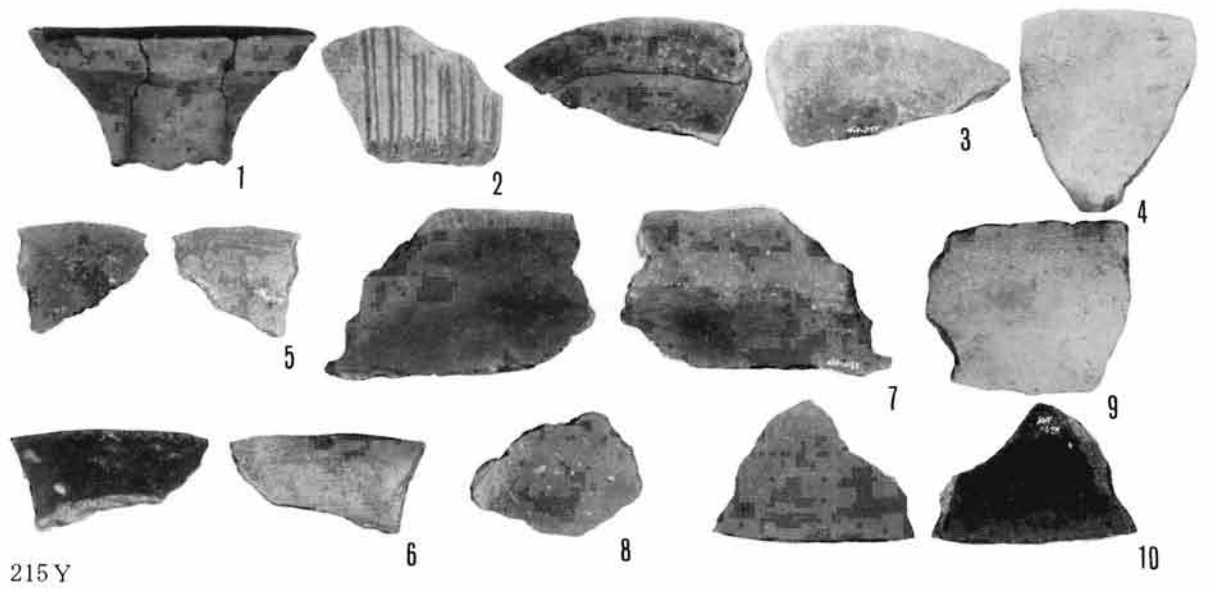
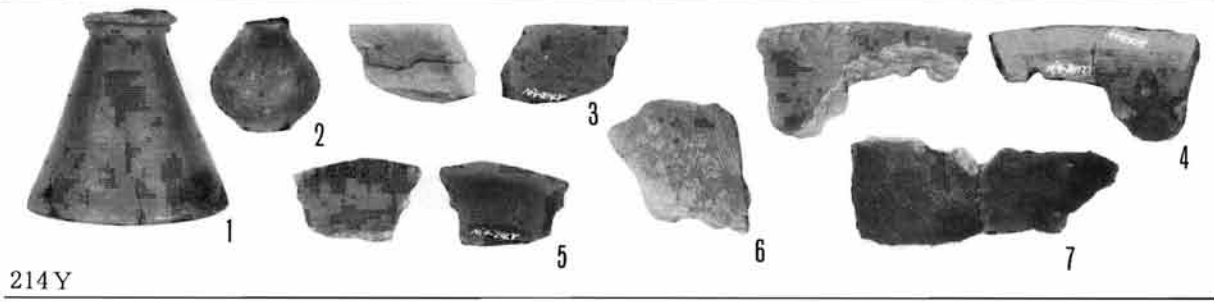
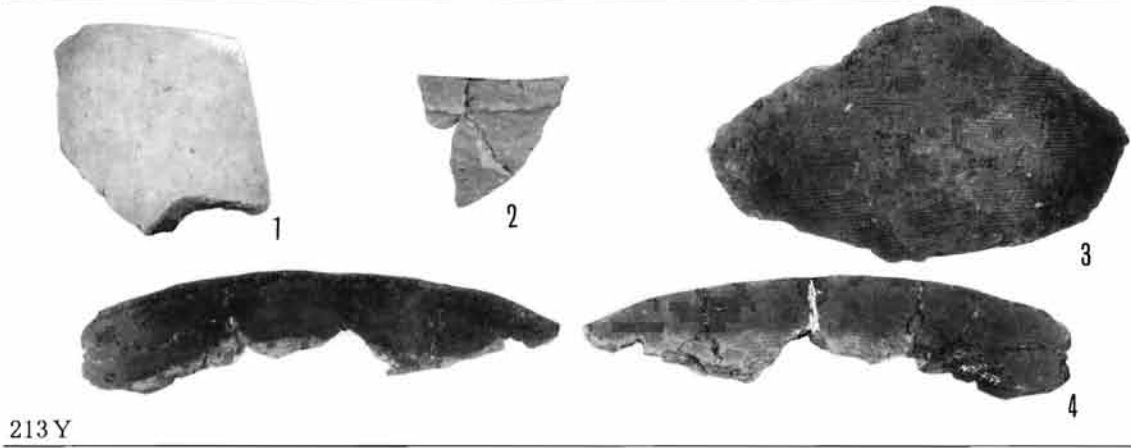
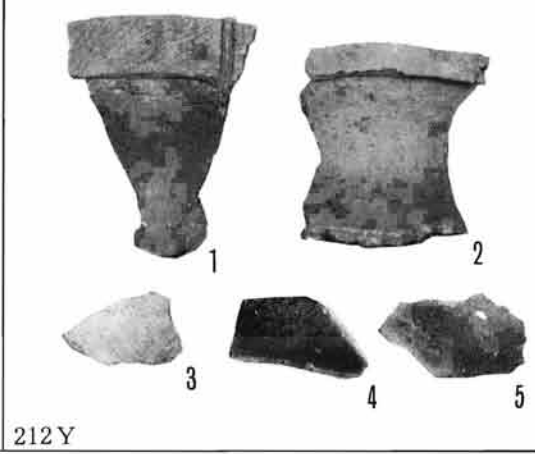
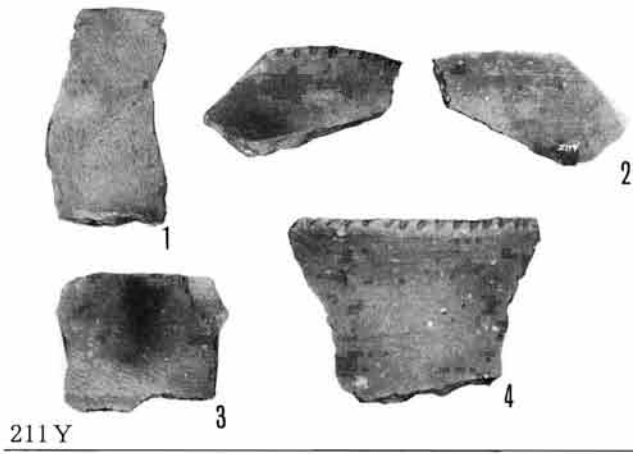
204 Y

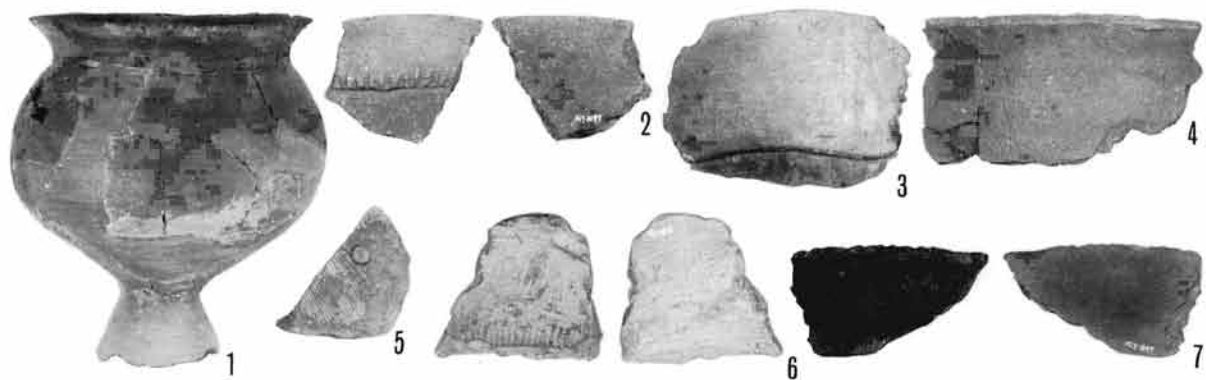
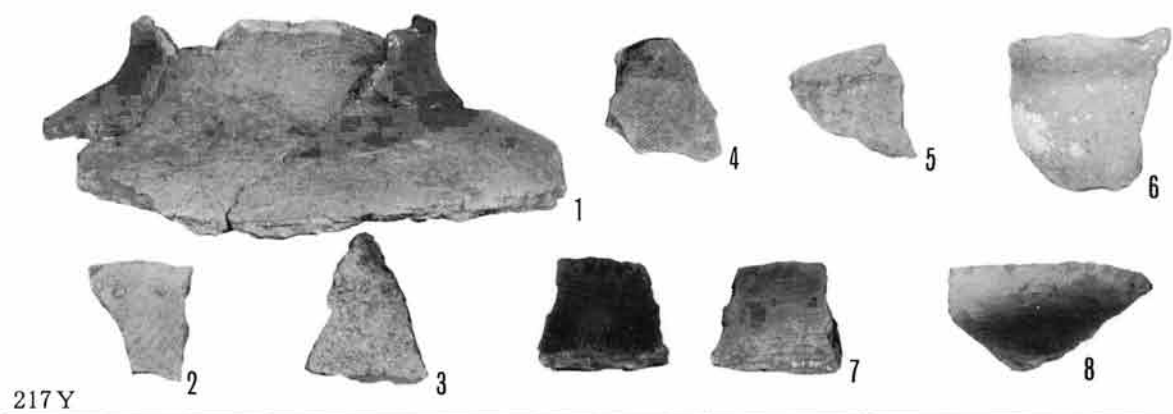
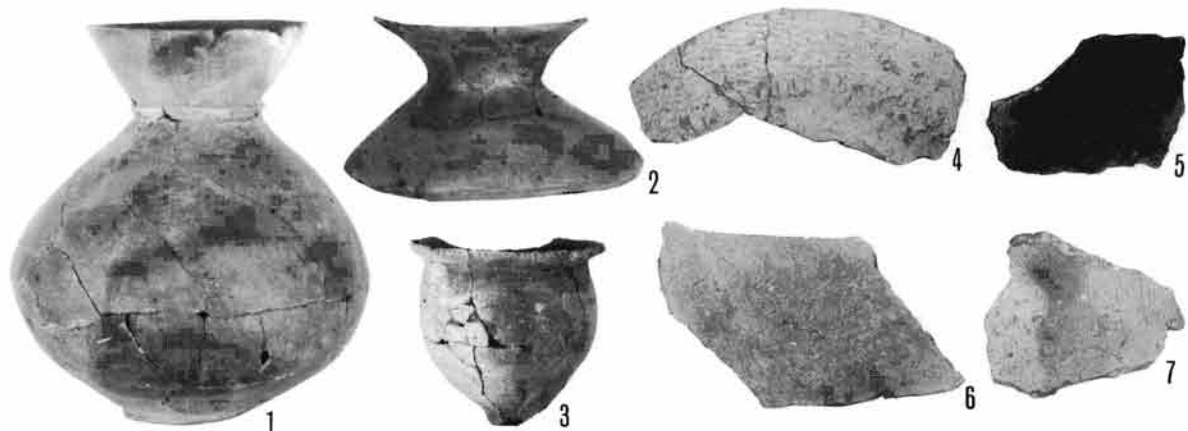


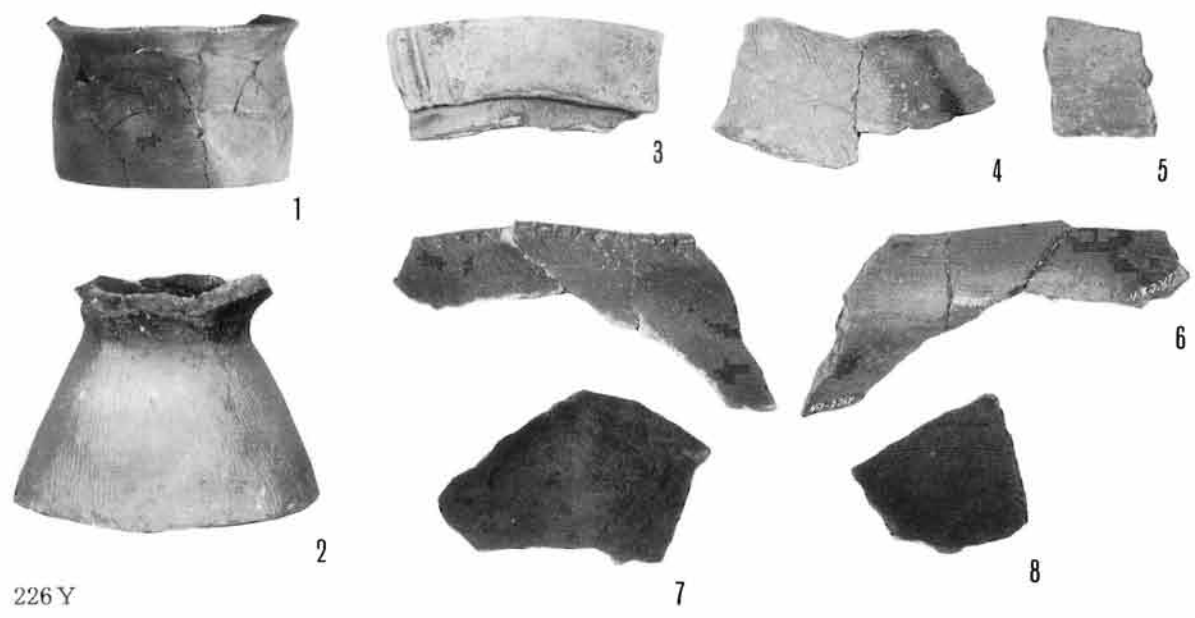
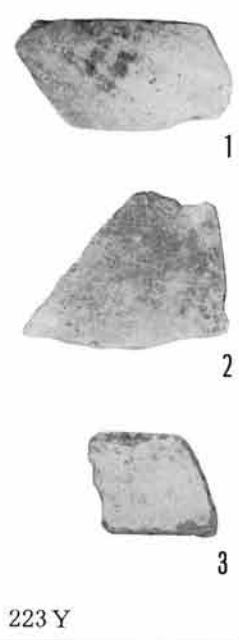
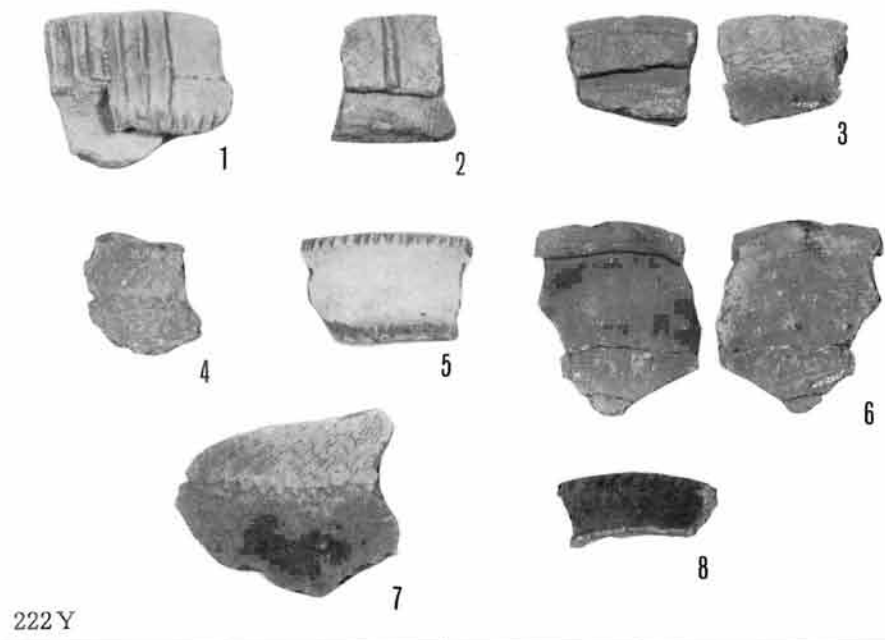
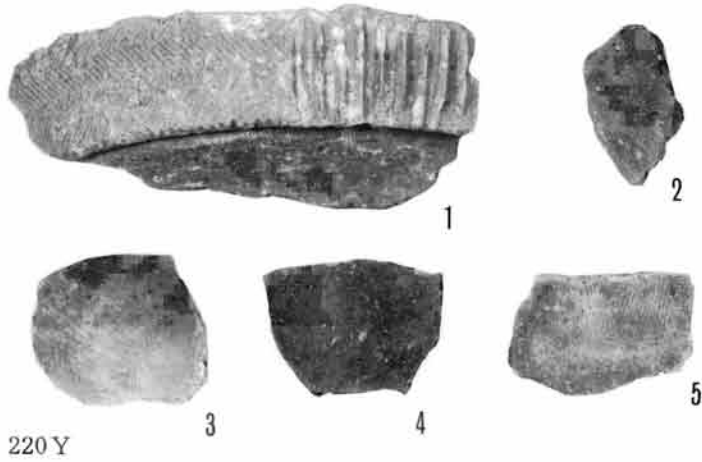
205 Y



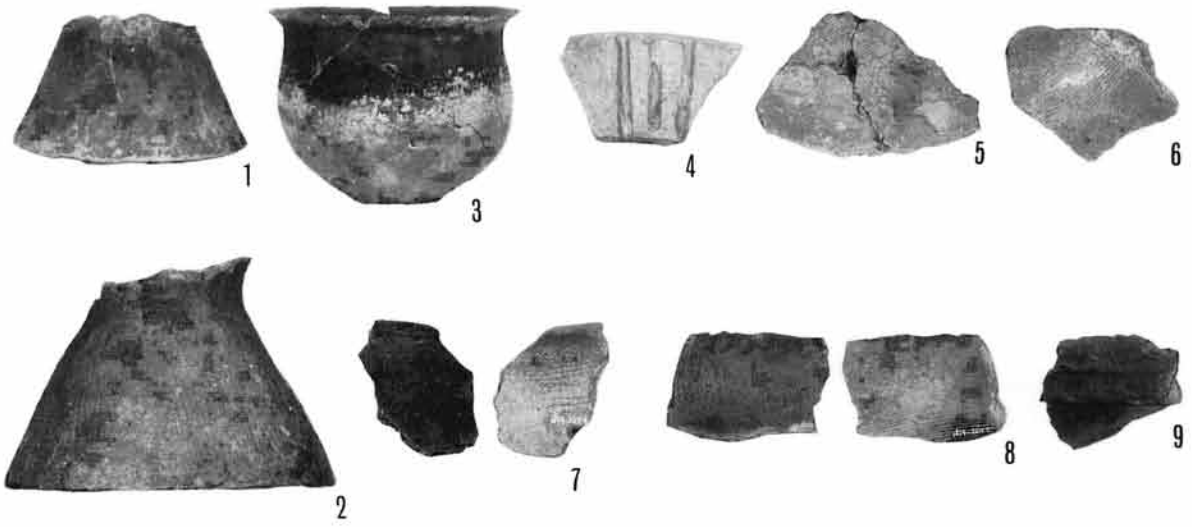




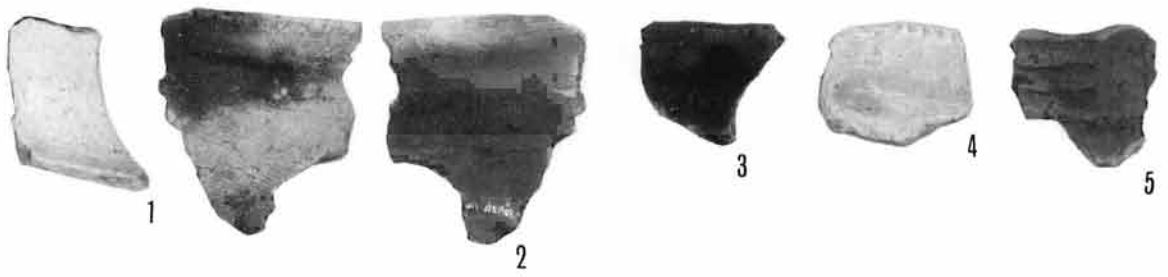




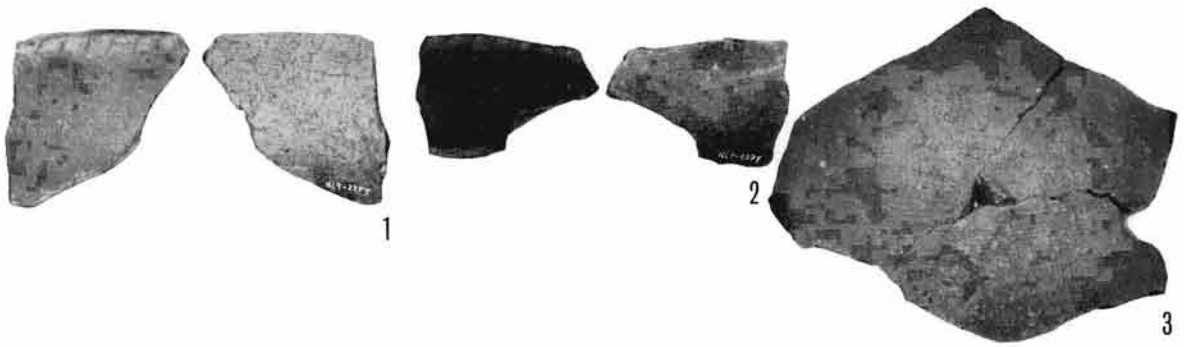
227 Y



228 Y



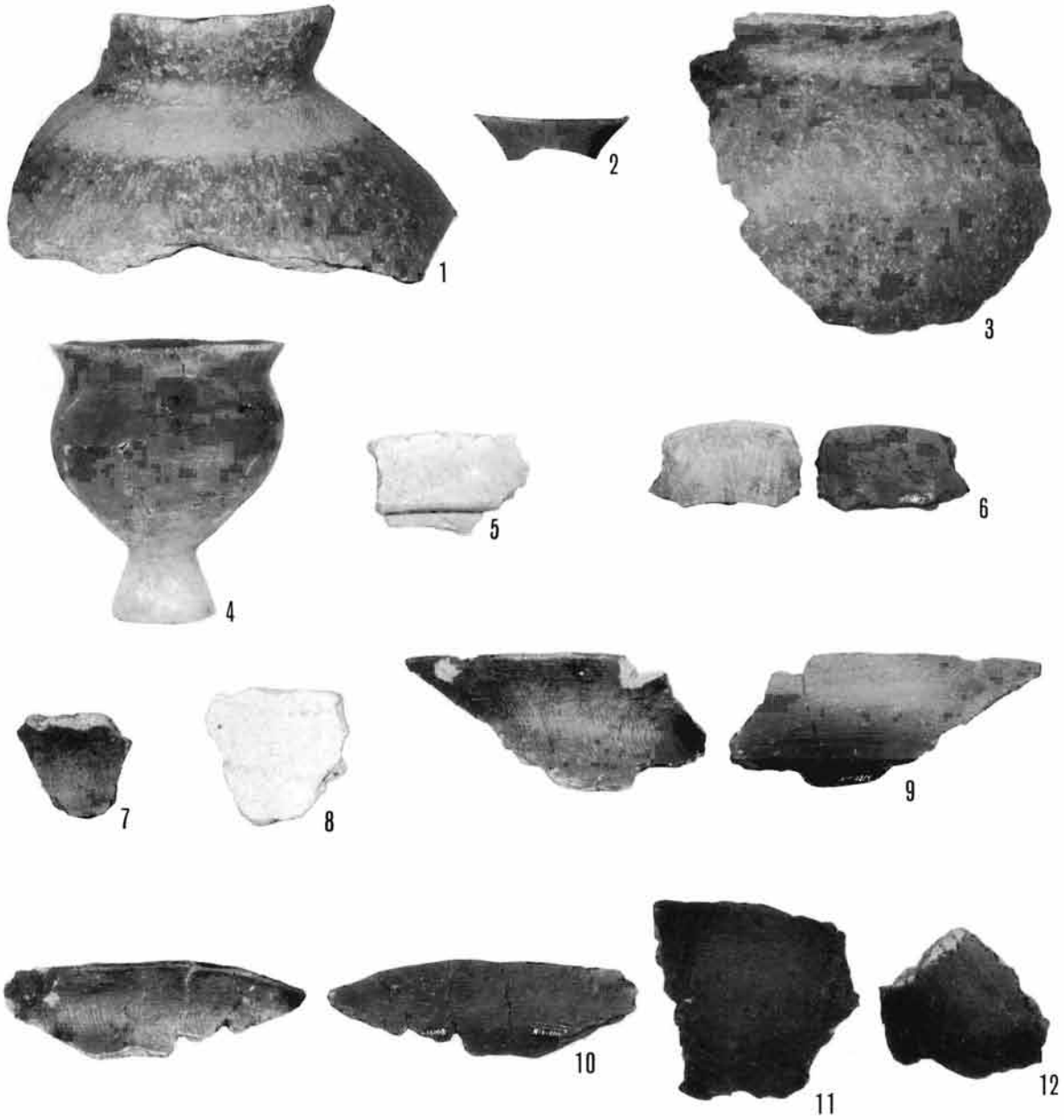
229 Y



230 Y



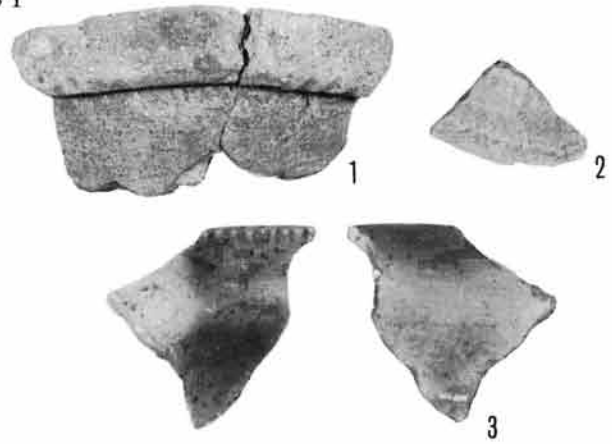
231 Y



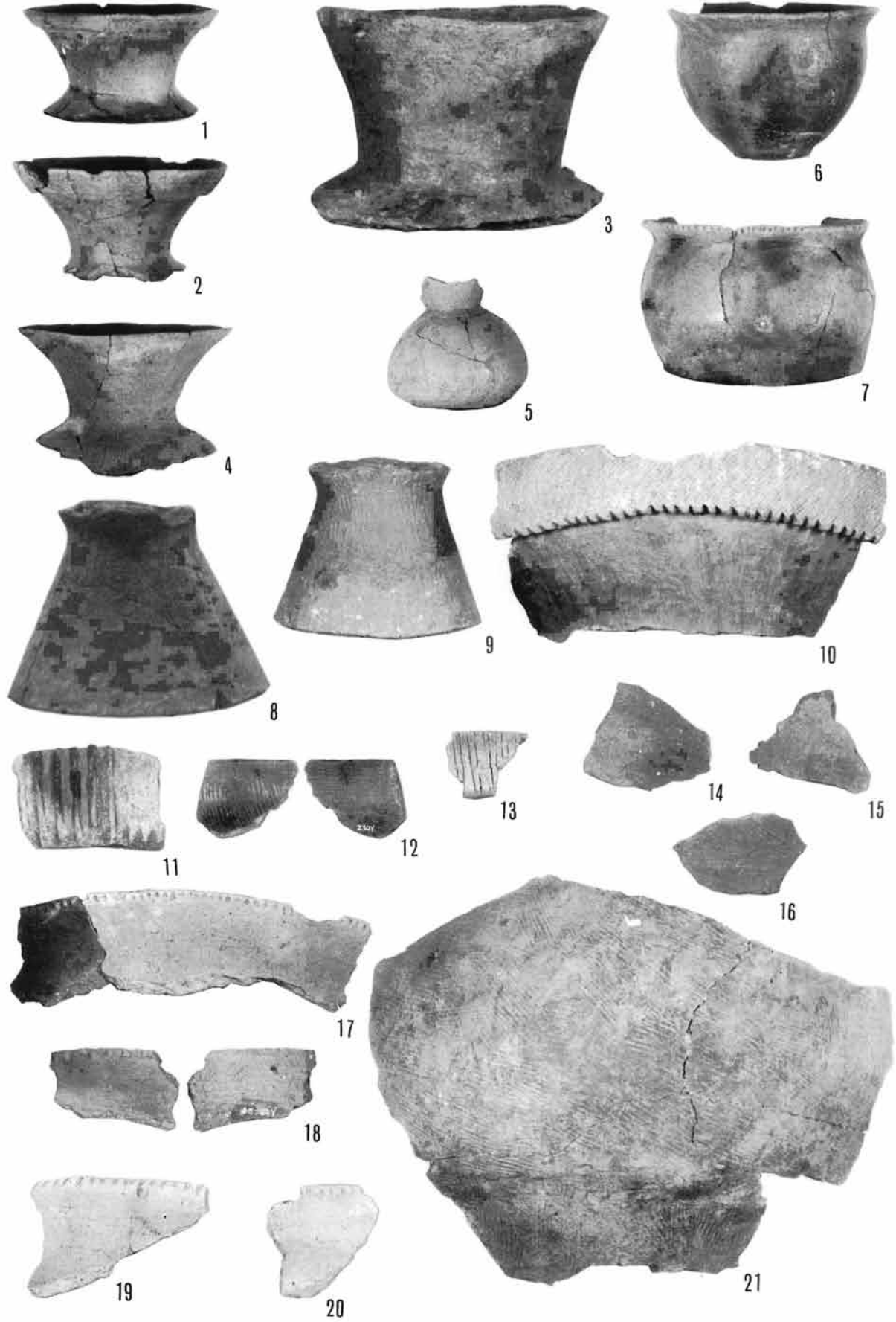
232 Y

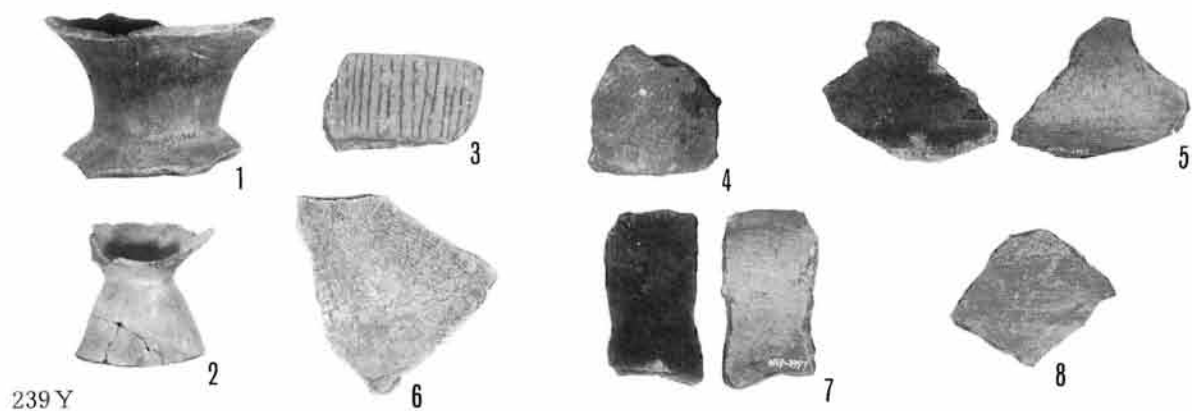
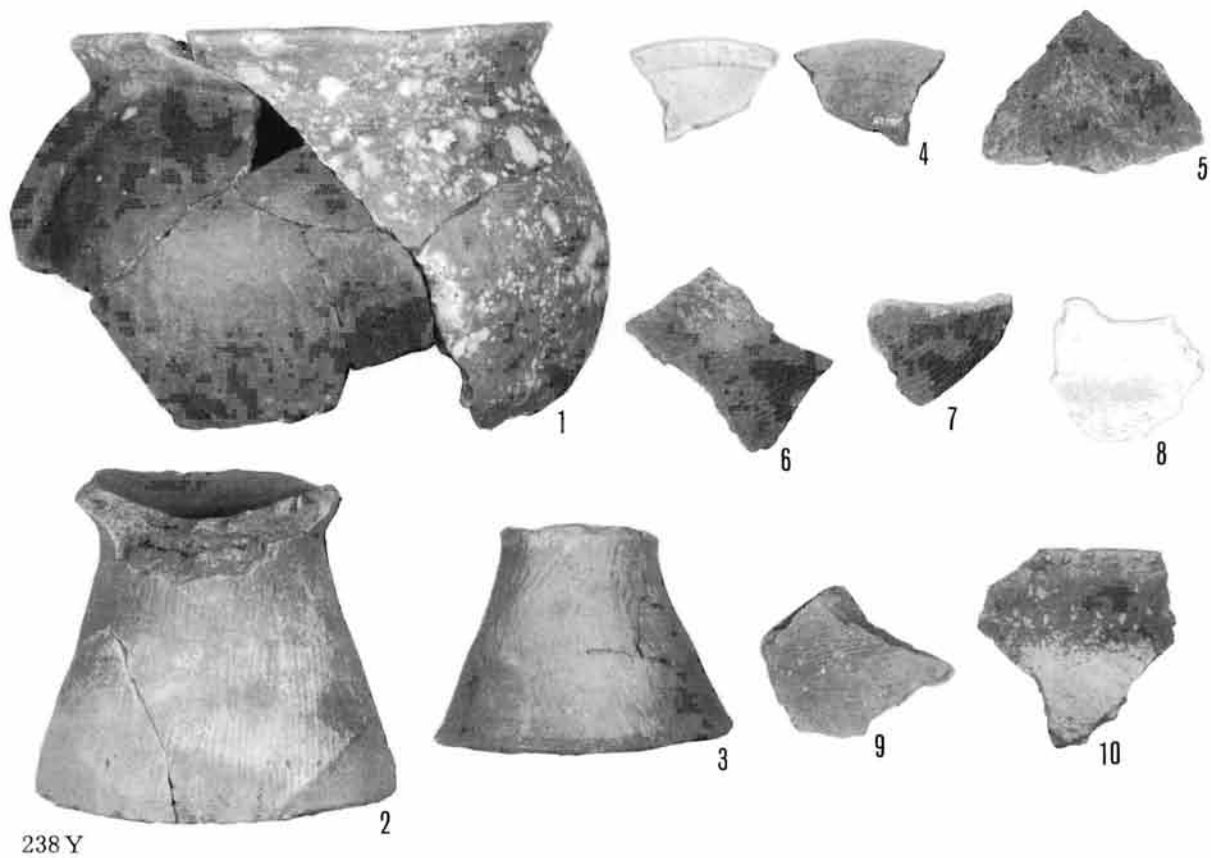


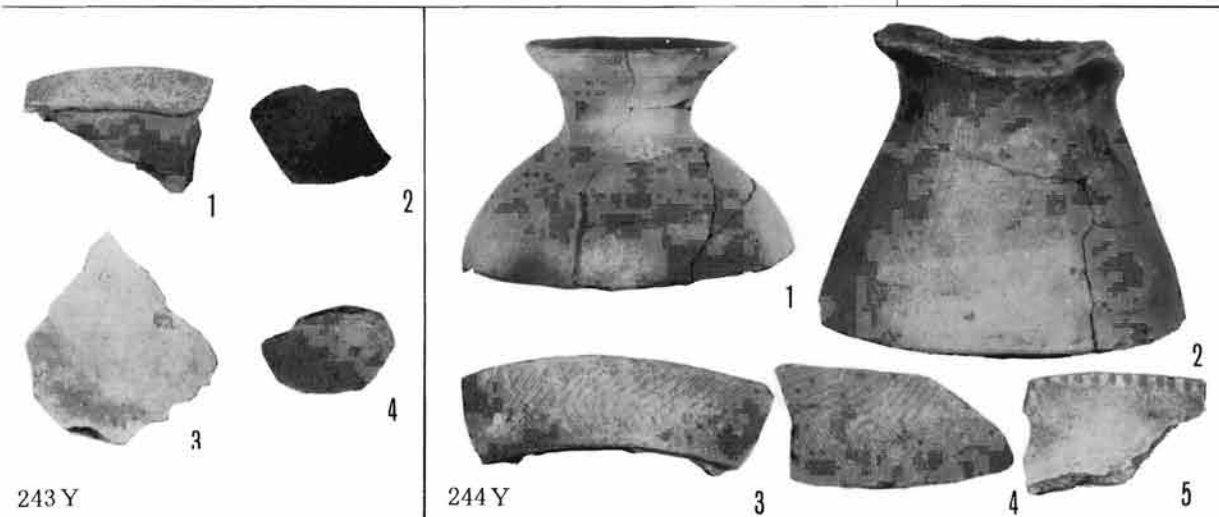
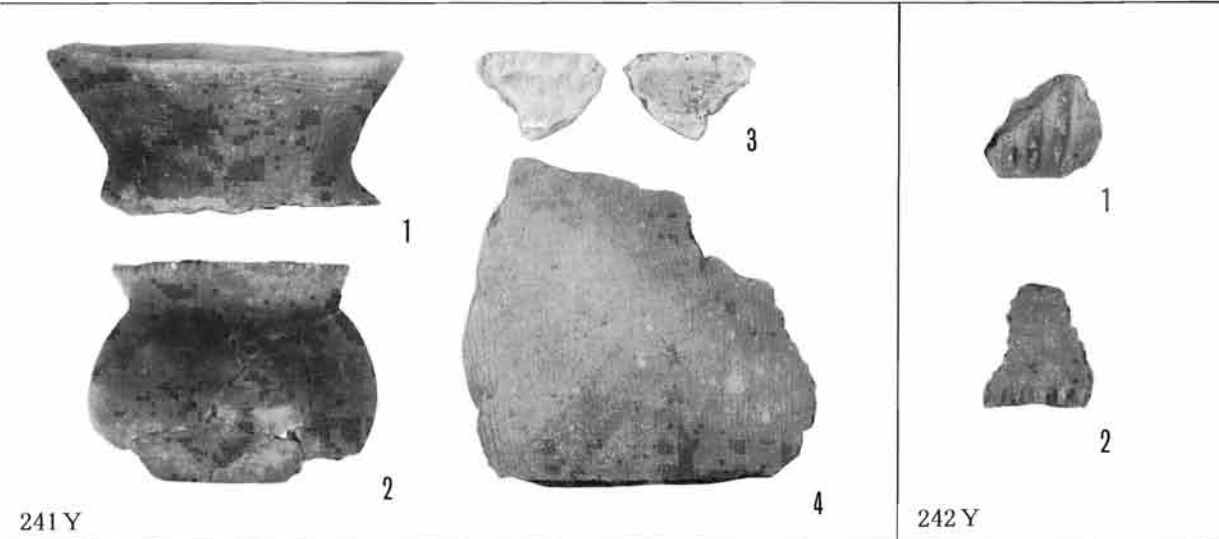
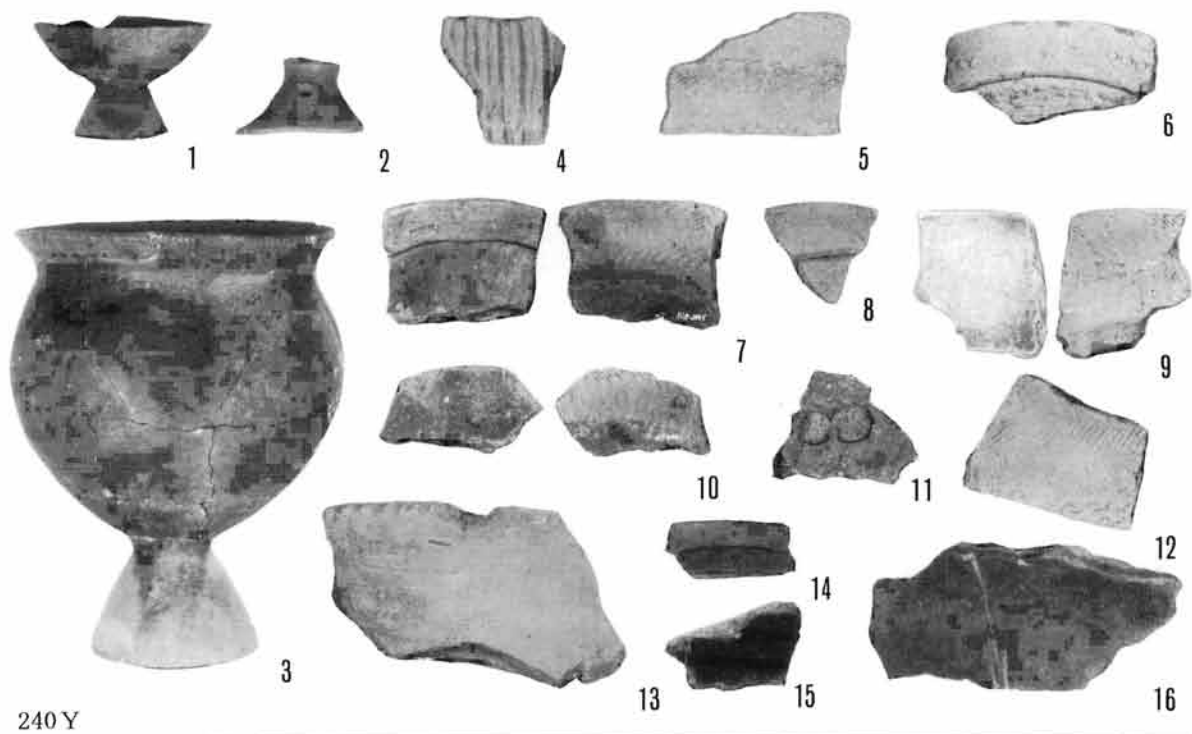
233 Y



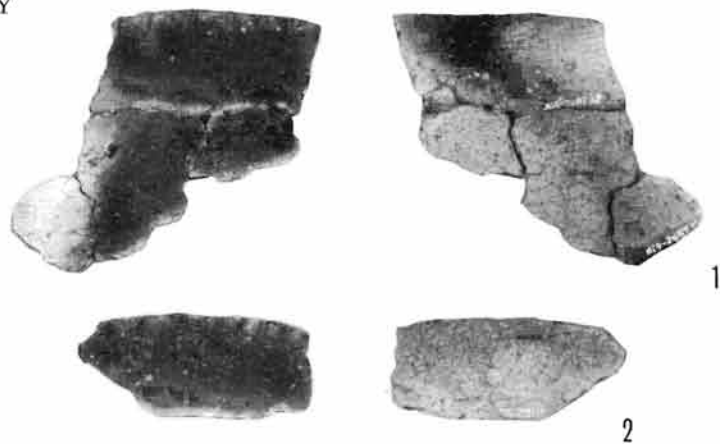
234Y



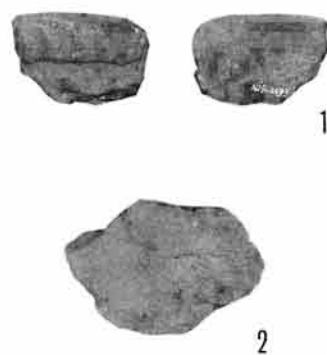




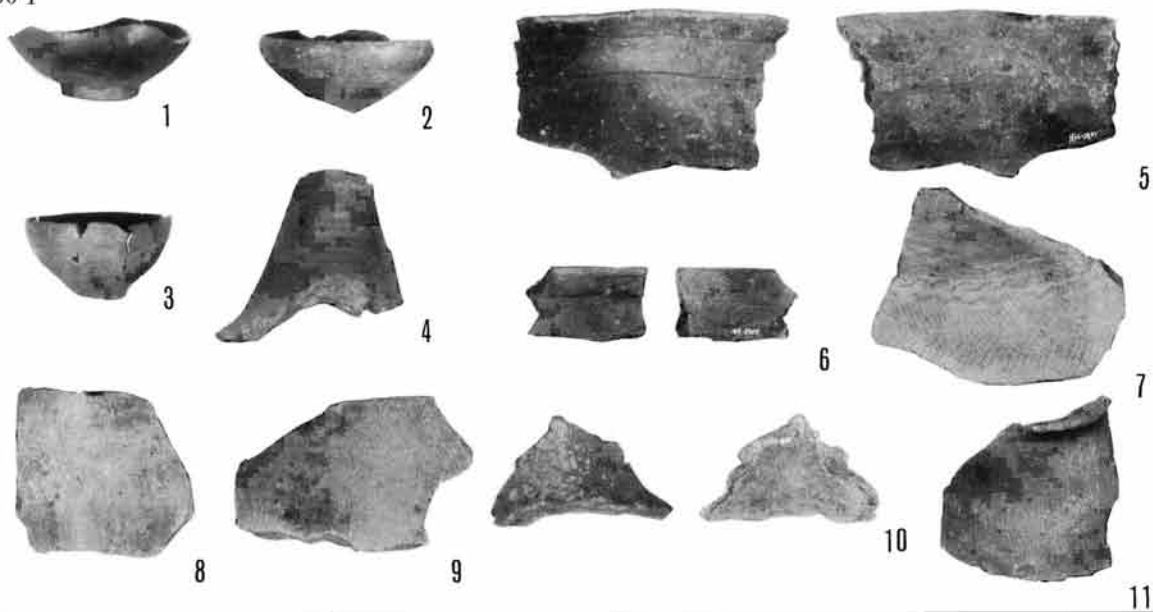
248 Y



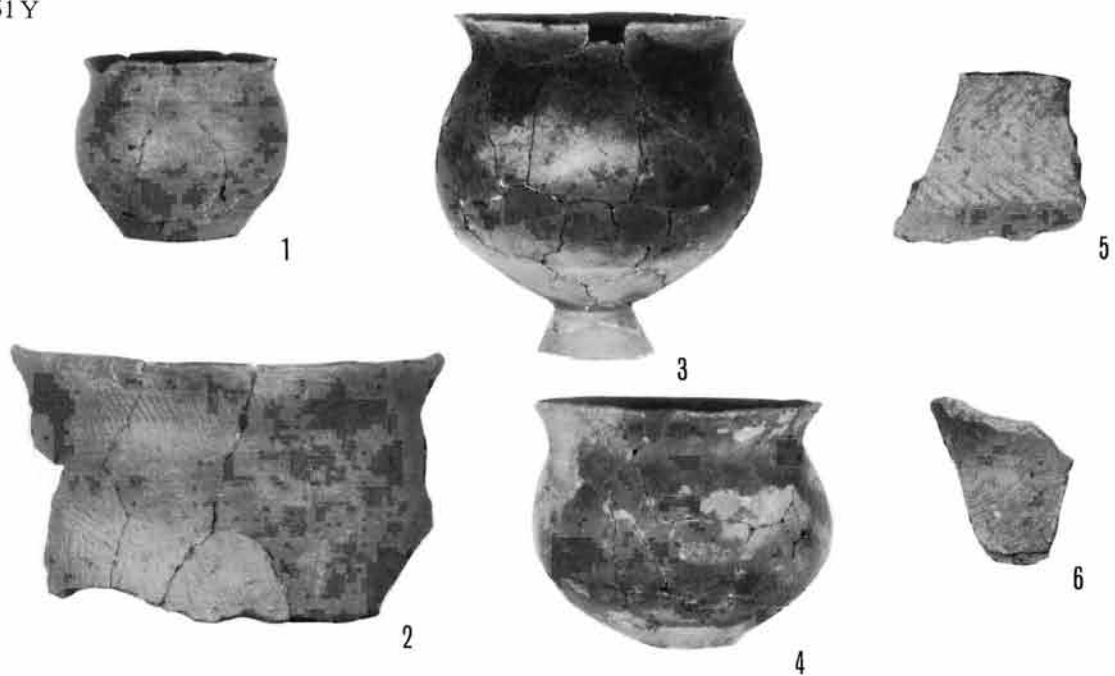
249 Y

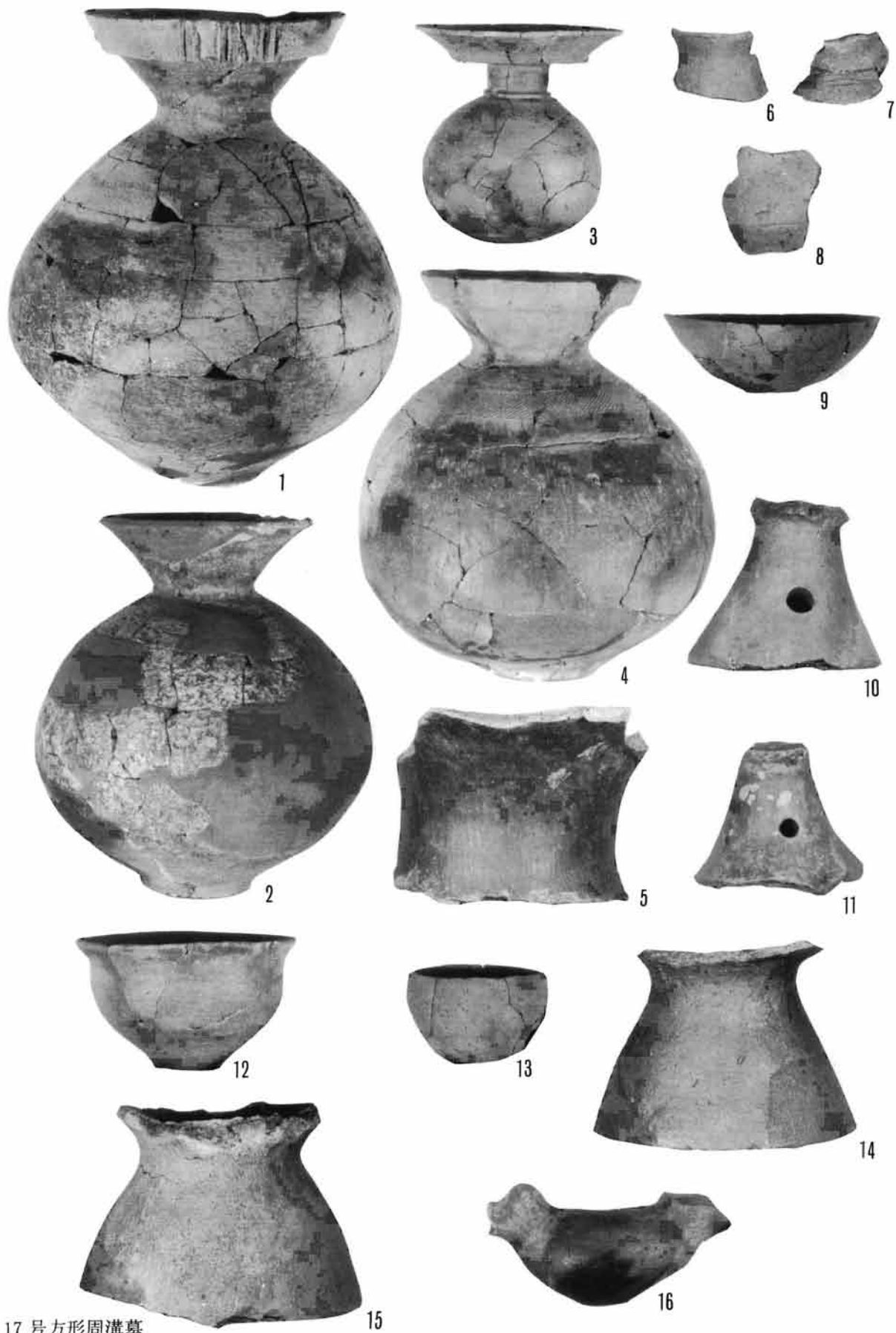


250 Y

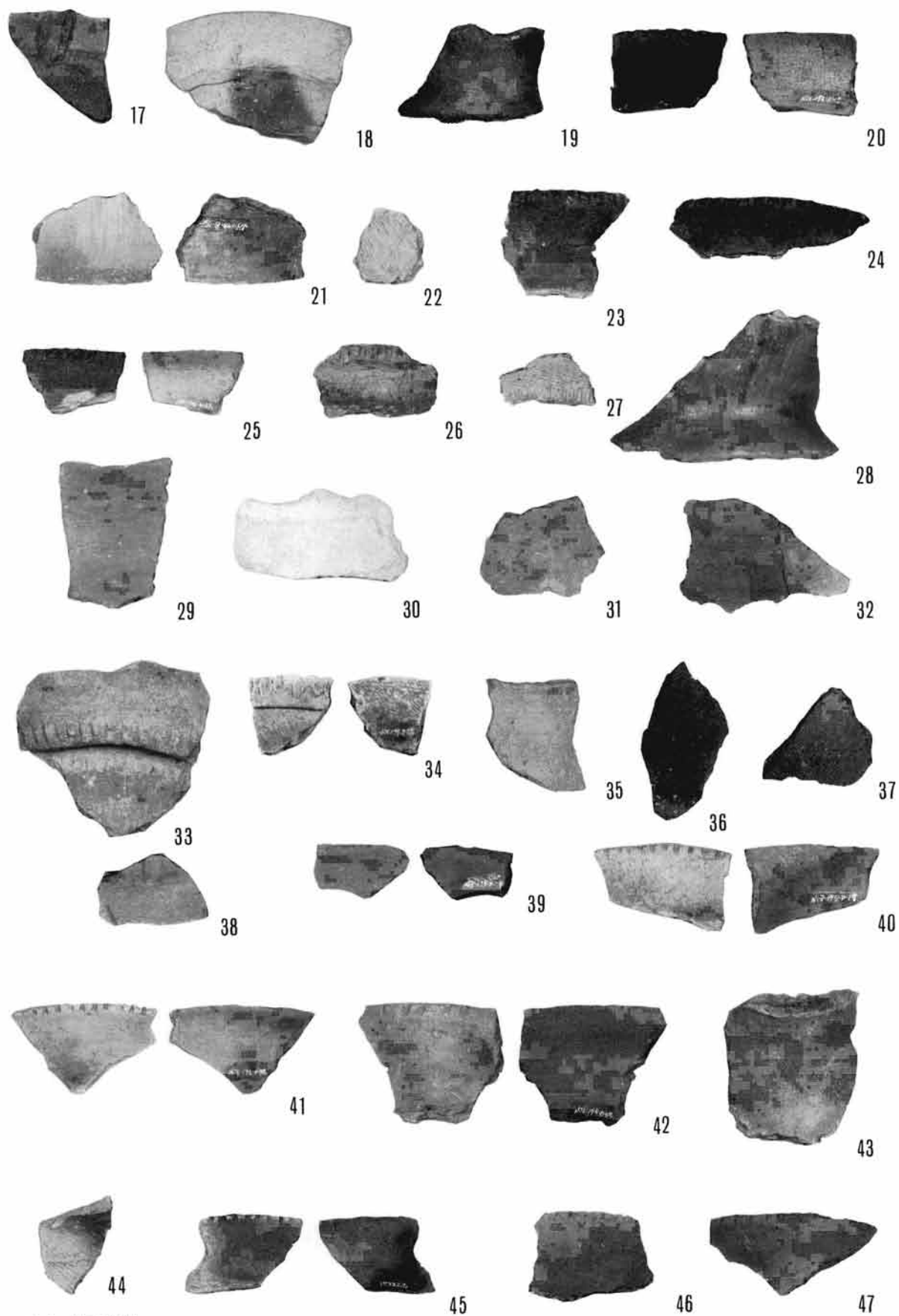


251 Y

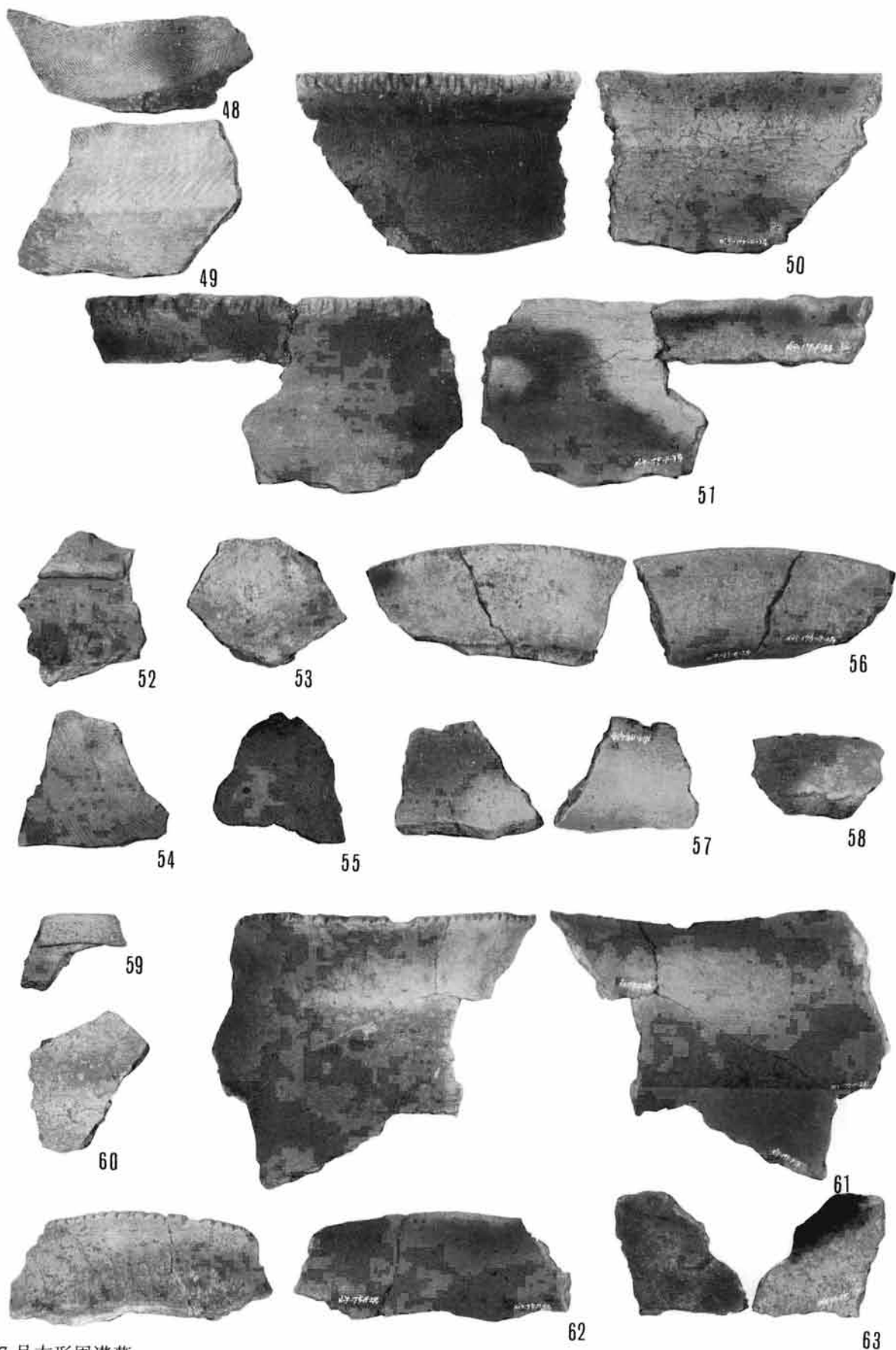




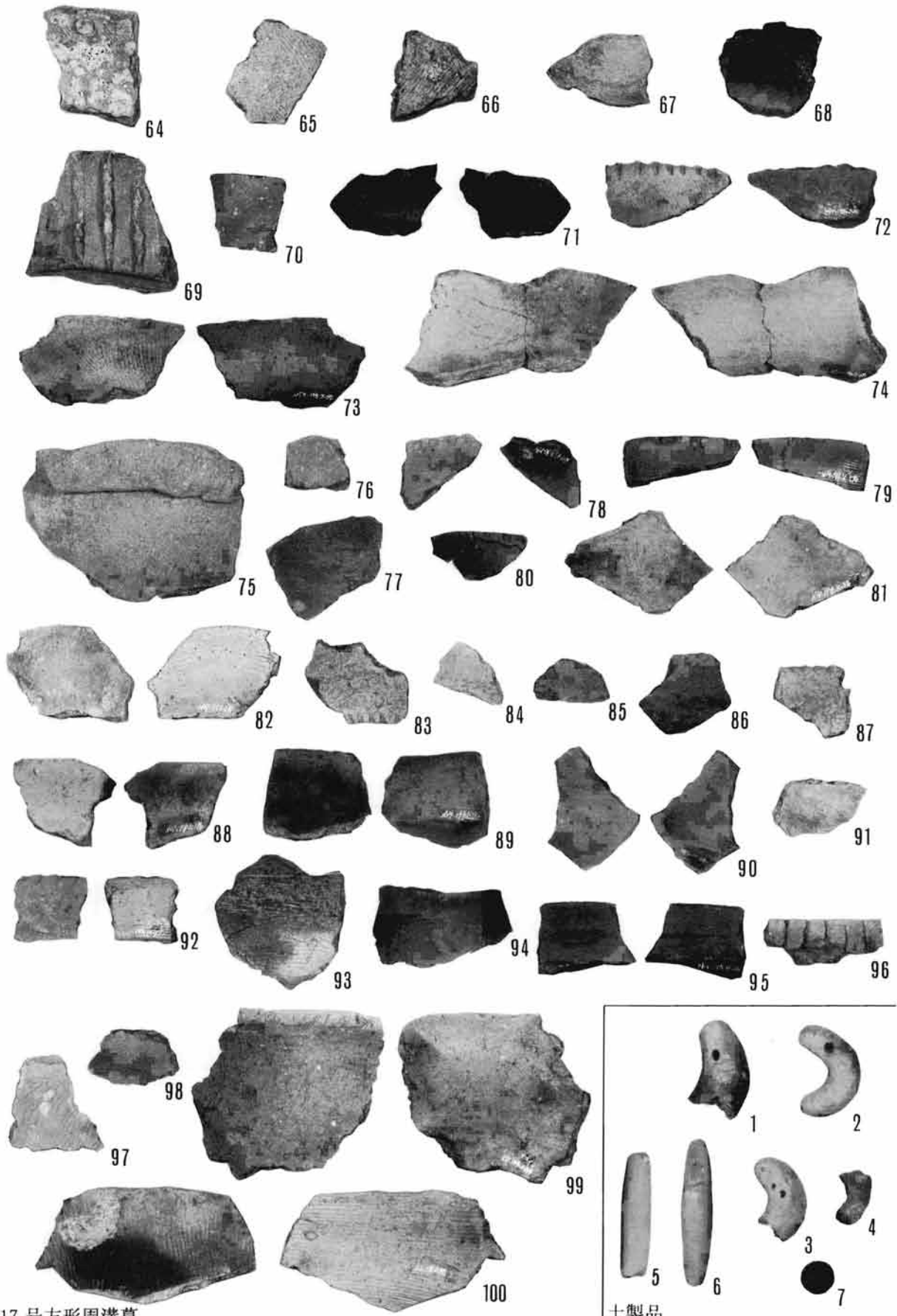
17号方形周沟墓



17号方形周沟墓



17号方形周沟墓



17号方形周溝墓

土製品



17号方形周沟墓

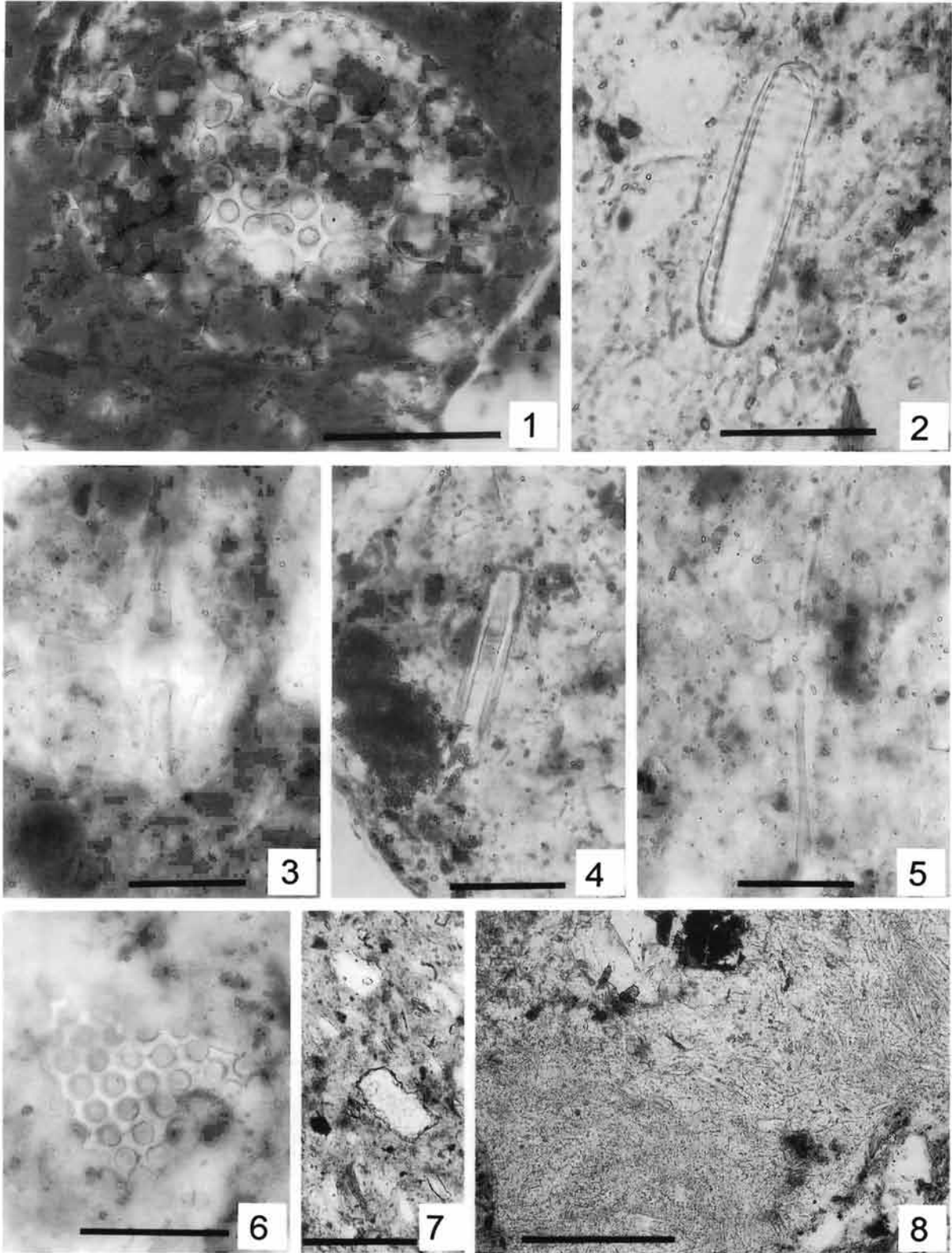


11H



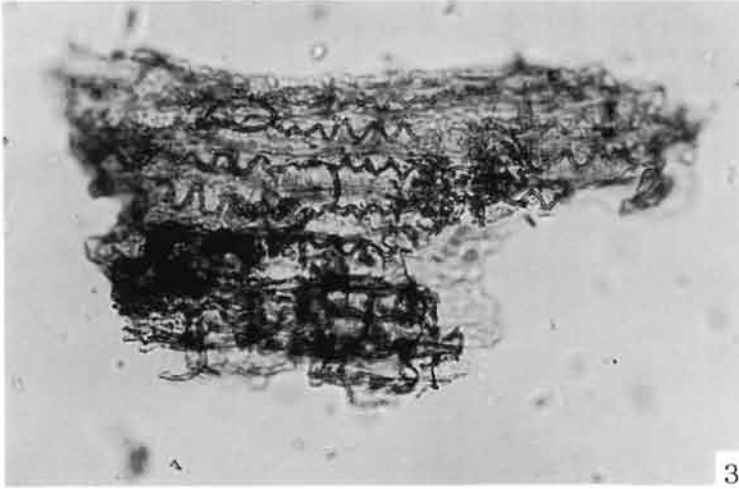
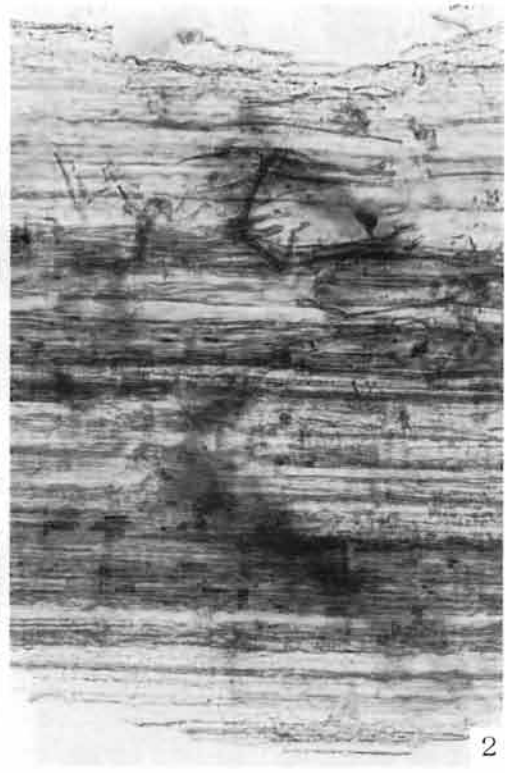
12H



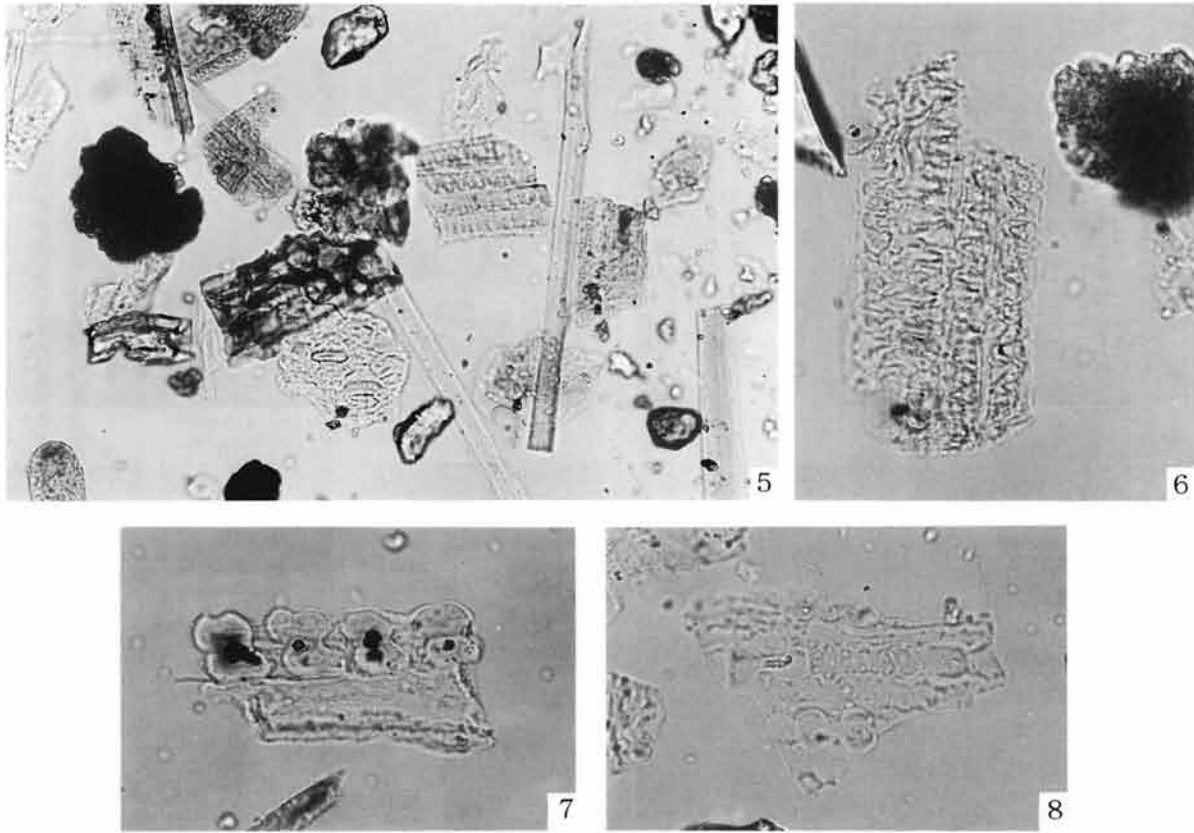


(スケール; No.1~6は20ミクロン、No.7・8は100ミクロン)

- | | |
|--|---|
| 1. 放散虫化石 No.2 | 2. 珪藻化石 (陸域指標種群 <i>Pinnularia borealis</i>) No.1 |
| 3. 珪藻化石 (淡水種 <i>Pinnularia</i> 属) No.3 | 4. 骨針化石 No.2 |
| 5. 珪藻化石 (淡水種 <i>Cymbella</i> 属) No.3 | 6. 珪藻化石 (海水種 <i>Coscinodiscus</i> 属/ <i>Thalassiosira</i> 属) No.4 |
| 7. 植物珪酸体化石 No.3 | 8. 凝灰岩質 No.4 |



———— (scale bar: 30 μ m)

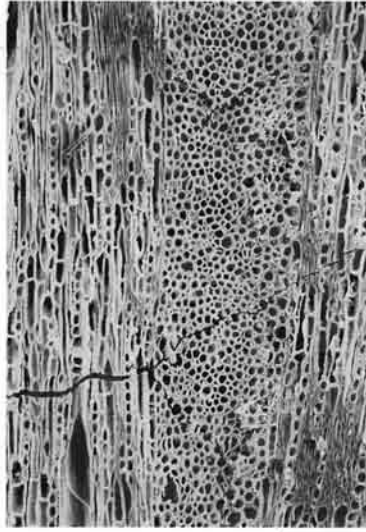


5 : ——— 6~8 : ——— (scale bar:30 μ m)

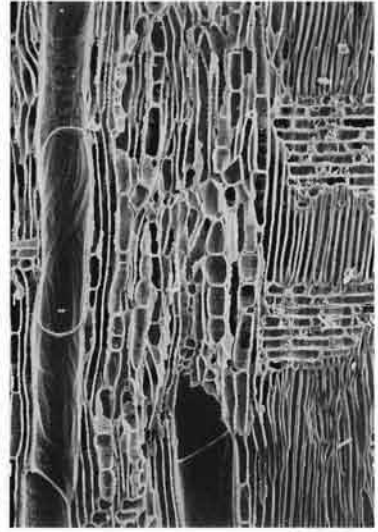
- 5, 6 : 不明植物珪酸体
- 7 : イネ型単細胞珪酸体列
- 8 : キビ型単細胞珪酸体列



1a クスギ節(横断面)
Niテ-228Y④ bar:1.0mm



1b クスギ節(接線断面)
Niテ-228Y④ bar:0.1mm



1c クスギ節(放射断面)
Niテ-228Y④ bar:0.1mm



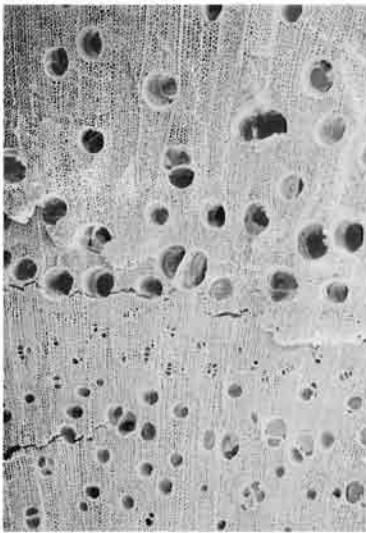
2a クリ(横断面)
Niテ-215Y② bar 1.0mm



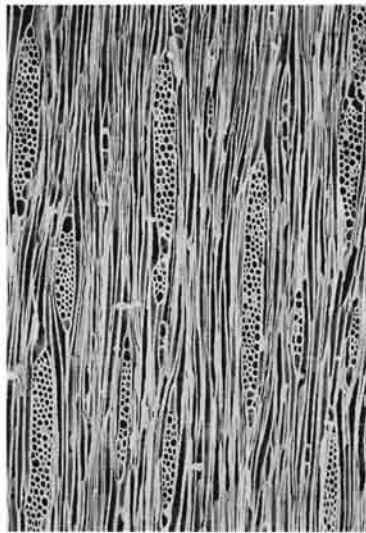
2b クリ(接線断面)
Niテ-215Y② bar:0.1mm



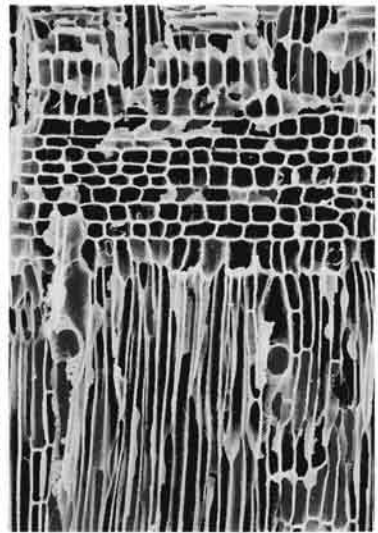
2c クリ(放射断面)
Niテ-215Y② bar 0.1mm



3a ヤマグワ(横断面)
Niテ-228Y② bar 1.0mm



3b ヤマグワ(接線断面)
Niテ-228Y② bar 0.1mm



3c ヤマグワ(放射断面)
Niテ-228Y② bar 0.1mm



4a イヌエンジュ(横断面)
Niテ-213Y① bar:1.0mm



4b イヌエンジュ(接線断面)
Niテ-213Y① bar:0.1mm



4c イヌエンジュ(放射断面)
Niテ-213Y① bar:0.1mm

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはらおおつかいせき だい 45 ちてん はくつちょうさほうこくしょ							
書 名	西 原 大 塚 遺 跡 第 45 地 点 発 掘 調 査 報 告 書							
副 書 名		卷	次					
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	卷	次	第 6 集				
編 著 者 名	佐々木保俊・関根正明・上田 寛・内野美津江・宮川幸佳							
編 集 機 関	埼玉県志木市遺跡調査会							
所 在 地	〒 353-0002 埼玉県志木市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成12年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積	調査原因
にしはらおおつかいせき だい 45 ちてん	しきしさいわいちよう 志 木 市 幸 町 3 ちようめ 3140 - 1 他	11228	007	35° 49' 11"	139° 34' 7"	19990803 ~ 19991224	5642,416㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
西原大塚 遺跡第45 地点	集 落 跡	弥生時代 末葉～ 古墳時代 初頭	住 居 跡 方形周溝墓	72 軒 1 基	壺形土器・甕形土器 高杯形土器・鉢形土器 鳥形土器		方形周溝墓は一辺20m を越す大型のもので、 鳥形土器や二重口縁壺 形土器など供献用の遺 物が出土した。	
		古墳時代 後 期	住 居 跡	2 軒	杯形土器・甕形土器			

志木市遺跡調査会調査報告第6集

西原大塚遺跡第45地点
発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成12年11月30日
印刷 ㈱白峰社

